FL. 5-6-69

ISSEIDO
東京 誠 神

PL
790
T3
1940

Taiheiki
Taiheiki shinshaku

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

太平記新釋

石田吉貞　著

東京神田
大同館發行

LIBRARY
MAY 21 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
790
T3
1940

巻首に

□

本書は、文檢受驗者、高等專門學校程度の學生、又は一般文學愛好者に對し、太平記研究の上に、幾分の參考になるやうにと編纂したものである。蓋し、太平記は、國文學上重要なものであるが、餘りに浩瀚なのと、註釋の書の具はらないのとから、一般に稍〻人親しみ難く感ぜられてゐるので、こゝに其の重要な部分を選び、やゝ詳しい解釋を試み、以て太平記研究の、小階梯たらしめようとしたのである。

□

本文の選出は、大體次の標準によつた。

一、内容の著名であるか、又は太平記の本質上から重要なもの

一、文章がよいか、又は人に知られてゐるもの

一、文章が代表的で、それを讀めば、他の部分まで讀解出來るやうなものかうして、形は選釋であつても、內容形式兩面から、太平記全體をつかみ得るやうにと期したのであるが、實際は、全體の六分の一の分量では、此の所期を完全に果してゐないかも知れないことを恐れる。

□

本書は、太平記の流布本を主とし、諸本を參考にした。そして、甚だしく違格のものでない限り、なるべく原文の俤をとゞめようとした。

□

解釋はすべて語釋にとゞめた。通釋をしないのは、紙數の徒らに增加する爲と、本書の如き近古文には、强ひてする必要がないのを思つたが爲である。批評をしないのは、いゝ加減な批評の、却つて眞の味讀と鑑賞とを妨げる所以であることを、常から感じてゐたからである。眞の古典解釋は、時代の諸背景や作者の性格等を審かに提供

して、古典に、それが書かれた時と同樣の、血行と呼吸とを與へる所にあると信じてゐる。しかし、それはもつともつと研究を重ねた上でなければ出來ることではない。即ち語釋のみに止めたわけである。

□

頭註とせず後註としたのは、見る上に幾分の不便はあるけれど、一つには、如何にも解釋本らしく頭の上にどつさり註を載せた、あの重苦しさを嫌ふところから、二つには、餘り註にたより過ぎず、無註の本を讀むやうな心持を好むところからしたのである。

□

余の淺學菲才と、參考書の少なかつたことゝ、太平記に詳しいよい註釋書がなく、爲に獨斷で文意語意をきめた部分の非常に多いことゝは、本書をして、到る處に誤のみを多くせしめたことと思ふ。伏して大方の御叱正を待ち、自ら今後の研究を期するのみ

である。」

大正十四年十月

著者識

太平記解説

一 著者

太平記は、あの頃の著書に多くあるやうに、著者不明の書である。不明であるから色々の説が生ずる譯であるが、太平記に就ては、古い理盡抄の説と、新しい修史局發見の説と二つある。

(一) 理盡抄の説

イ、卷一から卷十までは玄慧の作とする。—

建武の頃、後醍醐天皇、新田義貞を召されて「多年の朝威廢頽も、朕に至つて王法舊に復した。後代のため又は當時の讀み物として、義貞の鎌倉攻、高氏の六波羅攻

等を記したいものだ。」と仰せられた。そこで藤房が勅命によつて玄慧に語り、玄慧が義貞・尊氏等にきいて、先づ卷九・卷十が出來、次で漸次十卷だけ出來上つた。そして此十卷を、義貞鎌倉物語・高氏六波羅物語等よんで不定であつたので、僧師錬に命じて序を書かせ、其名も安危由來記と定めるに至つた。

十卷の出來た順序と筆者とは、

九、十、　玄慧作。義貞高氏と會談。

三、四、五、六、　玄慧作。藤房と會談。

七、八、　玄慧作。赤松則祐と會談。

一、二、　玄慧作。赤松來賢法師と會談。

ロ、卷十一以後は、玄慧及數僧の手で書き繼がれた。

十一、十六、　山門の護正院の筆。但正成討死の條は善智坊法印記す。

十三、十四、　南岸坊僧正顯信の筆。

十五、」　正平の頃備後三郎高德記す。
十二、十七、十八、二十三、　直義の命によりて玄慧記す。」
二十二、　高德入道義淸記す。後亡失したので二十三卷を割いて二十二とした。」
十九、二十、二十一、二十四――四十、　作者を明記せず。先づ三十九卷まで出來、久しく經て横川の僧能隣改めて四十卷とす。

以上が理盡抄の說の大要である。理盡抄は文明二年の作で、太平記所記の最後の年から約百年を經た時の作であるから、若し理盡抄を確かの本とすれば、其頃まではまだ太平記著作に關する說話も殘つてゐたかも知れず、或程度迄は信じてよい說である。然るに、理盡抄の文明の作なることも疑はれ、且つ何を根據に前記の說を言うたのかも明かでないから、どこ迄を信じてよいのか分らない。

(二) 修史局發見の說

これは修史局で、山城毘沙門堂藏の、洞院藤原公定公（後小松、應永六年薨）の日次記、應安七年五月三日の記に「傳聞、去二十八九日之間、小島法師圓寂…、是近日翫二天下一太平記作者也、凡雖レ爲二卑賤之器一有二名匠聞一、可レ謂二無念一。」とあるのから、小島法師を太平記の著者とするの説である。そして或學者は、小島法師は、兒島高德の出家したのであるとまで言つた。しかし、小島法師が如何なる人であるかは、全く分らないのである。そして、太平記の全部の著者か一部の著者かも亦不明なのである。

（三）結　論

吾人は、本書の記事の態度が一樣でないこと、文章も雜多であること等から、大體に理盡抄の説を採り、小島法師は其の多くの著者の中の一人であると考へて、大體上から、次の諸點を歸結したいと思ふ。

1、數人の手になつたこと。

2、多くは僧侶であること。其の學識の博く深い點等から、玄慧も其一人であると考へたい。

3、叡山關係の僧が多いこと。叡山の記事が詳しいことから推してかくいふのである。

4、南朝方に同情ある者が多いこと。これは夙に難太平記にも言うてあることであるが、中には、後醍醐帝を君德に背きと書き、直義や北朝の天子に同情の筆を用ひ、又尊氏を將軍と尊稱して、其の恩の有難きを言ふ等、南方深重の者の筆とのみ言ひ得ない節も多いので、唯だ大體上からかく言ふに過ぎない。

5、而して最後に誰か一人の手でこれを整理したらしいこと。

二　異本・註釋書

水戸の參考太平記に引いた異本は、

今出川本　南都本　今川本　毛利家本　島津家本　北條本　金勝院本　天正本
西源院本

である。而して參考太平記は、一々本文を比較對照してあるから、其の異同を知るには便利である。此外に神田本といふのがあつて、非常に異つた所の多い珍しいものである。國書刊行會で刊行してゐる。

註釋書は餘りよいものが出てゐないやうである。明治以前のもので、私の見たものは、

太平記抄（著者不明）　太平記賢愚抄（釋乾三）　太平記大全（西道智）　太平記綱目（原友軒）　太平記音義（著者不明）　太平記年表（河原貞頼）　太平記系圖（著者不明）

で、此うち註釋書としてよいのは太平記抄だけである。それも、多く漢土の故事や佛典の出所の説明で、國語方面のことはまことに少い。明治以後のものは、

太平記詳解七卷　三木五百重著
太平記註釋二卷　大塚彦太郎
　　　　　　　　萩野由之校補
太　平　記二卷　國文學會編
　　　　　　　　國文叢書の内

何れも似たやうなもので、始めは可成詳しいが、終の方になると、簡略に過ぎるといふ憾みがないでもなく、名は詳解でも、實はそれにともなはないものである。

三　太平記の内容

A、事實的内容

文保二年二月、後醍醐天皇御卽位の時から、御光嚴院の貞治六年十二月、將軍義詮薨去まで、滿四十九年十ヶ月、ざつと五十年間の戰亂を主として書いたものである。

重なる事柄は、（一）元弘役の顚末、（二）建武中興のこと、（三）尊氏の謀叛と其討伐に關すること、（四）南北兩朝分立間のこと等で、南北の朝廷と、朝廷に關係した武士との間の

記錄に止まり、一般民衆の消息など全く知ることを得ないものである。

更にこれを記事の種類から見ると、（一）普通の歴史的事實、例へば、後醍醐天皇御治世の事、關所停止の事のやうなもの、（二）戰爭前後の事件、例へば、無禮講のこと、俊基朝臣關東下向の事のやうなもの、（三）戰爭の記事、例へば、吉野城軍の事、六波羅攻の事のやうなもの、（四）爭亂に伴ふ說話、例へば、阿新殿の事、加茂神主改補の事のやうなもの、（五）全く附隨的の說話、例へば、玄慧文談の事、干將鏌鎁が事、のやうなものに分けることが出來る。其うちで、量から言つても、作者の態度から言つても、最も主なるものは（三）であつて、（五）は全く附加的のもの、太平記讀みが始まるに及んで、興味の爲に附け加ひたものが、大部であらう。とに角戰爭中心の記錄であつて、軍記の名にそむかないものと言ふことが出來る。

以上の記事が、史學的に信ずべきものか否かについては、古來諸說紛々としてゐる。明治以後に至つても、菅政友氏の「太平記の謬妄遺漏多きことを辨ず」（史學雜誌

第三・四號）久米邦武氏の「太平記は史學に益なし」（史學雜誌第十七・十八・二十・二十一・二十二號）や、內藤燦聚氏の「太平記は小說家の作にあらざるの說」（文第一卷第二十四號）等、一時中々賑かに論ぜられたものである。思ふに、太平記は、理盡抄にも見える如く、正確に史實を傳へようとするよりは、寧ろ一箇の讀物として、作られたもので、隨つて、作者の想像臆見で書いた部分も多く、悉く史實として信ずべからざること勿論である。しかし、大體に於ては、史實と見て差支なく、今日南北朝の歷史として知られてゐる事柄も、大部分は本書の記事によつたものに外ならない。

B、思想的內容

一、佛教思想

禍にあへば宿業を思ひ、福にあへば持戒作善を思ひ、夢に靈鬼を見、死に七生を念ず。太平記の人物は、すべて佛教の世界に覺め、佛教の世界に眠り、念々もそれを離

れることを得ない。のみならず、到る處に佛說を說き教理を談じ、人をして佛教宣傳の書であるかを疑はしめる程である。たゞ平家物語と比較すると、彼はこれ程うるさく佛教的言說を弄さないけれど、しみじみと內心に迫る無常の哀感を有つてゐるのに、これは稍〻形式的外面的となり、一つの習慣となつてゐるやうな趣があるの差がある。

二、武士的思想

名を惜み義を重んじ、死を見ること歸するが如き武士道の思想は、亦本書の重要な思想をなして、かなり强く武人の行動を支配してゐる。高時と共に自害したもの、すべて八百七十餘人、それをきいて死んだもの、鎌倉中だけで六千餘人。源平以來養はれた武士道思想が、玆に美しい花となつて、一時に散つたかの觀がある。しかし、一方、實利的思想もかなり强烈に働いて、利によつて道を二三にする武人も甚だ多く、由て以て、本書の全體に、一種暗澹陰慘な色合を帶ばしめてゐることも否み難い。

平家物語の、あの純情的な清澈な武士の心情美は、今や再び見ることが出來なくなつた。

三、儒教的思想

漢士の說話を好んで引き、漢語の使用が著しく增加したのに伴つて、內容上には、儒教的思想が著しく見られるやうになつて來た。其の特に著しいものは、君德を云爲する思想と、政道を是非する思想とで、第一卷の初めの二三章や、公家一統政道の事等によく現はれてゐる。書名を、始め國家治亂記などと呼んだことも、天下國家の治亂を重視する儒教思想の現はれである。其他、諫めて用ひられざれば退く思想（藤房遁世の事）革命の思想（武家繁昌の事）等の支那思想が、到る處に見えてゐる。

四、王朝風月の思想

月に花に、世をわび戀を嘆く王朝風流の思想も、亦隨所に見られるが、それは殆んど全く、公卿・宮女の間に限られるものとなつてゐる。平家物語に見える賴政や平家

の公達のやうな、半ば宮人化した武士は、殆んど一人も見當らない。そして、爲明詠歌の事や、三位局御夢想の事に見えるやうに、其の王朝趣味を代表する宮人達の行動は、一般の武士共の眼に、一種神祕的な貴いものとしてうつり、又はあえかな女性的な、絶えなんとする糸萩のやうなものとして映つてゐる。卽ち、王朝趣味は愈々地上の生活と離れ、單なる趣味となり典型化して、僅かに宮廷人の生活の上に、其のおもかげを止めるに過ぎなくなつてゐるのである。

五、戰爭觀

戰爭に對する考へも、平家物語との間には、少からざる相違を示してゐる。彼は戰爭に對してひたぶるに驚き悲しみ、其悲慘を見ては末法の世をかこち、敗亡を見ては無常轉變を長歎してゐる。然るに、これは戰爭と、大分馴れつこになつてゐる。相摸場の如く取りかこんで見物するといふやうに（千劍破城軍）、又は所々に見物衆といふ語が見えるやうに、彼等は、輕い明るい氣分でこれに對するやうになつてゐる。

次に、彼では、戰の勝敗は單に戰の勝敗に止まらないで、家門の興亡に關して居る所から、又彼の敵とする所は、代々相惡んだ、怨、骨髓に徹する敵である所から、其の戰爭は本當に必死であり眞劍である。然るに、これは勝敗は單に恩賞に關係するのみであり、其の敵とする所は一時ある事情で敵となつたものに過ぎない。隨つて戰爭に對する眞劍味が、どうしても彼より缺けてゐる。

次に、本書になると、力攻めのみを事としないで、大いに戰略を重んずるやうになつてゐる。武力の爭ひであると同時に智謀の爭ひとなつて來た。楠の智謀も、此の時勢に應じて現れたもの、そして大いに筆の先で誇大されたものであらう。

六、知的傾向

平家物語の全體に漲り溢れてゐるものは、感情であり、特に佛敎的哀感である。然るに太平記になると、著しく知的分子の多いことに氣がつく。假令知が中心主流をなしてゐないまでも、少くとも、感情を抑へて、其のほしいまゝな奔到を許さぬ程の力

は示してゐる。故に太平記では、物の見方も感じ方も極めて平明である。そして、或る點までさめてゐる。平家を、青い月光の下にふるへてゐる世界とすれば、太平記は明るい白晝の世界である。彼を浪曼主義的とすれば、これは自然主義的とまでは行かなくとも、少くとも寫實主義に近いものと見ることは出來る。

隨つて太平記には、平家に見る如き、悲哀、哀愁を根柢とした厭世の思想は見られないで、さめた厭世の相、高踏脫俗的に世を厭ふ隱逸の香がたゞよつてゐる。徒然草、方丈記に見る、山林の氣、草庵の氣の、高い香りと、一脈相通ずるものを有つてゐる。感傷は何人をも引付け易く、さめた感情の香氣は、中々常人には解し難い。太平記が、平家程人氣を博さない、一つの原因はこゝにある。」

四　太平記の文章

太平記の文章の特色を擧げると、」

一、用語が豐富自在であること

佛語・漢語・雅語・俗語・女房詞・武者詞、太平記の用語は、實に日本文學で古來用ひた用語のすべてを網羅して、これを調和し自由に驅使し、よく近世文の文體をひらいてゐる。これ程各種の言葉を總合したもの、特に佛語漢語の用ひ方の多量自在なものは、恐らく過去は論なく、將來にも見ることの出來ない所であらうと思ふ。

かくの如く單に用語が豐富であるのみでなく、更に其の使用が甚だ巧妙で自在である。作者の腦中に、よく消化されて藏されたこれら無數の言葉は、材料に應じ目的に應じて、最も自然に最も巧妙に運用されてゐる。哀話を寫せば、王朝物語式のなだらかな言葉が、いつの間にか流れ出で、其の間に佛語漢語が適宜にはさまつて、其の調子をしめて行く。宗教關係の材料を叙べると、自然に佛語が多くなつて來て、縱橫自在、殆ど讀者をして、朗々たる讀經の場裡、嗣々たる散華の中に恍惚たるの趣あらしめ

る。これは何と言つても、太平記文章の重大な特色に數へなければならぬものである。

二、詞材が豐富であること

用語の豐富自由に伴つて、詞材も實に豐富であり使用自在である。最も多く用ひられたのは、漢土の詩文や故事で、巫山の神女、驪山の月、毛嬙、西施、金谷、梁園、殆ど應接に遑なく、其他、佛經典中の材料、日本古文學の佳章佳話等、少しも窮した趣を見せず、多くは適切に有効に用ひられてゐる。

三、叙述が精細で場面が賑かであること。

太平記の筆者は、なるべく物を具體的に描き、精細に寫し出さうとしてゐる趣がある。平家物語の文に比べると、確かに、言ひ盡し描き盡さねばやまないといふ概が見られる。あの數多い戰爭なども、一つ一つ微細に具體的に書いて、目前に見ることの

やうにはつきりさせてゐる。

次に、太平記全體の人生觀は、前述のやうに、明るい、寧ろ樂觀的のところさへ見られるものである。故に、何をのべても平家の如く、沈んださびしい趣が底に流れない。随て其の記述は、いかにも賑かである。大塔宮入洛の行列や、兵庫海陸寄手のことなど、實に賑かである。此賑かさを好む手法が、やゝもすると誇大の記述を伴ふことになる。四方八百里に餘る武藏野に、人馬充ち滿ちて身を峙つるに所がなかつたり、海上十四五里が程に舟を連ねて、海上が俄に陸になつたりして、白髮三千丈や辟易數里にもまけずに、融通のきかない人をいやがらせてゐる。

四、漢文の影響が多いこと。

平家と比べる時、此特色も亦必ず擧げなければならないものである。平家には、どこ迄も純國語から來るまるみ、やはらかみがあるが、太平記には大いにそれが減じ

て、漢文から來る、銳利な點、かたい點、明快な點が加はつてゐる。」

五、太平記の文は彫琢にすぎ華麗にすぎてはゐない。

太平記といふと、すぐに華麗で彫琢に過ぎたものと考へ易いが、これは聊か誤である。太平記の中で、華麗彫琢の嫌のあるものは、僅に「俊基朝臣再關東下向」「上杉畠山流罪」等の道行文と其他三四のものに過ぎない。其他は何れも、殆んど書下しの儘で、寧ろ甚だ磨きの足らない文である。四十卷三百三十九章の中に、僅か五六章の華飾に過ぎたものがあつたとて、全體的に、華麗だ、細工に過ぎるといふのは少しく當を失してゐる。やゝもすれば道行文を、太平記の代表的の文の如くに考へる人もあるが、それは大きな誤である。道行文は、太平記全體から見ると、寧ろ遊離分子で、他の部分とは少しも調和してゐない。それに道行文そのものも、一種の言語遊戲で、浮華脈ふべきものである。これを以て、直ちに太平記の全體を云爲するのは間違つてゐ

る。アストン氏は「歐人若し太平記を見るも、其物語の大部分は、率直にして秩序あるを悦ぶべし。」と言つてゐるが、これが正直に太平記を讀んだ人の言である。

六、太平記は統一がないといふことに就いて。

太平記は、平家に比べると全體に於て統一が足りない。平家の如く悲哀の情緒の一貫もない。作者の態度も、南に與し北に嚮ひ、一定してゐない。のみならず、横にだらしなく手をひろげて、互の關係の不明な所さへある。加ふるに、平家が祇園精舍の哀聲で始めて、灌頂の巻で結んだ、あのうまい首尾の照應などは全くない。一貫する何物かゞないこと、きりつとしまらないこと、これは確かに太平記の一大缺點である。

しかし、私は一面から、これが太平記のよい點であるとも思ふ。あの紛糾に紛糾を極めた南北朝の世相を、そのまゝに映し出すと、それは整つた平家の形とならない

で、太平記の形となると思ふ。爭鬪があり、反覆があり、哀話があり、謀略があり、そして、それらが亂れもつれて推移して行つた、あの五十年の世相を、來るが儘に、去るが儘に寫して、故意の整理を加ひないのが太平記である。そこに統一を絕した統一がある。それが私には、太平記を好ましめる一つの原因となつてゐる。

目次

太平記解說……一
後醍醐天皇御治世の事附武家繁昌の事……一
關所停止の事……八
立后の事附三位殿御局の事……一一
儲王の御事……一五
中宮御產御祈の事附俊基僞籠居の事……一九
無禮講の事附玄慧文談の事……二三
賴員回忠の事……三〇

資朝俊基關東下向の事附御告文の事……………三九
僧徒六波羅召捕の事附爲明詠歌の事……………四四
俊基朝臣再關東下向の事……………四八
長崎新左衞門尉意見の事附阿新殿の事……………五九
主上臨幸依レ非ニ實事一山門變儀の事……………七五
主上御夢の事附楠の事……………七八
主上笠置を御沒落の事……………八三
赤坂城軍の事……………九〇
先帝遷幸の事……………一〇〇
備後三郎高德が事……………一〇三
相模入道弄ニ田樂一並鬪犬の事……………一〇六
大塔宮熊野落の事……………一一〇

民部卿三位局御夢想の事……一三三
赤坂合戰の事附人見本間拔懸の事……一三九
吉野城軍の事……一五三
千劍破の城軍の事……一六三
先帝船上に臨幸の事……一七六
六波羅攻の事……一八七
主上上皇御沈落の事……一九八
稻村崎干潟となる事……二一〇
龜壽殿令レ落二信濃一事附左近大夫僞落二奧州一事……二一六
筑紫合戰の事……二二三
公家一統政道の事……二三一
藤房卿遁世の事……二四一

兵部卿宮薨御の事附干將莫耶が事……二四九
長年歸洛の事附內裏炎上の事……二五八
加茂の神主改補の事……二六一
正成兵庫に下向の事……二七〇
正成兄弟討死の事……二七六
正成首送二故鄉一事……二八一
山門より還幸の事……二八五
先帝吉野へ潛幸の事……二九〇
金崎の城落つる事……二九六
義貞自害の事……三〇四
義貞の首を獄門に懸くる事附勾當內侍の事……三一一
先帝崩御の事……三二一

正行吉野へ參る事……………………三二六
楠正行最期の事……………………三三三
賀名生皇居の事……………………三三八
上杉畠山流罪死刑の事……………………三四〇
直冬上洛の事附鬼丸鬼切の事……………………三四九
飢人身を投ぐる事……………………三五九
新田左兵衞佐義興自害の事……………………三六四
吉野御廟神靈の事附諸國勢京都に還る事……………………三八三

石田吉貞著 （六四判上製 美本四百頁） 金貳圓 （送料 十八錢）

◇國文法の解義と練習 全壹册

東京神田 大同館藏版

太平記新釋

石田吉貞著

後醍醐天皇御治世の事附武家繁昌の事

爰に本朝人皇のはじめ、神武天皇より九十五代の帝、後醍醐天皇の御宇に當りて、武臣相模守平高時といふ者あり。此時上乖君之徳、下失臣之禮。從此四海大に亂れて、一日も未安、狼煙翳天、鯢波動地、至今四十餘年、一人而不得富春秋、萬民無所措手足。倩尋其濫觴者、匪啻禍一朝一夕之故。元暦年中に、鎌倉の右

大將賴朝卿、追討平家而有其功之時、後白河院叡感之餘被補六十六箇國總追捕使。從是武家始めて諸國に守護を立て、庄園に地頭を置く。彼賴朝の長男左衛門督賴家、次男右大臣實朝公、相續で皆征夷將軍の武將に備はる。是を三代將軍と號す。然るを賴家卿は爲實朝討れ、實朝は賴家の子爲惡禪師公曉討れて、父子三代僅に四十二年にして盡きぬ。其後賴朝卿の舅遠江守平時政子息、前陸奥守義時、自然に執天下權柄、勢漸欲覆四海。此時の太上天皇は後鳥羽院なり。武威下に振ひ、朝憲上に廢れんことを歎き思召して、義時を亡さんとし給ひしに、承久の亂出來て天下暫も靜ならず。遂に旌旗日を掠めて、宇治勢多にして相戰ふ。其戰未終一日、官軍忽に敗北せしかば、後鳥羽院は隱岐國へ遷させられ給ひて、義時彌八荒を掌に握る。其より後武藏守泰時、修理亮時氏、武藏守經時、相模守時賴、左馬權頭時宗、相模守貞時、相續て七代政武家より出で、、德窮民を撫するに足り、威萬人の上に被るといへども、位四品の際を越えず。謙に居て仁恩を施し、己を責めて禮義を正す。是を以て高しと

いふとも危からず。盈てりといふとも溢れず。承久より以來、儲王攝家の間に、理世安民の器に相當り給へる貴族を一人、鎌倉へ申し下し奉りて、征夷將軍と仰いで、武臣皆拜趨の禮を事とす。同三年に、始めて洛中に兩人の一族を置て、兩六波羅と號して、西國の沙汰をとり行はせ、京都の警衛に備へらる。又永仁元年より鎭西に一人の探題を下し、九州の成敗を司らしめ、異賊襲來の守を堅うす。されば一天下普く彼下知に隨はずといふ處もなく、四海の外も均しく其權勢に服せずといふ者はなかりけり。朝陽犯されずとも、殘星光を奪はるゝ習なれば、必ずしも武家より公家を蔑にし奉るとしもはなけれども、所には地頭强うして領家は弱く、國には守護重うして國司は輕し。此故に朝廷は年々に衰へ、武家は日々に盛なり。因レ茲代々の聖主、遠くは承久の宸襟を休めんがため、近くは朝議の陵廢を歎き思召して、東夷を亡さばやと常に、叡慮を回らされしかども、或は勢微にしてかなはず、或は時未到らずして默止給ひける處に、時政九代の後胤、前相模守平高時入道崇鑑が代に至りて、天地命を革む

べき危機此に顯れたり。倩古を引きて今を視るに、行跡甚輕くして嘲を顧ず、政道正しからずして民の弊を思はず、只日夜に逸遊を事として前烈を地下に羞しめ、朝暮に奇物を翫びて傾廢を生前に致さんとす。衛の懿公が鶴を乘せし樂はや盡き、秦の李斯が犬を牽きし恨今に來なんとす。見る人眉を顰め、聽く人唇を翻す。此時の帝後醍醐天皇と申しゝは、後宇多院の第二の皇子、談天門院の御腹にて御座せしを、相模守がはからひとして、御年三十一の時御位に卽け奉る。御在位の間、内には三綱五常の儀を正うして、周公孔子の道に順ひ、外には萬機百司の政怠り給はず、延喜天暦の跡を追れしかば、四海風を望みてよろこび、萬民德に歸してたのしむ。凡諸道の廢れたるを興し、一事の善をも賞せられしかば、寺社禪律の繁昌爰に時を得、顯密儒道の碩才も皆望を達せり。誠に天に受けたる聖主、地に奉ずる明君なりと、其德を稱し、其の化に誇らぬものはなかりけり。(卷一)

【人皇】 神代と區別して、神武天皇以後の天皇を申す。【御宇】 御レ宇卽ち宇内を御し治むる意。みよ。

【狼焰】 烽火。のろし。狼の糞を用ひた所からいふ。前漢書注に「蓋狼糞爲レ煙、煙氣直上、雖二風吹一不レ斜故也。」とある。【鯢波】 鯨波とも書く。鯢は雌鯨也。ときの聲。事苑の四に「鯨常以二五月一就レ岸、生二數萬子一、至二八月一引レ子還レ海、鼓レ浪成レ雷」。【至今四十餘年】 本書を書いた年代をおぼろげながら知らしめる句。天下の亂れ始めた年を元弘元年とすれば、本書の最終の記事のある後光嚴院貞治六年までは前後三十七年を經てゐるから「從レ此四海大いに亂れて」といふ從レ此は元弘元年で、此部分を書いたのは凡そ貞治六年以後數年を經た頃であると見てよいと思ふ。【不レ得レ富二春秋一】 春秋に富むは年若き意。玆では長く生きることが出來ぬ意か。【無レ所レ措二手足一】 少しも安堵の姿のないこと。論語に「刑罰不レ中則民無レ所レ措二手足一。」

【濫觴】 觴はさかづき、濫はうかぶ、楊子江も源は杯をうかべる程の少量の水であつたといふ所から物のおこり、はじめを云ふ。【總追捕使】 國、庄園、寺社を守護するを追捕使といふ。然るに一寺一社の追捕使と、一國以上の追捕使とを區別する爲に後者を總追捕使といふ。後に守護と改稱した。こゝでは六十六ケ國の總追捕使である。【庄園】 平安朝以後、皇族・公卿及び神社・佛閣の私有地となり、國司の干渉を受けず、課役・租稅を免れた地。始めは皇族・功臣に賜はつた田園であつた。【地頭】 源賴朝が莊園に置いた職で、兵糧米の徵收・軍役に服すこと・部內の盜賊の追捕等を掌つた。【征夷將軍】 もとは蝦夷を征するためにおかれたもの。後には天下の武將をさす。【執二天下權柄一】 權ははかりのおもり、柄は斧の柄、人の上に在る人の執るべく、下に移すべからざる所、生殺與奪の權。文選注に「權柄威力也。」【四海】 天下のこと。四方の海の內の意味。

【太上天皇】 讓位後の天皇の尊號。太上皇とも上皇とも申す。【旌旗】 はた。旌も旗もはた。旗旌日を掠めては、多くの旗が天に飜つて日の光も見えなくなる程で。【八荒】 國の八方のはて。全天下を掌握する意。【七代】 これに時政と高時とを合せて、北條九代といふ。【德窮民を云々】 其德はなんぎな境遇に在る民を愛撫するに足り、其威力は萬民の上に及んだけれども。孟子に鰥・寡・孤・獨の四を窮民といふとある。【四品の際】 四位のこと。四位は尸位に通ずるから忌んで四品といふ。しかし品は親王の位に云ふのであるから武家がかく云ふのは惡いと貞丈なども云つてゐる。四位を最上とし、かぎりとして越えぬこと。【高しといふも危からず盈てりといふとも溢れず】 孝經にある言葉。【儲王攝家】 儲王はよつぎのきみ、太子。攝家は攝政關白となるべき家近衞・九條・一條・二條・鷹司の五家といふ。こゝでは親王又は藤原氏の中でといふ程の意。承久元年藤原賴經鎌倉に入り、建長四年尊宗親王を奉請してからは專ら皇族となつた。【理世安民】 世を治め民を安んずる。【拜趨の禮】 臣としての體をとつたこと。貴人に對する禮は走りて其前に到ると禮記曲禮にある。【兩人の一族を云々】 泰時は北方(今の建仁寺附近)、時房は南方(今の動物館附近)、此を兩六波羅といふ。【西國の沙汰】 沙汰は定にて處置し定めること、西國の行政其他の處置を行はせたこと。【九州の成敗……】 九州の政治を行はしめたこと。【四海の外も云々】 海外も云々の意味で、元寇のことを指してゐる。【公家】 朝廷。【所には地頭云々】 武家の置いた役人が勢がよく、朝廷方面の役人は勢が惡かつたこと。即ち莊園では地頭が強くて莊園の持主は弱められ、國では守護が國司を壓倒したこと。【承久の宸襟】 宸襟は天子の御心。承久亂に三上皇が遠島に遷された其御怨み。【朝議の陵廢】 朝議は朝廷の政。

陵廢は高い所のくづれた義。釋名に陵は隆也と注してある。朝政の頽廢と同じ、【東夷】古代から東國人を嘲つて呼ぶ語。こゝでは東國武士を嘲つて言ふ。【後胤】子孫のこと。【天地命を革むべき危機】天地命を革むとは天命の革まることで、即ち統治者の變ること。危機は危い機會、寧ろ危い兆候と譯したい字味。つまり、統治者の變るといふやうな大動亂の起るべき危いきざし。【民の弊】民の苦しみつかれること。【逸遊】ほしいまゝの遊び。【前烈を云々】前烈は先祖の遺功。地下にある先祖の功をはづかしめる。功をけがす。【衞の懿公が鶴を乘せし樂】衞は支那春秋時代に於ける國の名。懿公は其國の王。懿公は淫樂奢侈の君で、鶴を愛して太夫の乘るべき車に乘せあるいた。即ち太夫の秩祿を鶴に與へた。九年の後、北狄が攻めて來た時、懿公は戰はうとしたが、兵士が皆、「鶴に軍をさせ給へ。鶴に祿位があるのだ。」と言つて一人も戰はなかつたので破れて殺された。左傳第四其他に出てゐる。玆では、高時の懿公のやうな淫樂も將に盡きんとしてゐるといふ意。【秦の李斯が犬を牽きし恨】李斯は秦の名相。二世皇帝の時趙高の爲に讒せられて子李由と共に獄に投ぜられ、種々辨明しようとしたが趙高に妨げられて果さず、遂に引出されて殺された。其殺される時、李由を顧みて「俺は釋されたならばお前と共に、あの黄犬をつれて故郷の東門に上つて、兎でもとらうと思つたがもうためだ。」と言つて相哭した。玆は李斯が犬をつれて兎を狩らうと願つて得なかつた恨と同じく、驕慢を悔いて悲しみ恨む日が今にも來ようといふ意。【眉を顰め、脣を翻す】惡み、惡口すること。【談天門院】藤原忠繼の女忠子。【内には三綱五常の儀を云々】内にはは、宮中にては。三綱は君臣・父子・夫婦。五常は仁・義・禮・智・信。周公孔子の道は即儒教の道。即ち宮中にては人倫中の最も大なる君臣・父子・夫

尋の道を正し、五常の德を修め、以て周公・孔子の說かれた道に從ひ奉つたといふこと。【外には萬機百司の政】 外にはは、朝に出でてはの意。萬機は萬事、百司は百官。すべての政も百官の司る政もつまり同意。【延喜天暦の跡云々】 醍醐・村上兩帝の御治績を慕つてそれに近からしめんとしたこと。【四海風を望みて】 天下の人が樣子を望見して。此帝のなされ方を遠く見て喜ぶ。【寺社禪律の繁昌爰に時を得】 神社・佛閣及諸宗派が時を得て繁昌す。禪律は禪宗と律宗。【顯密儒道の碩才】 顯密は顯教と密教にて、碩才は大學者。儒・佛兩道の大學者。要するに前の句を通じて、神・儒・佛何れも榮え、社寺は繁昌し碩學は何れも認め用ひられるに至つたこと。【天に受けたる云々】 天より生れながら德を享け、地上の萬物より生れながら奉戴せられる程のすぐれた君の意。【化】 德化のこと。

關所停止の事

夫四境七道の關所は、國の大禁を知らしめ、時の非常を誡めんがためなり。然るに今壟斷の利に依りて、商賣往來の弊、年貢運送の煩ありとて、大津葛葉の外は、悉く所々の新關を止めらる。又元亨元年の夏、大旱地を枯して、甸服の外百里の間、空しく

赤土のみありて、青苗なし。餓莩野に滿ちて、飢人地にたふる。此年錢三百を以て、粟一斗を買ふ。君遙に天下の飢饉を思召して、朕不德あらば、天予一人を罪すべし。黎民何の咎ありてか此災に遭へると、自帝德の天に背ける事を歎き思召して、朝餉の供御を止められて、飢人窮民の施行に引かれけることそありがたけれ。是も猶萬民の飢を助くべきにあらずとて、檢非違使の別當に仰せて、當時富祐の輩が、利倍の爲に畜へ積める米穀を點檢して、二條町に假屋を建てられ、檢使自斷りて直を定めて賣せらる。されば商買共に利を得て、人皆九年の畜あるが如し。訴訟の人出來の時、若し下情上に達せざることもやあらんとて、記錄所へ出御成りて直に訴を聞召し明め、理非を決斷せられしかば、虞芮の訴忽に停りて、刑鞭も朽ちはて、諫鼓も撃つ人なかりけり。誠に理世安民の政、若し機巧につきてこれを見れば、命世亞聖の才とも稱しつべし。惟恨むらくは齊桓覇を行ひ、楚人弓を遺れしに叡慮少しき似たることを。是則所下以草創雖レ并二一天一守文不レ越二三載一也。（卷一）

【關所停止】 當時諸國に新關多く、關手をとつて利としたこと類聚名物考などにある。【四境七道】 四境は都の四方のさかひで、七道は東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道。【國の大禁】 孟子に「始至於境、問國之大禁、然後敢入。」とある。國の重大なる禁。茲は國の威力を知らしめといふ程の意。【時の非常を誡め】 非常時の警め。【壟斷の利】 一人で專ら利を占めること。壟は小高いうね、壟斷とは切り斷ちて高き所。市場で高い所に登り、四方を見廻して最も賣れさうの所を見つけ、そこに行つて一人で市利を得るといふ意味から市利の獨占といふ意味となる。孟子公孫丑下篇から出た言葉。「大津葛葉」 大津は近江、葛葉は河内の北端で淀川の岸にある。【甸服】 王城の四面方五百里の地、畿内のこと。甸服の外百里の間とあるは、尙書にも史記にも「五百里甸服百里賦納總」とある所からかく續けただけで、甸服の間といふ意味であらう。【餓莩】 餓死した人。莩は殍に通じ餓死する意味の字。【黎民】 庶民のこと。庶民は冠をつけず黑き頭を出す故に言ふ。黎は黑也。【朝餉の供御】 朝の御食事。朝餉には朝の御食の意味の外、單に天子の御食の意味もあるがこゝでは朝食。【檢非違使の別當】 姦民盜賊を追罰し、非違を檢するのが檢非違使廳の役目で、其長官が別當。【富祐の輩】 富裕の輩の意。【利倍】 倍の利益あること。【九年の畜】 富裕となつたこと。禮記王制篇に「國無九年之畜曰不足、無六年之畜曰急云々。」而して三十年耕して漸く九年の畜を得るのだといふ。【記錄所】 始めは莊園の濫置を防ぐ爲に、後三條帝の時置かれて、莊園を記錄にのせる所であつたが、後には一般の訴訟をきく所とたつた。一時中絶してあつたものを、後醍醐帝が再興せられた。【虞芮の訴】 孔子家語にある故事、虞と芮の二國が田を爭つて連年決しない。そこで周の西伯に質さうと行くと、

耕者は畔を譲り、行者は路を譲るといふ禮讓ぶりであつたので、二國の君大いに恥ぢて爭を止めた。茲では田地の訴などの止まつたこと。【刑鞭も朽ちはて諫鼓も云々】 刑鞭は罪人をうつ鞭、蒲で作る。諫鼓は堯の時、門外に鼓を設け、諫めんとする者は之を打つことにした。此れは朗詠の「刑鞭蒲朽螢空去。諫鼓苔深鳥不レ驚。」によつたもの。【機巧】 才智。【命世亞聖】 命は名也、世に名を得たるを命世といふ。亞聖は聖人に次ぐの義。才智のすぐれたるをほめて言ふ。史記序に「信に命世之宏才」とある。【齊桓覇を行ひ】 齊の桓公が覇道を行つたのに似る。覇道とは權謀・武力を以て國を治むること、王者の忌む所である。【楚人弓を遺れし】 孔子家語にある故事、楚の恭王が出遊して弓を失つた。侍臣が之を搜さうとすると王は之を止めて「楚王が弓を失ひ楚人が之を拾ふ。何で搜す必要があらう。」と言つた。孔子が之を聞いて、「惜しい哉其心が狹い。なぜ人弓を失ひ人之を得ると言はないのか」と言つた。恭王は仁であつたが、眼中楚人だけあつて人類がなかつた。茲は天皇が覇者的で又心の狹かつたことを惜しんだ文。【是則所以草創云々】 此覇者的で狹量であらせられたことが、はじめて天下を掌中にはしながら、之を維持すること三年を越えなかつた理由である。草創は事を始めひらくこと。守文は先祖が武力で得た國を、文を以て守り始めること。卽ち國を繼承維持し治めること。

立后の事附三位殿御局の事

文保二年八月三日、後西園寺太政大臣實兼公の御女、后妃の位に備りて、弘徽殿に入らせ給ふ。此の家に女御を立られたること、已に五代、是れも承久以後相模守代々西園寺の家を尊崇せしかば、一家の繁昌恰も天下の耳目を驚せり。君も關東の聞え然るべしと思召して、取分立后の御沙汰もありけるにや。御齡已に二八にして金鷄障の下にかしづかれて、玉樓殿の内に入り給へば、夭桃の春を傷むる粧、垂柳の風を含める御形、毛嬙西施も面を耻ぢ、絳樹青琴も鏡を掩ふ程なれば、君の御覺えも定めて類あらじと覺えしに、君恩葉よりも薄かりしかば、一生空しく玉顔に近かせ給はず。深宮の中に向ひて、春の日の暮れ難きことを歎き、秋の夜の長き恨に沈ませ給ふ。金屋に人なくして、皎々たる殘の燈の壁に背ける影、薫籠に香消えて、蕭々たる暗雨の窓を打つ聲、物毎に皆御泪を添ふる媒となれり。人生勿レ作ニ婦人身一百年苦樂因ニ他人ニと、白樂天が書きたりしも理なりとおぼえたり。

其比安野中將公廉の女に、三位殿の局と申しける女房、中宮の御方に候はれけるを、

君一度御覽ぜられて、他に異なる御おぼえなり。三千の寵愛一身にありしかは、六宮の粉黛は顔色なきが如くなり。都て三夫人九嬪、二十七世婦八十一女御、曁後宮の美人、樂府の妓女といへども、天子顧眄の御心を附けられず。只殊艶尤態の獨能く是を致すのみにあらず。蓋善巧便佞叡旨に先ちて奇を爭ひしかば、花の下の春の遊、月の前の秋の宴にも、駕すれば輦を共にし、幸すれば席を專にし給ふ。是より君王朝政をし給はず。忽に准后の宣旨を下されしかば、人皆皇后元妃の思ひをなせり。驚き見る光彩の始めて門戸に生ることを。此時天下の人、男を生むことを輕じて、女を生むことを重ぜり。されば御前の評定、雜訴の御沙汰までも、准后の御口入とだにいひてければ、上卿も忠なきに賞を與へ、奉行も理あるを非とせり。關雎は樂而不レ淫、哀而不レ傷、詩人採りて后妃の徳とす。奈何かせん、傾城傾國の亂今にありぬと覺えて、あさましかりし事どもなり。（卷一）

【弘徽殿】内裏中の宮殿の一つ。皇妃の御住所。【女御】中宮に次ぐ女官の名。後にはそれより直ちに皇后

に上ることゝなる。【金鷄障の下に云々】 金雞障は金雞といふ鳥の繪を描いた障子。玉樓殿は玉をちりばめた立派な宮殿。美しき宮殿内に入らせられて、かしづかれたこと。【夭桃の春を傷むる粧】 毛詩に少き女を「桃之夭々」といへるより、夭桃を少き女をたとへる語とする。若い桃花の春に惱んだやうなやうす。【毛嬙西施】 共に支那の古の有名な美人。文選の注に「毛嬙西施皆古之美姫也。」とある。【絳樹青琴】 これも遊仙窟其他に出てゐる美女。【一生空しく云々】 こゝは白氏文集の文を取つて作つたものだ。「一生遂向二空床一宿、秋夜長、夜長無レ睡天不レ明、耿々殘燈背レ壁影、蕭々暗雨打レ窓聲、春日遲、日遲獨坐天難レ暮。」【金屋】 華麗の家。【皎々たる殘の燈】 皎々は明かなる貌。殘燈は消え殘つた燈。夜更けの燈。【薫籠】 香爐に同じ。【公廉の女】 廉子、後に新待賢門院といふ。【女房】 女官のこと。こゝは廉子のこと。【三千の寵愛云々】 多くの侍女の寵愛を一身に集めたので、後宮の美女共は驚いて普通の顏色もなかつた、即ち驚き蒼ざめてゐた。六宮は支那で皇后一宮殿、夫人以下五宮殿の總稱で即ち後宮。粉黛は白粉とまゆずみで、化粧することゝ。白樂天の長恨歌によつた句。【三夫人云々】 夫人以下後宮の女官をいうたもので、日本のではなく、支那の制である。長恨歌の注を見て書いた文らしい。【樂府の妓女】 樂府は支那には漢武帝の置いたものがあつて、詩や謠を作らせたり、歌はせたりした所、日本にはない。支那知識によつて書いたもので、雅樂寮のうためを言ふのであらう。【天子顧眄の御心】 顧眄は恩顧。【殊艶尤態の云々】 特別の艶麗な姿態が、此寵を得る原因となつたのみでなく、非常に口先がうまくて、天子の御言葉のないうちに、其心を察してめづらしいとを言ふ。善巧便佞は口才のあること。【是より君王】 長恨歌による。「從レ是君王不二早朝一。」【准后の宣旨】

三后に准じて年官・年爵を賜はる勅旨。【皇后元妃】元妃は第一のきさきで、昔天皇の御寢に侍する者全部をきさきと云つた時、正妃をおほきさきと云つたがそれに當る。後にはおほきさきを皇后と云つたから。玆では皇后も元妃も同じことである。【驚き見る云々】例により長恨歌からとる。「可レ憐光彩生二門戶一、遂令二天下父母心、不レ重レ生レ男重レ生レ女。」【上卿】記錄所の長官。【奉行】公事の事務を行ふ人。玆は訴訟をきく人。【關雎は樂で不淫云々】論語八佾の語、關は關々で和ぎ鳴く聲、雎は雎鳩でみさごといふ鷹の類の鳥、雎鳩が川の邊で和樂してゐる樣を文王の后妃等の和樂に比して其德を頌めた詩が關雎の詩である。此語は孔子が關雎の詩をほめた語であるが、玆では雎鳩そのものをほめた樣にしてある。淫は樂の過ぎたこと、傷は哀のすぎて和を害すること。【傾城傾國の亂】婦人の國を亂した亂。傾城・傾國は美女のことで、美女を愛することから起つた亂をいふ。

儲王の御事

螽斯（しゆうし）の化行れて、皇后元妃の外、君恩に誇る宮女、甚だ多かりければ、宮々次第に御誕生ありて、十六人までぞ御座しける。中にも第一宮尊良親王（いちのみやたかなが）は御子（みこ）左大納言爲世卿の

女、贈從三位爲子の御腹にて御座しゝを、吉田内大臣定房公養君にし奉りしかば、志學の歳の始より、六義の道に長じさせ給へり。されば富緒河の清き流を汲み、淺香山の故き跡を踏みて、嘯風弄月に御心を傷しめ給ふ。第二宮も同御腹にてぞ御座しける總角の御時より、妙法院の門跡に御入室ありて、釋氏の敎を受けさせ給ふ。是も瑜伽三密の間には、歌道數寄の御翫ありしかば、高祖大師の舊業にも耻ぢず、慈鎭和尙の風雅にも越えたり。第三宮は、民部卿三位殿の御腹なり。御幼稚の時より利根聰明に御座せしかば、君御位を此の宮にこそと思召したりしかども、御治世は大覺寺殿と、持明院殿と、代々持たせ給ふべしと、後嵯峨院の御時より定められしかば、今度の春宮をば、持明院殿御方に立て進らせらる。天下の事小大となく、關東の計として叡慮にも任せられざりしかば、御元服の義を改められ、梨本の門跡に御入室ありて、承鎭親王の御門弟とならせ給ひて、一を聞きて十を悟る御器量、世に又類もなかりしかば、一實圓頓の花匂を荊溪の風に薫じ、三諦卽是の月の光を玉泉の流に浸せり。され

ば消えなんとする法燈を挑げ、絶えなんとする慧命を繼がんこと、只此の門主の御時なるべしと、一山掌を合せて悦び、九院首を傾けて仰ぎ奉る。第四宮も、同御腹にてぞおはしける。是は聖護院二品親王の御猶弟にておはせしかば、法水を三井の流に汲み、菩提を慈尊の曉に期し給ふ。此外儲君儲王の選、竹苑椒庭の備、誠に王業再興の運、福祚長久の基、時を得たりとぞ見えたりける。（卷一）

【儲王】東宮のこと。こゝでは親王の事といふ程の意。【螽斯の化】詩經から出た語。螽斯（いなご）は聚つて居て子を多く生む所から、后妃が相和して子を多く生むの德にたとへる。さういふ德が行はれて、君恩に誇る（皇子を生んだこと）宮女が多かつたといふこと。【十六人】或は三十八人といひ三十六人と云ふ。【養君】自分の妻を乳母として養ひ育てること。【志學】十五歲。論語に「子曰、吾十有五、而志二于學一」【六義の道】漢詩の六種の體を六義といふ。風・賦・比・興・雅・頌。こゝでは詩歌の道といふ程の意。【富緒川の云々】聖德太子の薨じた時巨勢三杖太夫のよんだ弔歌の「いかるがの富の緒川のたえばこそ、わが大君の御名わすらえめ。」による。淺香山の古き跡は萬葉集、采女の歌に「淺香山影さへ見ゆる山の井の、淺き心をわが思はなくに。」による。何れも歌の道を學ばれたこと。富緒川の歌をも難波津の歌や、淺香山の歌の如く取扱ひ、隨て歌のことに引いたことは、古今集眞名序に「如下難波津之什獻二天皇一、富緒河之篇報中太子上、或

事闕二神異一、或興入二幽玄一。」とあるので明かである。【嘯風弄月に云々】 詩歌・風流に心を苦しめ給ふ。【第二宮】 宗良親王を申す。【總角】 小兒の髮を分けて左右に結んだもの。轉じて少兒を指す。總角と書くのは、髮を總て上げて、左右に角の形に結ぶより。【妙法院の門跡】 門跡は御門の跡の義で、宇多帝が落飾後仁和寺に居られたのから出た。法親王の住職となる寺をいふ。又その住職をも云ふ。妙法院は延暦寺諸門跡の中の一である。【瑜伽三密】 瑜伽は梵語にて相應と譯す。融合不二の意。三密は身・口・意の三の秘密。瑜伽三密とは、行者と如來との三密が相應融合して卽身成佛の境に至ること。かゝる行をなす暇に歌道等をなされたこと。【數寄】 好きの義で風流のこと。【高祖大師】 傳教大師のこと。開宗の祖を高祖といふ。【慈鎭】 大僧正慈圓の諡名。和・漢・佛の學に通じ、和歌にも巧であつた。【第三宮】 護良親王。【利根】 鈍根に對し利發なる性質。【春宮】 東宮のこと。春は四方に當つれば東、故に東宮のことを春宮ともいふ也。【一實圓頓の花】 法華經をほむる語。轉じて天台宗をもほめて言ふ語となる。卽ち天台の美花と言ふ程の意。一實は眞實の理、圓頓は功德圓滿して成佛の頓速なる意。卽ち眞實の理によりて功德圓滿・成佛頓速なること。【匂を荊溪の云々】 荊溪は曹陵にあり、妙樂大師こゝに居給ふ。玆では天台の行所といふ意味に用ひた。卽ち天台の美花が叡山に咲いた、卽ち天台宗が榮えるといふ意味。【三諦卽是】 天台宗の三哲理。こゝでは、天台宗をほめて呼んだに過ぎぬ。三諦とは、諸法皆空と觀ずる空諦と、諸法皆有と觀ずる假諦と、空にあらず有にあらずと觀ずる中諦とをいふ。卽是とは、此三諦が圓融無二であるといふこと。【玉泉】 荊州にある寺の名。天台智者大師が、一夏の間住んで、摩訶止觀の一念三千の法門を談じた所。三諦卽是云々は、一實

圓頓の句と同意味を繰返したものである。【消えなんとする法燈云々】衰へた宗運をひきかへすのは此門主の時であらうと。法燈は佛の正法を、暗を照す燈にたとへたもの、慧命は佛法の命脈、門主は門跡の住職。【九院】昔は叡山に九院あつた。止觀院・定心院等。【聖護院云々】聖護院の門跡に入らせられたこと。【法水を三井の云々】聖護院は三井寺（圓城寺）の門跡であるからいふ。法水は法雨などと似た佛語。法水、三井、流、汲み、皆緣語である。【龍華を慈尊の云々】彌勒下生の時に佛となる許を得ようと期す。龍華は佛となることを許されること。慈尊は彌勒菩薩のこと。彌勒が兜率天より人天を化益せんと下られる曉。【儲君儲王の云々】皇子の多きこと、皇室を固める人々が多き意。竹園は梁孝王の故事から出て皇族のこと。椒庭は後宮。支那でさんしやうは室を暖め惡氣を除く故を以て、皇后の室に塗つた所から出た語。【福祚】一本には寶祚とある。天子の御位のこと。

中宮御產御祈の事附俊基僞籠居の事

元亨二年の春比より、中宮懷姙の御祈とて、諸寺諸山の貴僧高僧に仰せて、樣々の大法秘法を行はせらる。中にも法勝寺の圓觀上人、小野の文觀僧正二人は別勅（べつちよく）を承けて、じ

金闕に壇を構へ、玉體に近き奉りて、肝膽を碎きてぞ祈られける。佛眼金輪五壇の法、一字五反孔雀經、七佛藥師熾盛光、烏芻沙摩變成男子の法、五大虛空藏六觀音、六字訶臨訶利帝母、八字文殊普賢延命金剛童子の法、護摩の煙は內苑に滿ち、振鈴の聲は掖殿に響きて、如何なる惡魔怨靈なりとも、障礙を成し難じとぞ見えたりける。かやうに功を積み日を累ねて御祈の精誠を盡されけれども、三年まで曾て御產の御事はなかりけり。後に子細を尋ぬれば、關東調伏のために、事を中宮の御產に寄せて、かやうに秘法を修せられけるとなり。是程の重事を思召立つことなれば、諸臣の異見をも窺ひたく思召しけれども、事多聞に及ばゝ、武家に漏れ聞ゆることやあらんと、憚り思召されける間、深慮智化の老臣、近侍の人々にも仰せ合せらるることもなし。只日野中納言資朝、藏人右少辨俊基、四條中納言隆資、尹大納言師賢、平宰相成輔ばかりに、潛かに仰せ合せられて、さりぬべき兵を召されけるに、錦織の判官代足助次郎重成、南都北嶺の衆徒、少々勅定に應じてけり。彼俊基は累葉の儒業を繼ぎて、才學優

長なりしかば、顯職に召仕はれて、官蘭臺に至り、職職事を司れり。然る間出仕事繁くして、籌策に隙なかりければ、如何にもして暫く籠居して、謀叛の計略を回さんと思ひける所に、山門横川の衆徒、款狀を捧げて禁庭に訴ふる事あり。俊基彼奏狀を披きて讀み申しけるが、讀み誤りたる體にて、楞嚴院を慢嚴院とぞ讀みたりける。座中の諸卿是を聞きて、目を合せて相の字をば、篇につけても作につけても、もくとこそ讀むべかりけると、掌を拍つてぞ笑はれける。俊基大に耻ぢたる氣色にて、面を赤めて退出す。夫より耻辱に逢ひ籠居すと披露して、半年ばかり出仕を止め、山臥のかたちに身を易へて、大和河内に行きて、城郭になりぬべき處々を見置きて、東國西國に下りて國の風俗、人の分限をぞ窺ひ見られける。(卷一)

【中宮】禧子のこと。安產の祈である。【金闕】禁闕に同じ。御所。宮中。【壇を構へ】護摩壇、即ち護摩を焚く爐を備へた壇を設け。【佛眼金輪五壇の法】修法の名。佛眼尊を本尊として修する佛眼法と、大日如來を五つの壇を設けて修する金輪五壇の法と。安產の修法。【一字五反孔雀經】孔雀經を一字毎に五反づゝ讀む修法。【七佛藥師熾盛光】七佛藥師の法、即ち善稱名吉祥王如來、寶月智嚴自在王如來、金色寶光妙所成

就如來・無憂最勝吉祥如來、法海雷音如來、法海勝慧遊戯神通如來、藥師瑠璃光如來の七佛を、七つの祭壇に分けて修する法と、熾盛光の修法、卽ち熾盛光佛頂尊を本尊として行ふ修法と。安產・息災の祈禱法である。【烏芻沙摩變成男子の法】烏芻沙摩明王を本尊として、胎内の女子を男子に變ぜしめる法。【五大虛空藏六觀音】五大虛空藏の法、卽ち法界・金剛・寶光・蓮華・業用の五大虛空藏を本尊として修する修法と、六觀音の法、卽ち千手・聖・馬頭・十一面・准胝・如意輪の六觀音を本尊としての修法と。【六字訶臨訶利帝母】六字珂臨の法と、訶利帝母の法。六字珂臨は六字河臨の誤、六觀音を本尊として船を河上に浮べて其中に壇を設けてする修法。珂利帝母は鬼子母神に同じく、それを本尊とする修法。【八字文殊】八字の眞言を誦する文殊法。【普賢延命】普賢菩薩を本尊として延命を祈る法。【金剛童子の法】金剛童子を本尊とする修法。【護摩】梵語。火の祭の義。密敎で、壇を設け火を焚いて佛に祈ること。【內苑】宮中の庭。【披殿】わきの殿舍。以上の修法の敍述は、平家物語卷三、御產のまきの事によつて書いたものであらう。但し句調をよくし、漢語を多く用ひるなど、平家に對する差異が見られる。【調伏】祈禱によつて惡魔を降伏させることと。【南都北嶺の衆徒】南都は京都に對して奈良をいひ、北嶺は叡山をいふ。兩方の僧兵のこと。【累葉】重代【顯職】顯要なる官職。高き官職。【蘭臺】辨官の唐名。此官の人は、御前近く侍する故に身に芳香を帶びるといふ意。職原鈔に「口含二雞舌香一手握レ蘭。故此云二握蘭之職一也」とある。俊基は右少辨であつた。【職事】藏人の別名。【籌策】はかりごと。【謀叛】天皇に對して謀叛といつて平氣である所に、時代の面影が見える。【欵狀】願書。欵は誠の義があつて、官位などの望を申す時、誠を盡して書く狀といふ意。

【相の字をば云々】 楞の字の中に万の字があるといふので マンと讀むならば、相の字は、扁もつくりもモクだから、サウとよまずにモクと讀むべきではないかと嘲笑したのである。【山臥】 山伏。修驗道の行者。修驗道は役小角の開いた教法で、護摩をたき呪文を唱へて祈禱し、山野に交つて苦行をする。【人の分限】 分限はみのほど。身分。擧兵の時の用意に、主なる武士・豪族などの様子を視察したのである。

無禮講の事附玄慧文談の事

爰に美濃國住人、土岐伯耆十郎頼貞、多治見四郎次郎國長といふ者あり。共に淸和源氏の後胤として、武勇の聞えありければ、資朝卿様々の縁を尋ねて昵(むつ)び近かれ、朋友の交已に淺からざりけれども、是程の一大事を左右(さう)なく知らせん事、如何あるべからんと思はれければ、猶もよく〳〵其心を窺ひ見んために、無禮講(ぶれいかう)といふことをぞ始められける。其人數には尹大(いんの)納言師賢、四條中納言隆資、洞院左衛門督實世(かみさねよ)、藏人右小辨俊基、伊達三位房游雅(ゆうが)、聖護院廰の法眼玄基(げんき)、足助次郎重成、多治見四郎次郎國長、

等なり。其交會遊宴の體、見聞耳目を驚せり。獻盃の次第上下をいはず、男は烏帽子を脫ぎて髻を放ち、法師は衣を着ずして白衣になり、年十七八なる女の、眄容優に膚殊に淸らかなるを、二十餘人、褊の單ばかりを着せて酌を取らせければ、雪の膚すき通りて、大掖の芙蓉新に水を出でたるに異ならず。山海の珍物を盡し、旨酒泉の如くに湛へて、遊び戲れ舞ひうたふ。其間には、只東夷を滅すべき企の他は他事なし。其事となく常に會交せば、人の思ひ咎むることもやあらんとて、事を文談に寄せんがために、其比才學無雙の聞えありける、玄慧法印といふ文者を請じて、昌黎文集の談義をぞ行はせける。彼法印謀叛の企とは夢にも知らず、會合の日每に席に臨みて、玄義を談じ理をひらく。彼文集の中に昌黎赴潮州といふ長篇あり。此處に至りて、談義を開く人々、是皆不吉の書なりけり。吳子孫子六韜三略なんどこそ然るべき當用の文なれとて、昌黎文集の談義を止めてげり。

此韓昌黎と申すは、晚唐の季に出でゝ、文才優長の人なりけり。詩は杜子美李太白に

肩を雙べ、文章は漢魏晋宋の間に傑出せり。昌黎が猶子韓湘といふ者あり。是は文字をも嗜まず。詩篇にも携はらず。只道士の術を學びて、無爲を業とし、無事を事とす。或時昌黎韓湘に向ひて申しけるは、汝天地の中に化生して、仁義の外に逍遙す。是君子の耻づる處、小人の專らとする處なり。我常に汝がために是を悲む事切なりと、教訓しければ、韓湘大にあざわらひて、仁義は大道の癈れたる處に出て、學教は大僞の起る時に盛なり。吾無爲の境に優遊して、是非の外に自得す。されば眞宰の臂を掣きて、壺中に天地を藏し、造化の工を奪ひて、橘裏に山川を峙つ。却りて悲むらくは、公の只古人の糟粕を甘ひて、空しく一生を區々の中に誤ることをと答へければ、昌黎重て曰く、汝が言ふ所我未信ぜず。今則造化の工を奪ふことを得てんやと問ふに、韓湘答ふる事なくして、前に置きたる瑠璃の盃をうちうつぶせて、軈て又引仰向けたるを見れば、忽に碧玉の牡丹の花の嬋娟たる一枝あり。昌黎驚きて是を見るに花中に金字に書ける一聯の句あり。雲横二秦嶺一家何在、雪擁二藍關一馬不レ前云々。昌黎不思

議の思ひをなして、是を讀みて一唱三嘆するに、句の優美遠長なる體製のみありて其趣向落着の所を知り難し。手に取りて是を見んとすれば、忽然として消え失せぬ。是よりしてこそ、韓湘仙術の道を得たりとは天下の人に知られけれ。

其後昌黎、佛法を破りて儒教を貴むべきよし、奏狀を奉りける咎に依りて、潮州へ流さる。日暮馬泥みて前途程遠し。遙に故郷の方を顧れば、秦嶺に雲横りて來つらん方も覺えず。悼みて萬仭の嶮に登らんとすれば、藍關に雪滿ちて行くべき末の路もなし。進退歩を失ひて頭を回す處に、いづくより來れるともなく、韓湘勃然として傍にあり。昌黎悦びて馬より下り、韓湘が袖を引きて、泪の中に申けるは、先年碧玉の花の中に見えたりし、一聯の句は、汝我に預左遷の愁を告げ知せるなり。今又汝爰に來れり。料り知りぬ、我遂に謫居に愁死して歸ることを得じと。再會期なくして遠別今にあり。豈悲に堪へんやとて、前の一聯に句を續けて、八句一首と成して韓湘に與ふ。

一封朝奏ス九重天ノ　夕ニ貶セラル潮陽ニ路八千

欲下為二聖明一除中弊事上　豈將二衰朽一惜二殘年一
雲橫二秦嶺一家何在　雪擁二藍關一馬不レ前
知汝遠來須レ有レ意　好收二吾骨瘴江邊一

韓湘此詩を袖に入れて、泣々東西に別れにけり。誠なるかな、癡人の面前に夢を說かずといふこと。此談義を聞きける人々の忌み思ひけるこそおろかなれ。（卷一）

【清和源氏】 清和天皇より出でたる源氏。嵯峨源氏・村上源氏・宇多源氏と合せて源氏の四姓といふ。土岐・多治見は清和源氏中の美濃源氏。【昵び近かれ】 親しみ近づく。【左右なく】 とかくの論なく。たやすく。【聖護院廳の法眠】 法眠は放免の誤か、又は法眼の誤か。廳の放免は檢非違使廳の下役。【褊の單】 生絹の表のない衣服。【大披の芙容】 大披は漢の宮苑内にあつた大液池のこと。芙容は蓮。長恨歌の「大液芙容未央柳」からといつた句。【旨酒】毛詩の注に「旨美也」とある。美酒。【其ことゝなく云々】 何と定まつた事もなく會合すれば。【文談】 文學に關するはなし。【才覺無雙】 才學無雙と同じ。【玄慧法印】 後醍醐帝の侍讀をつとめた當代の碩學。法印は僧位の最上。【文者】 學者。儒者。【昌黎文集】 昌黎は號で、名は愈、字は退之。唐代第一流の文豪。其の韓愈の文集。【玄を談じ云々】 奧深い理を說いたこと。【是皆不吉の書】 擧兵の謀を廻してゐる最中に、流されて死ぬなどといふ話をきくのを不吉であるとした。【吳子孫子六韜三略】

何れも兵法の書。呉子は周の呉起の撰。孫子は周の孫武の撰で魏の武帝の注したもの。六韜は太公望の撰といはれるもの。三略は上略・中略・下略に分れてゐて、黄石公が圯上の橋で張良に授けたものと云はれてゐるが僞書である。【晩唐】 唐の終頃の時代。盛唐・中唐と對す。【猶子】 甥のこと。禮記に「兄弟之子猶レ子也」とある所から出た語。後には養子をも云ふ。【道士の術】 黄老無爲の道を修め、神仙の術奇怪の術を行ふ者【無爲】 人爲の反對で自然のまゝにしてゐること。黄老の教では、仁義禮法を人爲として斥け、唯だ自然のまゝ何等爲すことなきを理想とした。「大道廢れて仁義あり」は老子の語で、大道とは無爲の道である。【無事を事とす】 前の句と同意。文の調子でかく言つたのであらう。【學教は大僞の云々】 大僞は自然のまゝならぬこと、卽ち人爲。老子に「智慧出而有二大僞一」とあるによる。【優游】 自ら樂しむこと。曲禮の注に「優游自得之貌也。」とある。自適と同じい。【眞宰の臂を掣きて云々】 造化の神のなす所を掣肘して、小さな壺の中に天地を造ることが出來る。眞宰は宇宙の主宰者、天、造化の神。壺中に天地を藏すは、壺公の故事による。或る藥を賣る老人があつて、市がやむと店頭に懸けて置いた壺の中に跳び込んで見えなくなる。それを長房といふ市椽が樓上から見てゐたので、老人の所へ行つて、懇願して中へ入つて見ると、玉殿があり美酒があつたといふ故事。【造化の工を云々】 意味は前句と同じい。橘裏に云々は幽怪錄の次の話からとる。巴邛の人が橘を收めて見ると、非常に大きな橘があつたので、割つて見ると、中には二人の老人が棋を鬪はして、談笑自若としてゐた。【古人の糟粕を甘ひて】 古の聖人の言ひ古したことを喜んで守つて。莊子からとつた句。【區々の中】 區々は小さい貌。細かい道德の規定の中に一生を誤り送る。【嬋娟】 あてやかに

美し。【一聯】一双の對句。【優美遠長云々】詞の姿が優美で、情趣のかすかに遠く盡きない句の體ではあるが、意味が、つまりどう落着くのか分らない。句體はよいが句意がはつきり分らぬ。【佛法を破りて云々】憲宗に上つた有名の論二佛骨一表で、唐宋八家文卷二にある。【馬泥みて】馬が行きなやんで。【謫居】罪を得て配流されて居ること。【朝奏】朝に上奏すること。【九重天】天子のこと。天子の門は九重に造るから。【貶】官位をおとされること。【秦嶺】陝西省鳳翔府の南方にある嶺。【藍關】謫地に至る途中の關の名。【瘴江】瘴は毒氣。毒氣のある江。潮州は今の廣東の附近で健康に害ある地とされた。【第一二句】朝に佛骨を論ずる一封の表を天子に上つて、夕にはもう潮州の刺史におとされて遠い道を行かねばならぬ。【第三四句】これも天子の爲に弊事を除かうと思つてしたことだ。何で衰朽の殘年を惜しまうや、身をすててしたのだ。【第五六句】顧れば雲は秦嶺の上にかゝつて故郷も見えず、行く手の藍關には雪が積つて馬が進まぬ。【第七八句】お前が遠く自分を追つて來て與れた好意は有難い。どうか自分の骨をあの瘴氣立つ江の邊に拾つてくれ。【癡人の面前に云々】夢は解釋のし方でどうにもとれる。愚人の前で夢を話すとつまらぬ解釋をするから話してはならぬ。此昌黎の話も解し方では何とも無いのに、此人達が忌んだのは癡人に云々も思はれて愚かなことだ。

頼員回忠の事

謀叛人の與黨、土岐左近藏人頼員は、六波羅の奉行、齋藤太郎左衛門尉利行が女と嫁して、最愛したりけるが、世中已に亂れて合戰出來りなば、千に一も討死せずといふことあるまじと思ひける間、かねて餘波や惜しかりけん、或る夜の寢覺の物語に一樹の陰にやどり、同じ流を汲むも皆是多生の縁淺からず、況や相馴れ奉りて已に三年に餘れり。等閑ならぬ志の程をば、氣色につけ、折りに觸れても思ひ知り給ふらん。去りとても定なきは人間の習、相逢ふ中の契なれば、今若し我が身はかくなりぬと聞き給ふことあらば、なからん跡までも貞女の心を失はで、我後世を問ひたまへ、人間に返らば再び夫婦の契を結び、淨土に生れば同じ蓮の臺に半座を分けて待つべしと、其事となくかきくどき、泪を流してぞ申しける。女つく／＼と聞きてあやしや何事の侍る

ぞや、明日までの契の程も知らぬ世に、後世までのあらましは、忘れんとての情にてこそ侍らめ。さらではかゝるべしともおぼえずと、泣き恨みて商ひければ、男は心淺くして、さればよ、我不慮の勅命を蒙りて、君に憑れ奉つる間辭するに道なくして、御謀叛に與みしぬる間、千に一も命の生きんずることかたし。あぢきなく存ずる程に、近づく別の悲しさに、かねてかやうに申すなり。此の事あなかしこ、人に知らさせ給ふなと、能々口をぞ堅めける。彼女性心の賢き者なりければ、夙におきてつく／＼と此事を思ふに、君の御謀叛事成らずば、憑みたる男忽に誅せらるべし。若し又武家亡びなば、我親類誰かは一人も殘るべき。さらば是を父利行に語りて、左近藏人を回忠のものになし、是をも助け、親類をも扶けばやと思ひて、急ぎ父が許に行きて、忍びやかに此事をありのまゝにぞ語りける。

齋藤大に驚き、軈て左近藏人を呼び寄せ、斯る不思議を承る。誠にて候ふやらん。今の世にかやうの事思ひ企て給はんは、偏に石を抱きて淵に入るものにて候ふべし。若

し他人の口より漏れなば、我等に至るまで皆誅せらるべきにて候へば、利行急ぎ御邊の告げ知らせたるよしを、六波羅殿に申して、共に其咎を遁れんと思ふは、如何か計ひ給ふぞと問ひければ、是程の一大事を、女性に知らする程の心にて、なじかは仰天せざるべき、此事は同名頼貞、多治見四郎二郎がすゝめに依りて、同意仕りて候。只兎も角も身の咎を助かるやうに、御計ひ候へとぞ申しける。夜未明けざるに、齋藤急ぎ六波羅へ參りて、事の子細を委しく告げ申しければ、則時をかへず鎌倉へ早馬を立て、京中洛外の武士どもを六波羅へ召し集めて、先づ着到をぞつけられる。其比攝津國葛葉といふ處に、地下人代官を背きて、合戰に及ぶことあり。彼本所の雜掌を六波羅の沙汰として、庄家にしすゑんために、四十八箇所の篝、幷に在京人を催さるゝよしを披露せらる。是は謀叛の輩を落さじがための謀なり。土岐も多治見も、吾身の上とは思ひも寄らず、明日は葛葉へ向ふべき用意して、皆な己が宿所にぞ居たりける。去程に明くれば、元德元年九月十九日の卯の刻に、軍勢雲霞の如くに、六波羅へ馳せ

參る。小串三郎左衛門尉範行、山本九郎時綱、御紋の旗をたまはり、討手の大將を承つて、六條河原へうち出で、二千餘騎を二手に分けて、多治見が宿所錦小路高倉、土岐十郎が宿所三條堀河へ寄せけるが、時綱かくては如何樣大事の敵をうち漏しぬと思ひけるにや、大勢をばわざと三條河原に留めて、時綱只一騎、中間二人に長刀持たせて、忍びやかに土岐が宿所に馳せて行き、門前に馬をば乘り捨てゝ、小門より內へつと入りて、中門の方を見れば、宿直しける者よと覺えて、物具太刀刀枕に取り散し、高鼾かきて寢入りたり。廐の後を廻りて、何にか隱地のあると見れば、後は皆築地にて、門より外は路もなし。さては心安しと思ひて、客殿の奧なる二間を颯と引きあけたれば、土岐十郎只今起きあがりたりと覺えて、鬢髮を撫であげて結ひけるが、山本九郎を屹と見て、心得たりといふまゝに、立てたる太刀を取り、側なる障子を一間踏み破り、六間の客殿へ跳り出で、天井に太刀を打けつけじと、拂ひ切りにぞ切りたりける。時綱はわざと敵を廣庭へおびき出し、透間もあらば生捕らんと志して、う

後ち拂ひては退き、うち流しては飛びのき、人交もせず戰ひて、後を屹と見たれば、後陣の大勢二千餘騎、二の關よりこみ入りて、同音に吶喊をつくる。土岐十郎久しく戰ひては、中々生捕れんとや思ひけん、本の寢所へ走り歸りて、腹十文字にかき切りて北枕にこそ臥したりけれ。中の間に寢たりける若黨どもゝ、思ひ思ひに討死して、遁るゝ者一人もなかりけり。首を取りて鋒に貫きて、山本九郎は是より六波羅へ馳せ參る。

多治見が宿所へは、小串三郎左衞門範行を先として、三千餘騎にて推し寄せたり。多治見は終夜の酒に飲み醉ひて、前後も知らず臥したりけるが、吶喊の聲に驚きて、是は何事ぞとあはてさわぐ。傍に臥したる遊君、物馴れたる女なりければ、枕なる鎧取てうち着せ、上帶強くしめさせて、猶寢入たる者どもをぞ起しける。小笠原孫六、傾城に驚されて太刀ばかりを取りて、中門に走り出で、目をするするゝ四方を屹と見ければ、車の輪の旗一流、築地の上より見えたり。孫六内へ入りて、六波羅より打手の向

ひて候ひける。此間の御謀叛早顯れたりと覺え候。早面面太刀の目貫の堪へん程は切合せて、腹を切れと呼はりて、腹卷取りて肩になげかけ、二十四差したる胡籙と、繁藤の弓とを提げて、門の上なる櫓へ走り上り、中差取りて打ちつがひ、狹間の板八文字に排きて、あらこと〴〵しの大勢や、我等が手柄のほどこそ顯れたれ。抑討手の大將は、誰と申す人の向はれて候ふやらん、近づきて箭一つ請けて御覽候へといふまゝに、十三束三伏、忘るゝばかり引きしぼりて切りて放つ。眞先に進みたる狩野下野前司が若黨に、衣摺助房が冑のまつかう、鉢附の板まで矢先白く射通して、馬より倒に射落す。是を始として鎧の袖、草摺冑の鉢ともいはず、指し詰めて思ふやうに射けるに、面に立ちたる兵二十四人、矢の下に射て落す。今一筋胡籙に殘りたる矢を拔きて胡籙をば櫓の下へからりと投げ落し、此の矢一をば冥途の旅の用心に持つべしといひて腰にさし、日本一の剛の者、謀叛に與し自害する有樣、見置きて人に語れと高聲に呼はりて、太刀の鋒を口に呀へて、櫓より倒に飛び落ちて、貫かれてこそ死にけれ。

此の間に多治見を始として、一族若黨二十餘人、物具ひし〳〵と堅め、大庭に跳り出でゝ、門の關の木さして待ちかけたり。

寄手雲霞の如しといへども、思ひ切りたる者どもが、死狂をせんと引き籠りたるがこはさに、內へ切りて入らんとする者もなかりける處に、伊藤彥次郞父子兄弟四人、門の扉の少し破れたる處より這うて內へぞ入りたりける。志の程は武けれども、待ちうけたる敵の中へ這うて入りたるとなれば、敵に打ち違へるまでもなくて、皆門の脇にて討れにけり。寄手是を見て、彌近づく者もなかりける間、內より門の扉を推し開きて、討手を承るほどの人達の、きたなうも見えられ候ふものかな。はやこれへ御入候へ。我等が頸ども引出物に進せんと、耻しめてこそ立ちたりけれ。寄手ども敵にあくまで欺れて、先陣五百餘人馬を乘り放して、歩立になりをめいて庭へこみ入る。たてこもる所の兵ども、とても遁れじと思ひ切りたることなればいづくへか一足引くべき。二十餘人の者ども、大勢の中へ亂れ入りて、面もふらず切りてまはる。先驅の

寄手五百餘人、散々に切り立てられて、門より外へ颯と引く。されども寄手は大勢なれば、先陣引けば二陣喚いてかけ入る。かけ入れば追ひ出し、追ひ出せば懸け入り、辰の刻の始より午の尅の終まで、火出づる程こそ戰ひけれ。かやうに大手の軍強ければ、佐々木判官が手の者の千餘人後へ廻りて、綿小路より在家を打ち破りて亂れ入る。多治見今は是までとや思ひけん、中門に並居て廿二人の者ども、互にさし違へ〳〵算を散せる如く臥したりけり。追手の寄手どもが門を破りける、其間に搦手の勢ども亂れ入り首を取りて六波羅へ馳せかへる。一時ばかりの合戰に、手負死人を數ふるに二百七十三人なり。（卷一）

【一樹の陰に云々】說法用眼論に「宿二一樹下一、汲二一河流一……皆是先世結緣。」とあるによる。【後世までのあらまし】後世までの豫想、豫期。【あぢきなく】味氣なしの意。面白味なく。情なく。【あなかしこ】あな畏の意。あなは感歎のあゝと同じ。あゝ恐しの意から、絕對に等の意味となる。【回忠】前の主にそむいて、新の主に忠をつくすこと。內通。【石を抱いて淵に入る】無智・愚昧のため自ら身命を亡すこと。說苑其他に出てゐる。【同名賴貞】同名は同苗に同じ。苗字の同じいこと。【早馬】急使。【着到をつけ】

着到は、出陣の時集り來つた人々の名を書き記したもの。【地下人】土着の武士。昇殿を許されぬ官人をも仕官せぬ賤民をも云ふ。【代官】地頭代のこと。【彼本所の雜掌を云々】故に葛葉莊の雜掌を、六波羅の命によつて、庄家に任置しようといふこと。雜掌は莊園で、年貢などの雜事をとる者。庄家は、莊園に、本主が立てゝ置く事務所。【四十八箇所の篝】警備のために、京の四十八所で篝をたいたもの。【太刀刀】太刀は大刀で足があつて帶に佩くもの。刀は小さき刀。【六間の客殿】間とは柱と柱との間、それが四方とも六間ある客殿。柱の間は約六尺であるが一定しない。【二の關】第二の門。【車の輪の旗】車の輪の紋所うつた旗。【築地】柱を立て、板を心として、土で塗り固め、瓦の屋根をふいた垣。【腹卷取て云々】袖のない背で合せる鎧が腹卷。それを急いで着ること。【二十四差したる胡籙】二十四本の矢をさした胡籙。胡籙は矢を盛つて負ふ具。實は二十五本差すのだが、一本は射ずに殘すのが武士の故實だといふ。孫六も其通りに一本殘してゐる。【繁藤の弓】黑い弓に白い藤を少し間をおいてしげく卷いたもの。大將が主として持つ。【櫓】武家の門の側に設けたもので、常に弓矢を備へておき、いざといふ時上つて射る。【中差】征矢のわきに添ふる二本の鏑矢が上差、更に其のわきにさす二本の尖り矢が中差。【狹間の板八文字に排き】狹間は櫓の前にある窓。其戸を八の字形に開く。【十三束三伏】矢の長さ十三握りと指三本のこと。普通は十二束。【忘るゝばかり云々】一寸引いて直ぐ放たず、充分に引しぼる。【冑のまつから】冑の鉢の前面。【鉢板の附】しころの第一枚目。鉢につける故。【さし詰めて】指し詰め引詰と同じ。矢繼早に。【敵にあくまで歎かれて】嘲られてと同じ。神田本には此部分はない。【大手】追手の意。正面。【在家】田舍の

家。【算を散せる如く】算木を散りまいたやうに。算木は卜に用ひる木。

資朝俊基關東下向の事附御告文の事

土岐多治見討れて後、君の御謀叛次第に隱れなかりければ、東使長崎四郎左衞門泰光、南條次郎左衞門宗直二人上洛して、五月十日資朝俊基兩人を召し捕り奉る。土岐が討たれし時、生虜の者一人もなかりしかば、白狀はよもあらじ。さりとも我等が事は顯れじと、はかなきたのみに油斷して、曾て其用意もなかりければ、妻子東西に迯げ迷ひて、身を隱さんずるに處なく、財寶は大路に引き散されて、馬蹄の塵となりにけり。彼資朝卿は日野の一門にて、職大理を經、官中納言に至りしかば、君の御おぼえも他に異にして、家の繁昌時を得たりき。俊基朝臣は身儒雅の下より出で丶、望勳業の上に達せしかば、同官も肥馬の塵を望み、長者も殘盃の冷に從ふ。宜哉不義而富、且貴於

我如ニ浮雲ニといへること、是孔子の善言魯論に記する處なれば、なじかは違ふべき。夢の中に樂盡て、眼前の悲云に來れり。彼を見是を聞ける人ごとに、盛者必衰の理を知らでも袖をしぼりえず。同二十七日東使兩人、資朝俊基を具足し奉りて鎌倉へ下着す。此人々は殊更謀叛の張本なれば、聽て誅せられぬと覺えしかども、倶に朝廷の近臣として、才學優長の人たりしかば、世の誹君の御憤を憚りて嗷問の沙汰にも及ばず、只尋常の放召人の如くにて、侍所にぞ預け置れける。

七月七日今夜は牽牛織女の二星、烏鵲橋を渡して、一年の懷抱を解く夜なれば、宮人の風俗竹竿に願絲を懸け、庭前に嘉果を列ねて乞巧奠を修する夜なれども、世上騷がしき時節なれば詩歌を奉る騷人もなく、管絃を調ぶる伶倫もなし。適上臥したる月卿雲客も、何となく世中の亂、又誰身の上にか來らんずらんと、魂を消し肝を冷す時分なれば、皆眉を顰め面を低れてぞ候ひける。夜痛く更けて、誰か候ふと召されければ吉田中納言冬房候ふとて御前に候す。主上席を近けて仰ありけるは、資朝俊基が囚れ

し後、東風猶未靜ならず、中夏常に危を踏む。此上に又如何なる沙汰をか致さんずらんと、叡慮更に穩ならず。如何して先づ東夷を定むべき謀あらんと、勅問ありければ、冬房謹みて申しけるは、資朝俊基が白狀ありとも承り候はねば、武臣此上の沙汰には及ばじと存じ候へども、近日東夷の行事、楚忽の義多く候へば、御油斷あるまじきにて候。先づ告文一紙を下されて、相模入道が忿を靜め候はばやと申されければ、主上げにもとや思召されけん、さらば聽て冬房書けと仰ありければ、則ち御前にて草案をして、是を奏覽す。君暫く叡覽ありて、御泪の告文にはら〳〵とかゝりけるを、御袖にて押し拭はせ給へば、御前に候ひける老臣、皆悲啼を含まぬはなかりけり。頓て萬里小路大納言宣房卿を勅使として、此告文を關東へ下さる。

相模入道秋田城介を以て告文を請取りて、則ち披見せんとしけるを、二階堂出羽入道道蘊堅く諫めて申しけるは、天子武臣に對して、直に告文を下されたる事、異國にも我朝にも未其例を承らず、然るを等閑に披見せられん事冥見につきて其恐あり。只文

箱をひらかずして、勅使に返し進らせらるべきかと、再往申しけるを、相模入道何か苦しかるべきとて、齋藤太郎左衛門利行に讀進せさせられけるに、叡心不レ僞處、任ニ天照覽一と遊されたる處を讀みける時に、利行俄に目眩き衂垂りければ、讀みはてずして退出す。其日より喉下に惡瘡出でゝ、七日の中に血を吐きて死にけり。時澆季に及びて道塗炭に落ちぬといふも、君臣上下の禮違ふ時は、さすが佛神の罰もありけりと、是を聞きける人ごとに懼ぢ恐れぬはなかりけり。何樣資朝俊基の隱謀、叡慮より出でしことなれば、たとひ告文を下されたりといふとも、それに依るべからず。主上をば遠國へ遷し奉るべしと、初は評定一決してげれども、勅使宣房卿の申されし趣、實にもとおぼゆる上、告文讀みたりし利行、俄に血を吐きて死にたりけるに、諸人皆舌を卷き口を閉づ。相模入道も、さすが天慮其憚ありけるにや、御治世の御事は、朝議に任せ奉る上は、武家いろひ申すべきにあらずと、勅答を申して告文を返進せらる。宣房卿則歸洛して此由奏し申されけるにこそ、宸襟始めて解けて、群臣色をば直されけ

れ。去程に俊基朝臣は、罪の疑しきを輕くして赦免せられ、資朝卿は死罪一等を宥められて、佐渡國へぞ流されける。（卷一）

【大理】 検非違使別當の唐名。【望勳業の上に達す】 勳業は勳功ある仕事。儒家から出たが功業の方でも望をとげた。即ち大いに功業あつて昇進した。【肥馬の塵云々】 同官もお機嫌をとり、長者も恥を與へられて甘んじた。肥馬の塵云々は追從すること。殘盃の冷云々は冷たい飲殘しの酒をも甘んじて飲むことで、恥を甘んじ受ける。杜甫の詩による。「暮隨二肥馬塵一、殘盃與二冷炙一。」【宜哉不義而富云々】 資朝や俊基の榮達に對して、不義にして云々は餘りにひどい。文字を飾るに急で、深く意義を考へずに使用した爲であらう。作者は敢て不義の榮華と思つたのでもない。【魯論】 魯國に傳へられた論語。今の論語は、魯論であるから、こゝでは單に論語と云ふと同じ。【嗷問】 栲問と同じ。罪人を苦しめせめて問ふこと。【放召人】 刑具を用ひずに、一所に拘留し置かれる人。武家の刑。【牽牛織女の二星云々】 七月七日に、織女星が烏鵲の渡した橋を渡つて、牽牛星と、一年一度の會合をなすといふ支那の傳説。【竹竿に願絲をかけ云々】 七月七日の夜、庭前に机を置きて物を供へ、香をたき、竹竿に願絲といふ五色の絲をかけて立て、兒女が技藝の上達を二星に祈りしこと。白樂天の詩に「憶得少年長乞巧、竹竿頭上願絲多。」【騷人】 詩文の人。屈原の離騷の賦から出た語。【伶倫】 伶人に同じく、樂人。【上臥】 殿中に宿直すること。【月卿雲客】 月卿は公卿と同じく、中納言・參議又三位以上の人。雲客は殿上人。【中夏】 中華と同じ。四方の蠻夷に對して、中央の開けたる

所を指す。こゝは畿內又は都の意。都が常に危險を感ずる。【冥見】神佛の御照鑑。【澆季】澆はうすし。人情薄くなり衰へた末の世。【道塗炭に落ちぬ】塗は泥、炭はすみ、きたなきもの。人の道が廢れた。【いろひ】論ず。【死罪一等を宥め】等はしな。段。死罪とすべきを一段低き刑にゆるす。

僧徒六波羅召捕の事附爲明詠歌の事

事の漏れやすきは禍を招く媒なれば、大塔宮の御行事、禁裏に調伏の法行はるゝ事ども、一一に關東へ聞えてけり。相摸入道大に怒りて、いや〳〵此君御在位のほどは、天下靜まるまじ。所詮君をば承久の例に任せて遠國へ移し奉り、大塔宮を死罪に處し奉るべきなり。先づ近日殊に龍顏に咫尺し奉りて、當家を調伏し給ふなる、法勝寺の圓觀上人、小野の文觀僧正、南都の知教教圓、淨土寺の忠圓僧正を召し捕りて、子細を相尋ぬべしと、已に武命を含みて、二階堂下野判官、長井遠江守二人關東より上洛

す。兩使已に京着せしかば、又如何なる荒き沙汰をか致さんずらんと、主上宸襟を惱されける處に、五月十一日の曉雜賀隼人佐を使にて、法勝寺の圓觀上人、小野の文觀僧正、淨土寺の忠圓僧正、三人を六波羅へ召し捕り奉る。此中に忠圓僧正は顯宗の碩德なりしかば、調伏の法行ひたりといふ、其人數には入らざりしかども、最も此君に近づき奉りて、山門の講堂供養以下の事、萬直に申し沙汰せられしかば、衆徒與力の事、此僧正よも存ぜられぬことはあらじとて、同じく召し捕れ給ひにけり。これのみならず、知教教圓二人も南都より召し出されて、同じく六波羅へ出で給ふ。又二條の中將爲明卿は歌道の達者にて、月の夜雪の朝、褒貶の歌合の御會に召されて、宴に侍る事隙なかりしかば、さしたる嫌疑の人にてはなかりしかども、叡慮の趣を尋ね問はんために、召し捕れて齋藤某に是を預けらる。五人の僧達のことは、元來關東へ召し下して沙汰あるべきとなれば、六波羅にて尋ね窮むるに及ばず。爲明卿の事に於ては、先づ京都にて尋ね沙汰ありて、白狀あらば關東へ註進すべしとて、檢斷に仰せ

て已に嗷問の沙汰に及ばんとす。六波羅の北の坪に炭をおこすこと、鑊湯爐壇の如くにして、其上に青竹を破りて敷き雙べ、少し隙をあけゝれば、猛火炎を吐きて烈々たり。朝夕雜色右左に立ち雙びて、兩方の手を引き張りて、其上を歩ませ奉らんと支度したる有樣は、只四重五逆の罪人の燋熱大燋熱の炎に身を焦し、牛頭馬頭の呵責に逢ふらんもかくこそあらめと覺えて、見るにも肝は消えぬべし。爲明卿是を見給ひて、硯やあると尋ねられければ、白狀のためかとて、硯に料紙を取り添へて奉りければ、白狀にはあらで、一首の歌をぞ書かれける。

思ひきやわが敷島の道ならでうき世のことを問はるべしとは

常葉駿河守此歌を見て、感歎肝に銘じければ、泪を流して理に伏す。東使兩人も是を詠みて、諸共に袖を浸しければ、爲明は水火の責を遁れて、咎なき人になりにけり。詩歌は朝廷の翫ぶところ、弓馬は武家の嗜む道なれば、其習慣未必ずしも六義數奇の道に携らねども、物類相感ずる事皆自然なれば、此歌一首の感に依りて、嗷問の責

を止める、東夷の心中こそやさしけれ。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和げ、猛き武士（もののふ）の心をも慰むるは歌なりと、紀貫之（きのつらゆき）が古今の序に書きたりしも理（ことわり）なりと覺えたり。（卷二）

【大塔宮の御行事】時の貫主でいらせられながら、行・學共に捨て果てさせられ、專ら武勇のみ勵まれたこと。【京着】京に着くこと。【龍顏に咫尺し】天皇に接近し。龍顏は漢の高祖が龍顏であつたことから一般に天子の御顏、咫は八寸、咫尺は短いこと。【調伏】怨敵滅除の修法。【衆徒與力】叡山の衆徒が天皇に味方したこと。【二條爲明卿】二條爲藤の子で有名な和歌の家。新拾遺集の撰者。【褒貶の歌合】歌人が左右に分れて、優劣を定め合ふ歌合。【檢斷】檢斷職のことで、刑事裁判の任に當る人。鎌倉では侍所、六波羅では檢斷職が刑事を裁いた。【鑊湯爐壇】壇は炭とするがよい。故大法炬經に「鑊湯爐炭炎熾猛火」とある。大釜の湯、爐の灼炭。地獄の一つである。【朝夕雜色】朝夕人と同じく、又單に朝夕とも云つた。武家時代官廳で雜務に使はれた賤官。【四重五逆の罪人】四重罪と五逆罪。殺生・偸盜・邪淫・妄語の四禁を犯したのが四重罪。天理に逆ふ五つの罪、卽ち父を殺す・母を殺す・阿羅漢を殺す・妄語して修道者を離間せしめる・佛身の血を出すの五つを犯したのが五逆罪。【焦熱大焦熱】八大地獄中の第六・第七の名。罪人の身中からも、他物よりも倶に火を出し、相燒害する地獄。【牛頭馬頭】人身で牛頭馬頭の獄卒。【料紙】使用の料とする紙。用紙。【思ひきやの歌】自分の家の事である、和歌の道以外の世俗のことを問ひ質されようとは、

少しも思はなんだ。世俗のこと以外に超然としてゐた、當時の歌壇の權威者の姿が眼に見えるやうである。併し、實は頗る目先のきく俗人で、後に北朝について、勅撰集まで出してゐる人間だと思ふと、聊か、くすぐつたい。【泪を流して理に服す】世事に超越してゐる歌人に、俗のことの分らう道理なしと思つたこと。【物類相感ずる云々】天下の事物は、すべて自然に相感じ相應ずるといふ意。孝經に「物之相感有二自然者一」と同意。

俊基朝臣再關東下向の事

俊基朝臣は、先年土岐十郞賴貞が討れし後召捕られて、鎌倉まで下り給ひしかども、樣々に陳じ申されし趣、實にもとて赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに、專ら隱謀の企かの朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に又六波羅へ召捕られて關東へ送られ給ふ。再犯赦さゞるは法令の定むる所なれば、何と陳ずるとも許されじ、路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二の間をば離れじと思儲けてぞ出でられ

ける。
落花の雪に踏迷ふ、片野の春の櫻がり、紅葉の錦を衣てかへる、嵐の山の秋の暮、一夜を明すほどだにも、旅宿となればものうきに、恩愛のちぎり淺からぬ、わが故郷の妻子をば、行くへも知らず思ひ置き、年久しくも住馴れし、九重の帝都をば、今を限と顧て、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞあはれなる。憂をば留めぬ逢坂の、關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱、沖を遙に見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身を浮船の浮き沈み、駒もとゞろと踏鳴す、勢多の長橋打渡り、行きかふ人に近江路や世をうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかと哀なり。時雨もいたく守山の、木の下露に袖ぬれて、風に露ちる篠原や、篠分くる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとても、泪に曇りて見えわかず、物を思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を止めて顧る、故郷を雲や隔つらん。番場醒井柏原、不破の關屋は荒れ果てゝ、猶もるものは秋の雨の、いつか我身の尾張なる、熱田の八劍伏拜み、潮干に今や鳴海潟、傾く月に道見えて、

明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕潮に、引く人もなき捨小舟沈み果てぬる身にしあれば、誰か哀と夕暮の、入相なれば今はとて、池田の宿に著き給ふ。

元暦元年の頃かとよ、重衡の中將の、東夷のために囚はれて、此宿に著き給ひしに、「東路の丹生の小屋のいぶせきに、故郷いかに戀しかるらん。」と、長者の女が詠みたりし、其古のあはれまでも、思ひ殘さぬ涙なり。旅館の燈幽にして、鷄鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍河を打渡り、小夜の中山越え行けば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が、命なりけりと詠じつゝ、二度越えし跡までも、うらやましくぞ思はれける。

隙行く駒の足早み、日已に亭午に昇れば、餉進らする程とて、輿を庭前に舁き止む。轅を叩きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなりと答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし咎に依りて、光親卿關東へ召し下されしが、此宿に

て誅せられし時、

昔南陽縣菊水　汲下流而延齡

今東海道菊河　宿西岸而終命

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我身の上になり、あはれやいとゞまさりけん、一首の歌を詠みて宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしをきく川の同じ流に身をやしづめむ。

大井河を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花ざかり、龍頭鷁首の舟に乘り、詩歌管弦の宴に侍りしことも、今は二度見ぬ夜の夢となりぬと、思ひつゞけ給ふ。島田藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛うら枯れて、物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、蔦楓いと茂りて道もなし。昔業平の中將の、住所を覓むとて、東の方に下るとて、夢にも人に逢はぬなりけりと詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。清見潟を過ぎ給へば、都にかへる夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催

され、向はいづこ三保が崎、興津神原打過ぎて、富士の高峯を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思ひに比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、潮干や淺き船浮きて、おりたつ田子のみづからも、浮世を遶る車返し、竹の下道行きなやむ、足柄山の嶺より、大磯小磯見下して、袖にも波はこゆるぎの、急ぐとしもはなけれども、日數つもれば七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ著き給ひけれ。

其の日軈て南條左衞門高直請取り奉りて、諏訪左衞門に預けらる。一間なる處に蜘手きびしく結ひて、押籠め奉るありさま、只地獄の罪人の、十王の廳に渡されて、頸枷手枷を入れられ、罪の輕重を糺すらんも、かくやと思ひ知られたり。(卷二)

【先年】正中元年。【陳じ】のべる。申し開きをする。【今度の白状どもに】淨土寺の忠圓等が白狀したのである。白狀は罪人の白したことを書いた狀。白狀どもには白狀のどれにも。本書、三人僧徒關東下向の事に「大塔宮の御振舞、俊基の隱謀なんど、有りしもあらぬ事までも殘る所なく、白狀一卷に載せられたり。」とある。【路次】途中。【落花の雪】新古今、俊成の「またや見むかた野のみのゝ櫻がり、花の雪ちる春のあけぼの。」によつたもので　散る花を雪に譬へたもの。【片野の春の櫻がり】片野は交野と書くが正しい。河

内國北河内郡にあつて、王朝時代の遊獵地、櫻狩もあつた。櫻狩は櫻を求めて歩き樂しむこと。【紅葉の錦云々】 拾遺集、三舟の才をうたはれた時の公任の作「朝まだき嵐の山の寒ければ、紅葉のにしききぬ人ぞなき。」による。散る紅葉を浴びて歸ることを、錦を著て歸ると言つたのである。嵐山は山城國葛野郡に在る。【恩愛のちぎり】 恩愛は佛語で、親子・夫婦・兄弟などの間の、恩によつて引かれる愛情。ちぎりは言ひかはすことで、句の意は愛し合ふことの淺からぬといふ程の意。【行方も知らず云々】 將來どうなるかも分らずに思うておく意。【九重の帝都】 都といふこと。九重は支那の王城は門を九重に造る制であつた所から出た語で、宮城又は都をいふ時に用ひる。【思はぬ旅に】 まさかこんなになるだらうと思はなかつた旅。意外の旅【憂をば留めぬ逢坂の】 旅人はとめるけれど、心の憂きをば留めずに通す逢坂の關。逢坂の關は山城と近江との國境にあつて、鈴鹿不破の關と共に三關といはれた。昔は都の人が親しい人を送迎するに、此の關まで來たので、旅の心、別れの心、相逢ふ心等を此の關によせて詠んだ歌が非常に多い。【關の清水】 拾遺集、貫之の「逢坂の關の清水に影見えて、今やひくらん望月の駒。」等有名な清水である しかし既に、長明の無名抄に、所在不明の由が記してある。【袖濡れて】 清水を掬んで袖の濡れた意と、愈々逢坂を越えるといふ悲しみの涙で袖を濡らす意とを含んでゐる。【末は山路を云々】 關路を通つて行つた末に山路から打出の濱に出たといふこと。山路をうち出ると、打出の地名とを懸けてゐる。打出濱は大津市松本石場の邊の古名だといふ。【鹽ならぬ海云々】 琵琶湖をいふ。淡水の湖だからである。こがれは漕がれと。焦れとを懸け、更に鹽と焦れと縁語をあやなしたもの。【身を浮舟の云々】 琵琶湖を漕がれて行く浮舟を見ると、自身の運命

の浮沈が思はれるといふ意。浮舟に憂きを懸けてゐる。【駒もとゞろと】駒もとんとんと踏みならす。風雅集、兼益「後調物たえずそなふる東路の勢多の長橋音もとゞろに。」又平家物語、海道くだりに「勢多の唐橋駒もとゞろと踏みならし」とある。【勢多の長橋】近江國瀬田川にかけた橋。宇治・淀と合せて本朝の三大橋といふ。【行きかふ人に云々】行きかふ人は行き來する人。逢ふと近江とかけてある。【世をうねの野に云々】うねの野は、近江國蒲生郡武佐村附近、地形が起伏して畝の様だから言ふのだといふ。世を憂く思ふ憂と、宇禰と懸けてある。古今集、近江ぶり「あふみより朝たちくればうねの野にたづぞ鳴くなるあけぬこの夜は。」からとつたもの。鶴の子を思ふに切なることは、白樂天の「第四弦冷々、夜鶴憶レ子籠中鳴。」や、「燒野の雉子夜の鶴。」の諺から書いたものであらう。【時雨もいたく云々】時雨は秋から冬にかけて降る雨。古今集、貫之の「白露もしぐれもいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり。」による。漏ると守山と懸けてゐる。守山は近江國野洲郡にある。【木の下露に云々】漏る下露に濡れたのと、淚にぬれたものと、兩方を含めてある。【篠原・鏡の山】共に近江にある歌枕。露ちるは篠の緣語。宴曲に「篠に露散る篠原の、笹分くる袖もしめりつゝ。」とある。【物を思へば云々】物思ひをすれば老いる、と和漢古今いうてゐるので、老いると老蘇と懸けて用ひたのである。宴曲に「年經ぬる老ぬる。老蘇の森の下草の蔭に駒を留めて云々。」とある。【故鄕を雲や云々】故鄕の方を顧ても、雲がかゝつてどこがそれか分らない。韓愈の「雲横二秦嶺一家何在。」あたりから取つたものであらう。【番場醒井柏原】何れも近江國にある地名。【不破の關屋】美濃國不破郡關ケ原村にある。關屋は關守の居る家。古の三關の一。新古今集。藤原良經「人すまぬ不破の關屋

の板庇荒れにし後はたゞ秋の風。」とある。【猶もる物は】漏ると守ると懸けてある。【いつか我身の尾張なる】身の終と美濃・尾張とかけてある。【熱田の八劒】熱田神宮の南方に八劒宮があつて、元正天皇の時に造つた八口の劒を祀つてある。しかし作者の意は、熱田神宮の神劒にあらうから、熱田の神劒を拜しと解するがよい。【潮干に今や云々】汐干になると、鳴海とを懸けてある。夫木集、常盤井入道「うち渡す今やしほひになるみ潟、とをよる舟の聲もかよはず。」によつたものであらう。鳴海潟は尾張國愛知郡鳴海町。【傾く月に云々】西に沈まんとする月によつて、道がかすかに見えること。新古今集、季能「小夜千鳥聲こそ近くなるみ潟、傾く月にしほやみつらむ。」【末はいづくと遠江】末は何處と人に問ふと、遠江とを懸けてゐる。【濱名の橋】昔、濱名湖と海とをつなぐ所の濱名川に架けてあつた橋。三代實錄「遠江濱名橋、長五十六丈、廣一丈三尺、高一丈六尺。」【引く人もなき】捨小舟を引くと、己を引く、即ち贔屓する意に用ひたのである。千載集、俊賴の長歌中に「なぎさなるかたわれ舟の、うづもれてひく人もなき なげきすと」【沈みはてぬる身】落ちぶれはてたことを、捨小舟の沈むにかけていつたもの。【誰か哀と夕暮の】哀と言ふと、夕暮とかけか假名ちがひの懸詞。【入相】夕方のこと。【池田の宿】遠江國磐田郡池田村。【元暦元年云々】平家物語、海道下りに次の如くある。「本三位の中將重衡の卿三月十日の日（元暦元年）梶原平三景時に具せられて、關東へとこそ下られけれ。池田の宿にも著き給ひぬ。かの宿の長者熊野が女、侍從がもとに、其夜は三位宿せられけり。侍從、三位の中將を見奉つて『日頃はつてにだに思し召し寄り給はぬ人の、今日はかゝる所へ入らせ給ふことの不思議さよ』とて、一首の歌を奉る。『旅の宿はにふの小屋のいぶせきて、故

鄕いかに戀しかるらん。』(抄錄)【重衡中將】平淸盛の第五子。元曆元年一の谷で捕へられて鎌倉に送られ、同二年奈良に送られ、木津川で斬られた。【東夷】東國武士を卑しんでいうた言葉。【東路の云々】はにふは埴(はに)(赤黃色の粘土)のある地、はにふの小屋は埴の上にむしろを敷いたやうな賤しい小家。いぶせきは氣のふさぐやうに又むさくるしいこと。第一句、平家物語には「旅の空」とあり、源平盛衰記には「東路の」とある。後者を參考にしたものであらう。【長者】驛の長の人。【思ひ殘さぬ涙】自分のことの外に、昔のことも思ひ殘さないで涙を催す意。【匹馬】一匹の馬。公羊傳「匹馬隻輪無レ還。」三體詩「宮柳靑々匹馬嘶。」【いばえ】嘶くこと。和名抄「嘶、音西、訓以波由、俗云以奈々具、馬鳴也。」【小夜の中山】遠江國小笠・榛原兩郡の堺にある。坂路曲折、左右に深谷がある。行程一里。もとは佐野と書いて「さや」が正しいが、後に「さよ」と訛つて呼ぶ。【命なりけりと云々】新古今集、西行『年たけてまた越ゆべしと思ひきや、命なりけり小夜の中山。』歌の意味は、以前越えた時に、年とつてから再び越えるであらうと思つたであらうか。いや越えようとは思はなかつた。然るに今再び越えることの出來たのは、命のあるおかげであつたわい。【隙行駒の云々】隙は壁のすきま、駒は日光、日光の壁隙をすぎるが如く、時間の經過の早いことをいふ。史記列傳の魏豹傳「人生二一世間一、如二白駒過レ隙耳。」索隱に「白駒謂二日影一也、隙壁隙也、以言二速疾若三日影過二壁隙一也。」【亭午】亭は至、日が午に至ること。正午。【餉】昔旅行の時に携帶した乾飯。進らする程は、差上る間。【舁き止む】かくは二人以上でかつぐこと。【轅】輿を持上る二本の棒。【菊川】遠江國榛原郡金谷町菊川。【院宣】上皇の宣旨。院宣を書いたのは光親であるが、菊川で殺されたのは別人であ

る。筆者の誤であらう。【光親卿】才學優長の人で、其故實に明るいとは、徒然草に、食ひ散らした衝重を御簾の中へ入れたことが記されてゐるのでも分る。東鑑によると光親は駿河國加古坂で斬られたので、此處で殺されたのは中納言宗行である。【昔南陽縣菊水云々】詩學大成に「南陽酈縣有二甘谷一谷中水甘美、上有二大菊一落レ水從レ山流下、得二其滋液一谷中人家飲二此水一上壽百二三十、其中百餘歲、」とある說話によつたもの。大意は、昔支那の南陽縣の菊水では下流を飲んで長壽を得たといふが、今日本の其名も同じい菊川では、其西岸に宿つて命を終るとは如何にも哀しいことである。【古もの歌】昔も似たやうなことがあつたときくが自分も同じ運命にあふのではなからうかと思はれる。聞くと菊川と懸け。菊川、流れ、沈めんと緣語を連ねたもの【大井川】駿河と遠江との國境にある川。【都にありし云々】嵐山の下を流れ、下流桂川となる大堰川といふ川がある故にいふ。【龜山殿の行幸】龜山殿は後嵯峨天皇が今の嵐山の傍天龍寺の所に建てた離宮。後醍醐帝の行幸に從つてそこへ行つた事をいふ。【龍頭鷁首の舟】二隻を一對とし一つの船首には龍頭を、一つの船首には鷁首をつけたもので、貴顯の御座舟とし、又は樂人などを據せたもの。鷁は水鳥の一種で、此の二つを飾とするのは、二つともよく水を涉るから水難を防ぐ意だといふ。【詩歌管弦の宴】詩歌を作り、音樂を奏して宴をする事。【島田藤枝】何れも駿河國にある。【かゝりて】藤の緣語。通りかゝる事。【岡邊の眞葛】駿河國の地名である岡部を、普通の岡の如くよんだので、爲家の「かへり來る程はなけれど朝露の、をかべの眞葛うらがれにけり。」から書いたもの。眞葛は荳科に屬する蔓草、葉は大きく三小葉からなる。葉裏は白く、葉柄が長く、よく裏返るので其旨をよんだ歌などが多い。花は蝶形總狀花、秋開く。根から葛粉を

とり、莖からは葛布を織る。【うら枯れ】末枯で、秋になつて草木の末が枯れると。【宇都の山邊】駿河國にある峠で、今は宇都の谷峠といふ。此邊はすべて伊勢物語を本として書いてゐる。よく知られてゐるとだから本文を引かない。【葛楓】葛は葡萄科に屬する蔓草。楓は本來はかつらと訓むのが正しい。そしてこゝでは蔓（かづら）の意で用ひたもの、かづらは蔓草の總稱である。【業平中將】平城帝の皇子。阿保親王の第五子。在原姓を賜はる。右馬頭右近衞中將となつたから在五中將ともいふ。【夢にも云々】伊勢物語「駿河なるうつの山べのうつゝにも、夢にも人にあはぬなりけり。」わびしい旅の心を、宇都の山のうつといふ音から、うつゝにも夢にも人に逢はぬといつたもの。【清見潟・三保崎・興津・神原】何れも駿河にある地名。神原は蒲原の誤。【都にかへる云々】夢にだけなりと、都のことを見たいと思ふのに、波の音で其の夢さへ結ばれないのを、場所が清見關である所から、浪を關守と見夢を旅人と見たのである。新後撰集、院大納言典侍「清見潟浦風さむき夜な〳〵は、夢もゆるさぬ波の關守。【雪の中より云々】富士山の煙は、古今集の序に既に煙がたゝぬとあるが、次に引く家隆の歌には猶立のぼる由を言うてある。時々變化があつたものと見える。【上なき思ひ】限もなく上り行く煙を見て、己の思ひもあのやうに限りもないと思ふの意。おもひに火を懸けてある。新古今集、家隆「富士のねの煙はなほぞ立ちのぼる、上なきものはおもひなりけり。」【明くる霞む云々】新勅撰良經「足柄の關路越えゆくしのゝめに、一むらかすむ浮島が原。」によつて書いたのであらう。浮島が原は沼津の附近、須戸沼を抱いてゐる平原。海道記に「此原昔は海の上に浮びて、蓬萊の三つの島の如くにありけるによつて浮島となん名づけたる。」とある。【潮干や淺き云々】潮干が淺いかして、舟が浮い

て見えるといふので、おり立の田子以下には續けて解かぬがよい。【おり立つ田子云々】 田子は農夫。田子の浦にかけたもの。おり立つは田に出て働くことをいふ。源氏物語、葵卷「袖ぬるゝ戀路とかつは知りながら、おり立つ田子のみづからぞうき。」による。【浮世をめぐる】 田子自身にも浮世を渡る苦勞のあるといふ意。浮世と自らうきのうきと懸け、車返しと浮世をめぐるくるしみのくると懸け、更にめぐると車と縁語を辿つたもの車返は沼津町東北三枚橋の邊。【竹の下】 駿河國駿東郡足柄村中の大字。足柄山の麓にあつて、岳の下の意だといふ。其の地名に竹の下の道といふ語をかけてある。【大磯・小磯】 相模國中郡大磯町。小磯は今は大磯町に合併せられて其の字となる。【袖にも云々】 波のこえるを、地名の小餘綾にかけ、磯と急ぐとかけたもの。大磯小磯一帶の海岸を小ゆるぎの磯といふ。【蜘手】 材木を蜘蛛の脚の如く、八方に打ちがへて室の周圍をかためたもの。【十王の廳】 十王は秦廣王・初江王・宗帝王・五官王・琰魔王・變成王・泰山王・平等王・都市王・輪轉王で、冥土に行つた人は七日毎に各王の下に行つて處斷を受けるのだといふ。【頸枷手枷】 枷は昔の刑具で鐵又は木で造り、罪人の首又は手足につけて自由を奪ふもの。

長崎新左衛門尉意見の事附阿新殿の事

當今御謀叛の事露顯の後、御位は軈て持明院殿へぞ進らんずらんと、近習の人々、青

女房に至るまで悦びあへる處に、土岐が討れし後も曾て其沙汰もなし。今又俊基召し下されぬれども、御位の事につきては、如何なる沙汰ありとも聞えざりければ、持明院殿方の人々、案に相違して、五噫を謳ふ者のみ多かりけり。さればとかく申し進むる人のありけるにや、持明院殿より内々關東へ御使を下され、當今御謀叛の企近日事已に急なり。武家速に糺明の沙汰なくば、天下の亂近きにあるべしと仰られたりければ、相模入道げにもと驚きて、宗徒の一門、幷に頭人の評定衆を集めて、此事如何あるべきと各所存を問はる。然れども或は他に譲りて口を閉ぢ、或は己を顧みて言を出さゞる處に、執事長崎入道が子息新左衛門尉高資、進み出でゝ申しけるは、先年土岐十郎が討れし時、當今の御位を改め申さるべかりしを、朝憲に憚りて、御沙汰緩かりしに依りて、此事猶未休まず。亂を撥へて治を致すは武の一德なり。速に當今を遠國に遷しまゐらせ、大塔宮を不返の遠流に處し奉り、俊基資朝以下の亂臣を、一々誅せらるゝより外は、別儀あるべしとも存じ候はずと、憚る處なく申しけるを、二階堂出

羽入道道蘊、暫く思案して申しけるは、此儀尤然るべく聞え候へども、退きて愚案を廻すに、武家權を執りて、已に百六十餘年、威四海に及び、運累葉を輝すこと更に他事なし。唯上一人を仰ぎ奉りて忠貞に私なく、下百姓を撫でゝ仁政に施ある故なり。然るに今君の寵臣一兩人召しおかれ、御歸依の高僧兩三人流罪に處せらるゝことも、武臣惡行の專一といひつべし。此上に又主上を遠所へ遷し進らせ、天台座主を流罪に行はれんこと、天道奢を惡むのみならず、山門いかでか憤を含まざるべき。神怒り人背かば、武運の危に近かるべし、御謀叛の事、縱令思召し立つとも、武威盛ならん程は、與し申す者あるべからず。是につきても、君雖レ不レ君臣不レ可ニ以不一レ臣といへり。武家彌愼みて勅命に應ぜば、君もなどか思召し直すことなからん。かくてぞ國家の泰平、武運の長久にて候はんと存ずるは、面々如何思召し候と申しけるを、長崎新左衞門尉、又自餘の意見をも待たず、以の外に氣色を損じて、重ねて申しけるは、文武揆一なりといへども、用捨時異なるべし。靜なる世には文を以て彌治め、亂れたる時には

武を以て急に靜む。故に戰國の時には孔孟用ゐるに足らず、太平の世には干戈用ゐる事なきに似たり。事已に急に當りたり。武を以て治むべきなり。異朝には文王武王、臣として無道の君を討ちし例あり。吾朝には義時泰時、下として不善の主を流す例あり。世皆是を以て當れりとす。されば古典にも、君視レ臣如ニ土芥一則視レ君如ニ寇讎一といへり。事停滯して武家追罰の宣旨を下されなば、後悔すとも益あるべからず。只速に君を遠國に遷し進らせ大塔宮を硫黃が島へ流し奉り、隱謀の逆臣資朝、俊基を誅せらるゝより外の事あるべからず。武家の安泰萬世に及ぶべしとこそ存じ候へと、居長高になりて申しける間、當座の頭人評定衆、權勢にや阿りけん、又愚案にや落ちけん、皆此儀に同じければ、道蘊再往の忠言に及ばず、眉を顰めて退出す。さる程に君の御謀叛を申し勸めけるは、源中納言具行、右小辨俊基、日野中納言資朝なり。各死罪に行はるべしと、評定一途に定りて、先づ去年より佐渡國へ流されておはする資朝卿を斬り奉るべしと、其國の守護本間山城入道に下知せらる。

此事京都に聞えければ、此資朝の子息國光の中納言、其比は阿新殿とて、歳十三にておはしけるが、父の卿召人に成り給ひしより、仁和寺邊に隱れて居られけるが、父誅せられ給ふべきよしを聞きて、今は何事にか命を惜むべき。父と共に斬られて、冥途の旅の伴をもし、又最後の御有樣をも見奉るべしとて、母に御暇をぞ乞はれける。母御頻に諫めて、佐渡とやらんは、人も通はぬ怖しき島とこそ聞ゆれ。日數を經る道なれば、いかんとしてか下るべき。其上汝にさへ離れては、一日片時も命存ふべしとも覺えずと、泣き悲みて止めければ、よし、伴ひ行く人なくば、如何なる淵瀨にも身を投げて、死なんと申しける間、母痛く止めば、又目の前に憂別もありぬべしと思ひ侘びて、力なく今まで只一人附き副ひたる、中間を相副へられて、遙々と佐渡國へぞ下りける。路遠けれども乘るべき馬もなければ、はきも習はぬ草鞋に、菅の小笠を傾けて、露分わくる越路の旅、思ひやるこそ哀れなれ。

都を出でゝ十日餘と申すに、越前敦賀の津に着きにけり。是より商人船に乘りて、程

なく佐渡國へぞつきにける。人をしてかうといふべき便もなければ、自ら本間が館に至りて、中門の前にぞ立ちたりける。折節僧のありけるが立ち出でゝ、此内への御用にて御立ち候ふか、又如何なる用にて候ふぞと問ひければ、阿新殿、是は日野中納言の一子にて候ふが、近來切られさせ給ふべしと承りて、其最後の様をも見候はんために、都より遙々と尋ね下りて候と、いひもあへず泪をはら〳〵と流しければ、此僧心ありたる人なりければ、急ぎ此よしを本間に語るに、本間も岩木ならねば、さすが哀にや思ひけん、軈て此僧を以て持佛堂へいざなひ入れて、蹈皮行纏解せ足洗ひて、疎ならぬ體にてぞ置きたりける。阿新殿是をうれしと思ふにつけても、同じくは父の卿を疾く見奉らばやといひけれども、今日明日斬らるべき人に、是を見せては中々よみ路の障ともなりぬべし。又關東の聞えもいかゞあらんずらんとて、父子の對面を許さず。四五町隔りたる處に置きたれば、父の卿は是を聞きて、行末も知らぬ都にいかがあらんと、思やるよりもなほかなし。子は其方を見やりて、浪路遙に隔りし都の住居

を思ひやりて、心苦しく思ひつる、泪は更に數ならずと、袂の乾くひまもなし。是こそ中納言のおはします籠の中よとて見やれば、竹の一村茂りたる處に、堀ほり廻し屏塗りて、行き通ふ人も稀なり。なさけなの本間が心や、父は禁籠せられ、子はいまだをさなし。縱令一所に置きたりとも、何程の怖畏かあるべきに、對面をだに許さで、まだ同じ世の中ながら、生を隔てたる如くにて、なからん後の苔の下、思寢に見ん夢ならでは、相見んことありがたしと、互に悲む恩愛の、父子の道こそ哀なれ。

五月二十九日の暮程に、資朝卿を籠より出し奉りて、遙に御湯も召され候はぬに、御行水候へと申せば、早斬らるべき時になりけりと思ひ給ひて、嗚呼うたてしきことかな、我最後の樣を見んために遙々と尋ね下りたる幼きものを、一目も見ずして終てぬることとばかり宣ひて、其後は曾て諸事につきて言をも出し給はず。今朝までは氣色しほれて、常には泪を押し拭ひ給ひけるが、人間の事に於ては、頭燃を拂ふ如くになりぬと覺りて、只綿密の工夫の外は餘念ありとも見え給はず。夜に入れば輿さし寄せ

て乘せ奉り、爰より十町ばかりある河原へ出し奉り、輿舁き居ゑたれば少しも臆したる氣色もなく、敷皮の上に居直りて、辭世の頌を書きたまふ。」

五蘊假成レ形ヲ　四大今歸レ空ニ
將レ首ヲ當ニ白刃ニ　截斷一陣風

年號月日の下に名字を書きつけて、筆を閣き給へば、切手後へ廻るとぞ見えし。御首は敷皮の上に落ちて、體は尙坐せるが如し。

此の程常に法談なんどし給ひける僧來て、葬禮式の如く取り營み、空しき骨を拾ひて、阿新に奉りければ、阿新是を一目見て、取る手も撓く倒れ伏し、今生の對面遂に叶はずして、替れる白骨を見ることよと泣き悲むも理なり。阿新未幼稚なれども、けなげなる所存ありければ、父の遺骨をば只一人召仕ひける中間に持せて、先づ我よりさきに高野山に參りて、奧の院とかやに納めよとて、都へ歸しのぼせ、我身は勞はることあるよしにて、尙本間が館にぞ留りける。是は本間が情なく、父を今生にて我に見せ

ざりつる欝憤を散ぜんと思ふ故なり。かくて四五日經けるほどに、阿新晝は病のよしにて終日に臥し、夜は忍びやかにぬけ出でゝ、本間が寢處なんど細々に伺ひて、隙あらば彼入道父子が間に一人さし殺して、腹切らんずるものをと思ひ定めてぞねらひける。或夜雨風烈しく吹きて、番の郎等どもも皆遠侍に臥したりければ、今こそ待處の幸よと思ひて、本間が寢處の方を忍び伺ふに、本間が運やつよかりけん、今夜は常の寢處を替へて、いづくにありとも見えず。又二間なる處に、燈の影の見えけるを、是は若し本間入道が子息にてやあらん。それなり共討ちて恨を散ぜんと、ぬけ入りて是を見るにそれさへ爰にはなくして、中納言殿を斬り奉りし本間三郎といふ者ぞ、只一人臥したりける。よしや是も時によりては親の敵なり、山城入道に劣るまじと思ひて、走りかゝらんとするに、我は元來太刀も刀も持たず、只人の太刀を我物と憑みたるに、燈殊に明なれば、立ち寄らば聽て驚き合ふこともやあらずらんと、危みて左右なく寄り得ず、如何せんと案じ煩ひて立ちたるに、折節夏なれば、燈の影を見て、蛾

といふ蟲の數多明障子に取りつきたるを、すはや究竟のことこそあれと思ひて、障子を少し引きあけたれば、此蟲あまた內へ入りて軈て燈を打ちけしぬ。今はかうと嬉しくて本間三郎が枕に立ち寄りて探るに、太刀も刀も枕にありて、主はいたく寢入りたり。先づ刀を取りて腰にさし、太刀を拔きて胸もとに指し當てゝ、寢たる者を殺すは、死人に同じければ、驚かさんと思ひて、先づ足にて枕をはたとぞ蹴たりける。蹴られて驚く處を、一の太刀に臍の上を疊までつとつきとほし、返す太刀に喉笛指し切りて、心閑に後の竹原の中へぞかくれける。

本間三郎が一の太刀に胸を通されて、あつといふ聲に、番衆ども驚き騷ぎて、火を燃して是を見るに、血のつきたるちいさき足跡あり。さては阿新殿のしわざなり。堀の水深ければ、木戸より外へはよも出でじ。さがし出でゝ打ち殺せとて、手に〳〵松明をともし、木の下草の陰まで殘る處なくぞさがしける。阿新は竹原の中に隱れながら、今はいづくへか遁るべき、人手にかゝらんよりは、自害をせばやと思はれけるが、惡

しと思ふ親の敵をば討つ。今はいかにもして命を全うして、君の御用にもたち、父の素意をも達したらんこそ、忠臣孝子の儀にてもあらんずれ。若しやと一まど落ちて見ばやと思ひ返して、堀を飛び越えんとしけるが、巾二丈深さ一丈に餘りたる堀なれば、越ゆべき様もなかりけり。さらば是を橋にして渡らんよと思ひて、堀の上に末靡きたる呉竹の梢へさら／＼と登りたれば、竹の末堀の向へ靡き伏して、やす／＼と堀をば越えてけり。夜は未ふかし。湊の方へ行きて、船に乗りてこそ陸へは着かめと思ひて、たどる／＼浦の方へ行く程に、夜もはや次第に明け離れて忍ぶべき道もなければ、身を隠さんとて日を暮し、麻や蓬の生ひ茂りたる中に隠れ居たれば、追手共と思しき者ども百四五十騎馳せ散りて、若し十二三ばかりなる兒や通りつると、道に行き合ふ人ごとに問ひ音してぞ過ぎ行きける。

阿新其日は麻の中にて日を暮し、夜になれば湊へと心ざして、そことも知らず行く程に、孝行の志を感じて、佛神擁護の眸をや廻らされけん、年老いたる山臥一人行き合ひ

たり。此兒の有樣を見て、痛しくや思ひけん、是は何處よりいづくをさして御渡り候ぞと問ひければ、阿新事の樣をありのまゝにぞ語りける。山臥是を聞きて、我此人を助けずば、只今の程にかはゆき目を見るべしと思ひければ、御心安く思召され候へ。湊に商人船ども多く候へば、乘せ奉りて、越後越中の方まで送りつけ進らすべしといひて、足たゆめば、此兒を肩に乘せ背に負ひて、程なく湊にぞ行き着きける。夜明けて便船やあると尋ねけるに、折節湊の內に船一艘もなかりけり。如何せんと求むる處に、遙の澳に乘り浮べたる大船、順風になりぬと悅びて、檣を立て篷をまく。山臥手を上げて、其船是へ寄せてたび給へ、便船申さんと呼はりけれども、曾て耳にも聞き入れず船人聲を帆に上げて湊の外に漕ぎ出す。山臥大に腹を立てゝ、柿の衣の裾を結びて肩にかけ、澳行く船に立ち向ひて、いらたか誦珠をさら〳〵と押し揉みて、一持秘密呪、生々而加護、奉仕修行者、猶如薄伽梵といへり。況や多年の勤行に於てをや。明王の本誓あやまらずば、權現金剛童子、天龍夜叉八大龍王、其船此方へ漕ぎ返して

たばせ給へと、跳り上り〳〵肝膽を碎きてぞ祈りける。行者のいのり神に通じて、明王擁護やしたまひけん、澳の方より俄に惡風吹き來りて、此の船忽に覆らんとしける間、船人どもあわてゝ、山臥の御房、先づ我等を御助け候へと、手を合せ膝をかゞめ、手々に船を漕ぎもどす。汀近くなりければ、船頭船より飛び下りて、兒を肩にのせ、山臥の手を引き、屋形の內に入れたれば、風は又もとの如くに直りて、船は湊を出でにける。其後追手ども百四五十騎馳せ來り、遠淺に馬をひかへて、あの船止れと招けども、船人是を見ぬよしにて、順風に帆を揚げたれば、船は其日の暮程に越後の府にぞ着きにける。阿新山臥にたすけられて、鰐口の死を遁れしも、明王加護の御誓掲焉かりけるしるしなり。（卷二）

【青女房】年若く物事に馴れず、又位も賤しき女官。青は未熟の意。【五噫を謳ふ】世の非なるを嘆く。後漢書梁鴻傳に梁鴻が五噫の歌を作つて悲みをのべたとある。噫は大いに悲しみ痛む意。五噫の歌は「陟二彼北芒一兮噫、顧二覽帝京一兮噫、宮室崔嵬兮噫、人之劬勞兮噫、遼々未央兮噫。」【糺明】問ひ糺し事情を明かに

する。【宗徒の一門】宗とある者の義。宗と頼む一門。主なる一族。【頭人の評定衆】神田本には頭人・評定衆とあるから引附頭人と評定衆であるが、こゝでは引附の頭人を兼ねた評定衆。引附の頭人は、引附衆といふ評定衆を補佐する人々の頭。評定衆は、執權と共に政所に列して諸事の評定や事務をとつた人々。神田本の方がよいと思ふが、はつきりは定められない。【執事】政所の次官。【亂を撥へて治を致す】撥はのぞく。漢書から出た亂「撥反正」を少しかへたもの。【武家權を執りて百六十餘年】賴朝の兵を起してから、元弘元年まで、百五十二年。【累葉】累代。重代。累世。【一人】天子のこと。【百姓】四民のこと。庶民。【歸依】佛語、佛の教を信じてそれに從ふこと。【山門】本來は寺の樓門を言ふのであるが、普通には比叡山延暦寺の異稱として用ひられる。これに對し、園城寺を寺門といふ。【君雖不君云々】孝經序にある。君が君たる德がなくとも、臣たるものは、臣たる分を守らなければならない。【文武揆一】揆は道。文も武も、本づく所の道は同一であること。【用捨】用ひると否と。【戰國の時云々】支那の戰國の世には、孔子や孟子の仁義の道は、時世に迂として用ひられなかつたことを言ふ。【干戈】たてとほこ。武器。【文王武王云々】周の武王が、殷の紂王を討つたこと。文王を出したのは誤であらう。逆臣の口實とするのは、いつでも此事である。【下として不善の云々】三上皇を流したこと。不善は餘りにも亂暴な語である。【古典にも】此語は孟子、離婁章に出てゐる。【硫黃が島】薩摩國の南方、十二里餘の海上にある島。【居長高】少しく居たけを高くし聳かすことで、怒氣を含んださま。【愚案に落つ】愚案に同意す。【召人】囚人。【思ひ侘びて】思ひ惱んで。【中間】侍と小者との間に、召使はれた男。【人して】人を以て。【地佛堂】佛間に

同じ。持佛又は父祖の位牌などを安置する堂。【中々よみ路の云々】 中々は却て、よみ路は冥土へ行く道。【行末も知らぬ都に云々】 父は阿新が近くに來て居るときいて、遠い都にどうして居るだらうと思ふより一層悲しく、子は、父の牢の方を見て、都に居た時、浪路へだてた佐渡の住居を思うて、悲しく思つたことなど、今の悲に比すれば比べ物にならないと思ふ。【生を隔てたる如く】 死んで、あの世と此世と隔つた如く。幽明境を異にすること。【苔の下云々】 墓の下。死んで墓の下で會ふか、夢で會ふより外ない。【うたてしきことかな】 うたてしは、甚し又は餘りなりの意。うたてしは、形容詞く活用であるのを、茲では、しく活用にしてある。【頭燃を拂ふ】 頭燃は頭上にもえる火。頭燃の如く自分を惱ました一切の人事が、すつかり心中から去つたこと。大藏經「勤行精進、如レ救二頭燃一。」【綿密の工夫】 他念を絶して、こまかく悟入の工夫をこらす。【頌】 梵語の偈の漢譯語。佛の盛德を賞め稱へる言葉の意。主に四句から成る韻文。【五蘊】 積聚の義と譯す。集積して人身を形成する五つのもの。即ち色・受・想・行・識。色とは有形のもの。即ち肉體をなすもの。受以下は心法。【四大】 地大・水大・火大・風大の總稱。印度の哲學に於ては、此地・水・火・風の四元素が集つて萬物を成すとせられた。【一陣風】 一としきり颯と吹く風。【頌の意】 自分は人間の形をして居るが、もと〱これは、五蘊が假に人間の形をなしたものに過ぎぬ。故に今殺されると云つても、それは、四大が分散して、もとの空になるまでのことで、何等心を惱ます必要もないことである。だから、全く靜平な心で、此首を白刃に當てる。すると、一陣の風が、さつと身首を截斷することであらう。【取る手も撓く】 撓くけだるいこと。手に取るにも堪へないこと。【勞はること】 病氣であるとて。【遠侍】 昔武家の家にて、多くは

中間のわきに造り、當番の武士の詰めて居る所。【二間】柱間の二つある四角の室。【左右なく】たやすく。【明障子】明をとる障子。襖障子・衝立障子に對するもの。【すはや究竟の云々】すはやは、さあ、それ等に當る感歎詞。屈竟は至極の意で、玆では最もうまいことがあるの意。【喉笛】のどの、氣管の通つてゐる所。【番衆】宿直して、雜務や警衞に任ずる人。武家の職名。【素意】もとからの考。【一まど】一先に同じい。源平盛衰記貞能上洛の所にも「西國へ落ちて、一間戸も助からばや。」とある。【吳竹】淡竹(はちく)と同じい。二三丈に達し、竹の皮には斑點がある。【問ひ音して】問ふ音をさせて。【かはゆき目】可愛相な目。【足たゆめば】阿新の足が疲れると。【便船】便宜を來て乘る船。幸便の船。【篷をまく】苫とも書く。菅・藁などで、こものやうにあみ、家根などを覆ふもの。沖にゐた船が、上に被うた苫を卷いて、出かけようとする樣。【聲を帆に上げて】帆を高く上ぐる如く、聲を高く張上げること。古今集、藤原菅根「秋風に聲をほに上げて來る舟は、あまのと渡る雁にぞありける。」【いらたか誦珠】修驗者の用ひる、珠のかどある一種の數珠。いらたかは、角立つたことで、まろ數珠に對す。【一致秘密呪云々】信驗者の呪文。【明王の本誓】大日如來の命を以て、忿怒の相を現じ、諸惡魔を降伏する五大尊を、明王といふ。然れども、單に明王といふ時は、普通に不動明王を指す。本誓は、如來の根本の誓。惡魔を伏するが、明王の本誓である。【權現金剛童子】金剛童子は、寶冠を頂き、三目六臂、忿怒の相を現はす菩薩の稱。佛の權に現はれたるものなれば、權現といふ。【天龍夜叉】諸天と龍神と夜叉とを云ふ。八部衆のうちの三である。【八大龍王】八體の龍神のこと。難陀・跋難陀・娑伽羅・和修吉・德叉迦・阿那婆達多・魔那斯・優鉢羅がこれである。【肝膽を碎

き】心の有りたけを働かす。【御房】坊は僧の居所、轉じて僧のことゝなる。御僧に同じ。【屋形の中】屋根の中。【揭焉】いちじるしきこと。明か。

【參考】神田本によると、資朝は死前に、阿新に次のやうな書を送つたことになつてゐる。

天地無ニ定主一、日月無ニ定時一、擧有ニ三才一、强有ニ三綱一、以レ之謂レ之如ニ夢幻泡沫一矣、和翁懷ニ屈平之楚志一八回、優遊以到ニ今日一、爲レ汝爲レ言、秋霜三尺、曾不レ埋ニ貞松一、士見レ之豁ニ開眼睛一、洒々落々、獨ニ立乾坤之間一哉。元德三年五月廿九日　和翁

主上臨幸依レ非ニ實事一山門變儀の事

山門の大衆唐崎の合戰に打ち勝ちて、事はじめよしと喜びあへる事斜ならず。爰に西塔の皇居に定めらるゝ條、本院面目なきに似たり。壽永のいにしへ、後白河院山門を御憑ありし時も、先づ横川へ御登山ありしかども、軈て東塔の南谷、圓融坊へこそ御移ありしか。且は先蹤なり。且は吉例なり。早く臨幸を本院へ成し奉るべしと、西塔院へ觸れなくる。西塔の衆徒理にをれて、仙蹕を促さんために皇居に參列す。折節深

山おろし烈しうして、御簾を吹き上げたるより、龍顏を拜し奉りたれば、主上にてはおはしまさず、尹大納言師賢の天子の衮衣を着し給へるにてぞありける。大衆是を見て、こは如何なる天狗の所行ぞやと興をさます。其後よりは、參る大衆一人もなし。かくては山門如何なる野心をか、存ぜんずらんと覺えければ、其夜の夜半ばかりに、尹大納言師賢、四條中納言隆資、二條中將爲明、忍びて山門を落ちて、笠置の石室へまゐらる。去程に上林房阿闍梨豪譽は、元來武家へ心を寄せしかば、大塔宮の執事、安居院の中納言法印澄俊を生捕りて、六波羅へ是を出す。護正院僧都猷全は、御門徒の中大名にて、八王子の一の木戸を堅めたりしかば、かくては叶はじとや思ひけん同宿手の者引きつれて六波羅へ降參す。是を始として、一人落ち二人落ち落ち行ける間、今は光林房律師源存、妙光房の小相模、中坊の惡律師、三四人より外は落ち止る衆徒もなかりける。

妙法院と大塔宮とは、其夜まで尙八王子に御座ありけるが、かくては惡しかりぬべし。

一まども落ち延びて、君の御行末をも承らばやと思召されければ、廿九日夜半ばかりに、八王子に篝火をあまた所に燒きて、未大勢籠りたるよしを見せ、戸津の濱より小舟に召され、落ち止る所の衆徒三百人ばかりを召し具せられて、先づ石山へ落させ給ふ。此處にて兩門主一所へ落させ給はんことは、計略遠からぬに似たる上、妙法院は御行歩もかひがひしからねば、只暫く此邊に御座あるべしとて、石山より二人引き別れさせ給ひて、妙法院は笠置へ越させ給へば、大塔宮は十津河の奥へと志して、先づ南都の方へぞ落させ給ひける。さしもやごとなき一山の貫首の位を捨てゝ、未習はせ給はぬ萬里漂泊の旅に浮れさせ給へば、醫王山王の結縁も、是やかぎりと名殘惜しく、竹園連枝の再會も今は何をか期すべきと、御心細く思召されければ、互に隔たる御影の隱るゝまでに顧みて、泣々東西へ別れさせ給ふ、御心の中こそ悲しけれ。（卷二）

【唐崎の合戰】 前出。【西塔】 比叡山には三塔があつて、東塔（根本中堂とも本院とも云ふ）西塔・横川がこれである。西塔の重なる堂宇は、釋迦堂・相輪堂・法華堂・椿堂・常行堂である。【本院】 前條に出てゐる。

【壽永のいにしへ云々】 壽永二年、後白河法皇、木曾義仲が近江に迫つたので山門に行幸せられたこと。【先蹤】 前例に同じ。【仙蹕】 蹕は先ばらひの意味の字、轉じて行幸の意に用ひる。仙蹕は行幸。【袞衣】 日月星辰龍等のぬひとりのある、天子著用の緋の衣。袞龍の衣ともいふ。【大塔宮の執事】 執事は貴人の側にあつて事をとる人。【八王子】 比叡山の東につゞく小山。此山の金石といふ石の上に、天照大神の御子八神の下りまします故に言ふと。【同宿手の者】 同宿は同じ寺に住む者。手の者は部下。【妙法院】 宗良親王を申す。【一まども】 一先もと同じ。とにもかくにも。一應。【十津河】 大和國吉野郡から出る川。【やごとなき】 やんごとなしと同じ。止むごとなし、うち捨て置かれずの意から、非常に貴きといふ意味に用ひられる。【貫主】 各宗で總本山の住持をいふのであるが、昔は專ら、天台宗の座主を言うた。大塔の宮は天台座主である。【醫王山王】 醫王は藥師に同じ。叡山の根本中堂に、本尊として祀つ居てる藥師如來と。叡山の東麓坂本村に祀つて居る日吉山王とを云ふ。古來比叡山の守護神として尊ばれる。【結緣】 佛道に緣を結ぶこと。醫王山王との佛緣も、これ限りで絕たれる。【竹園連枝】 竹園は、梁の孝王が、東苑、方三百里に竹を植ゑた故事から、皇子を指し、連枝は兄弟のこと。千字文新註に「父母如レ樹、兄弟如レ枝、同受二父母之氣一、故曰二連枝一也。」親王御兄弟同志の再會。

主上御夢の事附楠の事

元弘元年八月廿七日、主上笠置へ臨幸成りて、本堂を皇居となさる。始一兩日の程は武威に恐れて、參り仕ふる人一人もなかりけるが、叡山東坂本の合戰に、六波羅勢うち負けぬと聞えければ、當寺の衆徒を始めて、近國の兵ども此處彼處より馳せ參る。されども未名ある武士、手勢百騎とも二百騎とも、打せたる大名は一人も參らず。此勢ばかりにては、皇居の警固如何あるべからんと、主上思召し煩はせ給ひて、少し御まどろみありける御夢に、所は紫宸殿の庭前と覺えたる地に、大なる常盤木あり、緑の陰茂りて、南へ指したる枝、殊に榮え蔓れり。其下に三公百官位に依りて列座す。南へ向ひたる上座に、御座の疊を高く敷き列座したる人はなし。主上御夢心地に、誰を設けんための座席やらんと、怪しく思召して、立たせ給ひたる處に、鬢結ひたる童子二人、忽然として來て、主上の御前に跪き、泪を袖にかけて、一天下の間に暫くも御身を隱さるべき所なし。但しあの樹の陰に南へ向へる座席あり、是御ために設たる玉扆にて候へば、暫くこゝに御座候へと申して、童子は遙の天に上り去りぬと御覽じて、

御夢はやがて覺めにけり。主上是は天の朕に告ぐる所の夢なりと思召して、文字につきて御料簡あるに、木に南と書きたるは楠といふ字なり、其陰に南に向ひて座せよと、二人の童子の敎へつるは、朕再び南面の德を治めて、天下の士を朝せしめんずる處を日光月光の示されけるよと、自ら御夢を合せられて、たのもしくこそ思召されけれ。夜明けゝれば當寺の衆徒、成就房の律師を召され、若し此邊に楠といはるゝ武士やありと、御尋ありければ、近きあたりに、左樣の名字つきたる者ありとも未承り及ばず候。河內國金剛山の西にこそ楠多門兵衞正成とて、弓矢取りて名を得たる者は候ふなれ。是は敏達天皇四代の孫、井手左大臣橘諸兄公の後胤たりといへども、民間に下りて年久し。其母若かりし時、志貴の毘沙門に百日詣でゝ、夢想を感じて設けたる子にて候ふとて、稚名を多聞とは申し候なりとぞ答へ申しける。主上さては今夜の夢の告是なりと思召して、頓て是を召せと仰下されければ、藤房卿勅を奉りて、急ぎ楠正成をぞ召されける。

勅使宣旨を帶して、楠が舘へ行き向ひて、事の子細を演べられければ、正成弓矢とる身の面目、何事か是に過ぎじと思ひければ、是非の思案にも及ばず、先づ忍びて笠置へぞ參りける。主上萬里小路中納言藤房卿を以て仰せられけるは、東夷征罰の事、正成を憑み思しめさるゝ子細ありて、勅使を立てらるゝ處に、時刻を移さず馳せ參る條、叡感淺からざる處なり。抑天下草創の事、如何なる謀を廻してか、勝つ事を一時に決して太平を四海に致さるべき、所存を殘さず申すべしと、勅定ありければ、正成畏りて申しけるは、東夷近日の大逆、只天の譴を招き候上は、衰亂の弊に乘りて天誅を致されんに、何の子細か候ふべき。但天下草創の功は、武略と智謀との二にて候。若し勢を合せて戰はゞ、六十餘州の兵を集めて、武藏相模の兩國に對すとも勝つことを得がたし。若し謀を以て爭はゞ、東夷の武力只利を摧き堅を破る内を出でず。是欺くに安くして、怖るゝに足らざる所なり。合戰の習にて候へば、一旦の勝負をば必ずしも御覽ぜらるべからず。正成一人未生きてありと聞召され候はゞ、聖運遂に開かるべし

と思召され候へと、たのもしげに申して、正成は河内へ歸りにけり。(卷三)

【本堂】笠置寺の本堂。【手勢】手下の軍勢。【打せたる】馬に騎つて前むこと。【大名】土地を多く持ち勢力ある武士。【此勢】此軍勢。此人數。【まどろみ】一寸の間眠る。とろとろと少間眠る。【三公】支那では、代によつて名が異つた。周では、大師・大傅・大保を云つた。とに角。天子を輔けて天下を治めた三高官。我國では、太政大臣・左大臣・右大臣のこと。【百官】もろ〳〵のつかさ。それが、官位の順序に列んだ。【びんづら】みづらと同じ。頂から髪を左右に分けて、左右に結んだもの。昔は男子の結髪であつたが、後には童子の髪となる。【玉扆】天子の座後に樹てる屏風で、赤色の絹に、斧の形をぬひとりしたもの。廣さ八尺といふ。こゝでは御座といふ意。【御料簡】おかんがへ。【南面の德云々】支那で天子は、南面して臣に對したことから、南面の德は天子の德。治めては、修めてと同意。【天下の士を朝せしめ】天下の士をして、朝に參つて、拜謁の禮をとらしめる。【御夢を合す】御夢を判斷せらる。【橘諸兄】姓氏錄によれば、敏達天皇から五代である。始めは葛城王といひ、臣籍に下つて橘姓を稱し、西院大臣、又は井手左大臣と言はれた。【志貴】志貴山寺は、大和と河内の境にある、信貴山の東腹にある寺で、毘沙門天を本尊として祀つてある。【夢想云々】夢知らせを受けて生んだ子。【多聞】毘沙門は梵語で、之を譯して多聞といふ。多聞天といふ譯は、福德の名が四方に聞えるからだといふ。【憑み思召さるゝ子細】子細は、わけ、事情。【草創】事業をひらき始めることで、天下統一の事業を始めるに當つて、如何なる謀を廻すべきか。【勝つ事を

云々】短時日の間に勝利を得ること。【天の譴】天のとがめ。【天誅】天に代つて誅伐すること。【武略と智謀】武略は武の上の謀略をいふが、こゝでは武力といふ程の意。【若し勢を合せて云々】若し軍勢と軍勢とを驅け合はせて戰つたなら、日本全國の兵を以てしても、武藏・相模兩國の兵に勝つはと出來ない。即ち武力に於いては、迚も東國兵に敵はない。【若し謀を以て云々】利は鋭きこと。即ち、若し謀で爭ふなら、東國兵の強さといふものは、唯だ敵陣の堅鋭を摧き破るだけの強さで、即ち武力の強さだけで、智謀の強さでないから、挫くに易いといふこと。【一旦の勝負云々】一時の勝まけを重視し給ふな。

主上笠置を御沒落の事

去程に類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上を始め進らせて、宮々卿相雲客、皆歩跣なる體にて、いづくを指すともなく足に任せて落ち行き給ふ。此人々、始め一二町が程こそ、主上を扶け進らせて、前後に御伴をも申されたりけれ。雨風烈しく道闇くして、敵の閧の聲此處彼處に聞えければ、次第に別々になりて、後には只藤房季房二人より外は、主上の御手を引進する人もなし。忝くも十善の天子、玉

體を田夫野人の形に替へさせ給ひて、そことも知らず迷ひ出させ給ひける、御有様こそあさましけれ。如何にもして、夜の内に赤坂の城へと、御心ばかりを盡されけれども、假にも未習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には休み、二足には立ち止り、晝は道の傍なる青塚の陰に御身を隱させ給ひて、寒草の疎なるを御座の茵とし、夜は人も通はぬ野原の露分け迷はせ給ひて、羅縠の御袖をほしあへず。とかうして夜晝三日に、山城多賀の郡なる有王山の麓まで落させ給ひけり。

藤房季房も、三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ身疲れて、今は如何なる目に逢ふとも逃げぬべき心地せざりければ、せん方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟諸共に、うつゝの夢に伏し給ふ。梢を拂ふ松の風を、雨の降るかと聞召して、木陰に立ち寄らせ給ひたれば下露のはら〳〵と御袖にかかりけるを、主上御覽ぜられて、

さしてゆく笠置の山を出でしより天が下にはかくれがもなし

藤房卿泪をおさへて、

いかにせんたのむ陰とて立ちよれば猶袖ぬらす松の下露

山城國の住人、深須入道松井藏人二人は、此邊の案内者なりければ、山々峯々殘る所なく捜しける間、皇居隱れなく尋ね出されさせ給ふ。主上誠に怖しげなる御氣色にて、汝等心ある者ならば、天恩を戴きて、私の榮花を期せよと仰せられければ、さしもの深須入道俄に心變じて、あはれ此君を隱し奉りて、義兵をあげばやと思ひけれども、跡につゞける松井が所存、知りがたかりける間、事の漏れ易くして、道の成り難からんことをはかりて、默止けることそうたてけれ。俄の事にて網代の輿だになかりければ、張輿の怪しげなるに、扶け乘せ進らせて、先づ南都の內山へ入れ奉る。其體只殷湯夏臺に囚はれ、越王會稽に降せし、昔の夢に異ならず。是を聞き是を見る人ごとに、袖をぬらさずといふことなかりけり。此時こゝかしこにて、生捕られ給ひける人々都合六十一人、其所從眷屬共に至るまでは、計ふるに遑あらず。或は籠輿にめされ、或は傳馬に乘られて、白晝に京都へ入り給ひければ、其方さまかと覺えたる男女街に立ち並

びて、人目をも憚からず泣き悲む、あさましかりし分野なり。十月二日六波羅の北方、一常葉駿河守範貞、三千餘騎にて路を警固仕りて、主上を宇治の平等院へ成し奉る。其日關東の兩大將、京へは入らずして、直に宇治へ參り向ひて、龍顏に謁し奉り、先づ三種の神器を渡し給ひて、持明院新帝へ進むべきよし奏聞す。主上藤房を以て仰出されけるは、三種神器は、古より繼體の君、位を天に受けさせ給ふ時、自ら是を授け奉るものなり。四海に威を振ふ逆臣ありて、暫く天下を掌に握る者ありといへども、未此三種の重器を、自ら專にして新帝に渡し奉る例を聞かず。其上内侍所をば、笠置の本堂に捨て置き奉りしかば、定めて戰場の灰塵にこそ落させ給ひぬらめ。神璽は山中に迷ひし時、木の枝に懸け置きしかば、遂にはよも吾國の守とならせ給はぬことはあらじ。寶劍は武家の輩若し天罰を顧みずして、玉體に近づき奉ることあらば、自ら其刄の上に伏させ給はんずるために、暫くも御身を放たる事あるまじきなりと仰せられければ、東使兩人も、六波羅も言なくして退出す。

翌日に龍駕を廻らして、六波羅へ成し進らせんとしけるを、前々臨幸の儀式ならでは、還幸なるまじきよしを、強ひて仰出されける間、力なく鳳輦を用意し、袞衣を調進しける間、三日まで平等院に御逗留ありてぞ、六波羅へは入らせ給ひける。日來の行幸に事替りて、鳳輦は數萬の武士に打ち圍まれ、月卿雲客は怪しげなる籠輿傳馬に扶け乘せられて、七條を東へ河原をのぼりに、六波羅へと急がせ給へば、見る人淚を流し、聞く人心を傷ましむ。悲乎昨日は紫宸北極の高きに座して、百司禮儀の粧をつくろひしに、今は白屋東夷の卑しきに下らせ給ひて、萬卒守禦のきびしきに、御心を惱ませらる。時移り事去り、樂盡きて悲來る。天上の五衰、人間の一炊、唯夢かとのみぞ覺えたる。遠からぬ雲の上の御住居、いつしか思召しいだす御事多き時節、時雨の音一通、軒端の月に過ぎけるを聞召して、

住みなれぬ板屋の軒のむらしぐれ音を聞にも袖はぬれけり

四五日ありて、中宮の御方より御琵琶を進らせけるに、御文あり、御らんずれば、

思ひやれ塵のみつもる四のをにはらひもあへずかゝるなみだを

引き返して、御返事ありけるに、

涙ゆゑなかばの月はかくるとも共に見し夜のかげは忘れず（卷三）

【類火】類焼する火。【卿相雲客】大中納言・參議・三位以上が卿相、公卿といふと同じ。雲客は殿上人。【藤房・季房】增鏡によれば、天子に從へるは藤房・具行・師賢。【十善】殺生・偸盜・邪淫・妄語・綺語・惡口・兩說・貪欲・瞋恚・愚痴の十惡を犯さぬが十善。十善に上中下の三品あつて、前世で十善の上であつた人は、今生で天子となる。故に十善の天子といふ。【青塚】靑い草の茂つた塚。【寒草の云々】冷たい草を褥とする。時は陰曆十月の始めでもう初冬である。【羅縠】羅はうすもの。縠はこめおりと云つて、紗の類。何れもうす絹。【山城多賀郡】天正本に高市郡とあるのがよい。山城に多賀郡はない。【さして行く云々】笠につゞける爲、さして行くと序詞に言ひ、天が下と、雨が下と懸けた。笠置山を出てからは、廣い天下に隱れ所がないといふ意味。【いかにせん云々】一天下に御身をおく所もなく、せめて此松の下にと賴みにして寄れば、松の露までが無情にも、一層涙をまさせる。あゝ如何にしよう。悲しいことである。【案内者】地理をよく知つた人。【天恩を戴きて云々】皇恩をうけてゐながら、朕を捕へ出して、私の榮華を得る氣か。得る氣ならば得よ。【網代の輿】網代で張り、黑塗の押緣した輿。【張輿】莚で張つた輿。【殷湯夏臺に囚はれ】夏の桀王が無道で、湯といふ者を捕へ、夏臺といふ所に囚人とした。後湯は桀を伐て、殷の湯王といふ。【越

王會稽に云々】越王勾踐・吳王夫差の爲に破られ會稽山で降つた。【眷族】親族と同じ。【傳馬】宿々で繼ぐ馬。【其方さまか】其の人々に緣故があるゝ思はれる男女といふ意。【關東の兩大將】大佛貞直・金澤貞將。【繼體の君】位をつぐ君。【内侍所】神鏡のこと。實は禁中で神鏡を安置する所の名で內侍が齋きまつるから、から云ふ。【神璽】八坂瓊曲玉のこと。【前々臨幸の云々】前の臨行の儀式によらぬで、六波羅へ行くのはいやと仰せられる。【鳳輦】天子の御輿。屋形の上に鳳鳥を飾るからいふ。【七條を東へ云々】七條通を東へ行き、鴨川の河原を上つて六波羅へ行くこと。【紫宸北極】紫は紫微星、宸は帝居の意。北極は北極星で、天子の御座にたとへる。こゝは二つで天子の御座所の意【白屋】賤人の居る所。轉じて賤人をも云ふ。【天上の五衰】大論に云ふ。「天人の死ならとする時、五つの死相が現はれる。一に華冠が萎れ、二に腋下に汗が出、三に蠅が來て身に着き、四に更に別の天人が己の坐する所に坐するのを見、五に自ら本座を樂まなくなる。」其の他五種の衰相については種々の說がある。【人間の一炊】支那の邯鄲といふ所で、盧生が道士にあひ、枕を借りて眠り、立身して榮華を極め、老病で死ぬまでのことを夢みて、さめるとまだ枕頭の黃粱がよく煮えない間であつたといふ故事から、人生の夢の如くはかないものだといふに譬へる【四つのを】琵琶の異名。普通に四弦であるから。【半ばの月】琵琶の異名。表に半月形があるから。中宮より琵琶によせて言ひ送られたので、琵琶に關する言葉をとり、さて恰度十月初旬の上弦の月であつたから、涙故に月は見えなくても、共に見た夜の月は忘れないと詠んだのである。

赤坂城軍の事

遙々と東國より上りたる大勢ども、未近江國へも入らざる前に、笠置の城已に落ちければ、無念のことに思ひて、一人も京都へは入らず。或は伊賀伊勢の山を經、或は宇治醍醐の道を要りて、楠兵衞正成が楯籠りたる赤坂の城へぞ向ひける。石川河原を打ち過ぎ、城の有樣を見遣れば、俄に構へたりと覺えて、はか〴〵しく堀をもほらず。僅に屏一重塗りて方一二町には過ぎじと覺えたる其内に、櫓二三十が程掻き雙べたり。是を見る人ごとに、あな哀の敵の有樣や、此城我等が片手に載せて、投ぐるとも投げつべし。あはれせめて如何なる不思議にも、楠が一日こらへよかし。分捕高名して、恩賞に預からんと思はぬ者こそなかりけれ。されば寄手三十萬騎の勢ども、打ち寄すると均しく馬を踏放ち〳〵、堀の中に飛び入り、櫓の下に立ち雙びて、我前に打ち入

らんとぞ評ひける。
正成は元來策を帷幄の中にめぐらし、勝つ事を千里の外に決せんと、陳平張良が肺肝の間より、流出せるが如きの者なりければ、究竟の射手を二百餘人城中に籠めて、舍弟の七郎と和田五郎正遠とに三百餘騎を差し副へて、よその山にぞ置きたるける。寄手は是を思ひもよらず、心を一片に取りて、只一揉に揉み落さんと、同時に皆四方の切岸の下に着きたりける處を、櫓の上矢間の陰より指しつめ引きつめ、鏃を支へて射ける間、時の程に手負死人千餘人に及べり。東國の勢ども案に相違して、いや〱此城の爲體、一日二日には落ちまじかりけるぞ、暫く陣々を取りて役所を構へ、手分をして合戰致せとて、攻口を少し引退き、馬の鞍をおろし、物具を脱ぎて、皆帷幕の中にぞ休み居たりける。楠七郎、和田五郎、遙の山より直下して、時尅よしと思ひければ、三百餘騎を二手に分け、東西の山の木陰より、菊水の旗二流松の嵐に吹き靡かせ、閑に馬を歩ませ、煙嵐を捲きて押し寄せたり。東國の勢是を見て、敵か御方かとため

らひ怪む處に、三百餘騎の勢ども、兩方より吶喊をどつとつくりて、雲霞の如くにたなびきたる、三十萬騎が中へ、魚鱗かゝりにかけ入り、東西南北へ破りて通り、四方八面を切りて廻るに、寄手の大勢あきれて陣を成しかねたり。城中より三の木戸を同時に颯と排きて、二百餘騎鋒を雙べて打つて出で、手崎をまはして散々に射る。寄手さしもの大勢なれども、僅の敵に驚き騷ぎて、或は維げる馬に乘りてあをれども進まず。或は弛せる弓に矢をはげて射んとすれども射られず。物具一領に二三人取りつき、我がよ人のよと引き合ひける。其間に主打たるゝとも從者は知らず、親打たるゝとも子は助けず。蜘の子を散すが如く、石川河原へ引き退く。其道五十町が間、馬物具の捨てたること、足の踏所もなかりければ、東條一郡の者どもは、俄に德つきてぞ見えたりける。

指しもの東國勢思ひの外に爲損じて、初度の合戰に負けゝれば、楠が武略侮りにくしとや思ひけん、吐田楢原邊に各打ち寄せたれども、軈て又推し寄せんとは擬せず。こ

ゝに暫くひかへて、畿内の案内者を先に立てゝ、後攻のなきやうに山を苅り廻り、家を燒き拂ひて、心やすく城を責むべきなんど評定ありけるを、本間澁谷の者共の中に、親打たれ子討たれたる者多かりければ、命生きては何かせん、よしや我等が勢計なりとも馳せ向ひて打死せんと、憤りける間、諸人皆是に勵されて、我も／＼と馳せ向ひけり。

彼赤坂の城と申すは、東一方こそ山田の畔重々に高く、少し難所のやうなれ、三方は皆平地に續きたるを、堀一重に屏一重塗りたれば、如何なる鬼神が籠りたりとも、何程の事かあるべきと、寄手皆是を侮り、又寄ると均しく、堀の中切岸の下まで攻めつきて、逆木を引きのけて打ちて入んとしけれども、城中には音もせず是は如何樣昨日の如く手負を多く射出でゝ漂ふ處へ、後攻の勢を出して、揉み合せんずるよと心得て、寄手十萬餘騎を分けて、後の山へ指向けて、殘る二十萬騎稻麻竹葦の如く、城を取り卷きてぞ責めたりける。かゝりけれども城の中よりは、矢の一筋をも射出でず、更に人ありとも見えざりければ、寄手彌氣に乘りて、四方の屏に手をかけ、同時に上り越えん

としける處を、本より屏を二重に塗りて、外の屏をば切りて落すやうに拵へたりければ、城の中より四方の屏の釣繩を、一度に切りて落したりける間、屏に取りつきたる寄手千餘人、壓しに打たれたるやうにて、目ばかりはたらく處を、大木大石を投げ懸け〳〵打ちける間、寄手又今日の軍にも七百餘人討たれたり。

東國の勢ども、兩日の合戰に手こりをして、今は城を攻めんとする者一人もなし。只其近邊に陣々を取りて、遠攻にこそしたりけれ。四五日が程はかやうにてありけるが、あまりに暗然として守り居たるもいふかひなし。方四町に足らぬ平城に、敵四五百人籠りたるを、東八箇國の勢どもが責めかねて、遠攻したることのあさましさよなんど、後までも人に笑はれんこととこそ口惜しけれ。前々は早りのまゝ楯ても衝かず、責具足をも支度せで、責むればこそそゞろに人は損じつれ。今度は質を替へて責むべしとて、面々に持楯をはがせ、其面にいため皮を當てゝ、輙く打たれぬやうに拵へて、かづきつれてぞ責めたりける。切岸の高さ堀の深さ幾程もなければ、走りかゝりて屏に着か

んことは、いと安く覺えけれども、是も又釣屏にてやあらんと危みて、左右なく屏には着かず、皆堀の中におり漬りて、熊手を懸けて屏を引きける間、既に引き破られぬべう見えける處に、城の内より柄の一二丈長き柄杓に、熱湯の湧き翻りたるを酌みてかけたりける間、甲の天返綿がみのはづれより、熱湯身に通りて燒け爛れければ寄手こらへかねて、楯も熊手も打ち捨てゝばつと引きける見苦しさ、矢庭に死ぬるまでこそなけれども、或は手足を燒かれて立ちもあがらず、或は五體を損じて、病み臥する者二三百人に及べり。寄手質を替へて責むれば、城中工を替へて防ぎける間、今は兎も角もすべきやうなくして、只食攻にすべしとぞ議せられける。かゝりし後はひたすら軍をやめて、己が陣々に櫓をかき、逆木を引きて遠攻にこそしたりけれ。是にこそ中々城中の兵、慰む方もなく氣も疲れぬる心地してけれ。

楠此城を構へたる事暫時の事なりければ、はかばかしく兵粮なんど用意もせざれば、合戰始めて城を圍まれたること、僅に二十日あまりに、城中兵粮盡きて、今四五日の食

を殘せり。かゝりければ、正成諸卒に向ひていひけるは、此間數箇度の合戰に打ち勝ちて、敵を亡す事數を知らずといへども、敵大勢なれば敢て物の數ともせず、城中既に食盡きて助の兵なし。元來天下の士卒に先立ちて、草創の功を志とする上は、節に當り義に臨みては、命を惜むべきにあらず。然りといへども事に臨みて恐れ、謀を好みてなすは勇士のする所なり。されば暫く此城を落ちて、正成自害したる體を知らせんと思ふなり。其故は正成自害したりと見及ばゝ、東國勢定めて悅をなして下向すべし。下らば正成打ちて出で、又上らば深山に引き入り、四五度が程東國勢を惱したらんに、などか退屈せざらん。是身を全うして敵を亡す計略なり。而々如何計ひ給ふといひければ、諸人皆然るべしとぞ同じける。さらばとて城中に大なる穴を二丈ばかり掘りて、此間堀の中に多く討れて臥したる死人を、二三十人穴の中に取り入れて、其上に炭薪を積みて、雨風の吹き洒ぐ夜をぞ待ちたりける。正成が運や天命に叶ひけん、吹風俄に沙を擧げて、降雨更に篠を衝くが如し。夜色窈溟として、氈城皆帷幕を垂る。」

是ぞ待所の夜なりければ、城中に人を一人殘し留めて、我等脫ち延びんこと、四五町にも成りぬらんと思はんずる時、城に火をかけよといひ置きて、皆物具を脫ぎ、寄手に紛れて五人三人別々になり、敵の役所の前軍勢の枕の上を超えて、閑々と落ちけり。正成長崎が厩の前を通りける時、敵是を見つけて、何者なれば、御役所の前を案内も申さず、忍びやかに通るぞと咎めければ、正成是は大將の御内の者にて候ふが、道を踏み違へて候ひけれといひ捨てゝ、足早にぞ通りける。咎めつる者、さればこそ怪しき者なれ、如何樣馬盜人と覺ゆるぞ、只射殺せとて、近々と走り寄せて、眞直中をぞ射たりける。其矢正成か臂のかゝりに答へて、したゝか立ちぬと覺えけるが、すはだなる身に少しも立たずして、筈を返して飛び翻る。後に其矢の痕を見れば、正成が年來信じて讀み奉る觀音經を入たりける膚の守に矢當りて、一心稱名の二句の偈に、矢先留りけるこそ不思議なれ。正成必死の鏃に死を遁れ、二十餘町落ち延びて跡を顧ければ、約束違はず、早城の役所どもに火をかけたり。寄手の軍勢火に驚きて、すは

や城は落ちけるぞとて、勝閧をつくりて、あますなもらすなと騒動す。燒け靜りて後城中をみれば、大なる穴の中に炭を積みて、燒け死にたる死體多し。皆是を見てあなあはれや、正成はや自害をしてけり。敵ながらも弓矢取りて、尋常に死にたる者かなと、譽めぬ人こそなかりけれ。（卷三）

【宇治醍醐】 何れも山城國宇治郡にある。【はかばかしく】 きつぱりと。きまり通りに。【屏一重塗りて】 屏は板屏。塗りては土屏に使ひ馴れた故こゝにも言つたもの。造つてと同じ。【櫓】 門又は屏の中に立てゝ、弓矢を置き矢を射る所の樓。矢倉の意。【蹈放ち】 鐙をふんで馬を走らせ、隊伍から散々（ちりぢり）に走り出すこと。【策を帷幄の云々】 帷幄は幕で將軍の陣屋。幕中で策戰をして、千里も離れた所に於て勝つ。史記張良傳の句。【陳平】 張良と同じく漢の高祖の謀將。【究竟】 すぐれた。【心を一片にとりて】 心を一方にのみ注いで。【切岸】 據のがけ。【矢間】 さまは狹間又は小間の意で、櫓又は城壁の小孔、すき間。用途によつて矢狹間。鐵砲狹間等ある。こゝは城壁の矢狹間。【指しつめひきつめ】 矢つぎの早いこと。【鏃を支へて】 鏃を揃へて。【役所】 軍の事務を處理する所。【煙嵐を捲き】 煙嵐は、水蒸氣と山氣で即ち山中のもや。それを卷き上らせつゝ。【魚鱗がゝり】 がゝりは攻めること。魚鱗の陣は鶴翼と反對で、先を細く中を太くしたもの。鶴翼は左右を擴げて敵を包み、これは敵をつき拔ける。【手崎をまはして】 手先の誤。十分に引しぼる

意か。【あをる】鐙をふんで馬を急がせる。【我かよ人のよ】我物よ人の物よと。【馬物具】馬や武具。【徳つきて】利徳がついて。【擬せず】擬すは豫め定めること。【後攻】先陣に次がうと後に控へて居る軍勢。豫備隊。【漂ふ處へ】浮ついてゐる。しかとしない。【稻麻竹葦】稻や麻や竹や葦のやうに、すき間のないこと。【目ばかりはたらく】體は自由を失ひ目ばかりぱつちつかせる。【暗然】晏然の誤。のんきに。【早りのまゝ】氣の勇みはやるまゝに。【平城】平地に築いた城。【そゞろに】自然の結果として。【持楯】各自の持つ楯。はぐは造る。【[illegible]面にいため皮云々】いため皮は、膠の水に革をひたし、取出して打固め乾したもの。楯の面にそれをつける。【かづきつれて】其楯を擔ぎ連つて。【甲の天返】天邊と書くがよい。甲の頂上の穴のあるあたりすべてをいふ。【綿がみ】鎧の胴の左右の腋下に當るところ。皮で造り。上を色々の紋つけた染革や織物で包む。【矢庭】すぐ其場。【五體】頭・頸・胸・手・足といひ、又頭・兩手・兩足といひ色々ある。とに角全身のこと。【逆木】とげのある木の枝を欄などに結付けたもの。【事に臨みて恐れ云々】論語、述而篇で孔子が子路に告げた語。「子曰、暴虎馮河、死而無レ悔者、吾不レ與也、必也臨レ事而懼、好レ謀而成者也。」【夜色窈溟】夜がまつくらであること。窈溟は暗い貌。【甄城】陣營に同じ。字彙に「甄城者謂二陣營一也。」【臂のかゝり】かゝりは關節。【筈をかへして】筈は矢答。矢筈がとびかへる。【一心稱名の二句の偈】一心稱名といふ二句の偈がある。その偈のところで止まつてゐた。一心稱名は、一心に佛の名號をとなへること。偈は佛の徳をほめた讃文。多くは四句。

先帝遷幸の事

明くれば三月七日、千葉介貞胤、小山五郎左衛門、佐々木佐渡判官入道々譽、五百餘騎にて路次を警固仕りて、先帝を、隱岐國へ遷し奉る。供奉の人とては、一條頭大夫行房、六條少將忠顯、御介借は三位殿御局ばかりなり。其外は皆甲冑を鎧ひて、弓箭を帶せる武士ども、前後左右に打ち圍み奉りて、七條を西へ、東洞院を下へ御車をきしれば、京中貴賤男女小路に立ち雙びて、正しき一天の主を、下として流し奉ることのあさましさよ。武家の運命今に盡きなんと、憚る所なくいふ聲巷に滿ちて、只赤子の母を慕ふが如く泣き悲みければ、聞くに哀を催ほして、警固の武士も諸共に、皆鎧の袖をぞぬらしける。櫻井の宿を過させ給ひける時、八幡を伏し拜み、御輿を舁き居ゑさせて、二度帝都還幸の事をぞ御祈念ありける。八幡大菩薩と申すは、應神天皇

の應化、百王鎮護の御ちかひ新なれば、天子行在の外までも、定めて擁護の御眸をぞ―廻らさるらんと、たのもしくこそ思召しけれ。

湊川を過させ給ふ時、福原の京を御覽ぜられて、平相國淸盛が四海を掌に握りて、平安城を此卑濕の地に遷したりしかば、幾程なく亡びしも、偏に上を犯さんとせし侈の末果さずして、天のために罰せらるゝぞかしと、思召し慰む端となりにけり、印南野を末に御覽じて、須磨の浦を過させ給へば、昔源氏大將の、朧月夜に名を立てゝ此浦に流され、三年の秋を送りしに、波只こゝもとに立ちし心地して、涙落つるとも覺えぬに、枕は浮くばかりになりにけりと、旅寢の秋を悲みしも、理なりと思し召さる。明石の浦の朝霧に遠くなり行く淡路がた、寄せ來る浪も高砂の、尾上の松に吹く嵐、跡に幾重の山川を、杉坂越えて美作や、久米の佐羅山さら〳〵に、今はあるべき時ならぬに、雲間の山に雪見えて、遙かに遠き峯あり。御警固の武士を召して、山の名を御尋ねあるに、是は伯耆の大山と申す山にて候と申しければ、暫く御輿を止められ、

內證深心の法施を奉らせ給ふ。或時は雞唱抹過茅店月、或時は馬蹄踏破板橋霜、行路に日を窮めければ、都を御出ありて、十三日と申すに、出雲の見尾の湊に着かせ給ふ。爰にて御船を艤して、渡海の順風をぞ待ち給ひける。（卷四）

【御介借】かしづくこと。お身の廻の御世話申上ること。【七條を西へ云々】七條通を西へ行き、東洞院の通を南の方へ下られたこと。【車をきしる】車を進めること。きし〳〵音たてゝ行くこと。【櫻井の宿云々】櫻井宿は京阪線山崎驛の西南。こゝで、遙に男山八幡宮を拜し給ふ。【應化】佛菩薩が衆生を救ふために、機に臨んで形を變じ、適應の變態を現じ給ふこと。【百王鎭護】百代の天皇鎭護の本誓。【天子行在の外まで】行在はかりに御居あること。隱岐の島まで。【福原の都】治承四年、都を福原に遷す。淸盛の意志によつてである。僅かに數月で、平安に還都した。【相國】太政大臣の唐名。【印南野】播磨國加古郡から明石郡に跨る原野。其野を一端から御覽になる。【朧月夜に名を立てゝ】源氏物語による。源氏大將は、東宮妃に入內すべき、朧月夜の君と戀しあつて、須磨に配謫された。朧月夜のことで浮名を立てゝ。【波たゞこゝもとに云々】源氏物語の文である。須磨の卷に「御前にいと人ずくなにて、打やすみわたれるに、一人眼をさまして枕をそばだてゝ四方の嵐を聞き給ふに、浪たゞこゝもとに立ち來る心地して、涙おつともおぼえぬに、枕うくばかりになりにけり。」浪が直ぐこゝまで來る心地がして云々。【明石の浦の朝霧に】人麿の「ほのぼのと明石の浦の朝霧に、しまがくれ行く舟をしぞ思ふ。」による。【寄せ來る波も高砂の】波の高いと高砂とか

ける。【杉坂】山川を過ぎと杉坂とかける。杉坂は美作國英田郡。【久米の佐羅山】さらさらにと言はう爲に持て來た語。美作國久米南條郡にあつて有名な歌枕。古今集「みまさかや久米のさら山さらさらに、我名は立てじ萬代までに。」增鏡によると、こゝで帝は次の歌を詠まれて居る。「きゝおきしくめのさら山越えゆかむ、道とはかねて思ひやはせし。」【さら〳〵に】更に更に。【內證深心の法施】內證は心の內で深く悟ること。深心は深く信じて變らぬこと。法施は神佛に法文を献唱すること。心中で深く悟り深く信ずるといふこと。【雞唱云々】雞聲が茅屋の月をかすめてきこえ、馬蹄で板橋の霜をふむ。卽ち或時は月を踏んで出立し、或時は霜を侵して行かれた意。御困難の御樣子である。溫庭筠が商山早行詩に「雞聲茅店月、人迹板橋霜。」

備後三郎高德が事

其比備前國に、兒島備後三郎高德といふ者あり。主上笠置に御座ありし時、御方に參じて義兵をあげしが、事未成らざる先に笠置も落され、楠も自害したりと聞えしかば、力を失ひて默止けるが、主上隱岐國へ遷されさせ給ふと聞きて貳心なき一族共を集て評定しけるは、志士仁人無求生以害仁、有殺身以爲仁といへり。されば昔衛の

懿公が、北狄のために殺されてありしを見て、其臣に弘演といひし者、是を見るに忍びず、自腹を搔き切りて、懿公が肝を己が胸の中に收めて、先君の恩を死後に報いて失せたりき。見レ義不レ爲無レ勇、いざや臨幸の路次に參り會ひ、君を奪ひ取り奉りて、大軍を起し、縱令尸を戰場に曝すとも、名を子孫に傳へんと申しければ、心ある一族ども皆此義に同ず。

さらば路次の難所に相待ちて、其隙を伺ふべしとて、備前と播磨との境なる、船坂山の嶺に隱れ伏し、今や〳〵とぞ待ちたりける。臨幸あまりに遲かりければ、人を走らかして是を見するに、警固の武士、山陽道を經ず、播磨の今宿より山陰道にかゝり、遷幸を成し奉りける間、高德が支度相違してけり。さらば美作の杉坂こそ究竟の深山なれ、こゝにて待ち奉らんとて、三石の山より直違に、道もなき山の雪を凌ぎて杉坂へ着きたりければ、主上はや院の庄へ入らせ給ひぬと申しける間、力なくこれより散々になりけるが、せめても此所存を上聞に達せばやと思ひける間、微服潛行して、時

分を伺ひけれども、然るべき隙もなかりければ、君の御座ある御宿の庭に、大なる櫻木ありけるを、押し削りて大文字に一句の詩をぞ書きつけたりける。

天莫レ空ニ勾踐一　時非レ無ニ范蠡一

御警固の武士ども、朝に是を見つけて、何事を如何なる者が書きたるやらんとて、讀みかねて、則ち上聞に達してけり。主上は軈て詩の心を御さとりありて、龍顔殊に御快く笑ませ給へども、武士共は敢て其來歷を知らず、咎むる事もなかりけり。（卷四）

【志士仁人云々】 論語衞靈公篇に出てゐる。志士は身を棄てゝ道に盡さうと志す人。仁人は仁に安んじ行つてゐる人。志士・仁人は自分の生命の安全のために、仁を害することなく、其反對であるといふこと。【衞の懿公】 韓詩外傳にある。懿公が鶴を愛して太夫の位をやつてゐた爲め、戰ふ者がなく、北狄に破れて殺された。北狄は王の肉を盡く食つて、肝だけ捨てゝ置いた。所が弘演といふ臣が使から歸つて之を見、肝に向つて復命し、哭いて腹を割いて其肝を納れて死んだ。【見レ義不レ爲無レ勇】 論語爲政篇にある語。【此義に同ず】 此意に賛成した。【支度】 豫めなした計畫。【直違】 斜に。はすに。【力なく】 せん方なく。【微服潜行】 賤しき者の衣服を衣て、忍んで行く。【時分】 よい機會。【天莫レ空ニ勾踐ニ云々】 天は姑蘇城の中に幽囚されてゐる勾踐のやうな、囚はれの天皇を空しく殺し奉るやうのことはない。時に微服して姑蘇城に尋ねて行つた、

忠臣范蠡の如きものがあつて、天皇をお助けし恥を雪ぐ者がないでもありますまい。

相摸入道弄ニ田樂一幷闘犬の事

又其比洛中に田樂を弄ぶ事昌にして、貴賤擧りて是に着せり。相摸入道此事を聞き及び、新座本座の田樂を呼び下して、日夜朝暮に弄ぶ事他事なし。入興のあまりに、宗徒の大名達に田樂法師を一人づゝ預けて、裝束を飾らせける間、是は誰がし殿の田樂なんどいひて金銀珠玉を逞くし、綾羅錦繍を飾れり。宴に臨みて一曲を奏すれば、相摸入道を始として、一族大名我劣らじと、直垂大口を解きて抛げ出す。是を集めて積むに宛山の如し。其弊幾千萬といふ數を知らず。或夜一献のありけるに、相摸入道數盃を傾け、醉に和して立ち舞ふ事良久し。若輩の興を勸むる舞にてもなし。又狂者の言を巧にする戯にもあらず。四十有餘の古入道、醉狂の餘に舞ふ舞なれば、風情ある

べしとも覺えざりける處に、いづくより來るとも知らぬ、新座本座の田樂共十餘人、忽然として座席に列りてぞ舞ひ歌ひける。其座甚奇特に越えたり。暫くありて拍子を替へて、舞ふ聲を聞けば天王寺のようれいほしを見ばや、とぞはやしける。或官女此聲を聞きて、餘のおもしろさに障子の隙より是を見るに、新座本座の田樂共と見えつる者、一人も人にてはなかりけり。或は嘴勾りて鵄の如くなるもあり、或は身に翅ありて其形山伏の如くなるものあり、異類異形の化者共が、姿を人に變じたるにてぞありける。官女是を見てあまりに不思議に覺えければ、人を走らかして、城入道にぞ告げたりける。入道とるものも取りあへず、太刀を執りて其酒宴の席に臨む。中門を荒らかに歩みける跫を聞きて、化者は掻き消すやうに失せ、相摸入道は前後も知らず醉ひ伏したり。燈を挑げさせて遊宴の座席を見るに、誠に天狗の集りけるよと覺えて、踏み汚したる疊の上に禽獸の足跡多し。城入道暫く虚空を睨みて立ちたれども、敢て眼に遮る者もなし。良久しくして、相摸入道驚き覺めて起きたれども、惘然として更

に知る所なし。後日に南家の儒者刑部少輔仲範、此事を傳へ聞きて天下將に亂れん時、妖靈星といふ惡星下りて、災を成すといへり。しかも天王寺は佛法最初の靈地にて、聖徳太子自ら日本一州の未來記を留め給へり。されば彼媚者が天王寺の妖靈星と歌ひけるこそ怪しけれ。如何樣天王寺邊より天下の動亂出來て、國家敗亡しぬとおぼゆ。あはれ國主徳を治め、武家仁を施して、消レ妖謀を致されよかしといひけるが、果して思ひ知らるゝ世になりにけり。彼仲範實に未然の凶を鑒みける、博覽の程こそありがたけれ。相摸入道かゝる妖怪にも驚かず、ます／＼奇物を愛する事止む時なし。或時庭前に犬共集まつて、噛み合ひけるを見て、此禪門面白きことに思ひて、是を愛する事骨髓に入れり。則ち諸國へ相觸れて、或は正税官物に募りて犬を尋ね、或は權門高家に仰ぎて是を求めける間、國々の守護、國々所々の一族大名、十匹二十匹飼ひ立て、鎌倉へ引き進らす。是を飼ふに魚鳥を以てし、是を維ぐに金銀を鏤む。其弊甚多し。輿に乘せて路次を過ぐる日は、道を急ぎ行人も馬より下りて是に跪き、農を勤むる里民も、

夫に執られて是を舁く。如此賞翫輕からざりければ、肉に飽き錦を着たる奇犬、鎌倉中に充滿して、四五千匹に及べり。月に十二度犬合の日とて定められしかば、一族大名御内外樣の人々、或は堂上に座を列ね、或は庭前に膝を屈して見物す。時に兩陣の犬どもを、一二百匹づゝ放し合せたりければ、入り違ひ追ひ合せて、上になり下になり、噉み合ふ聲天を響し地を動す。心なき人は是を見て、あらおもしろや、只戰に雌雄を決するに異ならずと思ひ、智ある人は是を聞きてあな忌々しや、偏に郊原に尸を爭ふに似たりと悲めり。見聞の准ふる處、耳目雖レ異、其前相皆鬪諍死亡の中にありて、あさましかりし擧動なり。（卷五）

【田樂】平安時代に始まり、鎌倉より室町に亘りて盛に行はれたるもの。もと田植に農夫の勞を慰めんが爲に、鼓笛で面白い技を演じたもの、後には貴族の間にも行はれ、專ら法師のするものとなる。【着せり】同着し熱中したこと。【新座本座】共に田樂の家の名。かく家を分けて技を競ひ磨いた。【宗徒】宗とたのむ、主として賴む。【綾羅錦繡】あや・うすもの・にしき・ぬひとり。美しき貴き布。【直垂大口】直垂はもと庶人の衣服、鎌倉の終頃から貴族も着るに至つた。大口は直垂や狩衣の下に穿く一種の袴。【四十有餘の】高時

此時四十一歳だといふ。【其座甚だ尋常に云々】なみでなかつた事。【天王寺の云々】天王寺は攝津西成郡今の大阪市にある大寺。ようれいほしは妖靈星。【或官女】高時の侍女を官女といふのは惡い。此頃はかう言つたか。【城入道】宗顯の子時顯。【虚空】大空。【惘然】自失の貌。心を失つた貌。【仲範】丹後守仲範の子。【博覽】博く書物をみ、ひろく物事を見てゐること。【禪門】寺に入らずに剃髪し、佛門に入つた男子。禪尼に對す。【正稅官物に云々】正稅官物は共に稅。稅として犬を募り求める。【權門高家】威權ある家柄と武家の名族。【夫に執られて】夫役に當てられること。【犬合】犬と犬と噛み合せて勝負を決せしめること。【忌々し】嫌はしい。厭はしい。【郊原に云々】犬が野原で屍骸を爭ふに似てゐる。【見聞の云々】今見たり聞いたりする所は、人間の爭闘死亡ではないが、然し類を以て考へれば、人間の爭闘死亡の前兆であるといふ意。

大塔宮熊野落の事

大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞召れんために、暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城已に落ちて、主上囚はれさせ給ひぬと聞えしかば　虎の尾を

履むおそれ御身の上に迫りて、天地雖レ廣御身を可レ被レ藏所なし、日月雖レ明長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隱れて、露に臥鶉の床に御淚を爭ひ、夜は孤村の辻に佇みて、人を尤むる里の犬に御心を惱され、何處とても御心安かるべき所なかりければ、かくても暫しはと思召されける處に、一乘院の候人按察法眼好專、如何して聞きたりけん、五百餘騎を卒して、未明に般若寺へぞ寄せたりける。折節宮に附き奉りたる人、一人もなかりければ、一防ぎて落させ給ふべきやうもなかりける上、透間もなく兵既に寺内に打ち入りたれば、紛れて御出あるべき方もなし。さらばよし自害せんと思召して、既に推膚脱せ給ひたりけるが、事叶はざらん期に臨みて、腹を切らんことはいと安かるべし。若しやと隱れて見ばやと思召し返して、佛殿の方を御覽ずるに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三あり。二の櫃は、未蓋を開けず、一の櫃は御經を半過ぎ取出して、蓋をもせざりけり。此蓋を開けたる櫃の中へ、御身を縮めて伏させ給ひ、其上に御經を引きかづきて、隱形の呪を御心の中に唱へてぞ座しける、

若し捜し被レ出ば、頓て突立てんと思召して、氷の如くなる刀を拔きて、御腹に指し當て、兵こゝにこそといはんずる一言を待せ給ひける、御心の中推量るも尚淺かるべし。

去程に兵佛殿に亂入りて、佛壇の下天井の上までも無ニ殘ク所ル捜しけるが、餘に求めかねて、是體の物こそ怪しけれ、あの大般若の櫃を開きて見よとて、蓋したる櫃二を開きて、御經を取り出し、底を翻して見けれどもおはせず。蓋開けたる櫃は見るまでもなしとて、兵皆寺中を出去りぬ。宮は不思議の御命を續せ給ひ、夢に道行く心地して、獨櫃の中に座しけるが、若し又兵立ちかへり、委しく捜す事もあらんずらんと御思案ありて、頓て前に兵の捜し見たりつる櫃に、入替らせ給ひてぞ座しける。案の如く兵共又佛殿に立ちかへり、前に蓋の開けたるを見ざりつるが覺束なしとて、御經を皆打移して見けるが、から／＼と打笑ひて、大般若の櫃の中を能々捜したれば、大塔宮はいらせ給はで、大唐の玄弉三藏こそ座しけれと戲れければ、兵皆一同に笑ひて門外へぞ

出でにける。是偏に摩利支天の冥應、又は十六善神の擁護に依る命なりと、信心肝に銘じ、感涙御袖を潤せり。

斯ては南都邊の御隱家も難レ叶ければ、則ち般若寺を御出ありて、熊野の方へぞ落させ給ひける。御供の衆には、光林房玄尊、赤松律師則祐、木寺相模、岡本三河房、武藏房、村上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎、彼此以上九人なり。宮を始め奉りて、御供の者までも皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半に責め、其中に年長ぜるを先達に作り立て、田舍山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。此君元より龍樓鳳闕の内に長らせ給ひて、華軒香車の外を出させ給はぬ事なれば、御步行の長途は、定めて叶はせ給はじと、御伴の人々かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども怪しげなる單皮脚巾草鞋を召して、少しも草臥たる御氣色もなく、社々の奉幣宿々の御勤懈らせ給はざりければ、路次に行き逢ひける道者も、勤修を積める先達も、見尤むる事なかりけり。

由良の湊を見渡せば、澳漕ぐ船の梶をたへ、浦の濱ゆふ幾重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺々と、藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌吹上を外に見て、月に瑩ける玉津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を砕く習なるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、哀を催す時しもあれ、切目の王子に着き給ふ。其夜は叢祠の露に御袖をかたしきて、通夜祈り申させ給ひけるは、南無歸命頂禮三所權現滿山護法、十萬の眷屬、八萬の金剛童子、垂跡和光の月明に分段同居の闇を照し、逆臣忽に亡びて朝廷再び輝く事を得しめ給へ。傳へ承る。兩所權現は是伊弉諾伊弉冊の應作なり。我君其苗裔として、今朝日忽に浮雲のために隱されて冥闇たり。豈不レ傷哉、玄鑒似レ空、神若し神たらば、君盍レ爲レ君と、五體を地に投げて、一心に誠を致してぞ祈り申させ給ひける。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと、神慮も暗に計られたり。終夜の禮拜に御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫く御目睡ありける御夢に、鬢結ひたる童子一人來て、熊野三山の間は、尚も人の心不和にして大義

成り難し。是より十津河の方へ御渡り候ひて、時の至らんを御待候へかし。兩所權現より、案內者に附け進らせられて候へば、御道指南可レ仕候と申すと御覽ぜられ、御夢は則ち覺めにけり。是權現の御告なりけりと、憑敷思召されければ、未明に御悅の奉幣を捧げ、頓て十津河を尋ねてぞ分入らせ給ける。其道の程三十餘里が間には絕えて人里もなかりければ或は高峯の雲に枕を攲て、苔の莚に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。山路本より雨なくして、空翠常に衣を濕す。向上ぐれば萬仭の青壁刀に削り、直下せば千丈の碧潭藍に染めり。數日の間斯る嶮難を經させ給へば、御身も草臥はてゝ流るゝ汗水の如し。御足は缺け損じて草鞋皆血に染れり。御伴の人々も、皆其身鐵石にあらざれば、皆飢ゑ疲れてはか〴〵しくも歩み得ざりけれども、御腰を推し御手を挽きて、路の程十三日に、十津河へぞ着かせ給ひける。

宮をばとある辻堂の內に置き奉りて、御供の人々は在家に行きて、熊野參詣の山伏ども、道に迷ひて來れるよしをいひければ、在家の者共哀を垂れて、栗の飯橡の粥など

取り出して其飢を相助く。宮にも此等を進らせて、二三日は過ぎけり。かくして始終如何可ㇾ在ともと覺えざりければ、光林房玄尊、とある在家の、是ぞさもある人の家なるらんと思しき所に行きて、童部の出でたるに、家主の名を問へば、是は竹原八郎入道殿の甥に、戸野兵衞殿と申す人の許にて候といひければ、さては是こそ、弓矢取りてさる者と聞き及ぶ者なれ、如何にもして是を憑まばやと思ひければ、門の内へ入りて、事の樣を見聞く處に、内に病者ありと覺えて、あはれ貴からん山伏の出で來れかし、祈らせ進らせんといふ聲しけり。玄尊すはや、究竟の事こそあれと思ひければ、聲を高らかに揚げて、是は三重の瀧に七日うたれ、那智に千日籠りて、三十三所の巡禮のために、罷り出でたる山伏共、山路に踏み迷ひて此里に出でゝ候。一夜の宿を貸し、一日の飢をも休め給へといひたりければ、内より怪しげなる下女一人出合ひ、是こそ可然佛神の御計ひと覺えて候へ。是の主の女房物怪を病せ給ひ候。祈りてたばせ給はらんと申せば、玄尊、我等は夫山伏にて候間、叶ひ候ふまじ。あれに見え候辻堂に、足

を休めて居られて候先達こそ、效驗第一の人にて候へ。此樣を申さんに子細候はじといひければ、女房大に悅びて、さらば其先達の御房、是へ進らせさせ給へといひて、喜びあへる事限りなし。玄尊走り歸りて此由を申しければ、宮を始め奉りて、御供の人、皆彼が館へ入らせ給ふ。宮病者の臥したる所へ御入ありて御加持あり、千手陀羅尼を二三反高らかに遊ばされて、御念珠を押し揉ませ給ひければ、病者自ら只走りて、樣々の事をいひけるが、誠に明王の縛にかけられたる體にて、足手を縮めて戰き、五體に汗を流して、物怪は則ち立ち去りぬれば、病者忽に平癒す。主の夫斜ならず喜びて、我蓄へたる物候はねば、別の御引出物までは叶ひ候ふまじ。枉げて十餘日是に御逗留候ひて、御足を休めさせ給へ。例の山伏楚忽に忍びて、御逃げ候ひぬと存じ候へば、恐れながら是を御質に給はらんとて、面々の笈どもを取り合せて皆內にぞ置きたりける。御供の人々、上には其氣色を顯はさずといへども、下には皆悅び思へる限りなし。かくて十餘日を過させ給ひけるに、或夜家主の兵衞尉、客殿に出で丶、燒火などせさ

せ、四方山の物語どもしける次に申しけるは、かた〳〵は定めて聞き及ばせ給ひたる事候ふらん。誠やらん大塔宮、京都を落させ給ひて、熊野の方へ赴かせ給ひ候ひけんなる。三山の別當定遍僧都は、無二の武家方にて候へば、熊野邊に御忍びあらんことは、成り難く覺え候。哀此里へ御入り候へかし。所こそ分内は狹く候へども、四方皆嶮岨にて、十里廿里が中へは鳥も翔り難き所にて候。其上人の心僞ならず、弓矢を取る事世に超えたり。されば平家の嫡孫維盛と申しける人も、我等が先祖を憑みて此處にかくれ、遂に源氏の世に恙く候ひけるとこそ承り候へと語りければ、宮誠に嬉しげに思召したる御氣色顯れて、若し大塔宮なんどの、此所へ御憑ありて入らせ給ひたらば、憑まれさせ給はんずるかと問はせ給へば、戸野兵衞申にや及び候。身不肖に候へども某一人だに、かゝることぞと申さば、鹿瀨、蕪坂、湯淺、阿瀨川、小原、芋瀨、中津河、吉野、十八鄕の者までも、手刺す者候ふまじきにて候とぞ申しける。其時宮木寺相模に、きと御目合ありければ、相模此兵衞が側に居寄りて、今は何をか隱し申

すべき、あの先達の御房こそ、大塔宮にて御座あれといひければ、此兵衛尙も不審氣にて、彼此の顔をつく〴〵と守りけるに、片岡八郎、矢田彦七、あらあつやとて、頭巾を脱ぎて側に指し置く。實の山伏ならねば、さかやきの跡隱れなし。兵衛是を見て、實にも山伏にて御座さゞりけり。賢うぞ此事申し出でたりける。あなあさまし。此程の振舞こそ尾籠に思召し候ひつらんと、以の外に驚きて、首を地に着け手を束ね、疊より下りて蹲踞せり。俄に黒木の御所を作りて、宮を守護し奉り、四方の山々に關を居ゑ、路を切り塞ぎて、用心嚴しくぞ見えたりける。是も猶大義の計略叶ひ難しとて、叔父竹原八郎入道に此由を語りければ、入道頓て戸野が語ひに隨ひて、我館へ宮を入れ進らせ、無二の氣色に見えければ、御心安く思召して、此に半年ばかり御座ありける程に、人に見知られじと思召されける御支度に、御還俗の體に成らせ給ひければ、竹原八郎入道が息女を、夜のおとゞへ召されて御おぼえ他に異なり。さてこそ家主の入道も彌志を傾け、近邊の鄕民共も次第に歸伏申したるよしにて、却りて武家をば編

じけり。

去程に熊野の別當定遍此事を聞きて、十津河へ寄せんずることは、縦令十萬騎の勢ありとも叶ふべからず。其邊の郷民共の欲心を勸めて、宮を他所へおびき出し奉らんと相謀りて、道路の辻に札を書きて立てけるは、大塔宮を討ち奉りたらん者には非職凡下をいはず、伊勢の車間の庄を恩賞に可レ被ニ充行一由、關東の御教書有レ之、其上に定遍先づ三日が中に六萬貫を與ふべし。御内伺候の人、御手の人を討ちたらん者には五百貫、降人に出でたらん輩には三百貫、何れも其日の中に必ず沙汰し與ふべしと定めて、奥に起請文の詞を載せて、嚴密の法をぞ出しける。夫移木の信は約を堅うせんがため、献芹の賂は心を奪はんがためなれば、欲心強盛の八庄司ども此札を見てければ、いつしか心變じ色替りて、奇しき振舞どもにぞ聞えける。宮かくては此所の御止住、始終惡しかりなん。吉野の方へも御出あらばやと仰せられけるを、竹原入道如何なることや候ふべきと、強ひて留め申しければ、彼が心を破られんことも、さすがに叶は

せ給はで、恐懼の中に月日を送らせ給ひける。結句竹原入道が子どもさへ、父が命を背きて、宮を討ち奉らんとする企ありと聞きしかば、宮潜に十津河を出させ給ひて、高野の方へぞ趣かせ給ひける。

其路小原、芋瀬、中津河といふ、敵陣の難所を經て通る路なれば、中々敵を打ち憑みて見ばやと思召され、先づ芋瀬の庄司が許へ入らせ給ひけり。芋瀬宮をば我舘へ入れ進らせずして、側なる御堂に置き奉り、使者を以て申しけるは、三山の別當定遍武命を含みて、隱謀與黨の輩をば關東へ注進仕る事にて候へば、此道より無ニ左右一通し進らせん事、後の罪科陳謝するに不レ可レ有レ據候、乍レ去宮を留め進らせんことは其恐候へば、御伴の人々の中に、名字さりぬべからんずる人を一兩人賜りて、武家へ召し渡し候歟、不レ然ば御紋の旗を賜ひて、合戰仕りて候ひつる支證是にて候と、武家へ可レ申にて候。此二つの間、何れも叶ふまじきとの御意にて候はゞ、無レ力一矢仕らんずるにて候と、誠に又餘儀もなげにぞ申し入れたりける。宮は此事いづれも難儀なりと思召して、敢

て御返事もなかりけるを、赤松律師則祐進み出でゝ申しけるは、危きを見て命を致すは士卒の守る所に候。されば紀信は詐りて敵に降り、魏豹は留りて城を守る。是皆主の命に代りて、名を留めし者にて候はずや。兎ても角ても彼が所存解けて、御所を通し進らすべきにてだに候はゞ、則祐御大事に代り罷出候はんことは、子細あるまじきにて候と申せば、平賀三郎是を聞きて、末座の意見卒爾の議にて候へども、此艱苦の中に附き纏ひ奉りたる人は、雖二一人一上の御爲には、股肱耳目よりも難レ捨被二思召一候べし。就レ中芋瀬庄司が申す所、實に難レ被二默止一候へば、其安きに就きて、御旗ばかりを被レ下候には、何の煩ひか候ふべき。戰場には馬物具を捨て、太刀刀を落して敵に取らるゝこと、さまでの恥ならず。只彼が申し請くる旨に任せて、御旗を被レ下候へかしと申しければ、宮げにもと思召して、日月を金銀にて打ちて着けたる錦の御旗を、芋瀬の庄司にぞ下されける。かくて宮は遙に行過させ給ひぬ。暫くありて村上彦四郎義光、遙の路にさがり、宮に追ひ着き進らんと急ぎげるに、芋瀬庄司はしたなく道に

て行き逢ひぬ。芋瀬が下人に持たせたる旗を見れば、宮の御旗なり。村上怪みての事の様を問ふに、爾々のよしをかたる。村上こはそも何事ぞや。忝くも四海の主にて御座します天子の御子の、朝敵御追罰のために、御門出ある路次に參りあひて、汝等ほど大凡下の奴原が、左樣の事可レ仕樣やあるといひて、則ち御旗を引き奪ひて取り、剰へ旗持ちたる芋瀬が下人の大の男を掴みて、四五丈ばかりぞ抛げたりける。其怪力比類なきにや怖れたりけん、芋瀬の庄司一言の返事もせざりければ、村上自ら御旗を肩に懸けて、程なく宮に追ひ着き奉る。義光御前に跪きて此樣を申しければ、宮誠に嬉しげに打ち笑はせ給ひて、則祐が忠は孟施舍が義を守り、平賀が智は陳丞相が謀を得、義光が勇は北宮黝が勢を凌げり。此三傑を以て、我盍レ治ニ天下一哉と仰せられけるぞかたじけなき。

其夜は椎柴垣の隙あらはなる山がつの庵に、御枕を傾けさせ給ひて、明くれば小原へと志して、薪負ひたる山人の行き逢ひたるに、道の樣を御尋ありけるに、心なき樵夫

までも、見知り進らせてやありけん。薪を下し地に跪きて、是より小原へ御通り候はん道には、玉置の庄司殿とて、無貳の武家方の人おはしまし候。此人を御語ひ候はではいくらの大勢にても、其前をば御通り候ひぬと覺えず候。恐ある申しごとにて候へども、先づ人を一二人御使に遣され候ひて、彼人の所存をも聞召れ候へかしとぞ申しける。宮つくづくと聞召して、芻蕘の詞までも捨てずといふは是なり。げにも樵夫が申す處さもと覺ゆるぞとて、片岡八郎矢田彦七二人を、玉置の庄司が許へ遣はされて、此道を御通あるべし。道の警固に木戸を開き、逆茂木を引のけさせよとぞ仰せられける。玉置の庄司御使に出合ひて、事のよしを聞きて、無返事にて內へ入りけるが、軈て若黨中間どもに、物具させ馬に鞍置き、事の體躁しげに見えければ、二人の御使、いや〳〵御事叶ふまじかりけり。さらば急ぎ走り歸りて、此由申さんとて、足早に歸れば、玉置が若黨ども五六十人、取太刀ばかりにて追ひかけたり。二人の者立留り、小松の二三本ありける陰より跳り出でゝ、眞前に進みたる武者の、馬の諸膝薙きて刎

ね落させ、返太刀にて首打ち落して、仰たる太刀を押直してぞ立ちたりける。跡に續きて追ひける者共も、是を見て敢て近づく者一人もなし。只遠矢に射すくめければ、片岡八郎矢二筋射つけられ、今は助かり難しと思ひければ、や殿、矢田殿、我はとても手負ひたれば、此處にて打死せんずるぞ。此邊は急ぎ宮の方へ走り參りて、此由を申して、一まども落し進らせよと、再往强ひていひければ、矢田も一所にて打死せんと思ひけれども、實にも宮に告げ申さゞらんは、却りて不忠なるべければ、無力只今打死する傍輩を見捨てゝ歸りける、心の中推量られてあはれなり。矢田遙に行き延びて跡を顧れば、片岡八郎はや討たれぬと見えて、首は太刀の鋒に貫きて持ちたる人あり。矢田急ぎ走り歸りて、此由を宮に申しければ、さては遁れぬ道に行き迫りぬ。運の窮達歎くに詞なしとて、御伴の人々に至るまで、中々騷ぐ氣色ぞなかりける。さればとて此處に留まるべきにあらず。行かれんずる所まで行けやとて、上下三十餘人の兵ども、宮を前に立て進らせて、問ひ〳〵山路をぞ越え行きける。

既に中津河の峠を越えんとし給ひける所に、向の上の峯に玉置が勢と覺えて五六百人が程、混胄(ひたかぶと)に鎧ひて、楯を前にすゝめ、射手を左右へ分けて鬨(とき)の聲をぞ揚げたりける。宮是を御覽じて、玉顏殊に儼(おごそか)に打ち笑ませ給ひて、御手の者共に向ひて、矢種のあらんずる程は防矢(ふせぎや)を射よ、心靜に自害して名を萬代に貽(のこ)すべし。但し相構へて、吾より先に腹切ることあるべからず。吾已に自害せば、面の皮を剝(は)ぎ耳を切りて、誰が首とも見えぬやうにしなして捨つべし。其故は、我首を若し獄門にかけて曝(さら)されなば、天下に御方(みかた)の志を存ぜんものは力を失ひ、武家は彌(いよ〳〵)恐るゝ所なかるべし。死せる孔明生ける仲達を走らしむといふことあり。されば死して後までも、威を天下に殘すを以て良將とせり。今はとても遁れぬ所ぞ。相構へて人々きたなびれて、敵に笑はるなと仰せられければ、御供の兵ども何故か、きたなびれ候ふべきと申して、御前に立ちて、敵の大勢にて責め上りける、坂中の邊まで下り向ふ。其勢僅三十二人、是皆一騎當千の兵とはいへども、敵五百餘騎に打ち合ひて、戰ふべきやうはなかりけり。寄手は楯

を雌羽につきしとうてかづきあがり、防ぐ兵は打物の鞘をはづして、相懸りに近づく所に、北の峯より赤旗三流、松の嵐に飜して、其勢六七百騎が程かけ出でたり。其勢次第に近づくまゝ、三手に分けて鬨の聲を揚げて、玉置庄司に相向ふ。眞前に進みたる武者大音聲を揚げて、紀伊國の住人野長瀬六郎、同七郎、其勢三千餘騎にて、大塔宮の御迎に參る所に、恭くも此君に對ひ進らせて、弓を引き楯を列ぬる人は誰ぞや。玉置庄司殿と見るは僻目か、只今滅ぶべき武家の逆命に随ひて、即時に運を開かせ給ふべき、親王に敵對申しては、一天下の間何れの處にか身を置かんと思ふ。天罰遠からず、是を鎭めん事我等が一戰の中にあり。餘すな漏すなと、をめき叫びてぞかゝりける。是を見て玉置が勢五百餘騎、叶はじとや思ひけん、楯を捨て旗を卷きて、忽に四角八方へ逃げ散りぬ。其後野長瀬兄弟、冑を脱ぎ弓を脇挾みて遙に畏る。宮の御前近く召されて、山中の體爲、大義の計略叶ひ難かるべき間、大和河内の勢へ打ち出でゝ、勢をつけんために、令進發之處に、玉置庄司只今の擧動、當手の兵萬死の中に

一生をも得難しと覺えつるに、不慮の扶に逢ふこと天運尙憑あるに似たり。抑此事何として存じ知りたりければ、此戰場に馳せ合ひて、逆徒の大軍をば靡けぬるぞと御尋ありければ、野長瀨畏りて申しけるは、昨日の晝ほどに、年十四五ばかりに候ひし、童の名をば老松といへりと名のりて、大塔宮明日十津河を御出ありて、小原へ御通りあらんずるが、一定道にて難に逢はせ給ひぬと覺ゆるぞ。志を存ぜん人は急ぎ御迎に參れと、觸れ廻り候ひつる間、御使ぞと心得て參りて候とぞ申しける。宮此事を御思案あるに、徒事にあらずと思召し合せて、年來御身を放されざりし膚の御守を御覽ずるに、其口少し開きたりける間、彌怪しく思召して、則ち開き御覽ぜられければ、北野天神の御神體を金銅にて鑄進らせたる、其御眷屬、老松の明神の御身體遍身より汗かいて、御足に土のつきたるぞ不思議なる。さては佳運神慮にかなへり。逆徒の退治何の疑かあるべきとて、其より宮は、槇野上野房聖賢が拵へたる、槇野の城へ御入りありけるが、此も尙分內狹くて惡しかるべしと御思案ありて、吉野の大衆をかたら

はせ給ひて、愛善寶塔を城郭に構へ、岩切り通す吉野河を前に當てゝ、三千餘騎を隨へて楯籠らせ給ひけるとぞ聞えし。（卷五）

【大塔宮】護良親王を申す。皇族で天台座主たる人をすべて大塔宮といふのであるが、今では專ら護良親王を指す。【般若寺】奈良市奈良坂の下にある。律宗の寺。【虎の尾を履むおそれ】非常に危いこと。易經履卦の辭に「履二虎尾一不レ咥レ人、亨。」とある。【鷄の床に云々】鷄の床、卽ち草に置く露と涙を爭ふ。【一條院】奈良の興福寺内にある。興福寺の寺務門跡である。【候人】門跡家に使はるゝ人。一條院は興福寺の門跡である。【推膚脫】おしは接頭語。膚脫ぐこと。【大般若】六百卷ある。唐の玄弉三藏の翻譯。【唐櫃】からびつが音便で、からうづとなり、轉じてからうどとなつたもの。脚のついた唐風造のひつ。【隱形の呪】身を隱す咒で、摩利支天經にあり、其摩利支天の通力を借りようとする咒。【玄弉三藏】唐の高僧。天竺に渡り十三年の間に百三十餘國を巡つて、貞觀九年に歸る。譯した經が一千三百三十八卷あるといふ。三藏は經・律・論の三藏に通じた高僧の稱。大唐の云々と言つたのは、大唐と大塔と語呂が同じい所から言つた洒落。【摩利支天】天竺で火屋の女神の名、陽燄と譯す。神通力自在で、日天の前を行つても、日天も見ることが出來ぬといふ。【十六善神】佛法を守護する十六の神。多くは武裝をしてゐる。【柿の衣】柿色の衣で山伏の着るもの。【笈】負ひの義、山伏や行脚僧などの、佛具、食物など入れて負つて行くもの。脚があり、扉がある。【頭巾】布で作つた頭巾、修驗者の冠るもの。ときんとよむ。【眉半に責め】前下りに、眉半

ばかけて冠る。責めは迫る意。【先達】修業の重つた、同行の先導をする修驗者。【龍樓鳳闕】王宮と禁門。【華軒香車】軒は車、華美の車のこと。【怪しげなる】見苦しげな。【單皮】皮靴の一種。底が一枚革であるから單皮といふとも、旅に用ひられるから云ふともいふ。【脚巾】脛穿(ハギハキ)の略。脚絆である。【由良港】淡路にもあるけれど、紀伊の由良港であらう。日高郡由良村にある。【梶を絶へ】楫を絶えである。古今集、曾根好忠「由良のとをわたる舟人かぢを絶え、行へも知らぬ戀の道かな。」による。楫をなくして行くべき方法もなくなる意の歌。こゝは、沖を船がどこへ行くか知れずこいでゐる意。【浦の濱ゆふ云々】濱ゆふは濱木綿で、海邊に生ずる草。皮が幾重にも重なつてゐるから、幾重とつゞけて歌にも用ひられる。こゝも幾重とつゞける爲の詞にすぎぬ。【幾重とも知らぬ】遠いこと。【渺々】はてしなく廣い貌。【藤代・和歌・吹上】すべて紀伊の國の浦の名。【月にみがける】月光の下に、美しく照らされてゐる玉津島といふ意で、みがけるは、月光の清澄を、玉の縁語でいつたもの。【玉津島】和歌の浦にある。玉津島神社は衣通姫を祀り、和歌の神として有名である。【光も今は云々】光さらずを、さらでだに心を碎くとつゞけたもの。【長汀曲浦】長い汀と曲つた浦。【雨を含める云々】唐の盧綸の詩に「出レ關愁暮一沾レ裳、滿野蓬生古戰場、孤村樹色昏ニ殘雨一、遠寺鐘聲帶ニ夕陽一。」【切目の王子】紀伊國日高郡切目村にあり。こゝに切目王子社がある。【叢祠】草むらの中のほとら。【片しきて】片袖を敷いて。【南無歸命頂禮】南無は梵語、歸命と譯す。故に南無歸命は同語を重ねたもの。歸命は己の性命を盡して佛に歸依すること、頂禮は印度の最敬禮で、自分の頭を對手の足下の所まで下げる　つまり深い信を以て禮拜するといふ意味。【三所權現】熊野の本宮・新宮・那

智の三所權現。【滿山護法】 一山を守護し佛法を擁護する善神のこと。【垂跡和光の月】 和光も垂迹と同じい。本地の光を和げて、此の塵土に應同することを月にたとへたもの。【分段同居の闇】 分段は區別の意で、人間は人間、畜類は畜類と區別あることをいふ。同居は、天台大師が、迷から悟に至る次第を分けて四土を立てた其中の一つで、四土とは同居土、方便土、實報土、寂光土である。同居土とは聖凡雜居の意である。此衆生界は同居土で、又分段の姿であるから、分段同居の闇とはつまり衆生界の闇といふこと。垂跡和光から、佛の權に現はれて衆生界の闇を照すことを云ふ。【應作】 機に應じ現はれて作業すること。【苗裔】 遠い子孫。【玄鑒】 神佛の冥々の照覽。【君盍爲君】 君いづくんぞ君たらざらむ。【鬘】 髮を頂上で分けて左右に結んだもの。【御指南】 御道の案內。指南車の故事から出る。）史記に「黃帝之時、蚩尤作レ亂、其人銅鐵類、能作二大霧一、軒轅作二指南車一云々。」【奉幣】 みてぐら（神に奉るものゝ總稱）を献ること。【空翠常に云々】 空翠は山氣が深くこめて翠に見えるもの。山氣が濕氣を帶びて、衣を濕す。王維の荊溪出二白石一、天寒紅葉稀、山道元無レ雨、空翠濕二人一衣。によつたものであらう。【在家】 田舍の家。【橡の粥】 橡は七葉樹科に屬する喬木で、其果實を粥に入れて煮たもの。山間では今でも橡餅、橡粥など食ふ。【三重の瀧】 那智の瀧をいふ。【那智】 紀伊國牟婁郡にある那智山。【三十三所】 觀音を祀つてある三十三の靈地。西國、坂東、秩父の三種あるが、玆は最も著名の西國三十三所。【物怪を病せ】 死靈・生靈などが祟つて病氣となること。【天山伏】 平山伏。【加持】 病災を除くための祈禱。【千手陀羅尼】 千手觀音の功德をのべた陀羅尼。陀羅尼は呪（じゅ）とも云ひ、佛菩薩の禪定から發した秘密の言句。千手陀羅尼は八十二句からなる。【明王の縛云々】

不動明王の縄で、縛られた樣子で。【引出物】主人から客への贈物。昔は饗應の贈物に馬を以てしたから。【楚忽に忍びて】粗忽の取扱に忍び得ずして。【三山の別當】熊野三山（三所權現と同じ）の別當。【分内】限界内の意。【平家の嫡孫云々】平惟盛入水自殺と偽つて逃れ、子孫も殘り居れりといふ口碑がある。【手指す者】指一つさす者がない。【さかやき】昔普通の男子は、額から頂へかけて剃つた、それをいふ。山伏は月代を剃らぬもの故、僞山伏と分つた。【尾籠】失禮。無禮。【蹲踞】うづくまる。【黒木の御所】皮を削らぬ木で造つた御所。【褊し】輕侮する。【非職凡下】官職のない人、身分のない人。【御教書】官の命令書。【起請文】天地の神祇に誓つて、約を違へない旨を書いた文。【移木の信】秦の商鞅が、三丈の木を南門に立て、之を北門に移すものには十金を與へようと言つたが、誰も信じないので、今度は五十金與へようと言つた。或人が其木を移したので、五十金を與へて欺かぬことを明かにした。かくして政府の命令を信ぜしめた故事。【獻芹の賂】獻芹は人に物を贈獻すること。呂氏春秋「野人、美レ芹、願レ獻二之至尊一」に出づ。【八庄司】熊野八箇の庄の庄司である。【無左右】たやすく。【律師】僧官。僧都に次ぐ。【紀信】漢の高祖が楚兵に圍まれた時、高祖と名乘て降り、高祖を逃れしめ、自らは燒殺された人。【魏豹】漢王の命によつて滎陽を守り、遂に殺された人。【卒爾】ぶしつけの意。【股肱】もゝとひぢ。缺くべからざる重要の臣をいふ。【さがり】おくれたこと。【はしたなく】間がわるく。【孟施舍】孟子公孫丑上篇に出た勇者。【陳丞相】高祖の臣陳平。【北宮黝】孟子公孫丑上篇に出た勇者。膚橈せず、目逃せず、萬乘の君を刺すことを視る事、褐夫を刺すが如き勇者。【椎柴垣】叢生した椎の木の生垣。【山がつ】樵夫。【小原】紀

伊日高郡にある。【芻蕘】芻は草を刈る義、蕘は薪を采る義。草刈る人やきこり。【取太刀ばかり】太刀を手に持つての意。【諸膝】兩膝。【仰たる太刀】そりかへり曲つた太刀。【射すくめ】射てすくませる。【一まど】一先。【混冑】全部が冑を被つたをいふ。直冑とも書く。【相構へて】決して。【獄門にかけ】斬首して首をさらすこと。【きたなびれて】卑怯のさまをして。【雌羽に云々】雌の羽の如く重ねて並べること。つきしとうては、突き治うて。かづきは、楯を被ぎて攻め上ること。【打物】打ち合ふ物。刀・鎗・長刀の類。多くは刀を云ふ。【相懸り】双方からうちかゝること。【四角八方】四方八方と同じ。【當手の兵】當の手下の兵。【一定】かならず。【其御眷族】其末社のこと。【遍身】身體全體。【岩切り通す】新拾遺集冬の部「さゆる夜は氷るも早し吉野川、岩きり通す水の白波。」とあるによる。水勢の强くして、岩を切り崩して通る程なるをいふ。

民部卿三位局御夢想の事

夫年光不レ停如ニ奔箭下流水一、哀樂互替似ニ紅榮黃落樹一、しかれば此世中の有樣、只夢とやいはん、幻といやはん。憂喜共に感ずれば、袂の露を催すこと今に始らずといへど

も、去年の九月に笠置城破れて、先帝隱岐國へ遷されさせ給ひし後は、百司の舊臣悲を抱きて所々に籠居し、三千の宮女涙を流して面々に臥沈み給ふ有樣、誠に憂世の中の習といひながら、殊更哀に聞えしは、民部卿三位殿の御局にて留めたり。其を如何にと申すに、先朝の御寵愛淺からざるうへ、大塔宮の御母堂にて渡らせ給ひしかば、傍の女御后は、花の側の深山木の色香もなきが如くなり。しかるに世間靜ならざりし後は、萬引き替へたる九重の內の御住居も定まらず、荒れのみまさる浪の上に、船流したる海士の心地して、寄る方もなき御思の上に打ち添ひて、君西海のかへらぬ波に浮き沈み、泪隙なき御袖の氣色と承りしかば、空しく思を萬里の曉月に傾け、宮は又南山の道なき雲に踏み迷はせ給ひて、狂浮たる御住居と聞ゆれど、書を三春の暮の鴈に託け難し。云ゝ彼云ゝ此一方ならぬ御歎に、青絲の髮疎にして、いつの間に老は來りぬらんと怪まれ、紅玉の膚消えて、今日を限の命ともがなと思召しける御悲の遣る方なさに、年來の御祈の師とて、御誦經や撫物なんど奉りける、北野の社僧の坊に御座

して、一七日參籠の御志あるよしを仰せられければ、此折節武家の聞えも憚りなきにはあらねど、日來の御恩も重く、今程の御有樣も御痛しければ、情なきは如何と思ひて、拜殿の傍に僅なる一間を拵へて、尋常の青女房なんどの、參籠したるよしにて置き奉りけり。

あはれいにしへならば錦帳に粧を籠め、紗窓に艷を閉ぢて、左右の侍女其數を知らず、あたりを輝して假冊奉るべきに、いつしか引き替へたる御忍の物籠なれば、都近けれども事訪ひかはす人もなし。只一夜の松の嵐に御夢を覺され、主忘れぬ梅が香に昔の春を思召し出すにも、昌泰の年の末に荒人神とならせ給ひし、心づくし御旅宿までも、今は君の御思になぞらへ、又は御身の數に思召し知られたる、哀の色の數々に、御念誦を暫く止められて、御涙のうちにかくばかり、

忘れずば神もあはれと思ひ知れこゝろづくしのいにしへの旅

とあそばして少し御目睡ありける、其夜の御夢に、衣冠正しくしたる老翁の、年八十

有餘なるが、左の手に梅の花を一枝持ち、右の手に鳩の杖をつき、いと苦しげなる體にて、御局の臥し給ひたる枕の邊に立ち給へり。御夢心地に思召しけるは、篠の小篠の一節も、問ふべき人も覺えぬ都の外の蓬生に、怪しや誰人の道踏み迷へるやすらひぞやと御尋ありければ、此老翁世に哀なる氣色にて、いひ出せる詞はなくて、持ちたる梅の花を御前にさし置きて立ちかへりけり。不思議やと思召して御覽ずれば、一首の歌を短册にかけり。

　めぐり來てつひにすむべき月かげのしばしくもるを何なげくらん

御夢覺めて歌の心を案じ給ふに、君遂に還幸成りて、雲の上に住ませ給ふべき瑞夢なりと、たのもしく思召しけり。誠に彼聖廟と申し奉るは、大慈大悲の本地、天滿天神の垂跡にて渡らせ給へば、一度歩を運ぶ人、二世の悉地を成就し、僅に御名を唱ふる輩、萬事の所願を滿足す。況や千行萬行の紅涙を滴て盡して、七日七夜の丹誠を至させ給へば、懇誠暗に通じて感應忽に告あり。世既に澆季に及ぶといへども、信心誠あ

る時は靈鑑新なりと、いよ〳〵たのもしくぞ思召しける。（卷六）

【民部卿三位局】大塔宮の御母、源親子。【年光不ㇾ停云々】光陰の早く過ぐること奔箭流水の如し。【哀樂互替云々】樂しみと哀しみとの替ること、紅に花咲き榮えるかと思へば、忽ちに葉の落ち散る樹のやうである。【憂喜共に感ずれば】人間は悲も喜も共に感ずるものであるから。【三千の宮女】後宮の多くの宮女。白居易の長恨歌に、「後宮佳麗三千人、三千寵愛在二一身一。」【民部卿云々にて留めたり】民部卿云々を最上とする。【傍の女御后】他の女御や后。后は皇后、中宮、女御は中宮に次ぐ女官。【萬引き替へたる】全く樣子の變つた。【寄る方もなき云々】頼りない御思ひに又附け加へて。寄る方もなきは、浪、船流し、海士等からつゞいた縁語。【西海のかへらぬ波云々】隱岐に流され給うたことを云ふ。【思を萬里の云々】遙かの隱岐で、曉の月を御覽になつてゐることを思ふ。【宮は又南山云々】大塔宮は十津川の方に行かれたこと。【狂浮たる】魂の身にそはぬ。又は思ひ余つた御生活と。【書を三春の云々】書を春の暮の雁に託してやることも出來ぬ。三春は春の三ケ月。書を雁に託すは蘇武の故事による。【青絲の髮】絲の美しい髮も少くなる。【紅玉の膚】若やかに血行よく、つやのよい膚。【今日を限の命云々】新今古集、儀同三司母「忘れじの行末まではかたければ、今日を限のいのちともがな。」今日を限りに命が終つてくれゝばよいとの意。【撫物】祈禱の時に、身を撫でゝ禍を祓ひすてる人形。【社僧の坊】社僧の住所。社僧は、神宮寺で社の爲に佛事を行つた僧。【青女房】物事に馴れず、身分低い女房。【紗窓に燈を閉ぢ】紗をかけた窓の中に、美しさを凝

らす。【侍女】 おともびととよむ。御許人の意。貴人の側近く仕へる人。【假冊】 いつきかしづき。いつくは、かしづくと同じ。大切にして世話をし仕へる。【一夜の松】 天暦九年三月十二日、菅公の神託に、北野右近の馬場に、一夜に千本の松生ずべしとあつたが、果して其の通りであつた。その松を一夜の松といふ。【主忘れぬ梅】 菅公の「春な忘れそ」の歌によつてかく。【昌泰の年】 醍醐帝の年號。しかし道眞の薨去は延喜三年で、これは誤つてゐる。【荒人神】 威靈の大いにある神。あら神。ここは薨去されて威靈ある神となられたこと。【心づくし云々】 道眞公の心づくしや、旅ねのことまでも、今は天皇の御愁思に比べ、又は三位局御自身の歎に思ひ比べて、知られた。【忘れずば云々】 心づくしの、あの九州への昔の旅をお忘れでなくば、神樣よ、今の流された人を哀れと思召して下さいよ。【鳩の杖】 老人のつく杖。白氏六帖「老人刻杖爲二鳩形一、取二其不レ咽。」【篠の小篠の云々】 小篠は篠に同じい。篠の小篠のと續けたのは調子のためで意味は笹の一節といふこと。問ふべき人があると一寸も思はれぬといふ意である。【蓬生】 よもぎの生えた地。草深い所。【やすらひ】 たゝずみといふ意。【めぐり來て云々】 日數を經れば、終にはすむべき月であるから、一時曇るのを歎く必要はない。即ち時機來れば、つひには再び天下を治め給ふであらうから、一時の蒙塵を嘆く必要はないといふ意。【大慈大悲の本地云々】 大慈大悲の觀音が本地で、それの現はれたのが（即ち垂迹が）天滿天神だといふ意。【二世の悉地】 現當（未來）二世の妙果を成就する。悉地は、祕法を修して、眞言の妙果を得ること。【千行萬行の紅涙】 行はすぢ、紅涙は血の涙。菅公の離レ家三四月、落レ涙百千行、」によるか。【靈鑑】 神佛の御覽になること。

赤坂合戰の事附人見本間拔懸の事

去程に赤坂の城へ向ひける、大將阿曾彈正少弼、後陣の勢を待ち調へんがために、天王寺に兩日逗留ありて、同二月二日午の尅に、可レ有ニ矢合一、於ニ拔懸之輩一者、可レ爲ニ罪科一之由をぞ觸れられける。

爰に武藏國の住人に、人見四郎入道恩阿といふ者あり。此恩阿、本間九郎資貞に向ひて語りけるは、御方の軍勢雲霞の如くなれば、敵陣を攻落さん事疑なし。但事の樣を案ずるに、關東天下を治めて權を執る事已に七代に餘れり。天道缺レ盈理遁るゝ處なし。其上臣として君を流し奉る積惡、豈果して其身を滅さゞらんや。某不肖の身なりといへども、武恩を蒙りて齡已に七旬に餘れり。今日より後差したる思出もなき身の、そゞろに長生して、武運の傾かんを見んも、老後の恨、臨終の障ともなりぬべければ、

明日の合戰に先懸して、一番に討死して、其名を末代に遺さんと存ずるなりと語りければ、本間九郎心中には實にもと思ひながら、枝葉の事を宣ふものかな。是程なる打込の軍に、そゞろなる先懸して討死したりとも、さして高名ともいはれまじ。されば只某は人なみに振舞ふべきなりといひければ、人見世にも無興氣にて、本堂の方へ行きけるを、本間怪み思ひて、人をつけて見せければ、矢立を取り出して、石の鳥居に何事とは知らず一筆書きつけて、己が宿へぞ歸りける。本間九郎さればこそ、此者は一定明日先懸せられぬと、心ゆるしなかりければ、まだ宵より打ち立ちて、唯一騎東條を指して向ひけり。

石川河原にて夜を明すに、朝霧の晴間より、南の方を見ければ、紺の唐綾威の鎧に白母衣懸けて、鹿毛なる馬に乘りたる武者一騎、赤坂の城へぞ向ひける。何者やらんと馬打ち寄せて是を見れば、人見四郎入道なりけり。人見本間を見つけていひけるは、昨夜宣ひし事を思ひなば、孫程の人に出拔れまじと打ち笑ひてぞ、頻に馬を早めける。

本間跡につきて、今は互に先を爭ひ申すに及ばず。一所に尸をさらし、冥途までも同道申さんずるぞよといひければ、人見申にや及ばんと返事して、跡になり先になり、物語して打ちけるが、赤坂の城近くなりければ、二人の者共馬の鼻を雙べてかけあがり、堀の際まで打ち寄せて、鐙踏張り弓杖突きて、大音聲を揚げて名のりけるは、武藏國の住人に、人見四郎入道恩阿、年積りて七十三、相摸國の住人本間九郎資貞、生年三十七、鎌倉を出でしより軍の先陣をかけて、尸を戰場に曝さんことを存じて相向へり。我と思はん人々は、出合ひて手なみの程を御覽ぜよと、聲々に呼はりて、城を睨みてひかへたり。城中の者共是を見て、是ぞとよ坂東武者の風情とは、只是熊谷平山が一谷の先懸を傳へ聞きて、羨しく思へる者どもなり。跡を見るに續く武者もなし。又さまで大名とも見えず。溢者の不敵武者に跳り合ひて、命失ひて何かせん。只置きて事の樣を見よとて、東西鳴を靜めて返事もせず、人見腹を立てゝ、早旦より向ひて名のれども、城より矢の一をも射出さぬは、臆病のいたりか、敵を侮るか、いで

其義ならば手柄の程を見せんとて、馬より飛び下りて、堀の上なる細橋さら〳〵と走りわたり、二人の者共出屛の脇に引き傍ひて、木戸を切り落さんとしける間、城中是に騷ぎて、土小間櫓の上より、雨の降るが如くに射ける矢、二人の者共が鎧に、簑毛の如くにぞ立ちたりける。本間も人見も、元より討死せんと思ひ立ちたる事なれば、何かは一足も引くべき、命を限に二人共に一所にて討たれけり。

是まで附き從ひて、最後の十念勸めつる聖、二人が首を乞ひ得て、天王寺に持ちて歸り、本間が子息源内兵衛資忠に、始よりの有樣をかたる。資忠父が首を一目見て、一言をも出さず只涙に咽びて居たりけるが、如何思ひけん、鎧を肩に投げ懸け、馬に鞍置きて只一人打ち出でんとす。聖怪み思ひて、鎧の袖を引き留め、是はそも如何なる事にて候ふぞ。御親父も此合戰に先懸して只名を天下の人に知られんとばかり思召さば、父子共に打ち連れてこそ向はせ給ふべけれども、命をば相模殿に獻り、恩賞をば子孫の榮花に貽さんと思召しける故にこそ、人より先に討死をばし給ふらめ。然るに

思ひ籠め給へる所もなく、又敵陣にかけ入りて、父子共に打死し給ひなば、誰か其跡を繼ぎ、誰か其恩賞を蒙るべき。子孫無窮に榮ゆるを以て、父祖の孝行を呈す道とは申すなり。御悲歎のあまりに、無二是非一死を共にせんと思召すは理なれども、暫く止らせ給へと堅く制しければ、資忠涙を抑へて、無レ力着たる鎧を脱ぎ置きたり。聖さては制止に拘りはぬと嬉しく思ひて、本間が首を小袖に裹み、葬禮のために、側なる野邊へ越えける其間に、資忠今は止むべき人なければ、則ち打ち出でゝ、先づ上宮太子の御前に參り、今生の榮耀は、今日をかぎりの命なれば、祈る所にあらず。唯大悲の弘誓の誠あらば、父にて候ふ者の討死仕り候ひし戰場の同じ苔の下に埋れて、九品安養の同臺に生るゝ身となさせ給へと、泣々祈念を凝して、泪と共に立ち出でけり。石の鳥居を過ぐると見れば、我父と共に討死しける、人見四郎入道が書きつけたる歌あり。是ぞ誠に後世までの物語に、留むべきことよと思ひければ、右の小指を食ひ切りて、其血を以て一首を側に書き添へて、赤坂の城へぞ向ひける。城近くなりぬる所

にて、馬より下り弓を脇に挾みて、城戸を叩き、城中の人々に申すべき事ありと呼はりけり。良暫くありて、兵二人櫓の小間より顏を指し出して、誰人にて御渡り候ふかと問ひければ、是は今朝此城に向ひて、打死して候ひつる、本間九郎資貞が嫡子、源內兵衛資忠と申す者にて候ふなり。人の親の子を憶ふあはれみ、心の闇に迷ふ習にて候間、共に討死せんことを悲みて、我に知られずして、只一人討死しけるにて候。相伴ふ者なくて、中有の途に迷ふらん。さこそと思ひやられ候へば、同じく討死仕りて、なき跡まで父に孝道を盡し候はばやと存じて、只一騎相向ひて候ふなり。城の大將に此由を申され候ひて、木戸を開かれ候へ。父が打死の所にて、同じく命を止めて、其望を達し候はんと、慇懃に事を請ひ、泪に咽びてぞ立ちたりける。一の木戸を堅めたる兵五十餘人、其志孝行にして、相向ふ處やさしく哀なるを感じて、則ち木戸を開き、逆木を引きのけしかば、資忠馬に打ち乘り、城中へかけ入りて、五十餘人の敵と火を散してぞ切り合ひける。遂に父が討たれし跡にて、太刀を口に啣へてうつぶしに倒れ

て、貫かれてこそ失せにけれ。惜哉、父の資貞は、無雙の弓矢取にて、國のために要須たり。又子息資忠は、ためしなき忠孝の勇士にて家のために榮名あり。人見は年老齡傾きぬれども、義を知りて命を思ふこと時と共に消息す。此三人同時に討死しぬと聞えければ、知るも知らぬもおしなべて、歎かぬ人はなかりけり。

既に先懸の兵ども、ぬけぬけに赤坂の城へ向ひ、討死するよし披露ありければ、大將即ち天王寺を打ち立ちて馳せ向ひけるが、上宮太子の御前にて馬より下り、石の鳥居を見給へば、左の柱に、

花さかぬ老木のさくら朽ちぬともその名は苔の下にかくれじ

と一首の歌を書きて、其次に、武藏國の住人、人見四郎恩阿、生年七十三、正慶二年二月二日、赤坂の城へ向ひて、武恩を報ぜんために、討死仕り畢りぬとぞ書きたりける。又右の柱を見れば、

まてしばし子を思ふ闇にまよふらん六のちまたの道しるべせん

と書きて、相摸國の住人、本間九郎資貞嫡子、源内兵衛資忠生年十八歳、正慶二年仲春二日、父が死骸を枕にして、同戰場に命を止め畢りぬとぞ書きたりける。父子の恩義君臣の忠貞、此二首の歌に顯れて、骨は化して黄壤一堆の下に朽ちぬれど、名は留りて青雲九天の上に高し。されば今に至るまで、石碑の上に消え殘れる三十一字を見る人、感涙を流さぬはなかりけり。去程に阿曾彈正少弼、八萬餘騎の勢を卒して赤坂へ押し寄せ、城の四方廿餘町、雲霞の如くに取り卷きて、先づ鬨の聲をぞ揚げたりける。其音山を動かし地を震ふに、蒼涯も忽に裂けつべし。此城三方は岸高くして、屛風を立てたるが如し。南の方ばかりこそ平地に繼ぎて、堀を廣く堀り切りて、岸の額に塀を塗り、其上に櫓を搔き雙べたれば、如何なる太刀早業なりとも、輙く責むべきやうぞなき。されども寄手大勢なれば、思ひ侮りて楯にはづれ、矢面に進みて、堀の中へ走り下りて、切岸を襄らんとしける處を、堀の中より究竟の射手ども、鏃を支へて思ふやうに射ける間、軍の度毎に、手負死人五百人六百人、不レ被ニ射出一時はなかりけり。

是をも痛まず荒手を入れかへ〱、十三日までぞ攻めたりける。されども城中少しも弱らず見えけり。

爰に播磨國住人、吉岡八郎といふ者、大將の前に來りて申しけるは、此城の爲體、力攻にし候はゞ無二左右一不レ可レ落候。楠此一兩年が間、和泉河內を管領して、若干の兵粮を取り入れて候ふなれば、兵粮も無二左右一盡き候ふまじ。倩思案を廻し候ふに、此城三方は谷深くして地に續かず、一方は平地にてしかも山遠く隔れり。さればいづくに水あるべしとも見えぬに、火矢を射れば、水彈にて打ち消し候。近來は雨の降ることも候はぬに、是程まで水の卓散に候ふは、如何樣南の山の奧より、地の底に樋を伏せ城中へ水をかけ入るゝかと覺え候。あはれ人夫を集めて、山の腰を堀りきらせて御覽候へかしと申しければ、大將げにもとて、人夫を集め、城へ續きたる山の尾を、一文字に堀り切りて見れば、案の如く、土の底に二丈餘の下に樋を伏せて、側に石を疊み、上に眞木の瓦を覆せて、水を十町餘の外よりぞかけたりける。此揚水を止められ

て後、城中に水乏しくして、軍勢口中の渇忍びがたければ、四五日が程は、草葉に置ける朝の露を嘗め、夜氣に潤へる地に身を當てゝ、雨を待ちけれども雨降らず、寄手是に利を得、隙なく火矢を射ける間、大手の櫓二つをば燒き落しぬ。

城中の兵水を飲まで、十二日になりければ、今は精力盡きはてゝ、可レ防方便もなかりけり。死にたる者は再び歸ることなし。いざやとても死なんずる命を、各力の未墜ちぬ先に打ち出でゝ、敵と指し違へ、思ふやう討死せんと、城の木戸を開きて、同時に打ち出でんとしけるを、城の本人平野將監入道、高櫓より走り下り、袖をひかへていひけるは、暫く楚忽のことなし給ひそ。今は是程に力盡き、喉乾きて疲れぬれば思ふ敵に相逢はん事ありがたし。名もなき人の中間、下部どもに生虜られて、耻を曝さん事心憂かるべし。倩事の樣を案ずるに、吉野金剛山の城、未相支へて勝負を決せず。西國の亂未靜まらざるに、今降人になりて出でたらん者をば、人に見こらせじとて、討つ事あるべからずと存ずるなり。とても叶はぬ我等なれば、暫く事を謀りて降人にな

り、命を全うして時至らんとを待つべしといへば、諸卒皆此義に同じて、其日の討死をば止めてけり。去程に次日軍の最中に、平野入道高櫓に上りて、大將の御方へ可レ申仔細候。暫く合戰を止めて、聞召し候へといひければ、大將澁谷十郎を以て、事の樣を尋ぬるに、平野木戸口に出合ひて、楠和泉河内の兩國を平げて威を振ひ候ひし刻に、一旦の難を遁れんために、心ならず御敵に屬して候ひき。此仔細京都に參じ候ひて、申し入れ候はんと仕候處に、已に大勢を以て被二押懸一申候間、弓矢取身のならひにて候へば、一矢仕りたるにて候。其罪科をだに可レ有二御免一にて候はゞ、頸を伸べて降人に參るべく候。若し叶ふまじきとの御定にて候はゞ、無レ力一矢仕りて、尸を陣中に曝すべきにて候。此樣を具に申され候へといひければ、大將大に喜びて、本領安堵の御教書を成し、殊に功あらん者には、則ち恩賞を可レ申二沙汰一由返答して、合戰をぞ止めける。城中に籠る所の兵二百八十二人、明日死なんずる命をも知らず、水に渇せる堪へたがたさに、皆降人になりてぞ出でたりける。

長崎九郎左衛門尉是を請取りて、先降人の法なればとて、物具太刀刀を奪ひ取り、高手小手に禁めて、六波羅へぞ渡しける。降人の輩如此ならば只討死すべかりける者をと後悔すれどもかひなし。日を經て京都に着きしかば、六波羅に誡め置きて、合戰の事始なれば、軍神に祭りて、人に見こりさせよとて、六條河原に引き出し、一人も不殘首を刎ねて懸けられけり。是を聞きてぞ、吉野金剛山に籠りたる兵どもゝ、彌獅子の齒嚙をして、降人に出でんと思ふ者はなかりけり。罪を緩くするは、將の謀なりといふことを知らざりける六波羅の成敗を、皆人ごとにおしなべて、惡しかりけりと申しゝが、幾程もなうして、悉く亡びけるこそ不思議なれ。情は人のためならず、餘に驕を極めつゝ、我意に任せて振舞へば、武運も早く盡きにけり。因果の道理を知るならば、心あるべきことゞもなり。（卷六）

【赤坂城】河内國金剛山の西方支脈に築いた城。正成が火をかけて一旦逃げた後、敵方の湯淺入道が籠つてゐたが、正成の計略で乘取つてしまひ、そこに平野將監を置いて守らせ、自らは千早城に居つた。【矢合】戰の

始めに矢を射合ふこと。戰の開始。【拔懸】ひそかに味方の陣を拔け出して、先がけすること【天道缺盈】易の謙卦に「天道虧レ盈而益レ謙、地道變レ盈而流レ謙。」【七旬】七十。【そゞろに長生】何といふ功名もなく長生する。【枝葉のこと】つまらぬこと。【そゞろなる先懸】何の故もない先がけ、【一定】必ず。【東條】河内國南河内郡にある。【紺の唐綾威】綾には唐と和と二種ある。これは紺色の唐の綾で威した鎧。【白母衣】母衣は矢を防ぐために背に負うた布で大さや色は色々あつた。【鹿毛】茶色で鹿の毛の色に似たもの。【昨夜宣ひしことを云々】出拔れましは、まじの誤か。【弓杖つきて】弓を杖について。【溢者の不敵武者】溢者は無法者、ならず者。不敵武者は大膽の向ふ見ず武者。【出屛】矢石の發射や物見のために外に突き出して造つた屛。【土小間】土壁の間の小さい窓。【最後の十念】單に死ぬ際に、南無阿彌陀佛の名號を十回唱ふることをも云ふが、これは淨土宗で、信者に六字の唱名十回を授けて、結縁させること。【聖】僧のこと。【制止に拘はりぬ】制止の言に拘束される、制止の言をきく。【大悲の弘誓】佛の大きな慈悲を以て、衆生を敎はうといふ弘大の御誓。【九品安養の同臺】安養淨土の略で極樂淨土と同じい。九品は極樂淨土の等級で、極樂にも上生・中生・下生の三の區別があり、其各々が又上中下に分れ、都合九品に分れてゐるから、極樂のことを、九品安養とか、九品淨土とかいふ。臺は蓮のうてな。【心の闇に云々】「人の親の心はやみにあらねども、子を思ふ道にまよひぬるかな。」による。【中有の途】冥土の途といふ程の意。中有は四有の一で、死んで後、未だ生れない前、即ちまだ心識の母胎に託さない間をいふ。【時と共に消息す】易の豐卦彖傳に「天地盈虛、與レ時消息。」とある。時に應じて生き、時に應じて死んだといふ意。【上宮太子】聖

德太子のこと。用明帝が太子の聰明を愛して宮中の上殿に居らせたことからいふ。【花さかぬ云々】今まで何等の功名もなかつた此の老人も、討死の後には、其名が傳はるであらうとの意。【まてしばし云々】六のちまたは、六道のこと。卽ち冥土で、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六界に行き分れる道。歌の意は、父上よ。定めし子を思ふ心に冥土の道を迷ふであらう。私が案内をするから暫くお待ち下さい。【仲春】春三月の中の月。陰曆二月のこと。春湊浪話に、天王寺と赤坂城とは十里距つてゐるから、二日に出立して死んだ父を、僧が還つて報じ、又子が往つて死ぬのが皆同日では理に合はぬとある。尤もの疑である。【黄壤一堆】黄壤は黄色の土。黄土の一すうづたかい下。【靑雲九天】靑雲は雲の上、九天は高い天。九天を、淮南子の九天に解するは當らない。【蒼涯】大空のはて。【岸の額】岸のがけの直ぐ上。【太刀早業】太刀打の練達者。【力攻】智謀によらず、武力のみで攻めること。【無左右】容易に。【谷深くして云々】谷が深くて平地につゞかぬこと。【火矢】矢に火をしかけて放つもの。敵中の物を燒く爲に。【水彈】水をはぢき出すもの。ポンプの類。【卓散】澤山の宛字。【山の尾】山の裾の長くのびた所。【眞木の瓦】眞木は檜のこと。瓦は樋に被せておく蓋。【揚水】高い所に通ふやうにした水。【大手】正面のこと。搦手卽ち背面の對。【城の本人】城の主。【楚忽のこと云々】輕卒のことをするな。【仲間下部】雜用に使はれる賤卒。【見こらせじ】見て懲り畏れさすまいと。【刻】時又折の意。【具に】詳細に。【本領安堵の御敎書】舊領の地を取上ることとなしといふ令書。【高手小手】高手は肘から上、小手は下。高手高手とは、後方に、高手と小手と一つになる程高くきびしく縛ること。【首を懸く】獄門にさらすこと。【成敗】さばき。處置。

吉野城軍の事

元弘三年正月十六日、二階堂出羽入道道蘊、六萬餘騎の勢にて大塔宮の籠らせ給へる吉野城へ押し寄する。菜摘河の川淀より、城の方を見上げたれば、嶺には白旗赤旗錦の旗、深山下風に吹きなびかされて、雲か花かとあやしまる。麓には數千の官軍、兜の星をかゞやかし、鎧の袖を連ねて、錦繍しける地の如し。峯高くして道ほそく、山嶮しうして苔滑なり。されば幾十萬騎の勢にて攻むるとも、輙く落すべしとは見えざりけり。同十八日の卯の尅より、兩陣互に矢合して、入替へ〳〵攻め戰ふ。官軍は物馴れたる案内者共なれば、此處のつまり彼處の難所に走り散りて、攻め合せ開き合せ散々に射る。寄手は死生不知の坂東武士なれば、親子討るれども不レ顧、主從滅ぶれども不レ屑、乘越え〳〵攻め近づく。夜晝七日が間、息をもつかず相戰ふに、城中の勢三

百餘人討れければ、寄手も八百餘人討れにけり。況や矢に當り石に打たれ、生死の際を知らざる者は幾千萬といふ數を知らず。血は草芥を染め、尸は路徑に横れり。されども城の體少しもよわらねば、寄手の兵多くは退屈してぞ見えたりける。

爰に此山の案内者とて、一方へ向られたりける吉野の執行岩菊丸、己が手の者を呼び寄せて申しけるは、東條の大將金澤右馬助殿は、既に赤坂の城を攻め落して、金剛山へ向はれたりと聞ゆ。當山の事我等案内者たるに依りて、一方を承りて向ひたるかひもなく、攻め落さで數日を送ることこそ遺恨なれ。倩事の樣を案ずるに、此城を大手より攻めば、人のみ討たれて落す事ありがたし。推量するに、城の後の山金峯山には、峻を憑みて、敵さまで勢を置きたることあらじと覺ゆるぞ。物馴れたらんずる足輕の兵百五十人すぐりて、歩立になし、夜に紛れて金峯山より忍び入り、愛染寶塔の上にて、夜のほの〴〵と明けはてん時、鬨の聲をあげよ。城の兵鬨の聲に驚きて、度を失はん時、大手搦手三方より攻め上りて城を追ひ落し、宮を生捕り奉るべしとぞ下知

しける。さらばとて、案内知りたる兵百五十人をすぐりて、其日の暮程より、金峯山へ廻して、岩を傳ひ谷をのぼるに、案の如く山の峻しきを憑みけるにや、唯こゝかしこの梢に、旗ばかりを結ひつけ置きて、防ぐべき兵一人もなし。百餘人の兵ども、思ひのまゝに忍び入りて、木の下岩の陰に弓箭を伏せ、冑を枕にして、夜の明くるをぞ待ちたりける。合圖の比にもなりければ、大手五萬餘騎、三方より押し寄せて攻め上る。吉野の大衆五百餘人、攻口におり合ひて防ぎ戰ふ。寄手も城の内も、互に命ををしまず、追上せ追下し、火を散してぞ戰ひたる。斯る處に金峯山より廻りたる、搦手の兵百五十人、愛染寶塔よりおり下りて、在々所々に火をかけて、鬨の聲をぞ揚げたりける。吉野の大衆前後の敵を防ぎかねて、或は自ら腹を搔き切りて、猛火の中へ走り入りて死ぬるもあり。或は向ふ敵に引組みて、刺しちがへて共に死ぬるもあり。思ひ〳〵に討死をしける程に、大手の堀一重は死人に埋りて平地になる。去程に搦手の兵、思ひも寄らぬ勝手の明神の前より押し寄せて、宮の御座ありける、

藏王堂へ打つて懸りける間、大塔宮今は遁れぬ處なりと思召し切りて、赤地の錦の鎧直垂に、緋威の鎧のまだ巳の尅なるを、透間もなくめされ、龍頭の冑の緒をしめ、三尺五寸の小長刀を脇に挾み、劣らぬ兵廿餘人前後左右に立ち、敵の群りて控へたる中へ走りかゝり、東西を拂ひ南北へ追ひ廻し、黑煙を立て切つて廻らせ給ふに、寄手大勢なりといへども、纔の小勢に切り立てられ、木の葉の風に散るが如く、四方の谷へ颯とひく。敵引けば、宮は藏王堂の大庭に並居させ給ひて、大幕打ち揚げて最後の御酒宴あり。宮の御鎧に立所の矢七筋、御頰さき二の御腕二箇所つかれさせ給ひて、血の流るゝ事瀧の如し。然れども立ちたる矢をも拔かず、流るゝ血をも拭ひ給はず、敷皮の上に立ちながら、大盃を三度傾けさせ給へば、木寺相摸四尺三寸の太刀の鋒に、敵の首をさし貫きて、宮の御前にかしこまり、戈鋋劍戟を降らす事電光の如くなり、磐石岩を飛す事春の雨に相おなじ。然りとはいへども、天帝の身には近づかで、修羅かれがために破らると、はやしを揚げて舞ひたる有樣は、漢楚の鴻門に會せし時、楚の

項伯と項莊とが、劍を拔きて舞ひしに、樊噲庭に立ちながら、帷幕をかゝげて項王を睨みし勢も、かくやと覺ゆるばかりなり。

大手の合戰急なりと覺えて、敵御方の鬨の聲相交りて聞えけるが、實にも其戰に自ら相當る事、多かりけりと見えて、村上彥四郞義光、鎧に立處の矢十六筋、枯野に殘る冬草の、風に伏したる如くに折り懸けて、宮の御前に參りて申しけるは、大手の一の木戶、いふがひなく攻破られつる間、二の木戶に支へて、數刻相戰ひ候ひつる處に、御所中の御酒宴の聲、すさまじく聞え候ひつるにつきて參りて候。敵旣にかさに取り上げて、御方の氣の疲れ候ひぬれば、此城にて功を立てん事、今は叶はじと覺ゑ候。未敵の勢を餘所へ廻し候はぬ前に、一方より打ち破りて、一先づ落ちて御覽あるべしと存候。但し跡に殘り留りて、戰ふ兵なくば御所の落させ給ふものなりと心得て、敵いづくまでもつゞきて、追懸け進らせんと覺え候へば、恐ある事にて候へども、召されて候錦の御鎧直垂と、御物具とを下し賜りて、御諱の字を冐して敵を欺き、御命に代り

進らせ候はんと申しければ、宮いかでかさる事あるべき、死なば一所にてこそ、兎も角もならめと仰せられけるを、義光詞を荒らかにして、かゝるあさましき御事や候。漢の高祖滎陽に圍まれし時、紀信高祖の眞似をして、楚を欺かんと乞ひしをば、高祖是を許し給ひ候はずや。是程にいふがひなき御所存にて、天下の大事を思召し立ちけることこそうたてけれ。はや其御物具を脱せ給ひ候へと申して、御鎧の上帶を解き奉れば、宮げにもとや思召しけん御物具鎧直垂まで脱ぎ替へさせ給ひて、我若し生きたらば、汝が後生を弔ふべし。共に敵の手にかゝらば冥途までも同じ岐に伴ふべしと仰せられて、御涙を流させ給ひながら、勝手の明神の御前を、南へ向ひて落させ給へば、義光は二の木戸の高櫓にのぼり、遙に見送り奉り、宮の御後影の幽に隔らせ給ひぬるを見て、今はかうと思ひければ、櫓のさまの板を切り落し、身をあらはにして、大音聲を揚げて名のりけるは、天照大神御子孫、神武天皇より九十五代の帝、後醍醐天皇第二皇子、一品兵部卿親王尊仁、逆臣のために亡され、恨を泉下に報ぜんために、只今自

害する有様見置きて、汝等が武運忽に盡きて、腹を切らんとする時の手本にせよといふまゝに、鎧を脱ぎて櫓より下へ投げおとし、錦の鎧直垂の袴ばかりに、練貫の二小袖を押膚脱ぎて、白く淸げなる膚に刀をつき立て、左の脇より右のそば腹まで一文字に掻き切りて、腸爬みて櫓の板になげつけ、太刀を口にくはへてうつぶしになりてぞ伏したりける。大手搦手の寄手是を見て、すはや大塔宮の御自害あるは、我先に御首を賜はらんとて、四方の圍を解きて一所に集る。其間に宮は引き違へて、天の河へぞ落させ給ひける。

南より廻りける吉野の執行が勢五百餘騎、多年の案内者なれば道を要りかさに廻りて、打ち留め奉らんと取り籠むる。村上彥四郎義光が子息兵衞藏人義隆は、父が自害しつる時、共に腹を切らんと、二の木戶の櫓の下まで馳せ來りたりけるを、父大に諫めて、父子の義はさる事なれども、且く生きて宮の御先途を見はて進らせよと、庭訓を殘しければ、力なくしばらくの命を延べて、宮の御供にぞ候ひける。落ち行く道の

軍、事既に急にして討死せずは、宮落得させ給はじと覺えければ、義隆只一人踏み留りて、追ひてかゝる敵の馬の諸膝薙ぎては切りすゑ、平頸切りては刎ね落させ、九折なる細道に、五百餘騎の敵を相受けて、半時ばかりぞ支へたる。義隆節石の如くなりといへども、其身金鐵ならざれば、敵の取卷きて射ける矢に、義隆既に十餘箇所の疵を被りてけり。死ぬるまでも猶敵の手にかゝらじとや思ひけん、小竹の一群ありける中へ走り入りて、腹掻き切りて死にけり。村上父子が敵を防ぎ、討死しける其間に、宮は虎口に死を御遁れありて、高野山へぞ落させ給ひける。

出羽入道道蘊は村上が宮の御眞似をして、腹を切りたりつるを、眞實と心えて、其首を取りて京都へ上せ、六波羅の實檢にさらすに、ありもあらぬ者の首なりと申しける間、獄門にかくるまでもなくて、九原の苔に埋もれにけり。道蘊は吉野の城を攻め落したるは、專一の忠戰なれども、大塔宮を打ち漏し奉りぬれば、猶安からず思ひて、軈て高野山へ押寄せ、大塔に陣を取りて、宮の御在所を尋ね求めけれども、一山の衆

徒皆心を合せて宮を隠し奉りければ、數日の粉骨かひもなくて、千劒破城へぞ向ひける。（卷七）

【菜摘川】大和國吉野郡にある。吉野川の上流。【川淀】河水のよどんだ所。【兜の星】兜の鉢の表面に凸出した多くの小點。【つまり】道のつきた所。行き詰つた所。【攻め合せ云々】散々となり又は集ること。【不屑】「ものゝかずともせず」とよむ。【生死の際を云々】生きるか死ぬか分らぬ重傷者。【草芥】草とごみ。【執行岩菊丸】執行は寺の長官で、寺によつては別當ともいつた。參考太平記に「吉野の執行は昔から、吉水院、新熊野兩家を任じたのであつたが、大塔宮は、吉水院を寵して執行とした爲に、新熊野で怒つて反を謀つた。岩菊丸なるものは新熊野である」と、吉野僧徒の口碑として記してゐる。【足輕の兵】雜役に用ひられた輕捷の步卒のことを昔は足輕といつたが、茲では敏捷輕裝の兵といふ程の意。【愛染寶塔】愛染明王を祀つてある塔のこと。【度を失ふ】狼狽して常を失ふ。【大手五萬餘騎】毛利家本などには五百餘騎とある。【大衆】大勢の僧徒。【金峯山】吉野山の中の最高峯。【勝手の明神】吉野八神の一つ。祭神は知れない。【赤地錦の鎧直垂】赤地の錦でつくつた鎧直垂。鎧直垂は鎧の下に着る、少し狹く短く袖と裾に括緒のある直垂のこと。昔は大將軍は殆どすべて赤地錦の鎧直垂をきた。【巳の刻】巳の刻は午前十時。時の中程である午の刻より前である所から、未だ新しい事を云ふ。【龍頭の冑】冑の正面に龍頭を立てたもので、大將の着用したもの。【小長刀】和名抄によると、刄の部分の三尺餘りなのを小長刀といひ、五尺六寸に餘れるを

大長刀といふとある。長刀の短いもの。【大幕打揚げて】大幕を引いて。味方のは引くを忌んで揚げるといふ。【二の御腕】上膊、卽ち肘と肩との間。【戈鋋劍戟云々】戈鋋劍戟は何れも刀劍の類。天帝は帝釋天。これは帝釋天と阿修羅王との爭鬪を言つだものであるが、出所は分らない。【はやしを揚げて】囃す聲を高くあげて。【漢楚の鴻門に云々】漢の高祖と楚の項羽とが鴻門に會したことで、史記、通鑑綱目等に委しく、有名なことであるから説明を省く。【急なりと覺えて】危きに迫つたと見えて。【いふがひなく】ふがひなく。いくぢなく。【かさに取上げて】壓倒的に優勢になつて。【御所】禁中をもさし、其他將軍家大臣家以上の公卿をも指す等用ひ方が廣いが、玆では親王を指す。【御物具】鎧のと。【御諱の字を冒して】諱は實名。冐すは爲し難いことをなす意。おしきつて君の御名を用ひること。【上帶】鎧の上に結ぶ帶。【今はかう】今は斯くの音便。今はかうなつた。もうこれまでだ。【さまの板】狹間は敵を望み又は矢を放つ爲にあけた窓。其さまを切りあけた板を、切落したのである。【尊仁】護良とあるべきである。【練貫の二小袖】練貫はあて字で練緯の意。生糸をたてとし練絲をぬきとして織つた絹、それでつくつた小袖を二重に着たもの。【そば腹】わき腹。【引き違へて】反對に。【天の川】吉野の金峯山より出で、下流は十津川となる。【かさに廻りて】敵を壓倒しさうな勢で。【庭訓】論語の季氏篇に孔子が庭で其子の鯉に訓へたことから、家庭の訓へ、又は父から子への訓への意となる。【平頸】馬の頸のこと。側面から見ると平たいからいふ。【九折】屈折の甚しいと。つゞらは葛で、葛の蔓の折れまがつたといふ意味から來た語。【節石の如く】節義の固きこと金石の如く。參考本には「義節金石の如く」とある。【虎口】危險の場合。桓溫の譙元彥を薦

める表に曰く「身寄二虎吻一、危同二朝露一。」吻は口である。【實檢にさらす】實檢は實否を檢することで、實檢にさらすとは、實檢に呈出したこと。【九原】墓地のこと。支那の晉の墓のあつた地名から來た語。【粉骨】苦心すること。

千劍破の城軍の事

千劍破の城の寄手は、前の勢八十萬騎に、また赤坂の勢、吉野の勢、馳せ加つて、百萬騎に餘りければ、城の四方二三里が間は、見物、相撲の場の如くうち圍んで、尺寸の地をも餘さず充ち滿ちたり。旌旗の風に翻つて靡く景色は、秋の野の尾花が末よりも繁く、劍戟の日に映じて輝けるありさまは、曉の霜の枯草に布けるが如くなり。大軍の近づく所には、山勢これが爲に動き、鬨の聲の震ふ中には、坤軸須臾に摧けたり。この勢にも恐れずして、僅に千人に足らぬ小勢にて、誰をたのみ、何をか待つともなきに、城中にこらへて防ぎ戰ひける、楠が心の程こそ不敵なれ。

この城、東西は谷深く切れて、人の上るべきやうもなし。南北は金剛山につゞきて、しかも峰峙ちたり。されども高さ二町ばかりにて、廻り一里に足らぬ小城なれば、何程の事かあるべきと、寄手これを見侮つて、はじめ一兩日の程は、向ひ陣をも取らず、攻め支度をも用意せず、われさきにと城の木戸口の邊まで、かづきつれてぞ上りたりける。城中の者少しもさわがず、静まりかへつて、高櫓の上より、大石を投げかけ投げかけ、楯の板を微塵に打ち碎いて、漂ふ所を、さしつめさしつめ射ける間、四方の坂よりころび落ち、落ち重つて手を負ひ、死を致す者、一日が中に五六千人に及べり、長崎四郎左衞門の尉、軍奉行にてありければ、手負、死人の實檢をしけるに、執筆十二人、夜晝三日が間、筆をも置かず記せり。さてこそ今より後は、大將の御許なくして、合戰したらむずるともがらをば、却つて罪科に行はるべしと觸れられければ、軍勢暫く軍をやめて、まづおのれが陣々をぞ構へける。

こゝに赤坂の大將金澤右馬の助、大佛奥州に向つて宣ひけるは、先日赤坂を攻め落し

つること、全く士卒の高名にあらず。城中の構を推し出して、水を留めて候ひしに依つて、敵程なく降參仕り候ひき。これを以てこの城を見候ふに、これ程僅なる山の巔に用水あるべしとも覺え候はず。又あげ水なんどを、よその山より懸くべき便も候はぬに、城中に水澤山にありげに見ゆるは、いかさま東の山の麓に流れたる溪水を、夜々に汲むかと覺えて候。あはれむねとの人々一兩人に仰せつけられて、この水を汲ませぬやうに御計ひ候へかしと申されければ、兩大將、この儀然るべしと覺え候とて、名越越前の守を大將として、その勢三千餘騎をさし分けて、水の邊に陣を取らせ、城より人下り下りぬべき道々に、逆茂木を引きてぞ待ちかけける。楠は元來、勇氣智謀相兼ねたる者なりければ、この城をこしらへけるはじめ、用水の便を見るに、五所の祕水とて、峯通る山伏の祕して汲む水、この峯にあつて、滴る事、一夜に五斛ばかりなり。この水、いかなる旱にもひる事なければ、形の如く人の口中を潤さむ事、相違あるまじけれども、合戰の最中は、或は火矢を消さむため、また喉の乾く事繁ければ、

この水ばかりにては不足なるべしとて、大きなる木を以て、水舟を二三百打たせて、水を湛へ置きたり。また數百個所作り雙べたる役所の軒に繼樋を懸けて、雨降ればあまだれを少しも餘さず、船にうけ入れ、舟の底に赤土を沈めて、水の性を損ぜぬやうにぞこしらへける。この水を以て、たとひ五六十日雨降らずとも支ふべし。その中に又などかは、雨降ることなからむと了簡しける、智慮の程こそ淺からね。されば城よりは、あながちにこの谷水を汲まむともせざりけるを、水ふせぎける兵とも、夜毎に機をつめて、今や今やと待ちかけゝるが、始の程こそあれ、後には次第に心怠り機緩まつて、この水をば汲まざりけるぞとて、用心の體、少し無沙汰になりにける。楠これを見すまして、究竟の射手をそろへて二三百人、夜にまぎれて城よりおろし、まだしのゝめの明けはてぬ、霞隱れより押し寄せ、水邊につめて居たる者ども、二十餘人斬り伏せて、すきまもなく切つてかゝりける間、名越越前の守こらへかねて、本の陣へぞ引かれける。寄手數萬の軍勢これを見て、渡り合せむとひしめけども、谷を

隔て、尾を隔てたる道なれば、たやすく馳せ合する兵もなし。とかくしけるその間に、捨て置きたる旗、大幕なんど取り持せて、楠が勢、靜に城中へぞ引き入りける。その翌日、城の大手に三本傘の紋書いたる旗と、同じき紋の幕とを引きて、これこそみな、名越殿より賜つて候ひつる御旗にて候へば、御紋つきて候ふ間、他人の爲には無用に候。御中の人々、これへ御入り候ひて、召され候へかしといひて、同音にどつと笑ひければ、天下の武士どもこれを見て、あはれ名越殿の不覺やと、口々にいはぬ者こそなかりけれ。名越一家の人々、この事を聞きて、安からぬ事に思はれければ、當手の軍勢ども、一人も殘らず、城の木戸を枕にして、討死せよとぞ下知せられける。これに依つてかの手の兵五千餘人、思ひ切つて討てども、射れども用ゐず、乘り越え乘り越え、城の逆茂木一重引き破つて、切岸の下までぞ攻めたりける。されども岸高うして、切り立つたれば、やたけに思へども上り得ず。たゞ徒に城を睨み、怒を抑へて、息つき居たり。この時城の中より、切岸の上に横たへて置きたる大木、十ばかり切つ

て落しかけたりける間、將棊倒しをする如く、寄手四五百人、壓に討たれて死にけり。これにちがはむと、しどろになつて騷ぐ所を、十方の櫓よりさし落し、思ふやうに射ける間、五千餘人の兵ども、殘りずくなに討たれて、その日の軍ははてにけり。まことに志の程は猛けれども、たゞし出したる事もなくて、そこばく討たれにければ、あはれ恥の上の損かなと、諸人口遊はなほやまず。世の常ならぬ合戰の體を見て、寄も侮りにくゝや思ひけむ。今は始のやうに、勇み進んで攻めむとする者もなかりけり。長崎四郎左衛門の尉このありさまを見て、この城を力攻めにすることは、人の討たるゝばかりにて、その功成り難し。ただ取り卷いて、食攻にせよと下知して、軍をやめられければ、徒然にみな堪へかねて、花の下の連歌師どもを呼び下し、一萬句の連歌をぞ始めたりける。その初日の發句をば、長崎九郎左衛門の尉師宗、

さきがけてかつ色見せよ山櫻

としたりけるを、脇の句、工藤二郎右衛門の尉、

嵐や花のかたきなるらむ

とぞ附けたりける。まことに兩句ともに、ことばの緣巧しにて、句の體は優なれども、御方をば花になし、敵を嵐に喩へれば、禁忌なりける表爾かなと、後にぞ思ひ知られける。大將の下知に從ひて、軍勢みな軍をやめければ、慰む方やなかりけむ、或は雙六を打ちて日を過し、或は百服茶、褒貶の歌合なんどを翫びて夜を明す。これにこそ城中の兵は、なかなか惱まされたる心ちして、心をやる方もなかりける。

少し程經て後、正成、いざさらば、また寄手をたばかりで、居眠覺させむとて芥を以て人長に、人形を二三十作つて、甲冑を著せ、兵仗を持たせて、夜中に城の麓に立て置き、前に疊楯をつき雙べ、その後にすぐりたる兵五百人を交へて、夜のほのぼのと明けける霧の下より、同時に鬨をどつとつくる。四方の寄手、鬨の聲を聞いて、すはや城の中より打ち出でたるは。これこそ敵の運の盡くる所の死狂よとて、われさきにとぞ攻め合せける。城の兵、かねて巧みたる事なれば、矢軍ちとするやうにして、大

勢相近づけて、人形ばかりを木がくれに殘し置いて、兵はみな、次第次第に城の上へ引きのぼる。寄手、人形をまことの兵ぞと心得て、これを打たむと相集る。正成所存の如く、敵をたばかり寄せて、大石を四五十、一度にばつとはなす。一所に集りたる敵三百餘人、矢庭に打ち殺され、半死半生の者、五百餘人に及べり。軍はてゝこれを見れば、あはれ大剛の者かなと覺えて、一足も引かざりつる兵、みな人にはあらで、藁にて作れる人形なり。これを討たむと相集りて、石に打たれ矢に當つて死せるも高名ならず。またこれを危みて進み得ざりつるも、臆病のほど顯れていふかひなし。ただとにもかくにも、萬人のもの笑ひとぞなりにける。これより後は、いよいよ合戰をやめける間、諸國の軍勢、たゞ徒に城を守りあげて居たるばかりにて、するわざ一つもなかりけり。こゝにいかなる者が詠みたりけむ、一首の古歌を飜案して、大將の陣の前にぞ立てたりける。

よそにのみ見てややみなむ葛城やたかまの山の峯のくすの木

軍もなくて、そぞろに向ひ居たるつれづれに、諸大將の陣々に、江口、神崎の傾城どもを呼び寄せて、樣々の遊をさせられける。名越遠江の入道と同じき兵庫の助とは、伯父、甥にておはしけるが、ともに一方の大將にて、攻口近く陣を取り、役所を雙べてぞおはしける。ある時遊君の前にて雙六を打たれけるが、賽の目を論じて、聊かことばの違ひけるにや、伯父、甥、二人突き違へてぞ死なれける。兩人の郎從ども、何の意趣もなきに、刺し違へ刺し違へ、片時が間に死ぬる者、二百餘人に及べり。城の中よりこれを見て、十善の君に敵をなし奉る天罰に依つて、自滅する人々のありさま見よとぞ笑ひける。まことにこれたゞごとにあらず、天魔波旬の所行かと覺えて、あさましかりし珍事なり。

同じき三月四日、關東より飛脚到來して、軍をやめて徒に日を送る事、然るべからずと、下知せられければ、むねとの大將たち評定あつて、御方の向ひ陣と、敵の城との間に、高く切り立てたる堀に橋を渡して、城へ打ち入らむと巧まれける。これが爲に、

京都より番匠を五百餘人召し下し、五、六、八、九寸の材木を集めて廣さ一丈五尺、長さ二十丈餘に梯をぞ作らせける。梯既に作り出しければ、大綱を二三千筋つけて、車を以て卷き立てゝ、城の切岸の上へぞ倒し懸けたりける。魯般が雲の梯も、かくやと覺えて巧なり。やがてはやりをの兵ども五六千人、橋の上を渡り、われさきにと進みたり。あはやこの城、たゞ今打ち落されぬと見えたる所に、楯かねて用意やしたりけむ、投げ松明のさきに火をつけて、橋の上に、薪を積めるが如くに投げ集めて、水彈を以て、油を瀧の流るゝ樣にかけたる間、火、橋桁に燃えついて、谷風、炎を吹き布いたり。なまじひに渡りかゝりたる兵ども前へ進まむとすれば、猛火盛に燃えて身を焦す。歸らむとすれば、後陣の大勢前の難儀をもいはず支へたり。側へ飛び下りむとすれば、谷深く巖そびえて、肝を冷し、いかがせむと、身をもうでおしあふ程に、橋桁中より燃え折れて、谷底へどうと落ちければ、數千の兵、同時に猛火の中へ落ち重つて、一人も殘らず燒け死にけり。そのありさま、ひとへに八大地獄の罪人の、刀山劍

樹に貫かれ、猛火鐵湯に身を焦すらむも、かくやと思ひ知られたり。

さる程に吉野十津河、宇多内の郡の野伏ども、大塔の宮の命を含んで、相集ること七千餘人、こゝの峯、かしこの谷に立ち隠れて、千劒破の寄手どもの往來の路をさし塞ぐ。これに依つて諸國の兵の兵粮忽に盡きて、人馬ともに疲れければ、轉漕にこらへかねて、百騎、二百騎、引いて歸る所を、案内者の野伏ども、所々のつまりつまりに待ち受けて、討ち留めける間、日々夜々に討たるゝ者、數を知らず。希有にして命ばかりを助かる者は、馬、物具を棄て、衣裳を剝ぎ取られて、はだかなれば、或はやれたる簑を身に纏ひて、膚ばかりを隠し、或は草の葉を腰に卷いて、恥をあらはせる落人ども、毎日に引きも切らず、十方へ逃げ散る。前代未聞の恥辱なり。されば日本國の武士どもの、重代したる物具、太刀、刀はみなこの時に失せにけり。名越遠江の入道、同じき兵庫の助二人は、詮なき口論して、共に死に給ひぬ。その外の軍勢ども、親は討たるれば、子は髻を剪つてうせ、主疵を被れば、郎從助けて引きかへす間、

始は八十萬騎と聞えしかども、今は纔に十萬餘騎になりにけり（卷七）

【赤坂の勢】阿蘇治時を總大將とした八萬の勢。【吉野の勢】大塔宮を打ちもらした出羽道蘊の二萬七千の勢。【旌旗】何れの字もはた。【枯草に布ける】布けるは置けるの意。【大軍の云々】大軍が進み近づくと其の爲に山が搖れ動く。【坤軸云々】坤軸は地軸、即ち大地の中心にあつてそれを支持する軸。須臾はたちまち。鬨の聲の爲に地軸も忽ちに摧けると思はれたといふ意。【不敵】大膽で眼中に敵ないこと。【向ひ陣】敵に對して構へた陣。【攻め支度】城の敵を攻めるに必要な支度で、楯・面頰・熊手などを用意すること。【かづきつれ】楯をかづき連る意で、皆楯を被いで。【漂ふ】ふらふらと落ちつかぬこと。【軍奉行】軍中諸般のことを總理する臨時の職名。今ならば參謀長といふところ。【執筆】筆とつて記載する人。書記。【大佛奥州】二人の人であらうといふ。【あげ水】高い所に通ふやうに仕掛した水。【五所の秘水】五箇所の秘密の水。山伏の言つたもので、其一が此山にあつたものであらう。【形の如く】きまり通に。普通に。【火矢】敵城などを燒くため、火をしかけて放つ矢。【百打たせ】百造らせ。【繼樋】樋を繼ぎ合せて軒の水の皆一所に集まるやうにしたもの。【機をつめ】機は心のはたらき、つめはゆるみなくすること。心を張りつめたこと。【無沙汰】おろそかになること。【しのゝめ】明け方のこと。【渡り合す】敵にわたり合ふこと。【尾を隔て】尾は山のすその長く曳いた所。【討てども射れども用ゐず】用ゐずは、事ともしないこと。【やたけに】彌猛にて、いよいよ勇み立つ也。【ちがはん】外れようと。【しどろに】亂れること。【十方の】

諸方といふに同じい。【仕出したる事もなく】特に爲したこともなく。【口遊】嘲弄。【力攻】謀計を用ひず武力のみで攻めること。强襲。【徒然】つれづれ。退屈。【花の下の連歌師】花の下は連歌師の名であらうといはれる。後に宗祇が後土御門帝から、花の本の號を賜はつたとなどから考へると、相當勢力のある團體であつたらうと思ふ。連歌は、和歌の上下の句を分けて二人以上で、十句二十句連ねてよむものをいふ。連歌師は連歌の師匠。【發句】最初の句。これだけが後に獨立して俳句となつた。【さきがけて云々】

他の花にさきがけて咲いて、美しい色を見せよといふ意で、他軍にさきがけて、勝つさまを見せよといふ意を含めたもの。【脇の句】第二の句。序だから言ふと第三の句を「第三」といひ最終の句を「結句」といふ。【嵐や花の云々】さきがけ、勝つ、と戰爭關係の語がある所から、嵐は花の仇であらうとついだに過ぎない。【優なれど】やさしいけれど、【禁忌】忌むべき。【表爾】表現。あらはし。【百服茶】茶の湯の仕方なるべしといふ。【褒貶の歌合】兩方に分れて互ひに良否を批評し定めて勝負を爭ふこと。【兵仗】武器。【疊栃】折りたゝむやうに蝶番をつけてある栃。【翻案】本となる歌を土臺とし、趣向をかへてよむこと。【よそにのみの歌】本歌は、新古今集、讀人しらず「よそにのみ見てややみなむ葛城や、高間の山の嶺の白雲。」君をよそにのみ見てはゐられぬといふ、戀の意を述べたものである。こゝでは白雲を楠木として楠木をよそにのみ見てはやまれぬと皮肉つたもの。【江口神崎】共に攝津にある。大江匡房の遊女記にも此地の遊女のことが見えるから、古くからゐたものらしいといふ。【傾城】遊女。【片時】しばしの間。【天魔破旬】何れも惡魔。【番匠】交番に朝廷に來て役をつとめた大工をいふ言葉。轉じて一般に大工を言

ふ。【魯般が雲梯】　魯般は公輸般のことで魯人、械を造るに巧で、楚のために雲梯を造つた。雲梯は昔の攻城具で高くなるしかけの梯。淮南子「楚欲レ攻宋、墨子聞而悼レ之、見二楚王一曰、臣見二大王之必傷レ義而不レ得レ宋、王曰、公輸天下巧士、作二爲梯之械一設以攻レ宋、曷爲レ弗レ取、墨子曰、令二公輸設攻一、臣請レ守之、於レ是公輸般設二攻レ宋之械一、墨子設二守之備一、九攻而墨子九却レ之、弗レ能レ入、乃偃レ兵不レ攻。」【吹き布く】　吹きひろげる。【なまじひに】　强ひて。【八大地獄】　等活・墨繩・衆合・叫喚・大叫喚・焦熱・無間の八つ。【刀山劍樹】　劍樹地獄には刀山がありそれに劍樹が生ひてある。刀山は、刄劍を仰向けに植ゑ並べた山、劍樹は、枝・花實、すべて劍からなる樹。【野伏】　山野に潜在して、統轄者のない武士。野武士と書く。【轉漕】　陸には轉といひ海には漕といふ。【案内者の野伏】　案内をよく知つたる野伏。【希有に】　稀に。珍しく。【重代したる】　代々重寶とした。【詮なき口論】　つまらぬ口爭。

先帝船上に臨幸の事

畿内の軍未靜ならざるに、又四國西國日を追ひて亂れければ、人の心皆薄氷を履みて、國の危き事深淵に臨むが如し。抑今斯の如く天下の亂るゝ事は、偏に先帝の宸襟より

事起れり。若し逆徒差しちがひて、奪ひ取り奉らんとすることもこそあれ。相構へて能々警固仕るべしと、隱岐判官が方へ下知せられければ、判官近國の地頭御家人を催して、日番夜廻隙もなく宮門を閉ぢて警固し奉る。

閏二月下旬は、佐々木富士名の判官が番にて中門の警固にて候ひけるが、如何思ひけん、哀此君を取り奉りて、謀叛を起さばやと思ふ心ぞつきにける。されども申入る可き便もなくて、案じ煩ひける處に、或夜御前より官女を以て、御盃を下されたり。判官是をたまはりて、よき便なりと思ひければ、潜に彼官女を以て申し入れけるは、上樣には未知し召れ候はずや。楠兵衞正成金剛山に城を構へて、楯籠り候ひし處に、東國勢百萬餘騎にて上洛し、去二月の初より攻め戰ひ候といへども、城は剛くして、寄手已に引色になりて候。又備前には、伊東大和二郎、三石と申す所に城を構へて、山陽道を差し塞ぎ候。播磨には赤松入道圓心、宮の令旨をたまはりて、攝津國まで攻め上り、兵庫の北摩耶と申す處に陣を取りて候。其勢已に三千餘騎、京を縮め地を略し

て勢、近國に振ひ候なり。四國には河野の一族に、土居二郎、得能彌三郎、御方に參て旗を擧げ候處に、長門の探題上野介時直、彼に打ち負けて、行方を知らず落ち行き候ひし後、四國の勢悉く土居得能に屬し候間、既に大船をそろへて、是へ御迎に參るべしとも聞え候。又先づ京都を攻むべしとも披露す。御聖運開かるべき時、已に至りぬとこそ覺えて候へ。義綱が當番の間に、忍びやかに御出候ひて、千波の湊より御船に召され、出雲伯耆の間、何れの浦へも風に任せて御船を寄せられ、さりぬべからんずる武士を御憑み候ひて、暫く御待ち候へ。義綱恐れながら攻め進らせんために、罷り向ふ體にて、軈て御方に參り候ふべしとぞ奏し申しける。官女此由申し入れければ、主上猶も彼僞りてや申すらんと思召されける間、義綱が志の程を、能々伺ひ御覽ぜられんために、彼官女を義綱にぞ下されける。判官は面目身に餘り覺えける上、最愛又甚しかりければ、彌忠烈の志を顯しける。さらば汝先づ出雲國へ越えて、同心すべき一族を語ひて御迎に參れと仰下されける程に、義綱則ち出雲へ渡りて、鹽冶判官を語

ふに、鹽冶如何思ひけん、義綱を追籠め置きて、隱岐國へ歸さず、主上姑くは義綱を御待ありけるが、餘に事滯りければ、唯運に任せて御出あらんと思召して、或夜の宵のまぎれに三位殿の御局の御產の事近づきたりとて、御所を御出あるよしにて、主上其御輿にめされ、六條少將忠顯朝臣ばかりを召し具して、潛に御所をぞ御出ありける。此體にては人の怪め申すべき上、駕輿丁もなかりければ、御輿をば停められて、忝くも十善の天子、自ら玉趾を草鞋の塵に汚して、自ら泥土の地を踏せ給ひけるこそあさましけれ。

此は三月廿三日の事なれば、月待つほどの暗き夜に、そことも知らぬ遠き野の道を、たどりて步ませ給へば、今は遙に來ぬらんと思召されたれば、跡なる山は未瀧の響の仄に聞ゆる程なり。若し追懸け進らする事もやあるらんと、恐しく思召しければ、一足も前へと御心ばかりは進めども、いつ習はせ給ふべき道ならねば、夢路をたどる心地して、唯一所にのみやすらはせ給へば、こは如何せんと思ひ煩ひて、忠顯朝臣、御手

引き御腰を推して、今夜いかにもして、湊邊までと心を遣り給へども、心身共に疲れ終てゝ、野徑の露に徘徊す。夜いたく更けにければ、里遠からぬ鐘の聲の月に和して聞えけるを、道しるべに尋ね寄りて、忠顯朝臣或家の門を扣き、千波湊へは、何方へ行くぞと問ひければ、内より怪しげなる男一人出で向ひて、主上の御有樣を見進らせけるが、心なき田夫野人なれども、何となく痛はしくや思ひ進らせけん、千波湊へは、是より纔五十町ばかり候へども、道南北へ分れて、如何樣御迷ひ候ひぬと存じ候へば、御道しるべ仕り候はんと申して、主上を輕々と負ひ進らせ、程なく千波湊へぞ着きにける。爰にて時打つ鼓の聲を聞けば、夜は未五更の初なり。此道の案内者仕りたる男、かひ〴〵しく湊の中を走り廻りて、伯耆の國へ漕ぎもどる、商人船のありけるを、とかく語ひて、主上を屋形の内に乘せ進らせ、其の後暇申してぞ止りける。此男誠に凡人にあらざりけるにや、君御一統の御時に、尤忠賞あるべしとて、國中を尋ねられけるに、我こそ其にて候へと申す者遂になかりけり。

夜も已に明けゝれば、船人纜を解きて順風に帆を揚げ、湊の外に漕ぎ出す。船頭主上の御有樣を見奉りて、凡人にては渡らせ給はじとや思ひけん、屋形の前に畏りて申しけるは、かやうの時御船を仕りて候こそ、我等が生涯の面目にて候へ、何所の浦へ寄せよとも、御諚に隨ひて、御船の梶をば仕り候ふべしと申して、實に他事もなげなる氣色なり。忠顯朝臣是を聞き給ひて、隱しては中々惡しかりぬと思はれければ、此船頭を近く呼び寄せて、是程に推し當てられぬる上は、何をか隱すべき、屋形の中に御座あるこそ、日本國の主、忝くも十善の君にて入らせ給へ。汝等も定めて聞き及びぬらん、去年より隱岐判官が館に押し籠られて御座ありつるを忠顯盜み出し進らせたるなり。出雲伯耆の間に、何所にてもさりぬべからんずる泊へ、急ぎ御船を着けておろし進らせよ。御運開けなば、必ず汝を侍に申しなして、所領一所の主になすべしと仰せられければ、船頭實に嬉しげなる氣色にて、取梶面梶取り合せて、片帆にかけてぞ馳せたりける。今は海上二三十里も過ぎぬらんと思ふ所に、同じ追風に帆懸けたる船十

艘ばかり、出雲伯耆を指して馳せ來れり。筑紫船か商人船かと見れば、さもあらで、隱岐判官淸高、主上を追ひ奉る船にてぞありける。船頭是を見て、かくては叶ひ候まじ、是に御隱れ候へと申して、主上と忠顯朝臣とを船底にやどし參らせて、其上にあひものとて、乾したる魚の入りたる俵を取り積みて、水手梶取其上に立ち雙びて、櫓をぞ押したりける。去程に追手の船一艘、御座船に追ひつきて、屋形の中に乘り移り、こゝかしこ搜しけれども、見出し奉らず。さては此船には召さゞりけり。若しあやしき船や通りつると問ひければ、船頭今夜の子の尅ばかりに、千波湊を出て候ひつる船にこそ、京上臈かと思しくて、冠とやらん着たる人と、立烏帽子着たる人と、二人乘らせ給ひて候ひつる、其艘今は五六里も、先立ち候ひぬらんと申しければ、さては疑もなきことなり。早船をおせとて、帆を引き梶を直せば此船は聽て隔りぬ。今はかうと心安く覺えて、跡の浪路を顧れば、又一里ばかりさがり、追手の船百餘艘、御座船を目にかけて、鳥の飛ぶが如くに追ひかけたり。船頭是を見て、帆の下に櫓を立て、萬

里を一時に渡らんと、聲を帆に擧げて推しけれども、時節風たゆみ、潮に向ひて御船更に進まず、水手梶取如何せんと、あわて騒ぎける間、主上船底より御出ありて、膚の御護より、佛舍利を一粒取り出させ給ひて、御疊紙に載せて、波の上にぞ浮けられける。龍神此に納受やしたりけん、海上俄に風變りて、御座船をば東へ吹き送り、追手の船をば西へ吹きもどす。さてこそ主上は虎口の難を御遁ありて、御船は時の間に、伯耆の國名和湊に着きにけり。

六條少將忠顯朝臣、一人先づ船よりおり給ひて、此邊には如何なる者か、弓矢取りて人に知られたると問はれければ、道行く人立ちやすらひて、此邊には名和又太郎長年と申す者こそ、其身指して名ある武士にては候はねども、家富み一族廣くして、心がさある者にと候へとぞ語りける。忠顯朝臣能々其仔細を尋ね聞きて、聽て勅使を立てゝ仰せられけるは、主上隱岐判官が館を御迯ありて、今此港に御座あり。長年が武勇かねて、上聞に達せし間、御憑あるべきよしを仰出さるゝなり。憑まれ進らせ候ふべし

やいなや、速に勅答申すべしとぞ仰せられたりける。名和又太郎は、折節一族共呼び集めて、酒飲みて居たりけるが、此由を聞きて、案じ煩ひたる氣色にて、兎も角も申し得ざりけるを、舍弟小太郎左衛門尉長重、進み出でゝ申しけるは、古より今に至るまで、人の望む所は名と利との二つなり。我等忝くも十善の君に憑まれ進らせて、尸を軍門に曝すとも、名を後代に殘さん事、生前の思出、死後の名譽たるべし。唯一筋に思ひ定めさせ給ふより外の儀あるべしとも存候はずと申しければ、又太郎を始めとして、當座に候ひける一族ども二十餘人、皆此儀に同じてけり。さらば、頓て合戰の用意候ふべし。定めて追手も跡よりかゝり候ふらん。長重は主上の御迎に參りて、直に船上山へ入れ進らせん。旁は頓て打ち立ちて、船上へ御參候ふべしと云ひ捨てて、鎧一縮して走り出でければ、一族五人腹卷取りて投げかけ〳〵、皆高紐しめて共に御迎にぞ參じける。

俄の事にて御輿なんどもなかりければ、長重着たる鎧の上に荒薦を卷きて、主上を負

ひ進らせ、鳥の飛ぶが如くして、船上へ入れ奉る。長年近邊の在家に人を廻し、思ひたつ事ありて、船上に兵粮を上る事あり。我倉の内にある所の米穀を、一荷持ちて運びたらんものには、錢を五百づゝ取らすべしと觸れたりける間、十方より人夫五六千人出來りて、我劣らじと持ち送る。一日が中に兵粮五千餘石運びけり。其後家中の財寶悉く人民百姓に與へて、己が館に火をかけ、其勢百五十騎にて、船上に馳せ參り、皇居を警固仕る。長年が一族名和七郎といひける者、武勇の謀ありければ、白布の五百端ありけるを旗にこしらへ松の葉を燒きて煙にふすべ、近國の武士共の家々の紋を書きて、此處の木の本、彼處の峯にぞ立て置きける。此旗ども峰の嵐に吹かれて、陣々に飜りけるさま、山中に大勢充滿したりと見えておびたゞし。(卷七)

【先帝】後醍醐天皇の御事であることは勿論である。主上と書き、先帝と書き、一定してゐない。【人の心皆薄氷を履みて云々】詩經の小雅小旻篇に「戰々兢々、如レ臨ニ深淵一、如レ履ニ薄氷一」とある。論語にも引いてある。戰々は恐懼の貌。兢々は戒謹の貌。深い淵に臨んでは墜ちることを恐れ、薄い氷の上を渡っては陷ることを恐れて、恐れわなゝくこと。こゝでは天下が亂れて、人心の恐怖に滿ちてゐることに引いたの

である。【逆徒差しちがへて】逆徒は武家方から見た逆徒で、即ち天皇方の人々のこと。「差しちがひて」は、島に入り込んでの意。【相構へて】用心して。【隱岐判官】佐々木宗淸の子で佐々木淸高のこと。【地頭】莊園に置いて、平時は兵糧米の徵發、盜賊の追捕等を掌り、事ある時には軍役をつとめたもの。【御家人】武家に久しく仕へた家來。【佐々木富士名の判官】富士名は佐々木の分家であるから佐々木富士名といふ。三郎左衞門尉義綱といふ者である。【上樣】天皇を呼び奉る奉る稱。後には將軍をもいふ。【引色】退きさうな樣子。【京を縮み地を略し】京都を壓迫し土地を攻め取り。【長門の探題】探題は北條氏の時に、重要で且つ遠隔の地に置いて、地方事務及び外寇の鎭となしたもの。奧州探題、六波羅探題、九州探題などがある。【さりぬべからんずる】然かありぬべくあらんとする。適當だと思はれる武士。【鹽冶判官】名は高貞、近江判官貞淸の子。【三位殿の御局】從三位廉子。前坊恒良親王及び後村上天皇の母。【玉趾を云々】

御足にわらぢをはき給うての意。【月待つ程の云々】廿三夜は十七夜・廿六夜などと共に月待の夜であるからかくいふ。月待つ間の暗夜。月の出ぬ間のやみ夜。【今は遙に來ぬらんと云々】「思召されたれば」は「思召されたるに」といふ意味。遠く來たと心ばかり思うて、道は一向進まないこと。【田夫野人】田舍人。【五更】今の午前四時から六時の間。夜の八時から二時間づゝ數へて、初更・二更・三更・四更・五更と分ける。【御錠】御命令。【隱しては中々】中々は却て。【侍】諸太夫に次いだもの。五位・六位の人。【取梶面梶云々】船首を左へ向ける時の舵のとり方が取舵、右へ向ける時のが面舵。兩方の舵を一度に用ひたものだ。【片帆】帆を一方に片よせて風を受けるのをいふ。【あひもの】乾魚をいふ。今でも北國では乾物屋のこと

を、あひ物屋といふ。梅松論には、この所を、烏賊といふものにて玉體を埋め隱し奉るとある。【水手梶取】共に水夫のこと。【御座船】天皇の居られる船。【子の尅】今の十二時。【京上﨟】京の公卿衆の意。【立烏帽子】折烏帽子に對する語で、折らない烏帽子。【聲を帆にあげて】聲を高く上げて。（前出）【佛舍利】舍利は梵語で、元は米の義。其の形の似た所から骨をいふ。佛舍利は、碎けも燬けもしないといふ佛の靈骨。【龍神】海の神。【御疊紙】衣冠束帶の時に懷中して、鼻紙とし又は歌などを書く用にした、疊んだ紙。【心がさある】心藹あるで、心の深く思慮に富んだこと。【旁は】各々は。諸君は。【鎧一縮して】鎧を着てから、からだによくつくやうに、一ゆすりゆすること。【高紐】左右の綿上について上から垂れ、胸板のあひびきの緒と結ぶ紐。【荒薦】編み目のあらいこも。神事等にはこれを用ひた。【松の葉を燒きて云々】類聚名物考に「白布に急に紋をつくべき樣のなければ、松葉をいぶして紋を付けたり。」とある。

六波羅攻の事

去程に六波羅には、六萬餘騎を三手に分けて、一手をば神祇官の前に控へさせて、足利殿を防がせらる。一手をば東寺へ差向けて、赤松を防がせらる。一手をば伏見の上

へ向けて、千種殿の寄せらるゝ、竹田伏見を支へらる。巳の尅の始より、大手搦手同時に軍始りて馬煙南北に靡き、鬨の聲天地を響かす。内野へは陶山と河野とに、宗徒の勇士二萬餘騎を副へて向けられたれば、官軍も無左右かけ入らず、敵も輙くかけ出でず、兩陣互に支へて、只矢軍に時をぞ移しける。

爰に官軍の中より、櫨匂の鎧に、薄紫の母衣懸けたる武者只一騎、敵の前に馬を懸け居ゑて、高聲に名のりけるは、其身人數ならねば、名を知る人よもあらじ。是は足利殿の御内に、設樂五郎左衛門尉と申す者なり。六波羅殿の御内に、我と思はん人あらば、懸合ひて手柄の程をも御覽ぜよといふまゝに、三尺五寸の太刀を拔き、甲の眞向に差しかざし、誠に矢所少く馬をたてゝ控へたり。其勢一騎當千と見えたれば、敵御方互に軍を止めて見物す。爰に六波羅の勢の中より、年の程五十ばかりなる老武者の黑絲の鎧に、五枚甲の緒をしめて、白栗毛の馬に、青總懸けて乘りたるが、馬をしづ〳〵と歩ませて、高聲に名のりけるは、其身愚蒙なりといへども、多年奉行の數に加はり

て、末席を汚す家なれば、人は定めて筆とりなんど侮りて、あはぬ敵とぞ思ひ給ふらん。雖レ然我等が先祖をいへば、利仁將軍の氏族として、武略累葉の家業なり。今某十七代の末孫に、齋藤伊豫房玄基と言ふ者なり。今日の合戰敵御方の安否なれば、命を何のために惜むべき。死残る人あらば、我忠戰を語りて、子孫に留むべしと云ひ捨てゝ、互に馬をかけ合せ、鎧の袖と袖とを引き違へて、むずと組みてどうと落つ。設樂は力まさりなれば、上になりて齋藤が頸を掻く。齋藤は心早き者なりければ、擧げざまに設樂を三刀刺す。何れも剛の者なりければ、死して後までも、互に引組みたる手を放さず、共に刀を突立てゝ、同枕にこそ臥したりけれ。

又源氏の陣より、紺の唐綾威の鎧に、鍬形打ちたる甲の緒を締め、五尺餘の太刀を拔きて、肩に懸け、敵の前半町ばかり馬を驅け寄せて、高聲に名のりけるは、八幡殿より以來、源氏代々の侍として、流石に名は隱なけれども、時に取りて名を知られねば、然るべき敵に逢ひ離し。是は足利殿の御内に大高二郎重成といふ者なり。先日度々の

合戰に高名したりと聞ゆる、陶山備中守、河野對馬守はおはせぬか。出合ひ給へ。打物して人に見物せさせんといふまゝに、手綱かいくり、馬に白沫かませて控へたり。陶山は東寺の軍强しとて、俄に八條へ向ひたりければ、此陣にはなし。河野對馬守ばかり一陣に進みてありけるが、大高に詞をかけられて、元來たまらぬ懸武者なれば、なじかは少しもためらふべき、通治是にありといふまゝに大高に組まんと相近づく。是を見て河野對馬守が猶子に、七郎通遠とて、今年十六になりける若武者、父を討たせじとや思ひけん、眞前に馳せ塞りて、大高に押し雙べてむずと組む。大高河野七郎が總角を掴みて中に提げ、己ほどの小者と組みて勝負はすまじきぞとて、差しのけて鎧の笠符を見るに、其紋傍折敷に三文字を書きて着けたりけり。さては是も河野が子か甥かにてぞあらんと打ち見て、片手打の下切に、諸膝かけず切りて落し、弓だけ三杖ばかり投げたりける。對馬守最愛の猶子を目の前に討せて、なじかは命を惜むべき、大高に組まんと諸鐙を合せて馳せかゝる處に、河野が郎等共是を見て、主を討せじと、

三百餘騎にてをめいてかゝる。源氏又大高を討せじと、一千餘騎にてをめいてかゝる、源平互に入り亂れて、黒煙を立てゝ攻め戰ふ。官軍多く討たれて内野へはつと引く。源氏新手を入れ替へて戰ふに、六波羅勢若干討れて、河原へさつと引けば、平氏新手を入れ替へて、此を先途と戰ふ。一條二條を東西へ、追ひつ返しつ七八度が程ぞ揉み合ひたる。源平兩陣諸共に、互に命を惜まねば、剛臆何れとは見えざりけれども、源氏は大勢なれば、平氏遂に討ち負けて、六波羅を指して引き退く。

東寺へは赤松入道圓心、三千餘騎にて寄せかけたり。樓門近くなりければ、信濃守範資鐙踏張左右を顧みて、誰かあるあの木戸、逆茂木、引き破りて捨てよと下知しければ、宇野、柏原、佐用、眞嶋の早雄の若者共、三百餘騎馬を乘り捨てゝ、走り寄り、城の構を見渡せば、西は羅城門の礎より、東は八條河原邊まで、五六八九寸の琵琶の甲、安郡なんどを鑄り貫きて、したゝかに屏を塗り、前には亂杭逆木を引きかけて、廣さ三丈餘に堀をほり、流水をせき入れたり。飛び潰らんとすれば、水の深さの程を

知らず。渡らんとすれば橋を引きたり。如何せんと案じ煩ひたる處に、播磨國の住人妻鹿孫三郎長宗、馬より飛び下り弓を差しおろして、水の深さを探るに、末弭僅に殘りたり。さては我長は立たんずるものをと思ひければ、五尺三寸の太刀を拔きて、肩に掛け、貫脱ぎて拋げすて、かつぱと飛び漬りたれば、水は胸板の上へも揚らず。跡に續きたる武部七郎是を見て、堀は淺かりけるぞとて、長五尺ばかりなる小男が、無ニ是非一飛び入れたれば、水は甲をぞ越えたりける。長宗きつと見返りて、我總角に取りつきて、あがれといひければ、武部七郎妻鹿が鎧の上帶を蹈みて、肩に乘り揚り、一刎刎ねて向の岸にぞ着きける。妻鹿から／＼と笑ひて、御邊は我を橋にして渡したるや、いで其屏引き破りて捨んといふまゝに、岸より上へつと刎ね揚り、屏柱の四五寸餘りて見えたるに、手を懸けえいや／＼と引くに、一二丈ほり舉げて、山の如くなる揚土、壁と共に崩れて、堀は平地になりにけり。是を見て築垣の上に、三百餘箇所搔き雙べたる櫓より、指詰め引詰め射ける矢、雨の降るよりも猶しげし。長宗が鎧の菱

縫、甲の吹返に立所の矢少々折りかけて、高櫓の下へつと走り入り、兩金剛の前に太刀を倒につき、齒咀して立ちたるは、何れを二王、何れを孫三郎とも分ちかねたり。東寺、西八條、針、唐橋にひかへたる六波羅の兵一萬餘騎、木戸口の合戰强しと騒ぎて、皆一手になり、東寺の東門の脇より、濕雲の雨を帶びて、碁山を出でたるが如く、ましぐらにうち出でたり。妻鹿も、武部も、すはや討たれぬと見えければ、佐用兵庫助、得平源太、別所六郎左衞門、五郎左衞門、相懸りに懸りて面も振らず戰ひたり。あれ討たすな殿原とて、赤松入道圓心、嫡子信濃守範資、次男筑前守貞範、三男律師則祐、眞島、上月、菅家、衣笠の兵三千餘騎、拔連れてぞかゝりける。六波羅の勢一萬餘騎、七縱八横、に破られて、七條河原へ追ひ出でらる。一陣破れて殘黨全からざれば、六波羅の勢竹田の合戰にも討ち負け、木幡伏見の軍にも負けて、落ち行く勢散々に、六波羅の城へ逃げ籠る。勝に乘りて逃ぐるを追ふ四方の寄手、五萬餘騎皆一所に寄せて、五條の橋爪より七條河原まで、六波羅を圍みぬる事幾千萬といふ數を知らず。

されども東一方をばわざと開けられたり。是は敵の心を一になさで、轍く攻め落さんための謀なり。

千種頭中將忠顯朝臣、士卒に向ひて下知せられけるは、此城尋常の思をなして延々に攻めば、千劒破の寄手彼を捨てゝ、此後攻をしつと覺ゆるぞ、諸卒心を一にして、一時が間に攻落すべしと下知せられければ、出雲伯耆の兵共、雜車二三百兩取り集めて、轅と轅とを結び合せ、其上に家を壞ちて、山の如くに積み擧げて、櫓の下へ指し寄せ、一方の木戸を燒き破りけり。爰に梶井宮の御門徒、上林房、勝行房の同宿共、混甲にて三百餘人、地藏堂の北の門より、五條の橋爪へ打ちて出でたりける間、坊門少將、殿の法印の兵共三千餘騎、僅の勢にまくり立てられて、河原三町を追ひ越さる。されども山徒さすがに小勢なれば、長追しては惡かりなんとて、又城の中へ引籠る。六波羅に楯籠る所の軍勢少しといへども、其數五萬騎に餘れり。此時若し志を一にして、同時にかけ出でたらましかば、引立つたる寄手共足をためじと見えしかども、武家可レ亡運

の極にやありけん、日來名を顯せし剛の者ともいへども勇まず、無雙の强弓精兵といはるゝ者も弓引かずして、只あきれたるばかりにて、此處彼處にむら立ちて、落支度の外は擬勢もなし。名を惜み家を重ずる武士どもだにも此の如し。何ぞ況や主上上皇を始め進らせて、女院、皇后、北政所、月卿雲客、兒、女童、女房達にいたるまで、軍といふことは未目にも見給はぬことなれば、鬨の聲矢叫の音に懼ぢをのゝかせ給ひて、こは如何すべきと、消え入るばかりの御氣色なれば、實にも理なりと御痛はしきさまを見進らすにつけても、兩六波羅彌氣を失ひて、惘然の體なり。今まで貳心なき者と見えつる兵なれども、かやうに城中の色めきたる樣を見て、叶はじとや思ひけん、夜に入りければ、木戸を開き逆木を越えて、我先にと落ち行きけり。義を知り命を輕じて、殘り留る兵僅に千騎にも足らず見えにけり。(卷九)

【神祇官】大内の郁芳門の南、冷泉大宮にある。拾芥抄には、堀川の西、大炊御門の北とある。【東寺】大宮の西、壬生の東、九條の北、八條の南にある寺。桓武天皇が空海に建立せさせ給ひし眞言宗の大本山。【赤松】

赤松二郎入道圓心、即ち則村のこと。【千種殿】千種忠顯、頭中將であつた。【巳の尅】午前十時。【内野】上京の西に當る地をいふ。治承に大内裏が燒けて後は野となつてゐた。【無左右】たやすく。【櫨匂】櫨の紅葉した如き色、即ち紅に黄ばみをもつた色。匂とは袖・草摺の上部を濃く、漸次薄く終に白になるやうに威したもの。【矢所少く】矢のよきねらひ所の少いこと。【五枚甲】錏の板の五枚ある甲。【白栗毛】栗毛の色うすく黄ばんだもの。【青總】青色の總のしりがひ。【奉行】武家の職名で、主として政務をとる人。臨時常置色々の奉行があつた。【筆とりなんど】奉行は主として政務にたづさはる職であるから、かく言つて侮つたものであらう。【あはぬ敵】相應しない敵。【利仁】醍醐天皇の時の人で、鎭守府將軍藤時長の子。【武略累葉】累葉は累代に同じ。【擧げざまに】突き上げながら。【共に刀を云々】共に刀を敵に突き立てたまゝ一緒に倒れ臥した。【太刀を拔きて肩に懸け】肩にかつぎ。【時にとりて云々】現在に於ては世間に名を知られぬ故。【御内に】家臣といふに同じ。【打物して】打物は武器。打物すは打物で戰ひ合ふこと。立合つて。【東寺の軍】赤松の軍。【一陣に進みて】一陣に進むは、眞先に進むこと。【たまらぬ懸武者】懸武者は敵に向つて懸け進む勇武の武者の意。自ら制止することの出來ぬはやり武者。【猶子】兄弟の子をいふ場合と、養子をいふ場合とあるが、こゝは後の場合。【總角】鎧の背にある逆板に結びつけた裝飾の紐。多くは紅色。總角結び、即ち兩方に輪を出し中を石だゝみに組む結び方から名けたもの。【笠符】隊伍を區別せん爲につけた小旗標。兜の後方の笠標の鐶につけるのが普通であるが、又兜の前方にもつけ、後には鎧の袖等にもつけた。【傍折敷に】折傍敷は正方形を二つ組んだ紋所。其中に三の字を書いた紋である。

【諸膝かけず】 雨膝を少しの障りもなく切り落すこと。【弓だけ三枚許】 弓の長さで測つて三つ程の距離。弓だけは普通七尺五寸。【平氏】 北條氏は平氏から出たから斯く言ふ。【此を先途と】 こゝを最後の運の極め所と。【早雄】 血氣にはやる武士。【八條河原】 八條の地點に當る河原。河原は加茂川の河原。【琵琶の甲安郡】 五六寸又は八九寸角の、琵琶の腹にする材木や、近江國安州郡から出る材木を以て造つたこと。【末弭】 弓弭の上部のものをいふ。本はずに對す。【貫】 毛皮で造つたくつ。【無是非】 よくも考へずの意。【揚土】 高い所に積みあげた土。屏の上に積み上げた土である。【築垣】 築地に同じ。【雨金剛】 密跡金剛と。那羅延金剛と。仁王のこと。【木戸口の合戰】 東寺の側の木戸口。【濕雲の云々】 しふうんと訓む。雨雲の如く黒く固まつてむく〳〵と出たことを言ふ。【相懸りに】 敵味方雨方から打ちかゝること。【殿原】 ばらは複數を現はす接尾語。諸君といふ意。【七縱八横】 縱横無盡に。【千劍破の寄手云々】 千早城を攻めてゐる北條勢が後攻として此所へ寄せるとの意。後攻は先陣の後に控へてゐる軍勢。【梶井宮】 梶井は天台宗の門跡で、其門主は天台座主となるのが普通である。皇族が門主となる宮門跡であるから梶井宮と申す。【門徒】 其寺門に屬する僧徒。【殿の法印】 殿法印良忠。【山徒】 上林房其他の門徒のこと。比叡山の僧徒なればば山徒といふ。【足をためじ】 足をとゞめ得じ。【擬勢】 勇氣あり氣に見せかけること。【主上上皇】 光嚴帝と後伏見・花園兩上皇。【女院】 佛門に入られし皇太后。【北政所】 攝關の奧方。【惘然】 自失の貌。

主上上皇御沈落の事

爰に糟谷三郎宗秋、六波羅殿の御前に參りて申しけるは、御方の御勢次第に落て、今は千騎に足らぬ程になりて候。此御勢にて大敵を防がんことは叶はじとこそ覺え候へ。東一方をば敵未取りまはし候はねば、主上上皇を取奉りて、關東へ御下り候うて後、重ねて大勢を以て、京都を攻められ候へかし。佐々木判官時信、勢多の橋を警固して候ふを召具せられれば、御勢も不足候ふまじ。時信御伴仕る程ならば、近江國に於ては、手差す者は候ふまじ。美濃尾張三河遠江には、御敵ありとも承らねば、路次は定めて無爲にぞ候はんずらん。鎌倉に御着き候ひなば、逆徒の退治踵を回すべからず。先づ思召し立ち候へかし。是程にあさまなる平城に、主上上皇を籠め進らせて、名將匹夫の鋒に名を失はせ給はんこと、口惜しかるべき事に候はずやと、再三强ひて

申しければ、兩六波羅げにもとや思はれん、さらば先づ女院皇后北政所を始め進らせて、面々に女性幼き人々を、忍びやかに落して後、心閑に一方を打ち破りて落つべしと評定ありて、小串五郎兵衛尉を以て、此由院內へ申されたりければ、國母、皇后、女院、北政所、內侍、上童、上臈、女房達に至るまで城中に籠りたるが恐しさに、思はぬ別の悲しさも、後如何に成り行かんずるやうをも知らず、歩跣にて我先にと迷ひ出で給ふ。只金谷園裏の春の花、一朝の嵐に誘はれて、四方の霞に散り行きし、昔の夢に異ならず。

越後守仲時北の方に向ひて宣ひけるは、日來の間は、縦令思の外に都を去ることありとも、いづくまでも伴ひ申さんとこそ思ひつれども、敵東西に滿ちて、道を塞ぎぬと聞ゆれば、心安く關東まで落ち延びぬとも覺えず。御事は女性の身なれば、苦しかるまじ。松壽は未幼稚なれば、敵たとひ見つけたりとも、誰が子とも知らじ。只今の程に夜に紛れて、何方へも忍び出で給ひて、片邊土の方にも身を隱し、暫く世の靜

まらん程を待ち給ふべし。道の程事故なく關東につきなば、頓て御迎に人を進らすべし。若し又我等道にて討たれぬと聞き給はゞ、如何なる人にも相馴れて、松壽を人となし心つきなば僧になして、我後世を問はせ給へと、心細げにいひ置きて、泪を流して立ち給ふ。北方越後守の鎧の袖を控へて、などやかくうたてしき言葉に聞え侍るぞや。此折節少きものなんど引具して、知らぬ傍にやすらはゞ、誰か落人の其方樣と思はざらん。又日比より知りたる人の傍に立ち宿らば、敵に捜し出でられて、我身の耻を見るのみにあらず、少き者の命をさへ、失はんことこそ悲しけれ。道にて思の外のことあらば、そこにてこそ共に兎も角も成りはてめ。憑む陰なき木の下に、世を秋風の露の間も棄て置かれ進らせては、ながらふべき心地もせずと、泣き悲み給ひければ、越後守も心は猛しといへども、流石に岩木の身ならねば、慕ふ別を捨て兼ねて、遂に時をぞ移されける。昔漢の高祖と楚の項羽と戰ふ事、七十餘度なりしに、項羽遂に高祖に圍まれて、夜明けば討死せんとせし時に、漢の兵四面にして、皆楚歌するを聞きて、項羽

卽ち帳中に入り、其婦人虞氏に向ひて、別を慕ふ悲を含みて、自ら歌を作りていはく

力抜レ山兮氣蓋レ世、　時不レ利兮騅不レ逝、

騅不レ逝可レ奈何、　虞兮虞兮奈レ若何、

と悲歌忼慨して、項羽泪を流し給ひしかば、虞氏悲に堪へかねて、卽ち自ら劒の上に伏し、項羽に先立つて死にけり。項羽明くる日の戰に、二十八騎を伴ひて、漢の軍四十萬騎をかけ破り、自ら漢の將軍三人が首を取りて、討ち殘されたる兵に向ひて、我遂に漢の高祖がために亡されぬる事、戰の罪にあらず、天我を亡せりと、自ら運を計りて、遂に烏江の邊にして、自害したりしも、かくやと思ひ知られて泪を落さぬ武士はなし。

南方左近將監時益は、行幸の御前を仕りて打ちけるが、馬に乘りながら北方越後守の中門の際まで打ち寄せて、主上早寮の御馬に召されて候ふに、などや長々しく打ち立たせ給はぬぞと云ひ捨てゝ、打ち出でければ、仲時無レ力鎧の袖に取り着きたる、北方少き

人を引き放して、椽より馬に打ち乘り、北の門を東へ打ち出で給へば、捨て置かるゝ人々、泣々左右へ別れて、東の門より迷ひ出で給ふ。行々泣き悲む聲、遙に耳に留りて、離れもやらぬ悲しさに、落ち行く前の路暮れて、馬に任せて歩ませ行く。是をかぎりの別とは互に知らぬぞ哀なる。十四五町打ち延びて跡を顧れば、早兩六波羅の館に火かけて、一片の煙と燒き揚げたり。五月闇の比なれば、前後も見えず暗きに、苦集滅道の邊に、野伏みちく〳〵て、十方より射ける矢に、左近將監時益は、頸の骨を射られて、馬より倒に落ちぬ。糟谷七郎馬より下りて、其矢を拔けば、忽に息止りにけり。敵いづくにありとも知らねば、馳せ合ひて敵を討つべきやうもなし。又忍びて落つる道なれば、傍輩に知らせて返し合ふべきにてもなし。只同枕に自害して、後世までも主從の義を重ずるより、外の事はあらじと思ひければ、糟谷泣々主の首を取りて、錦の直垂の袖に裹み、道の傍の田の中に深く隱して、則ち腹搔き切りて、主の死骸の上に重りて、抱きつきてぞ伏したりける。

龍駕遙に四宮河原を過させ給ふ處に、落人の通るぞ打ち留めて、物具剝げと呼はる聲、前後に聞えて、矢を射ること雨の降るが如し。かくては行末とても如何あるべきとて、東宮を始め進らせて、供奉の卿相雲客、方々へ落ち散り給ひける程に、今は僅に日野大納言資名、勸修寺中納言經顯、綾小路中納言重資、禪林寺宰相有光許ぞ、龍駕の前後には供奉せられける。都を一片の曉の雲に阻てゝ、思を萬里の東の道に傾けさせ給へば、劍閣の遠き昔も思召し合せられ、壽永の亂れたりし世も、かくこそと叡襟を惱し給ふ。主上上皇も御涙更にせきあへず。五月の短夜明けやらで、關の此方も闇ければ、杉の木陰に駒を駐めて、暫くやすらはせ給ふ處に、いづくより射るとも知らぬ流矢、主上の左の御肱に立ちにけり。陶山備中守急ぎ馬より飛び下りて、矢を拔き御疵を吸ふに、流るゝ血雪の御膚を染めて、見進らするに目もあてられず。忝くも萬乘の主、卑しき匹夫の矢先に傷られて、神龍忽に釣者の綱にかゝれることあさましかりし世中なり。

去程に篠目（しのゝめ）、漸明け初めて、朝霧僅に殘れるに、北なる山を見渡せば、野伏共と覺えて、五六百人が程、楯をつき鏃（やじり）を支へて待ち懸けたり。是を見て面々、度を失ひてあきれたり。爰に備前國の住人中吉（なかぎり）彌八、行幸の御前に候ひけるが、敵近く馬をかけさせて、忝くも一天の君、關東へ臨幸なる處に、何者なればかやうの狼藉をば仕るぞ、心ある者ならば、弓をふせ甲を脱ぎて、通し奉るべし。禮を知らぬ奴原（やつばら）ならば、一々に召し捕りて、頸切り懸けて通るべしといひければ、野伏共から〳〵と笑ひて、如何なる一天の君にても渡（わた）せ給へ、御運已に盡きて落ちさせ給はんずるを、通し進らせんとは申すまじ。輙（たやす）く通りたく思召さば、御伴（おとも）の武士の馬物具を皆捨てさせて、御心安く落させ給ふべしといひもはてず、同音に鬨をどつと作る。中吉彌八是を聞きて、惡き奴原が振舞かな、いでほしがる物具とらせんといふまゝに、若黨六騎馬の鼻を雙べてかけたりけるに、欲心熾盛（よくしんしじやう）の野伏共六騎の兵にかけたてられて、蜘蛛（くも）の子を散す如く、四角八方へぞ逃げ散りける。六騎の兵ども、六方へ分れて逃ぐるを追ふ事各數十

町なり。彌八餘に長追したりける程に、野伏二十餘人返合せて、是を中に取り籠むる。然れども彌八少しもひるまず、其中の棟梁と見えたる敵に馳せ並べてむづと組み、馬二匹が間へどうと落ちて、四五丈ばかり高き片岸の上より、上になり下になりころびけるが、共に組も放れずして、深田の中へころび落ちにける。中吉下になり擧げさまに、一刀さゝんとて、腰刀を搜りけるに、ころぶ時拔けてや失せたりけん、鞘ばかりありて刀はなし。上なる敵中吉が胸板の上に乘りかゝりて、鬢の髮を摑みて、頸を掻かんとしける處に、中吉刀加へに、敵の小腕を丁と捫りすくめて、暫く聞きたまへ、申すべき事あり。御邊今は我をな恐れ給ひそ。刀があらばこそ刎ね返して、勝負をもせめ。又續く御方なければ、落ち重りて、我を助くる人もあらじ。されば御邊の手にかけて、頸を取りて出されたりとも、曾て實檢にも及ぶまじ。高名にもなるまじ。我は六波羅殿の御雜色に、六郞太郞といふ者にて候へば、見知りぬる人も候ふまじ。無用の下部の首取りて罪を作り給はんより、我命を助けてたび候へ。其悅には六波羅殿の

【あさまなる平城】 あさまは要害の淺きこと。平城は平地の城。【名將匹夫の】 匹夫は、身分のひくいたゞの人。名將が匹夫の手にかゝつて死ぬるのは殘念であるといふこと。【面々の】 それ〴〵の。【院內】 院、即ち上皇の御所と、內裏。【國母・皇后云々】 國母以下前出。內侍は內侍司の女官のうち、專ら掌侍(ないしのじょう)を指す。傳宣奏請を司る。【上童】 女孺の上品の女房。【上﨟】 女房の階級を上﨟・中﨟・下﨟の三つに分つが、上﨟は其最上位。專ら陪膳に侍す。【女房】 中﨟以下をいふ。【金谷園裏】 河陽縣界にある美園。晉の石崇の別莊のあつた地。石崇は客を會して觀花の宴を開き、詩を作つて成らないものには罰として酒三杯を飮ましめたことで知られてゐる。【越後守仲時】 相模守基時の子。北の六波羅探題。【思の外に云々】 意外の事變によつて都を去つても。【御事】・そなた位に當る第二人稱。【松壽】 後に左馬助友時といひ、曆應二年龍ノ口に斬られた。【片邊土】 片田舍といふに同じ。【事故なく云々】 無事に關東に私(仲時)がついたならば。【相馴れて】 つれそうて、夫婦となつて。【心つきなば】 松壽が物心つかば。【うたてしき】 いとはしき。薄情な。【やすらはゞ】 さまよはゞ。【其方様】 落人の方に屬する人。【憑む蔭なき木の下云々】 賴む人無き所に、捨置かれては露の間も生存へ(ながら)られずといふ意。賴む方を樹蔭に譬ふるは其例が甚だ多い。秋風、露、いづれも蔭、木の下、の緣を以てつゞけただけである。【項羽遂に高祖に圍まれ】 此の事は史記の項羽本紀に依つて書いたもの。長々しいから史記の文は引かない。【四面にした楚歌す】 項羽が垓下に圍まれてゐると、夜、城壁の四面で、項羽自身の領地楚の歌を歌つてゐるのをきいて「敵の漢はもう全部わが楚の地を得たか、それでなければこんなに多く楚人がゐる譯はない」と驚いたこと。【別を慕ふ悲を含んで】

別れを惜しむ悲情を歌に含ませて。【力拔レ山云々】騅は愛馬の名、虞氏は愛姫の名。詩の意は、我が力山を拔くに足り、我が意氣は世を包むに足る。しかも時運否に利あらず軍容衰へて騅も逝かぬに至る。騅の逝かざるを如何にすべきか。噫更に虞よ、汝の身を如何に處置したらよいだらうか。【悲歌忼慨】忼は慷に通ず。かなしみ歌ひ、憤りなげくこと。【戰の罪にあらず】戰の拙きが爲にあらず。【南ノ方】六波羅の南の探題。【打ちけるが】、馬に乘つて行くと。【寮御馬】左右馬寮の厩の馬。【行々泣き悲しむ聲云々】北の方等の行々泣き悲しむ聲遙かに仲時にきこえて離れ難き悲しさに。【落ち行く先の道暮れて】日の暮れると、悲しみに道も暗く見えるを兼ねてゐる。【苦集滅道】東山清水寺の南、淸閑寺の側にある。【野伏】野武士とも書く。將なき兵の山野にひそむもの。【時益は云々】増鏡月草の花には此人の死を守山としてゐる。【傍輩に知らせて云々】忍んで逃げるのであるから、仲間に言うて共に返して戰ふとも出來ぬ。騷がしくなつて追手に知られるから。【後世までも云々】冥土にまでも共に行きて主從の義を重んぜんといふ意。【龍駕】天子の御輿。【思を萬里の東の道に傾け】遠き東國に落ちむと思召し給ふといふ意。【劍閣の遠き昔】唐の天寶十五年、玄宗安祿山に苦しめられて蜀に奔る時劍閣を過ぎた。劍閣は蜀の境にある嶮路。【壽永の亂れたりし世】壽永二年七月、平家の一門安德帝を奉じて西に落ちたこと。【宸襟】天子の御心。【關の此方】關は逢坂の關。【神龍釣者の網に云々】說苑第九卷にある。「吳王欲レ從レ民飮レ酒、伍子胥諫曰、不可、白龍下二淸冷之淵一化爲レ魚。漁者豫且射中二其目一、白龍上訴二天帝一、帝曰、當二是之時一若安置二而形一（ナンヂイヅクニカナンヂガ）、白龍對曰、我下二淸冷之淵一化爲レ魚、天帝曰、魚固人之所レ射也、若レ是豫且何罪、天帝責レ訴也、豫且宋國賤臣

也、白龍不レ化豫且不レ射、今棄二萬乘之位一而從二布衣之士一飮レ酒、臣恐三其有二豫且之患一矣、王乃止。」【度を失ひて】驚きて常度を失ふ。【頸切りかけて】頸を切りてに同じきか。【一天の君にても渡らせ給へ】一天の君にても同じ。それを強く言ひたるのみ。【慾心熾盛】慾心の盛なること。熾もさかん也。【腰刀】鞘巻のこと。【刀加へに】持ちたる刀もろ共にの意。【握りすくめて】握りてすくましめたる意。強く握ること。【雜色】武家に使はれ雜役に服したる者。語源は定色の衣袍を着ることの出來ぬより來たといふ。【德つけ奉らん】利益を與へん。【耳のびくが云々】耳のびくは耳たぶのこと。古來耳朶の薄きは運悪しといつた。【駕輿丁】御輿を舁ぐ人夫をいふ。【出世坊官】身分ある僧。【逆旅】旅又は旅舍。こゝは旅。【山だち】山賊。【飼ひたる馬】家に飼ひたる馬。放ち飼の馬でなきもの。【白鞍】銀で前後の輪を張つた鞍。【道の讎】途中の妨げの意。【長絹の御衣】長絹は絹の一種、水張にしたこはい絹なれば張絹と書くべしとも言ふ。それで仕立てた法衣。【檳榔の裏無】棕櫚の葉にて作れる草履で裏のないもの。【袙重ねたる黑衣】袙を下に重ね着た上に黑の法衣を着たものか。袙は下着の名である。【水精の念珠】水晶の珠數。【山王大師】智證大師の別名であるが、これは山王權現などの意か。【蘇】草刈る人のこと也。

稻村崎干潟となる事

去程に極樂寺の切通へ向はれたる、大舘次郎宗氏、本間に討たれて、兵ども片瀨腰越まで、引き退きぬと聞えければ、新田義貞逞兵二萬餘騎を率して、卄一日夜半ばかりに、片瀨腰越を打ち廻り、極樂寺坂へ打ち莅給ふ。明け行く月に敵の陣を見給へば、北は切通まで山高く路嶮しきに、木戸をかまへ垣楯を掻きて、數萬の兵陣を雙べて並居たり。南は稻村崎にて、沙頭路狹きに、浪打ち際まで逆木を繁く引きかけて、澳四五町が程に、大船ども並べて、矢倉をかきて横矢に射させんと構へたり。實にも此陣の寄手、叶はで引きぬらんも理なりと見給ひければ、義貞馬より下り給ひて、甲を脱いで海上を遙々と伏し拜み龍神に向つて祈誓し給ひけるは、傳へ承る日本開闢の主、伊勢天照大神は、本地を大日の尊像に隱し、垂跡を滄海の龍神に顯し給へりと。吾君其苗裔として、逆臣のために西海の浪に漂ひ給ふ。義貞今臣たる道を盡さんために、斧鉞を把つて敵陣に臨む。其志偏に王化を資け奉りて、蒼生を安からしめんとなり。仰ぎ願くは、内海外海の龍神八部、臣が忠義を鑑みて、潮を萬里の外に退け、道を三

軍の陣に開かしめ給へと、至信に祈念し、自ら佩き給へる金作の太刀を拔きて、海中へ投げ給ひけり。眞に龍神納受やし給ひけん、其夜の月の入り方に、前々更に干ることもなかりける稻村崎、俄かに二十餘町干上りて、平沙渺々たり。横矢射んと構へぬる數千の兵船も、落ち行く潮に誘はれて、遙の澳に漂へり。不思議といふも類なし。義貞是を見給ひて、傳へ聞く、後漢の貳師將軍は、城中に水盡き渴に攻められける時、刀を拔きて岩石を刺しゝかば、飛泉俄に涌き出でき。我朝の神功皇后は、新羅を攻め給ひし時、自ら干珠を取り、海上に擲げ給ひしかば、潮水遠く退きて、終に戰に勝つことを得せしめ給ふと。是皆和漢の佳例にして、古今の奇瑞に相似たり。進めや兵どもと下知せられければ、江田、大舘、里見、鳥山、田中、羽河、山名、桃井の人々を始として、越後、上野、武藏、相模の軍勢ども、六萬餘騎を一手になして、稻村崎の遠干潟を眞一文字にかけ通りて、鎌倉中へ亂れ入る。數多の兵是を見て、後なる敵にかゝらんとすれば、前なる寄手跡につきて攻め入らんとす。前なる敵を防がんと欲すれ

ば、後の大勢道を塞ぎて討たんと欲す。進退度を失ひ、東西に心迷ひて、はか〴〵しく敵に向ひて、軍を致すことはなかりけり。

爰に島津四郎と申しゝは、大力の聞えありて、誠に器量骨柄人に勝れたりければ、御大事に逢ひぬべき者なりとて、執事長崎入道烏帽子子にして一人當千と憑まれたりければ、詮度の合戰に向はんとて、未口々の防場へは向けられず、態と相模入道の屋形の邊にぞ置かれける。斯る處に濱の手破れて、源氏已に若宮小路まで攻め入りたりと騷ぎければ、相模入道島津を呼び寄せて、自ら酌を取りて酒を進め三度傾けける時、三間の馬屋に立てられたりける、關東無雙の名馬、白浪といひけるに、白鞍置きてぞ引かれける。見る人是れを羨まずといふ事なし。島津門前より此馬にひたと打ち乘りて由非濱の浦風に、濃き紅の大笠符を吹きそらさせ、三つ物四つ物取りつけて、あたりを拂ひて馳せ向ひければ、數多の軍勢是を見て、誠に一騎當千の兵なり。此間執事の重恩を與へて、傍若無人の振舞せられたるもことわりかなと、思はぬ人はなかりけり。

義貞の兵是を見て、あはれ敵やと罵りければ、栗生、篠塚、畑、矢部、堀口、由良、長濱を始として、大力の覺え取つたる惡者ども、我れ先に彼武者と組んで、勝負を決せんと、馬を進めて相近づく。兩方名譽の大力共が、人交もせず軍する。あれ見よとのゝめきて、敵御方諸共に、難唾を呑うで汗を流し、是を見物してぞ控へたる。斯る處に島津馬より飛んで下り、甲を脫ぎて閑々と身繕をする程に、何とするぞと見居たれば、をめ〳〵と降參して、義貞の勢にぞ加りける。貴賤上下是を見て、譽めつる言を翻して、惡まぬ者はなかりけり。

是を降人の始として、或は年來重恩の郎從、或は累代奉公の家人ども、主を棄てゝ降人になり、親を棄てゝ敵につき目もあてられざる有樣なり。凡源平威を振ひ、互に天下を爭はんことも、今日を限りとぞ見えたりける。（卷十）

【極樂寺の切通】極樂寺の前から鎌倉に通ずる要路。鎌倉七口の一。極樂寺の中興忍性法師が岩崖を切り通して作つたもの。【本間】本間山城左衞門。五月十九日の戰に極樂寺坂の敵を退け、豫て勘氣を受けてゐた

主君大佛貞直の前に至つて切腹した人。【垣楯】楯を立て並べて垣の如くにしたもの。【沙頭路狹きに】砂濱の路の狹いこと。【矢倉】矢を射る爲に船上に櫓を造つたもの。【横矢】側面から射る矢。【本地を大日の尊像に隱し云々】天照大神は本地は大日如來で、龍神となつて權に現れましますとの意。【苗裔】子孫のこと。【斧鉞】共にまさかり、討賊の任のしるしに賜はるもの。王命によつてといふ意。【蒼生】人民のこと。【内海外海】須彌山の周圍に八つの海あり、内七海外一海。それをいふ。【龍神八部】天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅の八神をいふが普通の說。別說もあれど略す。【三軍】大軍。萬里の外にと對語をなす。【至信に】至極の信心をもつて。【金作の大刀】金具を黄金で飾つた太刀。【月の入方】月の入る頃。【平沙渺々】砂原がひろ〴〵となつてゐたこと。【武師將軍】後漢の李廣のこと。文選の注に「武師將軍、拔二佩刀一刺レ山、飛泉湧出。」【飛泉】瀧のこと。【神功皇后云々】俗說にて正史になき所。【干珠】滿珠に對する語。海に投ずれば潮の干るといふ珠。【奇瑞】不思議に目出度きこと。【後なる敵に云々】自分の後方に廻つた敵にかゝらんとすれば。【島津四郎】今出川本等には曾我奥太郎時久に作る。【器量骨柄】容姿や身體の構造。【御大事に逢ひぬべき】大事の場合に役に立つべき。【詮度の合戰】勝負の決する最も重要な戰。【烏帽子子】元服の時に烏帽子親と呼ぶ人から烏帽子を冠らせ、名をつけて貰ふ者。【若宮小路】鎌倉町中央の大通。車小路、千度小路、若宮大路などともいふ。【三間の馬屋】三間四方の廐。【三つ物四つ物】鉈、鎌、熊手、槌、鋸、金材棒、鉞を七つ物といふ。又、具足、刀、太刀、弓、矢、母衣、兜の七つをいふとの說もある。茲では後說可か。何れにしても、其うちの三つを三つ物、殘りを四つ物といふ。

【此間】これまで。【傍若無人】傍に人の居ないやうに、傍憚らず氣儘の振舞すること。【あはれ敵よ】あゝ小癪の敵よといふ程の意。【ののめきて】罵り騒ぎて。【片唾を呑うで】事の成行を危ぶみ、息を凝らして見て居ること。【身繕をする】降を申入れようため、戰に亂れた身なりを正せること。【をめ〳〵】恥を知らず平然として。【譽めつる言葉を翻す】今まで譽めた言葉を反對にして。

龜壽殿令落信濃事附左近大夫僞落奥州事

爰に相模入道殿の舍弟四郎左近大夫入道の方に候ひける、諏訪の左馬助入道が子息、諏訪三郎盛高は、數度の戰に郎等皆討れぬ。只主從二騎になりて、左近大夫入道の宿所に來りて申しけるは、鎌倉中の合戰、今は是までと覺えて候間、最後の御伴仕り候はんために參つて候。早思召し切らせ給へと進め申しければ、入道あたりの人をのけさせて、潜に盛高が耳に宣ひけるは、此の亂量らざるに出來て、當家已に滅亡しぬる事更に他なし。只相模入道殿の御振舞、人望にも背き神慮にも違ひたりし故なり。但

し天縦令驕を惡み、盈を缺くとも、數代積善の餘慶家に盡きずば、此子孫の中に絶えたるを繼ぎ廢れたるを興す者なからんや。昔齊の襄公無道なりしかば、齊の國亡ぶべきを見て、其臣に鮑叔牙といひける者、襄公の子小白を取つて、他國へ落ちてけり。其間に襄公果して公孫無知に亡され、齊の國を失へり。其時に鮑叔牙小白を取り立てて、齊の國へ推し寄せ、公孫無知を討つことを得て、遂に再び齊の國を保たせける。齊の桓公は是なり。されば於レ我探く存ずる子細あれば、無二左右一自害する事あるべからず候。逝るべくは再び會稽の耻を雪めばやと思ふなり。御邊も能々遠慮を回らして、如何なる方にも隱れ忍ぶか、不レ然ば降人になりて命を繼いで、甥にてある龜壽を隱し置きて、時到りぬと見ん時、再び大軍を起して、素懷を遂げらるべし。兄の萬壽をば、五大院の右衛門に申しつけたれば、心安く覺ゆるなりと宣へば、盛高泪を抑へて申しけるは、今までは一身の安否を、御一門の存亡に任せ候ひつれば、命をば惜むべく候はず。御前にて自害仕りて、二心なき程見え進らせ候はんずる爲にこそ、是ま

で參りて候へども。死を一時に定るは易く、謀を萬代に殘すは難しと申す事候へば、兎も角も仰に隨ふべく候とて、盛高は御前を罷り立ちて、相摸殿の妾、二位殿の御局の扇が谷に御座しける處へ參りたりければ、御局を始め進らせて、女房達まで、誠に嬉しげにて、さても此の世の中は、何となり行くべきぞや。我等は女なれば、立ち隱るゝ方もありぬべし。此龜壽をば如何すべき。兄の萬壽をば五大院右衞門隱すべき方ありとて、今朝何方へやらん具足しつれば、心安く思ふなり。只此龜壽が事思ひ煩ひて、露の如くなる我身さへ、消え侘びぬるぞと泣き口說き給ふ。

盛高此事ありのまゝに申して、御心を慰め奉らばやとは思ひけれども、女姓ははかなき者なれば、後にも若し人に泄し給ふこともやと思ひ返して、泪の中に申しけるは、此世中今はさてとこそ覺え候へ。御一門大畧御自害候ふなり。大殿ばかりこそ、未だ西谷に御座候へ。公達を一目御覽じ候ひて、御腹を召さるべしと仰せ候間、御迎のために參りて候と申しければ、御局られしげに御座しつる御氣色しほ〳〵とならせ

給ひて、萬壽をば宗繁に預けつれば心安し。構へて此子をも能々隱してくれよと仰せもあへず、御泪に咽ばせ給ひしかば、盛高も岩木ならねば、心ばかりは悲しけれども、心を強く持ちて申しけるは、萬壽御料をも五大院右衞門宗繁が、具足し進らせ候ひつるを、敵見つけて追懸け進らせ給ひしかば、小町口の在家に走り入りて、若子をば刺し殺し進らせ、我身も腹切りて燒死候ひつるなり。あの若子も今日此世の御名殘、是を限と思召し候へ。とても隱れあるまじきもの故に、狩場の雉の草隱れたる有樣にて、敵にさがし出されて、幼き御尸に、一家の御名を失はれん事口惜しく候。其よりは大殿の御手にかけられ給ひて、冥途まで御伴申させ給ひたらんこそ、生々世々の忠孝にて御座候はん。疾く〳〵入り進らせ給へと勸めければ、御局を始め進らせて、御乳母の女房達に至るまで、うたての事を申す者かな。せめて敵の手にかゝらば、如何せん。二人の公達を懷き存て進らせつる人々の、手にかけて失ひ奉らんを見聞きては、如何ばかりとか思ひ遣る。只我を先づ殺して後、何とも計へとて、幼き人の前後

に取りつきて、聲も惜まず泣き悲み給へば、盛高も目くれ、心消え〳〵になりしかども、思ひ切らでは叶ふまじと思ひて、聲をいらゝげ色を損じて、御局を睨め奉り、武士の家に生れし人襁褓の中よりかゝる事あるべしと、思召されぬこそうたてけれ。大殿のさこそ待ち思召し候ふらめ。早渡り候ひて、守殿の御伴申させ給へといふまゝに走りかゝり、龜壽殿を抱きとりて、鎧の上に舁い負ひて、門より外へ走り出づれば、同音にわつと泣きつれ給ひし御聲々、遙の外所まで聞えつゝ、耳の底に止れば、盛高も泪に行きかねて、立ち返りて見送れば、御乳母の御妻と申す者は、歩跣にて人目をも憚らず、走り出させ給ひて、四五町が程は、泣きては倒れ、倒れては起き、跡につきて追はれけるを、盛高心強く行方を知られじと、馬を進めて打つ程に、後影も見えずなりにければ、御妻今は誰をそだて、誰を憑みて命を惜むべきやとて、あたりなる古井に身を投げて、終に空しくなり給ふ。其後盛高此若君を具足して、信濃へ落ち下り、諏訪の祝を憑みてありしが、建武元年の春の比、暫く關東を劫略して、天下の大

軍を起し、中前代の大將に、相摸二郎といふは是なり。
かくして四郎左近大夫入道は、二心なき侍共を呼び寄せて、我は思ふさまありて、奥州の方へ落ちて、再び天下を覆す謀を廻すべし。南部太郎、伊達六郎二人は、案内者なれば、召具すべし。其外の人々は、自害して屋形に火をかけ、我は腹を切りて燒死にたる體を、敵に見すべしと宣ひければ、二十餘人の侍共、一議にも及ばず、皆御定に隨ふべしとぞ申しける。伊達南部二人は、貌をやつし、夫になり、中間二人に物具きせて馬に乘せ、中黑の笠符をつけさせ、四郎入道を箯に乘せて、血のつきたる帷を上に引き覆ひ、源氏の兵の手負ひて、本國へ歸る眞似をして、武藏までぞ落ちたりける。其後殘し置きたる侍共、中門に走り出で、殿は早御自害あるぞ、志の人は皆御伴申せと呼ばりて、屋形に火をかけ忽に煙の中に並居て、二十餘人の者共は、一度に腹をぞ切りたりける。是を見て、庭上門外に袖を連ねたる兵共三百餘人、面々に、劣らじ劣らじと腹切りて、猛火の中へ飛びて入り、尸を殘さず燒死にけり。さてこそ四郎左

近大夫入道の、落ち給ひぬる事をば知らずして、自害し給ひぬと思ひけれ。其後西園寺の家に仕へて、建武の比京都の大將にて、時興といはれしは、此入道のことなりけり。(卷十)

【龜壽】勝院寺本等には桃壽に、天正本には兆壽に、梅松論には勝壽丸に、太平記系圖には金嘉丸に作る。【思召し切らせ給へ】思切つて自害し給への意。【今は是までと】今は最後と。【積善の餘慶】善行のよき報が子孫にまでも及ぶと。易の文言に「積善之家、必有二餘慶一」とある。【盈を缺く】易の謙卦象傳に「天道虧レ盈益レ謙」とある。【齊の襄公】史記齊世家に詳し。【會稽の恥】越王勾踐が呉王夫差に會稽山に囚へられて恥を受けたこと。【遠慮】深遠の思慮。【素懐】平素のねがひ。本懐。【死を一時に定むるは易く云々】死は易く生は難しといふ諺によつたもの。【女性ははかなき者】女子はもろく強き所なき者の意。即ち飽くまでも秘すといふことの出來ない者の意。【今はさてと】今は滅亡の時と思ふ。【大殿】世子に對しての貴人の當主を指す。こゝは高時のこと。【公達】君達にて、貴族の子供をいふ。【構へて】必ず。【萬壽御料】御料は貴人の敬稱。御寮とも書く。【具足し】おつれ申す。【在家】田舍也。【若子】若樣といふ程の意にて幼き子の敬稱。【とく〱入り進らせ給へ】此御子を渡して早く奥に入られよの意。【目もくれ】悲しさに目もくらみ。【聲をいらゝげ】聲を怒して。【襁褓】赤兒のきる着物。【守殿】守、頭、督などの尊稱。高時は相摸守であつたからかく言ふ。【祝】禰宜の

下に位して、專ら祭祀を行ふ者。【劫略】おどして取ること。【中前代】此の時行の亂を中前代の亂と呼ぶ。中前代の亂の大將の意。【案内者】よく土地の案内を知つた者。【御定】おほせ。【夫になり】人夫の形となり。【中間】侍と小者との間に位する武家の雜卒。【中黑の笠符】中黑は新田氏の紋所。輪の中に横に一線を引いたもの。笠符は前出。【箯】「あんだ」ともいひ、板を編んで架とし、棒に吊して舁いたもの。日覆がないから布などをかけたものである。編み板の音便である。

筑紫合戰の事

京都鎌倉は、已に高氏義貞の武功に依つて靜謐しぬ。今は筑紫へ討手を下されて、九國の探題英時を攻めらるべしとて、二條大納言師基卿を太宰帥に成されて、既に下し奉らんとせられける處に、六月七日、菊池、小貳、大伴が許より、早馬同時に京着して、九州の朝敵殘る所なく、退治候ひぬと奏聞す。其合戰の次第を、後に委しく尋ぬれば、主上未船上に御座ありし時、小貳入道妙慧、大伴入道具簡、菊池入道寂阿三人同

心して、御方に參るべきよしを、申し入れける間、則ち綸旨に錦の御旗を副へてぞ下されける。其企彼等三人が心中に秘して、未色に出さずと雖も、さすがに隱れなかりければ、此事頓て探題英時が方へ聞えければ、英時彼等が野心の實否を能々伺ひ見んために、先づ菊池入道寂阿を、博多へぞ呼びける。菊池此使に肝ついて、是は如何樣彼隱謀露顯して、我等を討たんためにぞ呼び給ふらん。さらんに於ては、人に先をせられては叶ふまじ。此方より遮つて博多へ寄せて、覿面に勝負を決せんと思ひければ、かねての約諾に任せて、小貳大伴が方へ觸れ遣しける處に、大伴、天下の落居未だ如何なるべしとも見定めざりければ、分明の返事に及ばず。小貳は又其比京都の合戰に、六波羅毎度勝に乘るよし聞えければ、己が咎を補はんとや思ひけん、日來の約を變じて、菊池が使、八幡彌四郎宗安を討つて、其首を探題の方へぞ出したりける。菊池入道大に怒つて、日本一の不當人どもを憑みて、此一大事を思ひ立ちけるこそ越度なれ。よし〳〵其人々の與せぬ軍は、せられぬかとて、元弘三年三月十三日の卯の刻に、僅

に百五十騎にて、探題の舘へぞ押し寄せける。
菊池入道櫛田の宮の前を打ち過ぎける時、軍の凶をや示されけん、又乘打にしたりけるをや、御尤ありけん、菊池が乘つたる馬、俄にすくみて一足も前へ進み得ず。入道大に腹を立てゝ、如何なる神にてもおはせよ、寂阿が戰場へ向はんずる道にて、乘打を尤め給ふべき樣やある。其儀ならば、矢一つ進らせん。受て御覽ぜよとて、上差の鏑を拔き出し、神殿の扉を二矢までぞ射たりける。矢を放つと均しく、馬のすくみ直りにければ、さぞとよとあざ笑ひて、則ち打通りける。其後社壇を見ければ、二丈ばかりなる大蛇、菊池が鏑に當つて死したりけるこそ不思議なれ。
探題はかねてより用意したる事なれば、大勢を城の木戸より外へ出して、戰はしむるに、菊池小勢なりといへども、皆命を塵芥に比し、義を金石に類して、攻め戰ひければ、防ぐ兵若干打たれて、詰の城へ引き籠る。菊池勝に乘つて、屏を越え、關を切り破りて、透間もなく攻め入りける間、英時こらへかねて、既に自害をせんとしける處に

小貳大友六千餘騎にて、後攻をぞしたりける。菊池入道是を見て、嫡子の肥後守武重を喚びていひけるは、我今小貳大伴に出抜れて戰場の死に赴くといへども、義の當る所を思ふ故に、命を墮さん事を悔いず。然れば寂阿に於ては、英時が城を枕にして、討死すべし。汝は急ぎ我館へ歸りて、城を堅うし兵を起して、我が生前の恨を死後に報ぜよと云ひ含め、若黨五十餘騎を引き分けて、武重に相副へ、肥後の國へぞ返しける。故郷に留め置きし妻子どもは、出しを終の別れとも知らで、歸るを今やとこそ待つらめと、哀に覺えければ、一首の歌を袖の笠符に書きて、故郷へぞ送りける。

　故郷に今夜ばかりのいのちともしらでや人のわれを待つらん

肥後守武重は、四十有餘の一人の親の只今討死せんとて、大敵に向ふ戰なれば、一所にてこそ兎も角も成り候はめと、再三申しけれども、汝をば天下のために留るぞと、父が庭訓堅ければ、武重力なく是を最後の別と見捨てゝ、泣々肥後へ歸りける、心の中こそあはれなれ。

其後菊池入道は、二男肥後三郎と相共に、百餘騎を前後に立てゝ、御攻の勢には目を懸けずして、探題の屋形へ攻め入り、終に一足も引かず、敵に指し違へ〱一人も殘さず討死す。專諸荊卿が心は恩のために仕はれ、侯生豫子が命は義に依て輕しとも、是等をや申すべき。さても小貳大伴が今度の振舞人にあらずと、天下の人に譏られながら、晒知らずして世間の樣を聞居たりける處に、五月七日兩六波羅已に責め落され千劒破の寄手も、悉く南都へ引き退きぬと聞えければ、小貳入道こは如何すべきと仰天す。さらば我探題を討奉り身の咎を遁ればやと思ひければ、先づ菊池肥後守と大友入道とが許へ、內々使者を遣して相語ふに、菊池は先に懲りて耳にも聞き入れず。大伴は我も咎ある身なれば、かくてや助かると、堅く領掌してげり。今日や明日やと吉日を選びける處に、其時小貳が隱謀の企を聞きて、事の實否を伺ひ見よとて、長岡六郎を小貳が許へぞ遣しける。長岡卽ち行き向ひて、小貳に見參すべきよしをいひければ、時節相勞はる事ありとて、對面に及ばず。長岡力なく、小貳入道が子息、筑後新小貳が

許に行き向ひいひ入れて、さりげなき様にて、彼方此方を見るに、只今打ち立たんずる形勢にて、楯を矯せ鏃を礪ぐ最中なり。又遠侍を見るに、蟬本白くしたる青竹の旗竿あり。さればこそ船上より錦の御旗を賜りたりと聞えしが、實なりけりと思ひて、對面せば、頓て指違へんずるものをと思ひける處に、新小貳何心もなげにて出合ひたり。長岡座席に著くと均しく、まさなき人々の謀反の企哉といふまゝに、腰の刀を拔きて、新小貳に飛びてかゝりける。新小貳飽くまで心早きものなりければ、側なる將棊の盤をおつ取りて、突く刀を受け留め、長岡にむずと引組みて、上を下へぞ返しける。頓て小貳が郎從共あまた走り寄りて、上なる敵を三刀刺して、下なる主を助けゝれば、長岡六郎本意を遂せずして、忽に命を失ひてげり。小貳筑後入道、さては我謀反の企、早探題に知られてけり。今は已むことを得ぬ所なりとて、大伴入道相共に七千餘騎の軍兵を率して、同五月廿五日の午の刻に、探題英時の館へ押し寄せける。世の末の風俗、義を重ずるものは少く、利に趨る人は多ければ、只今まで附き順ひつる、筑

紫九箇國の兵どもゝ、恩を忘れて落ち失せ、名をも惜まで翻りける間、一朝の間の戰に、英時遂に打ち負けて、忽に自害しければ、一族郎從三百四十人、續きて腹をぞ切りたりける。哀なるかな、昨日は小貳大伴英時に順ひて、菊池を討ち、今日又小貳大友官軍に屬して、英時を討つ。行路難不レ在ラ山ニシモ兮不レ在ラ水ニシモ、唯在リ二人情反覆之間一ニと、白居易が書きたりし筆の跡、今こそ思ひ知られたれ。(卷十一)

【靜謐】世のおだやかなこと。【英時】九州探題で、越後守久時の子。【太宰師】太宰府の長官。【早馬】急使。【京著】著京と同じく。みやこに著くこと。【妙慧】少貳貞經の法名。【具簡】大伴貞宗の法名。【寂阿】菊池武時の法名。【綸旨】勅旨に同じ。【錦の御旗】錦の地に日月を金銀に分けて付けたもの。天皇の旗。昔は出征の大將軍に賜はつたもの、鎌倉以後にては、承久の時に將軍に賜ひ、後醍醐帝亦官軍の將に賜はつた。【肝ついて】氣づいて。【此方より遮つて】此方より關係を斷絶しての意。【覿面に】まのあたりに。【約諾】約束に同じい。【天下の落居】天下が如何に落ちつくか。何れが勝つか。【不當人】正しくない人。よくない奴。【其人々の與せぬ軍は云々】其人々の味方せぬ軍はしられないといふのか、立派にして見せようといふ意。【乘打】憚つて下馬すべき所を、乘馬のまゝで通ること。【上差の鏑】上差は箙の上(表)にさす二本の矢で、多くは鏑矢で、稀には雁股をさす。天正本には雁股とある。そして次の歌をものせ

てある。「もののふの上矢の鏑一筋に思ふ心は神ぞ知るらん。」【さぞとよ】さうあるべき筈だとの意。【城の木戸】上古は城も柵も何れも「き」と呼んだ。木戸とは其の柵の一種で、要害の地にそれを幾ヶ所も設けて一の木戸、二の木戸等よんで防備した。卷七吉野城軍のなどはそれであらう。後には城郭中の門を呼ぶので、とゝのは其の後の場合のものである。【詰の城】本城。本丸のことで城の最も内部のもの。【出抜れ】だまして先んぜられたと。【義の當る所】義の上から當然かうなければならぬと思ふの意。【終の別】永久の別れ。【故郷にの歌】今宵のみにて、明日は討死すべき命であるのに、故郷の妻子は、それとも知らずに吾が歸りを待つてゐるであらう。【四十有餘】菊地家譜によれば寂阿討死の時四十二歳也。【庭訓】家庭の教訓。父母の教へ。【專諸荊卿】共に刺客で史記の刺客傳に委しく出てゐる。專諸は吳人、公子光の爲に魚腹中に匕首をかくして王僚を殺した人。荊卿は荊軻のとで、燕の太子丹の客となつて荊卿といはれ、丹のために、圖中に匕首をかくして秦王を其廷に殺さうとして自分で殺された人。【侯生豫子】侯生は侯嬴のこと。史記信陵君列傳に委しく出てゐる。侯嬴は年七十で貧しかつたが、其賢なる故を以て公子（信陵君）に敬せられた。公子が晉鄙の軍に行かうとした時侯生を訪ねて暇乞をした。侯生曰く「臣も公子に從ふべきも老いて能はず、請ふ公子の行く日を數へ、晉鄙の軍に至るの日を以て北に向つて自刎し以て公子を送らん」と。公子軍に至る日侯生果して北嚮して自刎した。唐詩選魏徵の詩に「侯嬴重二一言一」とある如く、古來其信をほめてゐる。豫子は豫讓のこと。史記刺客傳に委しい。其主の智伯が趙襄子に亡ぼされたので、其恨を報いんために、或は刑人となり、襄子の厠を塗る人夫に交つて、襄子を刺さうとして露顯し、或は身に漆を塗つて

瘋病の如くになり、橋下に潜んで襄子を刺さうとして發見され、遂に襄子の衣服を得てそれを切斷して自盡した。以上の文は和漢朗詠集の事諸荊卿之感激、侯生豫子之投身、心爲レ恩使、命依レ義輕。による。【空知らず】ぼけて知らぬ振をする。【仰天】甚しく驚くこと。【領掌】領承に同じく承知すること。【相勞る】病氣なりとて。【楯をはがせ】楯の板を綴ぢつけること。【遠侍】中門のわきにある番侍の詰所。【蟬本】旗竿の上部一尺ばかりの部分の稱。【まさなき人々】よろしからぬ人々。【世の末の風俗】末世のならひ。【行路難云々】白氏文集の太行路と題する詩の句。行路難は世に處し行くことの艱難。人情反覆は人心のかはること。

公家一統政道の事

先帝重祚の後、正慶の年號は廢帝の改元なればとてこれを棄てられ、本の元弘にかへさる。其の二年の夏比、天下一時に評定して、賞罰法令悉く公家一統の政に出でしかば、群俗風に歸し霞を披いて春日に照すが若く、中華軌を懼るゝ事、刄を履んで雷霆を戴くが如し。同年の六月三日、大塔宮志貴の毘沙門堂に御座在りと聞えしかば、畿内

近國の勢は申すに及ばず、京中遠國の兵までも、人より先にと馳參じける間、其の勢頗る天下の大半を盡しぬらんと夥し。同十三日に御入洛あるべしとさだめられたりしが、其の事なく延引あつて、諸國の兵を召され、楯を作せ鏃を砥せ、合戰の御用意ありと聞えしかば誰が身の上とは知らねども、京中の武士の心中更に穩かならず。之れに依つて、主上右大辨宰相清忠を勅使にて仰せられけるは、天下已に鎭つて、七德の餘威を偃し、九功の大化を成す處に、猶干戈を動かし士卒をあつめらるゝの條、其要何事ぞや。次に四海騷亂の程は、敵の難を遁れん爲に、一旦其姿を俗體にかへらると雖も、世已に靜謐のうへは急ぎ剃髮染衣の姿に歸し、門跡相承の業をことゝし給ふべしとぞ仰せられける。

宮、清忠を御前へ近く召させられ、勅答申させ給ひけるは、今四海一時に定つて萬民無事の化に誇ること、陛下休明の德に依り、微臣籌策の功に由る。而るに足利治部大輔高氏僅に一戰の功を以て、其の志を萬人の上に立てんと欲す。今もし其勢微なるに

乘じて之を討たずんば、高時法師が逆惡を取つて高氏の威勢の上に加ふる者なるべし。是の故に兵を擧げ武を備ふ、全く臣が罪に非ず。次に剃髮のこと、兆前に機を鑑みざる者、定めて否を飜へさんか。今逆徒測らざるに滅びて、天下無事に屬すと雖も、輿黨猶身を隱し隙を伺ひ、時を待たずといふこと有るべからず。此時上威嚴なくんば、下必ず暴慢の心あるべし。されば文武の二道同く立つて治るべきは今の世なり。我若し剃髮染衣の體に歸して虎賁猛將の威を捨てば、武に於て朝家を全うせん人誰ぞや。夫諸佛菩薩利生方便を垂るゝ日、攝受折伏の二門あり。其攝受とは、柔和忍辱の貌を作して慈悲を先と爲し、折伏とは、大勢忿怒の形を現じて刑罰を宗と爲す。況んや聖明の君賢佐武備の才を求むるとき、或は出塵の輩を俗體に歸し、或は退體の主を帝位に卽け奉る。和漢其の例多し。所謂賈島浪仙は、釋門より出て朝廷の臣と成る。我朝の天武孝謙は、法體を替て重祚の位に登る。抑我台嶺の幽溪に栖んで、纔に一門跡を守ると、幕府の上將に居して、遠く一天下を靜ると、國家の用何をか吉とせん。

此兩篇速に勅許を下さるゝ樣に奏聞を經べしと仰せられ、則ち淸忠をぞ返されける。淸忠卿歸參して、此の由を奏聞しければ、主上具に聞召され、大樹の位に居して、武備の守りを全うせんこと、げにも朝家のために人の嘲を忘るゝに似たり。高氏誅罰の事、彼の不忠何事ぞや。太平の後天下の士卒なほ恐懼の心を抱く。若し罪なくして罰を行はゞ、諸卒豈安堵の思ひを成さんや。然らば大樹の任に於ては子細あるべからず。高氏誅罰の事に至つては、堅く其企を留むべしと聖斷あつて、征夷將軍の宣旨をなさる。之に依つて宮の御憤も散じけるにや、六月十七日志貴を御立あつて、八幡に七日御逗留あつて、同二十三日御入洛あり。

其行列天下の壯觀を盡くせり。先づ一番には赤松入道圓心千餘騎にて前陣を仕る。二番に殿法印良忠、七百餘騎にて打つ。三番には四條少將隆資、五百餘騎、四番には中院中將定平、八百餘騎にて打たる。其次に花やかに鎧うたる兵五百人すぐつて、帶刀にて二行に步ませらる。其次に宮は赤地の錦の鎧直垂に、緋威の鎧の裾金物に、牡丹

の陰に獅子の戲れて、前後左右に追合ひたるを、草摺長に召させられ、兵庫鏁の丸鞘の太刀に、虎の皮の尻鞘かけたるを太刀懸の半に結うてさげ、白箆の節陰ばかり少し塗つて、鵠の羽を以て矧いだる征矢の三十六指したるを筈高に負成し、二所籐の弓の、銀のつく打たるを十文字に挙つて、白瓦毛なる馬の、尾髪飽まで足つて太く逞しきに、沃懸地の鞍置いて、厚総の鞦の、只今染出たる如くなるを、芝打長に懸けなし、侍十二人に雙口をさせ、千鳥足を踏ませて、小路を狹しと歩ませたり。（中略）

總じて此君笠置へ落させ給ひし刻、解官停任せられし人々、死罪流刑に逢ひし其子孫、此處彼處より召出され一時に蟄懐を開けり。されば日來武威に誇り、本所を無する權門高家の武士共、いつしか諸庭の奉公人となり、或は輕軒香車の後に走り、或は青侍格勤の前に跪く。世の盛衰の轉變、嘆くに叶はぬ習とは知りながら、今の如くにて公家一統の天下ならば、諸國の地頭御家人は皆奴婢雜人の如くにてあるべし、哀如何なる不思議も出來て、武家四海の權を執る世の中に又成れかしと思ふ人のみ多かり

けり。

同八月三日より軍勢恩賞の沙汰あるべしとて、洞院左衛門督實世卿を上卿に定めらる。之に依て諸國の軍勢、軍忠の支證を立て申狀を捧げて恩賞を望む輩、何千萬人といふ數を知らず、實に忠ある者は功を憑んで諛はず、忠無き者は奥に媚びて竈に求め上聞を掠めし間、數月の內に僅に廿餘人の恩賞を沙汰せられたりけれども、事正路にあらずとて、軈て召返されけり。さらば上卿を改めよとて、萬里小路中納言藤房卿を上卿に成され、申狀を附渡さる。藤房之を請取り忠否を糺し淺深を分ち、各申與へんとしたまひける處に、內奏の祕計に依つて、只今まで朝敵なりつる者も安堵をたまはり、更に忠なき輩も五箇所十箇所の所領を賜はりける間、藤房諫言を納れかねて病と稱して奉行を辭せらる。かくて默止すべきにあらずとて、九條民部卿を上卿に定めて御沙汰ありける間、光經卿、諸大將に其手の忠否を委細尋究めて申與へんとし給ひける處に、相摸入道の一跡をば內裏の供御料所に置かる。舍弟四郎左近大夫入道の跡を

ば、兵部卿親王へ進せらる。大佛陸奥守の跡をば准后の御領になさる。此外相州の一族、關東家風の輩が所領をば、指せる事もなき郢曲妓女の、輩蹴鞠伎藝の者共、乃至衞府諸司官女官僧まで、一跡二跡を合せて、内奏より申し賜はりければ、今は六十六箇國の内には、錐を立つるの地も軍勢に行はるべき闕所はなかりけり。斯りければ光經卿も、心ばかりは無偏の恩化を申沙汰せんと欲し給ひけれども、叶はで年月をぞ送られける。

又雜訴の沙汰のためにとて、郁芳門の左右の脇に、決斷所を造らる。其議定の人數には、才學優長の卿相雲客、紀傳明法外記官人を三番に分つて、一月に六箇度の沙汰の日をぞ定められける。凡そ事の體嚴重に見えて堂々たり。されども是尚理世安國の政にあらざりけり。或は内奏より訴人勅許を蒙れば、決斷所にて論人に理を付けられ、又決斷所にて本主安堵を賜はれば、内奏より其地を別人の恩賞に行はる。此の如く互に錯亂せし間、所領一所に四五人の給主附いて、國々の動亂更に休む時なし。去

る七月の初より中宮御心煩はせ給ひけるが八月二日に隱れさせ給ふ。是のみならず、十一月三日、春宮崩御なりにけり。是徒事にあらず亡卒怨靈どもの所爲なるべしとて、其の怨害を止め、善所に赴かしめんが爲に、四箇の大寺に仰せて大藏經五千三百卷を一日中に書寫され、法勝寺にて則ち供養を遂げられけり。（卷十二）

【先帝】 後醍醐天皇。【重祚】 增鏡に「こたみ內裏へ入らせ給ふべき儀重祚などにてあるべけれども、璽の箱を御身にそへられたれば、只遠き行幸の還御の儀式にあるべきよし定めらる。」とあれば、重祚といふは誤なり。【廢帝】 光嚴帝。【公家一統の政】 公家は武家に對し朝家のこと。朝廷で一つに統べた政治。【群俗風に歸し云々】 帝範下務農篇に、「惠可レ懷也。則殊俗歸レ風、若三披レ霜而照二春日一、威可レ懼也、則中華懼レ軏若三履レ刃而戴二雷霆一」とあるによつた文。萬民が歸服して春日に照されるが如く皇恩に浴し、中國の民が皇威を懼れること刃をふみ雷を戴くが如くであつたといふこと。【志貴の毘沙門堂】 大和國生駒郡平群村字志貴にある有名の寺。【七德の餘威を假し云々】 武を止めて善政を施すべき場合にといふ意。七德は武の德で、禁レ暴戢レ兵、保レ天、定レ功、安レ民、和レ衆、豐レ財の七。九功は善政で、左傳に「六府三事謂二之九功一」とあるもの、即ち金、木、水、火、土の穀の六と、正德、利用、厚生の三と。こゝの文は、帝範崇文篇の「假二七德之餘威一敷二九功之化一」によつたもの。【干戈を動かし】 干戈はたてとほこ。武器を動かすこと。【門跡相承の業】 門跡として承けついだ業、即ち專ら佛道に携はるべしといふこと。【休明の德】 休は美、美しく明か

な徳。【微臣籌策の功】微臣は親王自らを指す。籌策ははかりごと。【高時法師が逆惡云々】高徳の逆惡と高氏の威勢とを合した恐るべきものとならうといふ意。【兆前に機を鑑みざる】事のきざしの現はれる前に其きざしを知る。【香を翻す】大いに驚きあきれること。【與黨】賊のなかま。【文武二道共に立つて云々】今の世は文武二道共に存して始めて治まるべき時なり。【虎賁】古の支那の勇士に孟賁といふものがあり、其の猛虎の如きより虎賁といふ。【利生方便】衆生に利益を與へる方便手段。【攝受折伏】佛法を弘通し衆生を救はんために設けた二門。攝受とは慈悲を主とし法敵を懐けて歸依させること。折伏とは威力を主とし邪惡・妄執をくじき從はせること。【大勢忿怒の形】大なる威勢と忿怒の相と。不動明王等の形相をいふ。【退讓の主】讓位の天子。【賈島浪仙】賈島字は浪仙、唐の人。始めは僧となり無本といひ、後還俗して遂州長江の主簿となる。詩人で、苦吟を以て有名の人。推敲といふ語も彼の苦吟から出た。【天武孝謙は云々】天武帝は始め剃髪して吉野に入られ、後に帝位に卽かれ、孝謙帝は重祚せられて稱德帝となられた。その事實をいふ。【台嶺】比叡山の異名。【幕府の上將】近衞府を幕府といひ、上將は近衞大將のこと。親王は近衞大將ではないが大將軍として居られようとしたのである。【兩篇】兩條の義。【大樹】馮異の故事より將軍の異名とす。【帶刀】將軍出行の時護衞として帶刀して供奉した役。【裾金物】鎧の袖・草摺の菱縫の板に三所に打つた金物。草花等好みによつて種々あつたが、親王は牡丹に獅子の金物である。【兵庫鎖の丸鞘の太刀】兵庫鎖は兵庫寮で造つた銀の鎖。丸鞘の太刀は圓い鞘といふ意でなく、鞘まですべて黄金で包んだ、太刀。此太刀を前の鎖を帶取にして佩いたのだ。【尻鞘】太刀の鞘を包んだ毛皮作の袋。太刀の錆を防ぐ料

である。【太刀懸】左の草摺の最上部を絲を用ひず染革で張つた部分をいふ。【白箆の節陰】白箆は漆も塗らず焦しもせぬ矢竹。節陰は矢竹の節のくぼき所に塗つたものをいふ。矢竹は其のくぼい所から割れる故漆をためて日蔭にしたる也。【鵠の羽】はくてうの羽。【筈高】矢筈を高く也。【二所籐】籐を二所づゝよせて卷いた弓。【つく】弓の握り革の上に打つた折釘。矢が拳から外れない爲のもの。【十文字に握る】弓と臂と十文字になるやうに握る意か。【白瓦毛】瓦毛は白く土器のやうな色。それの白ばんだ毛色。【沃懸地】一面に金粉をまいた塗方。【厚總の鞦の云々】厚總は大總とも云ひ、總を數多くつけたもの。唯今染め出したやうな色の鮮明な鞦である。色は多く緋を用ひた。【芝折長】芝折は鞦の裾。それを長く垂れたる也。【雙口】侍どもを吾が馬の左右に列ねたのをいふ。侍も吾も馬に乘つてゐる故に雙口といふ。【千鳥足を踏ませ】五武器談に「馬の足なみのはら〳〵と千鳥の飛ぶ羽音の如くなるをいふ也」とある。【解官】全く官を解かるゝこと。【停任】過失等にて一時任をとめられると。【蟄懐】ふさいだ心。不平。【本所を無みする】領家を蔑視する。【諸庭】諸處の公卿の家門。【輕軒香車】輕やかに走る美しい車。軒も車。【青侍格勤】何れも位ひくい侍。公家の侍をいふ。【上卿】公事のある時首座となる人。【軍忠の支證】軍功のあつた證據を擧げること。【申狀】上申の文書。軍忠狀のことである。【奥に媚て云々】君側の人にも媚び執政の人にも媚びること。論語八佾篇に「王孫賈問曰、與其媚於奥寧媚於竈何謂也云々。」とある。【上聞を掠め】天皇の御耳をもけがしたこと。奉行に上申するのみでなく、天子にも内奏したりしたので功賞が進捗しなかつたのである。【正路】正道に同じ。【申狀を附渡さる】申狀を引き繼ぐ。【内奏】君側に

あつて内密に奏聞すること。【九條民部卿】藤原定光の子光經。【兵手】其の部下の將士の忠否。【一跡】領土全體。【准后】藤原康子のこと。前に出づ。【指せる事もなき】さしたる功勞のなき。【郢曲】俗曲のこと。【一跡二跡】領地一箇所二箇所。【闕所】領主のかけた土地。【雜訴】種々雜多の訴訟。【郁芳門】大内裏外廓東方の最南の門。【紀傳】歴史・文章の道を修めたる者。【明法】法律に明かなる者。紀傳・明經・明法・算道の四つが大學の學科であつた。【外記】太政官の主典に當る官で、主として勅書奏文を勘考した。故に文筆に優れた人を任じた。中務省の内記に對す。【理世安國】世をおさめ國を安んずる。【訴人】原告のこと。【論人】被告のこと。【本主安堵】本來の所有主が其所有なることを確認されること。【春宮】光嚴天皇の太子康仁であらうと言はれる。【善所に赴かしめん】善所は六道のうち人界、天上界及び淨土のこと。【四箇の大寺】東大寺・興福寺・延暦寺・園城寺の四つ。【大藏經】佛教經典の總稱。一切經ともいふ。

藤房卿遁世の事

其後藤房卿連續して、諫言を上りけれども、君遂に御許容なかりしかば、大内裏造營の

事をも止められず、蘭籍桂筵の御遊猶頻なりければ、藤房是を諫めかねて、臣たる道我に於て致せり。よしや今は身を退かんにはしかじと、思ひ定めてぞ座しける。三月十一日は、八幡の行幸にて、諸卿皆路次の行粧を事とし給ひけり。藤房も時の大理にて御坐する上、今は是を限の供奉と思はれければ、御供の官人、悉く目を驚す程に出立たれたり。看督長十六人冠の老懸に、袖單白くしたる薄紅の袍に、白袴着しいちひはゞきに、亂緒をはいて列をひく。次に走り下部八人、細烏帽子の上下、一色の家の紋の水干著て、二行に歩みつゞきたり。其後大理は、卷纓の老懸に、赤裏の表の袴、靴の沓はいて、蒔繪の平鞘の太刀を佩き、あまの面の羽づきたる平胡籙の箙を負ひ、甲斐の大黑とて、五尺三寸ありける名馬の、太く逞しきに、いかけ地の鞍置きて、水色の厚總の鞦に、唐絲の手綱ゆるらかに結びてかけ、鞍の上閑に乘りうけて、町に三處手綱入れさせ、小路に餘りて歩ませ出でたれば、馬副四人鵠冠に猪の皮の尻鞘の太刀佩きて、左右にそひ、かい副の侍二人をば、烏帽子に花田の打絹を重ねて、袖單を出し

たる水干着たる舍人の雜色四人、次に白張の香の衣重ねたる童一人、次に細烏帽子に、袖單白くして、海松色の水干着たる調度懸六人、次に細烏帽子に、香の水干着たる舍人八人、其次に直垂着の雜人等百餘人、警蹕の聲高らかに、傍を拂ひて供奉せられたり。伏拜に馬を留めて、男山を登り給ふにも、榮行く時もありにしものなりと、明日はいはれぬべき身の程もあはれに、石清水を見給ふにも、可レ澄末の久しさを、君が御影に寄せて祝ひし、其言の葉の引き替へて、今よりは、心の垢を雪め、憂世の耳を洗ふべき、便になりぬと思ひ給ひ、大菩薩の御前にして、潜に自受法樂の法施を獻りても、道心堅固速證菩提と祈り給へば、和光同塵の月明に、心の闇をや照すらんと、神慮も暗に量られたり。

御神拜一日ありて、還幸事散じければ、藤房致仕のために參內せられ、龍顏に近づき進らせん事、今ならでは何事にかと思はれければ、其事となく御前に祗候して、龍逢比干が諫に死せし恨、伯夷叔齊が潔きを踏みにし跡、終夜申し出でゝ、未明に退出し

給へば、大内山の月影も、涙に陰りて幽なり。陣頭より車をば宿所へ返し遣し、侍一人召具して、北山の岩藏といふ所へ赴かれけり。此處にて不二房といふ僧を戒師に請じて、遂に多年拜趨の儒冠を解いで、十戒持律の法體に成り給ひけり。家貧しく年老いぬる人だにも、難離難捨恩愛の舊きすみかなり。況んや官祿共に卑からで、齡未四十に足らざる人の、妻子を離れ父母を捨てゝ、山川抖藪の身となりしは、ためし少き發心なり。

此事叡聞に達しければ、君無限驚き思召して、其在所を急ぎ尋ね出し、再び政道輔佐の臣となるべしと、父宣房卿に仰下されければ、宣房卿泣々車を飛して、岩藏へ尋ね行き給ひけるに、中納言入道は、其朝まで岩藏の坊におはしけるが、是も尙都近きあたりなれば、浮世の人、事問ひかはすこともこそあれと厭はしくて、何地といふ方もなく、足にまかせて出で給ひけり。宣房卿彼坊に行き給ひて、左樣の人やあると尋ねられければ、主の僧さる人は、今朝まで是に御座候ひつるが、行脚の御志候ふとて、何地へや

らん、御出で候ひつるなりとぞ答へける。宣房卿悲歎の泪を抑へて、其住み捨てたる庵室を見給へば、誰見よとてか書き置きける、破れたる障子の上に、一首の歌を殘されたり。

住み捨つる山をうき世の人とはゞあらしや庭の松にこたへん

棄恩入無爲眞實報恩者といふ文の下に、

白頭望斷萬重山　噴切恩波盡底乾
不是胸中藏五逆　出家端的報親難

と黃檗の大義渡を題せし、古き頌を書かれたり。さてこそ此人たとひ何處の山にありとも、命の中の再會は、叶ふまじかりけるよと、宣房卿戀慕の泪に咽びて、空しく歸り給ひけり。

抑彼宣房卿と申すは、吉田大貳資經の孫、藤三位資通の子なり。此人閑官の昔、五部の大乘經を、一字三禮に書き供養して、子孫の繁昌を祈らんために、春日の社にぞ奉

納せられける。其夜の夢想に、黃衣著たる神人、榊の枝に立文を著けて、宣房卿の前に差し置きたり。如何なる文やらんと怪みて、急ぎて是を披きて見給へば、上書に、萬里小路一位殿へと書きて、中には速證無上大菩提と、金字にぞ書きたりける、夢覺めて後靜に是を案ずるに、我朝廷に仕へて、位一品に至らんずる條疑なし。中に見えつる金字の文は、我則ち此作善を以て、後生善處の望を遂すべきものなりと、二世の悉地共に成就したる心地して、たのもしく思ひ給ひけるが、果して元弘の末に、父祖、代々、絕えて久しき從一位になり給ひけり中に見えし金字の文は。子息藤房卿出家得道し給ふべき、其善緣ありと示されける明神の御告なるべし。誠に百年の榮耀は風前の塵、一念の發心は命後の燈なり。一子出家すれば、七世の父母皆佛道を成すと如來の所說明なれば、此人一人の發心に依りて、七世の父母諸共に、成佛得道せんこと、歎の中の悅なるべければ、是を誠に第一の利生預りたる人よと、智ある人は聞きて感歎せり。（卷十三）

【蘭籍桂筵】 詩歌管弦の美しき席。【臣たる道我に於て致せり云々】 孝經注に「事レ君之禮、値二其有一レ罪、必犯二嚴顏一以レ道諫爭、三諫不レ納奉レ身以退、有二匡正之忠一無二阿順之從一良臣之節也」とある。其他諫めて用ひられざれば身を退くといふ思想は、儒書の到る處に見られる所である。【八幡の行幸】 石清水八幡宮への行幸である。此社は朝廷の尊信が厚く、賀茂の北祭に對し南祭といひ、毎年二回祭があつた外、概ね一代に一度、行幸があつた。【路次の行粧】 行幸の途中のいでたちを如何にせんかに苦心した。【大理】 檢非違使別當の唐名。【看督長】 檢非違使廳の下官にて罪人追捕を掌る者。【老懸】 武官の冠につけた飾。絲で作り兩耳の上に菊花を半切した如き形につける。【袖單】 下著の單衣を略し、大帷（かたびら）に單衣の袖のみつけたもの、【いちひはゞき】 からむしといふ草の皮を編みて作れる脛當。衞府の官人等が儀式の時に著く。【亂緒】 藁ぐつの一種。藁みごで鼻緒の所に飾をしたもの。【走り下部】 檢非違使廳の下官。逮捕押送を主とする。放免ともいふ。【細烏帽子】 立烏帽子の細く長きもの。【水干】 狩衣を一層簡單にせし衣服。【卷纓】 纓は冠の後方に垂れるもので、立纓・垂纓・卷纓等種類が多い。卷纓は內方に卷いて黑塗の夾木でとめておくもの。大將以下五位以上弓箭を帶する時に用ふ。【靴の沓】 革製黑塗の靴。束帶の時のみ用ふ。【平鞘の太刀】 衞府の太刀の別名。【あまの面の羽】 矢羽の名で安摩の舞の時にかぶる面の如き斑點のある羽。【平胡簶】 平形の胡簶。壺胡簶に對す。【唐絲の手綱】 唐絲織の手綱。【乘りうけて】 乘り浮けて也。【町に三所手綱入れさせ】 不明。【緌冠】 細纓に老懸したる褐色の冠。【かい副】 付添也。【花田の打絹】 はなだ色卽ち藍の薄き色した打絹。打絹は打つて光澤を出した絹。【舍人の雜色】 雜役に仕はれる者。【香の衣】 香染の衣。香染

は赤黑くやゝ黃ばんだ色。【海松色】 黃色を帶びた綠色。【調度懸】 出行の時弓箭を持たする役。【警蹕】 先拂して人を警めること。【伏拜】 昔神社の入口に設け、木を橫へて不淨の者を防ぎたる所。【榮行時もありにし云々】 古今集雜上にある「今こそあれわれも昔は男山さかゆく時もありこしものを」によりて書いたもの。【石淸水を見給ふにも云々】 君が代の萬代を石淸水の永久に澄むことにかけて祝つたのに、今は其淸水が俗心を洗ふ便になりたりとの意。前半は何かの歌によつたらしいが考へ得ない。【自受法樂の法施】 自身が實際に體受すべき最上最勝の法樂のための祈願。【速證菩提】 頓證菩提と同じ。證はさとる意、菩提は梵語で正覺と譯す、正しいさとり。速かに佛道修行を成就すること。【和光同塵の月云々】 諸佛が本地の光を隱して顯さぬを和光といひ、塵俗に應同せられることを同塵といふ。玆にては八幡神の神德を月にたとへたもの。【致仕】 官を辭して引退すること。【祇候】 つゝしんで伺候すること。【龍逢比干】 龍逢は夏の桀王の賢臣で、桀の無道を諫めて斬首に遭ひ、比干は殷の紂王の臣、屢々其の無道を諫め、紂王に「聖人の心には七つの竅があるといふ」と皮肉られて胸を割かれた。【伯夷叔齊】 孤竹君の二子、周武王の殷を伐たうとするを諫めてきかれず、周の世になるに及び其の粟を食ふを恥ぢ、首陽山に隱れ薇を食として餓死した。【大內山】 禁中のこと。【陣頭】 禁中の陣の前。陣は禁中で衞府の官人の詰めて居る所。【岩藏】 山城國愛宕郡岩倉村。【戒師】 戒を授ける法師。【多年拜趨の儒冠】 多年勤仕の文官といふ程の意。【十戒持律】 十戒を持つこと。十戒については諸說あり。不殺・不盜・不邪婬・不妄語・不飮酒・不說過罪・不自讚毀他・不慳・不瞋・不謗三寶が普通か。【齡末四十】 公卿補任に藤房出家年三十九とある。【山川抖擻】 抖擻は梵語頭陀に

充てた語。行脚と同じ。【住み捨つる云々の歌】 自分のすて去る山寺を人が訪はゞ、庭の松風のみが答へるであらう。【棄恩入無爲云々】 此の上に「流轉三界中、恩愛不レ能レ斷」といふ句があつて、受戒の時に唱へる四句の偈といふもの。【閑官】 ひまの多い官。【五部の大乘經】 舊譯華嚴經六十卷・方等大集經三十卷・大品般若經三十卷・法華經十卷・涅槃經四十卷の五部をいふ。【一字三禮】 一字書く毎に三度禮拜すること。【立文】 書狀の包紙の上下を折つたもの。書狀を木の枝につけるは昔の習慣であつた。【速證無上大菩提】 速證菩提に同じ。【一品】 一位といふに同じ。【作善】 善事を爲すこと。佛像を造り、經を寫し、寺を建てる等。【後生善所】 現世安穩と對になつた語。後世に善所に生れること。善所は人界・天上又は諸佛の淨土。【二世の悉地】 現未二世に於いて佛の妙果を得たこと。悉地は梵語、妙成就と譯す。現世で一位となり來世には善所に生れる譯合故にいふ。【一念の發心云々】 專心一意して得菩提の心を發することとは死後の光明となつて善所に導くといふ意味。【一子出家すれば云々】 于蘭盆經に「乞願、便使二現在父母壽命百年無病一、無二一切苦惱之患一、乃至七世父母離二餓鬼苦一、得レ生二天人中一、福樂無レ極。」とあるによる。【第一の利生云々】 第一の利生得たる人よの意か。利生は衆生を利すること。佛の御利益。

兵部卿宮薨御の事附干將莫耶が事

左馬頭既に山の内を打ち過ぎ給ひける時、淵邊伊賀守を近づけて宣ひけるは、御方無勢に依りて一旦鎌倉を引き退くといへども、美濃、尾張、三河、遠江の勢を催して、頓て又鎌倉へ寄せんずれば、相摸次郎時行を滅さんことは、踵を廻らすべからず。猶も只當家のために、始終可レ被レ成レ讎は、兵部卿親王なり。此御事死刑に行ひ奉れといふ勅許はなけれども、此次に只失ひ奉らばやと思ふなり、御邊は急ぎ藥師堂の谷へ馳せ歸りて、宮を刺し殺し進らせよと下知せられければ、淵邊畏りて候ふとて、山の内より主從七騎引き返して宮の坐しける牢の御前へ參りたれば、宮はいつとなく闇の夜の如くなる土牢の中に、朝になりぬるをも知らせ給はず、猶燈を挑げて御經あそばして、御座ありけるが、淵邊が御迎に參つて候ふよしを申して、御輿を庭に舁き居ゑたりけるを御覽じて、汝は我を失はんとの使にてぞあるらん。心得たりと仰せられて、淵邊が太刀を奪はんと走りかゝらせ給ひけるを、淵邊持たる太刀を取り直し、御膝の邊をしたゝかに打ち奉る。宮は半年ばかり牢の中に居屈らせ給ひたりければ、御足も

快く立たざりけるにや、御心は八十梟に思召しけれども、覆に打ち倒され、起上らんとし給ひける處を、淵邊御胸の上に乘りかゝり、腰の刀を拔きて御頸を掻かんとしければ、宮御頸を縮めて、刀のさきをしかと咋へさせ給ふ。淵邊したゝかなる者なりければ、刀を奪はれ進らせじと、引き合ひける間、刀の鋒一寸あまり折れて失せにけり。淵邊其刀を投げ捨て、脇差の刀を拔きて、先づ御心もとの邊を二刀刺す。刺されて宮少し弱らせ給ふ體に見えける處を、御髮を掴みて引き擧げて、即ち御首を掻き落す。牢の前に走り出でゝ明き所にて御首を見奉るに、噬ひ切らせ給ひたりつる刀の鋒、未御口の中に留りて、御眼猶生きたる人の如し。淵邊是を見て、さる事あり。斯樣の頸をば、主には見せぬことぞとて、側なる藪の中へ投げ捨てゝぞ歸りける。

去程に御かいしやくのために、御前に候はれける、南の御方此有樣を見奉りて、餘の恐しさと悲しさに、御身もすくみ、手足もたゝでましましけるが、暫く肝を靜めて、人心つきければ、藪に捨てたる御首を取り擧げたるに、御膚も猶冷えず、御目をも塞

がせ給はず、只元の氣色に見えさせ給へば、こは若し夢にてやあるらん、夢ならば覺むるうつゝあれかしと、泣き悲み給ひけり。遙にありて理致光院の長老、かゝる御事と承り及び候ふとて、葬禮の御事取り營み給へり。南の御方は、軈て御髮落されて泣々京へ上り給ひけり。

抑淵邊が宮の御首を取りながら、左馬頭殿に見せ奉らで、藪の傍に捨てける事、聊思へる所あり。昔周の末の代に、楚王といひける王、武を以て天下を取らんために、戰を習はし劍を好む事年ひさし。或時楚王の夫人、鐵の柱に倚り傍ひて、すゞみ給ひけるが、心地たゞならず覺えて、忽ち懷姙し給ひけり。七月を過ぎて後、產の席に苦みて、一の鐵丸を產み給ふ。楚王是を怪しとし給はず。如何樣是金鐵の精靈なるべしとて、干將といひける鍛冶を召され此鐵にて寶劍を作りて進らすべきよしを仰せらる。干將此鐵を賜りて、其妻の鏌耶と共に呉山の中に行きて、龍泉の水に淬して、三年が內に、雌雄の二劍を打ち出せり。劍成つて未奏せざる前に鏌耶干將に向ひてい

ひけるは、此二つの劒、精靈暗に通じて坐ながら怨敵を滅すべき劒なり。我今懐姙せり。産む子は必ず猛く勇なるべし。然れば一の劒をば、楚王に獻るとも、今一の劒をば隱して、我子に與へ給ふべしといひければ、干將鏌耶が申すにつきて、其雄劒一をば楚王に獻じて、一の雌劒をば、未胎內にある子のために、深く隱してぞ置きける。楚王雄劒を開きて見給ふに、誠に精靈ありと見えければ、箱の中に收めて置かれたるに、此劒箱の中にして、常に悲泣の聲あり。楚王怪みて、群臣に其泣く故を問ひ給ふに、臣皆申さく、此劒必ず雄と雌と二つあるべし。其の雌雄一所にあらざる間、是を悲みて泣く者なりとぞ奏しける。楚王大に怒りて、卽ち干將を召し出され典獄の官に仰せて、首を刎ねられけり。

其後鏌耶子を生めり。面貌尋常の人に替りて、長の高き事一丈五尺、力は五百人が力を合せたり。面三尺ありて眉間一尺ありければ、世の人其名を眉間尺とぞ名づけゝる。年十五になりける年、父が書き置きける詞を見るに。

日出北戸　南山其松
松生於石　劍在其中

と書けり。さては此劍北戸の柱の中にありと心得て、柱を破りて見るに、果して一つの雌劍あり。眉間尺是を得て、哀楚王を討ち奉りて父の仇を報ぜばやと思ふ事、骨髓に徹り、楚王も眉間尺が憤を聞き給ひて、彼世にあらんほどは、心安からず思はれければ、數萬の官軍を差し遣して、是を攻められけるに、眉間尺一人が勇力に摧かれ、其雌劍の刃に觸れて、死傷する者幾千萬といふ數を知らず。斯る處に、父干將が古の知音なりける甑山人來りて眉間尺に向ひていひけるは、我汝が父干將と、交を結ぶ事年久しかりき。然れば其朋友の恩を謝せんため、汝と共に楚王を可奉討事を謀るべし。汝若し父の仇を報ぜんとならば、持つ所の劍の鋒を三寸嚙ひ切りて口の中に含みて死すべし。我汝が頭を取りて、楚王に獻ぜば、楚王悅びて必ず汝が頭を見給はん時、口に含める劍のさきを楚王に吹きかけて、共に死すべしといひければ、眉間尺大

に悦びて、即ち雌劍の鋒三寸喫ひ切りて、口の中に含み、自己が頭をかき切りて、客の前にぞ指し置きける。客眉間尺が首を取りて、即ち楚王に獻る。楚王大に喜びて是を獄門に懸けられたるに、三月まで其頭爛れず、瞋レ目切レ齒常に齒喫をしける間、楚王是を恐れて敢て近づき給はず。是を鼎の中に入れ、七日七夜までぞ煮られける。餘につよく煮られて、此頭少し爛れて目を塞ぎたりけるを、今は子細あらじとて、楚王自ら鼎の蓋を開させて、是を見給ひける時、此頭口に含みたる劍の鋒を、楚王にはつと吹き懸け奉る。劍の鋒誤らず、楚王の首の骨を切りければ、楚王の頭忽に落ちて、鼎の中へ入りにけり。楚王の頭と眉間尺が首と、煎え揚る湯の中にして、上になり下になり喫ひあひけるが、動もすれば、眉間尺が頭は下になりて、喫負けぬべく見えける間、客自ら己が首を掻き落して鼎の中へ投げ入れ、即ち眉間尺が頭と相共に、楚王の頭を喫ひ破りて、眉間尺が頭は死して後父の怨を報じぬと呼はり、客の頭は泉下に朋友の恩を謝しぬと悦ぶ聲して、共に皆煮え爛れて失せにけり。

此口の中に含みたりし三寸の劒、燕の國に留りて、太子丹が劒となる。太子丹、荊軻秦舞陽をして秦始皇を伐たんとせし時、自ら差圖の箱の中より飛び出でゝ、始皇帝を追ひ奉りしが、藥の袋を投げ懸けられながら、口六尺の銅の柱の半を切りて、遂に三に折りて失せたりし、匕首の劒是なり。其雌雄二つの劒は、干將鏌耶の劒といはれて、代々の天子の寶たりしが、陳の代に至りて俄に失せにけり。或時天に一の惡星出でゝ、天下の妖を示すことあり。張華雷煥といひける二人の臣、樓臺に上りて、此星を見るに、舊き獄門の邊より、劒の光天に上りて、惡星と闘ふ氣あり。張華怪みて、光の指す所を掘せて見るに、件の干將莫耶の劒、土百尺が下に埋れてぞ殘りける。張華雷煥是を取りて、天子に獻らんために、自ら是を帶し、延平津といふ澤の邊を通りける時、劒自ら拔けて水の中に入りけるが、雌雄二つの龍となりて、遙の浪にぞ沈みける。淵邊かやうの前蹤を思ひければ兵部卿親王の刀の鋒を喫ひ切らせ給ひて、御口の中に含まれたりけるを見て、左馬頭に近づけ奉らじと、其御首をば藪の傍に棄てける

となり。（巻十三）

【左馬頭】尊氏の弟左馬守直義。北條時行、所謂中前代の亂を起して鎌倉に迫つたので、執權たりし直義は鎌倉を落ちることになつたのだ。【無勢】小勢。【踵を廻すべからず】踵をめぐらす暇もないこと。即時。【此ついで】此戰亂のついでに。どさくさ紛れにの意である。【やたけに】八十梟は當字である。彌猛の義で、いよいよ勇むこと。【腰の刀】腰刀のこと、鞘巻と同じ。【したゝかなる者】剛の者。【脇差】八九寸の短刀。懷中にさし置く。後のあひ口なり。【さる事あり】然るべき故事ありといふこと。後の眉間尺のことをいふ。【御かいしやく】附添うて世話すること。【南の御方】藤保藤の女。上臈。【遙にありて】遠くに隔りて。【淬して】刃を燒きては水中に入れて鍛へること。【精靈暗に通じ】刀にたましひが入つてゐると。【眉間】眉と眉との間。【眉間尺】眉間が一尺あるからの名。此話は祖庭事苑といふ書に委しい。【知音】知己と同じ。【獄門に懸く】さらし首にすること。獄屋の門の邊の木又は刑場の木架の上に首をさらすこと。【泉下】黄泉の下。めいど。【太子丹】燕の孝王の太子。荊軻と秦舞陽とを遣し、秦王を殺さうとした。彼等は圖卷の中に匕首をひそましめて殺さうとして顯はれて殺された。其ことを記してある。【口六尺の】直徑六尺。【陣】六國の一。【前蹤】前例に同じ。

長年歸洛の事附内裏炎上の事

那和伯耆守長年は、勢多を堅めて居たりけるが、山崎の陣破れて、主上早東坂本へ落させ給ひぬと聞えければ、是より直に坂本へ馳せ參ずる事は安けれども、今一度內裏へ馳せ參らで、直に落ち行かんずることは、後難あるべしとて、其勢三百餘騎にて、十日の暮程に又京都へぞ歸りける。今日は惡日とて、將軍未都へ入り給はざりけれども、四國、西國の兵ども、數萬騎打ち入りて、京白河に充滿たれば、帆懸船の笠符を見て、こゝに要り彼處に遮りて、打ち留めんとしけれども、長年かけ散しては通り、打ち破りては圍を出で、十七度まで戰ひけるに、三百餘騎の勢次第々々に討れて、百騎ばかりになりにけり。

されども長年遂に討れざれば、內裏の置石の邊にて、馬より下り冑を脫ぎ、南庭に跪

く。主上東坂本へ臨幸成りて、數尅の事なれば、四門悉く閉ぢて、宮殿正に寂寞たり。然れば早甲乙人ども、亂れ入りけりと覺えて、百官禮儀を調し、紫宸殿の上には、賢聖の障子引き破られて、雲臺の畫圖、此處彼處に亂れたり。佳人晨粧を飾りし弘徽殿の前には、翡翠の御簾半より絶えて、微月の銀鈎虛しく懸れり。長年つく〴〵と是を見て、さしも勇める夷心にも、あはれの色やまさりけん。泪を兩眼に餘して、鎧の袖をぞぬらしける。良且くやすらひて居たりけるが、敵の鬨の聲ま近く聞えければ、陽明門の前より馬に打ち乘りて、北白川を東へ今路越に懸りて、東坂本へぞ參りける。其後四國西國の兵ども、洛中に亂れ入りて、行幸供奉の人々の家、屋形々々に火を懸けたれば、時節辻風はげしく吹き布きて、龍樓竹苑准后の御所、式部卿親王常盤井殿、聖主御遊の馬場の御所、煙同時に立ち登りて、炎四方に充滿たれば、猛火內裏に懸りて、前殿后宮諸司八省、三十六殿十二門、大厦の搆へ、徒に一時の灰燼となりにけり、越王吳を亡して、姑蘇城一片の煙となり、項羽秦を傾けて、咸陽宮三月の火を燼にせ

し、呉越秦楚の古も、是にはよも過ぎじと、あさましかりし世間なり。（卷十四）

【勢多を堅めて】尊氏直義が謀反して京都に攻め上つて來たので、京都では義貞を主とし、勢を分けて勢多、宇治、山崎、大渡等を守らせることにした。長年は勢多を防守した大將であつた。【山崎の軍破れて】山崎を固めたのは脇屋右衞門佐義助等であつたが、此方面が先づ破れた。【東坂本】近江國比叡山の東麓にある。【惡日】わるい日。陰陽道から來た迷信で、其日は日が惡いから將軍は入京しなかつた。【將軍】尊氏のこと。北條時行を討つた功により、宣旨のないのに征夷將軍と呼んだ。【帆懸舟の笠符】笠符に帆懸舟の標をつけたもの。長年の紋所。【要り】まちぶせして遮る。【内裏の置石】置石は据ゑてある石であるが、場所は分らない。【四門】四方の門。【甲乙人】いろいろの人。貴賤老若種々の人。【賢聖の障子】紫宸殿の母屋の後面の障子。漢唐の功臣三十二人の像を描いてある。金勢金岡が始めて書いたものといはれる。【雲臺の畫圖】後漢の明帝、先代の功臣二十八人の像を南宮の雲臺に畫かしめた。それから功臣の像のことを雲臺の像といふ。こゝも功臣の畫像の意。【佳人】美人。【晨粧】朝の化粧。【弘徽殿】清涼殿の北隣にある後宮の一。皇后・中宮・女御等の居らるゝところ。【翡翠の御簾】簾の色が翡翠の羽色に似てゐること。【微月の銀鉤云々】簾をかける銀の鉤の形を細い月の如しと形容したもの。【夷心】武士の心。武士を卑しんで夷と公家は言つた。【屋形】貴族の邸宅をいふ。【辻風】つむじ風に同じ。【龍樓竹苑】龍樓は皇居。竹苑は皇族をいふのであるがこゝは皇族の邸宅。【前殿後宮】前殿は紫宸殿をいふのであるが、玆では

後宮に對したもので內裏中後宮以外の宮殿を指すのであらう。「大內裏造の事」の中に三十六の後宮、七十二の前殿とある。【諸司八省】 諸のつかさの役所や八省の殿舍。八省は中務・式部・民部・刑部・治部・兵部・大藏宮內。【三十六殿】 漢の三十六宮から斯く言つたまでゞ、多くの宮殿の意であらう。【十二門】 宮城の四方に各三つづつあつた門の總稱。陽明・待賢・郁芳・美福・朱雀・皇嘉・談天・藻壁・殷富・安嘉・偉鑒・達智。【越王呉を亡ぼして云々】 越王勾踐が呉を亡ぼして、呉王が寵姬西施のために建てた姑蘇臺が燒かれたことを指す。【項羽秦を傾けて云々】 項羽が秦を亡して其咸陽宮を燒いた時、其火が三月も續いたといふことを指す。

加茂の神主改補の事

大凶一元に歸して、萬機の政を新にせられしかば、愁を含み喜を懷く人多かりけり。中にも賀茂の社の神主職は、神職の中の重職として、恩補次第あることなれば、咎なくしては、改動の沙汰もありがたきことなるを、今度尊氏卿貞久を改めて、基久に補任せられ、彼眉を開く事、僅に廿日を過ぎず。天下又反覆せしかば、公家の御沙汰とし

て、貞久に返し付けらる。此事今度の改動のみならず、兩院の御治世替るごとに、轉變する事掌を反すが如し。

其逆鱗何事の起ぞと尋ぬれば、此基久に一人の女あり養はれて深窓に在りし時より、若紫の匂殊に初本結の寢亂髮、末如何ならんと、見るに心も迷ひぬべし。齡已に二八にも成りしかば、巫山の神女雲と成りし夢の面影を留め、玉妃の太眞院を出でし春の媚を殘せり。只容色嬋娟の世に勝れたるのみにあらず。小野小町が弄びし道を學び、優婆塞宮のすさみ給ひし跡を追ひしかば、月の前に琵琶を彈じては、傾く影を招き、花の下に歌を詠じては、うつろふ色を悲めり。されば其情を聞き、其貌を見る人ごとに、意を惱さずといふ事なし。其比先帝は未帥宮にて、幽なる御棲居なり。是は後宇多院第二の皇子、後醍醐天王と申しゝ御事なり。今の法皇は、伏見院第一の皇子にて、既に春宮に立たせ給ふべしといひ時めきあへり。此宮宮は如何なる玉簾の隙にか御覽ぜられたりけん。此女いとあてやかに﨟たけしとぞ思召されける。されどもひ

たすらなる御わざは、如何と思召し煩ひて、荻の葉に傳ふ風の便につけ、萱の末葉に結ぶ露のかごとに寄せては、いひしらぬ御文の數、千束に餘る程になりにけり。女も最物わびしう哀なる方に覺えけれども、吹きも定めぬ浦風に、靡きはつべき煙の末も、終にはうき名に立ちぬべしと、心强き氣色をのみ關守になして、早三年を過ぎにけり。

父は賤しくして、母なん藤原なりければ、やんごとなき御子達の御おぼえは、等閑ならぬを聞きて、などや今まで御いらへを申さでは止みにけるぞと、最痛う打ち詫ぶれば、御消息傳へたる二人の媒ついでよしと思ひて、たらちめの諫も、理にこそ侍るめれ。早く一方に御返事をと、かこち顏なりければ、女いふばかりなく打ち詫びて、いさや我とは爭でか分く方侍るべき。たゞ此度の御文に、御歌のいと哀に覺え侍らん方へこそ、參らめといひて、少し打笑める氣色を、二人の媒嬉しと聞きて、急ぎ宮々の御方へ參りて、かくと申せば、軈て伏見宮の御方より、取る手もくゆるばかりにこが

れたる紅葉重の薄樣に、いつよりも言の葉過ぎて、あはれなるほどなり。

思ひかねいはんとすればかきくれて泪の外は言の葉もなし

と遊ばされたり。此上の哀誰かと思へる處に、帥宮御文あり。是はさしも色深からぬ花染のかをり返りたるに、言はなくて、

數ならぬみのゝ小山の夕時雨つれなき松はふるかひもなし

と此御歌を見て、女そゞろに心あこがれぬと覺えて、手に持ながら詠じ伏したりければ、早いづれをかといふべき程もなければ、帥宮の御使、そゞろに獨笑して歸り參りぬ。頓て其夜の深け過ぐる程に、牛車さはやかに取りまかなひて、御迎に參りたり。瀧口なりける人、中門の傍にやすらひかねて、夜もはや丑三つになりぬと急げば、女下簾を褰げさせて、扶け乘せられんとしける處に、父の基久外より歸りまうで來て、是はいづ方へぞと問ふに、母上帥宮召ありてと聞ゆ。父痛く留めて、事の外なるわざをも計ひ給ひける者かな。伏見宮は春宮に立たせ給ふべきよし、御沙汰あれば、其御方へ

參りてこそ、深山隱の老木までも、花咲春にも逢ふべきに、行末とても憑みなき、帥宮に參り仕へんことは、誰がためとても待つべき方やあると云ひ留めければ、母上げにやと思ひ返す心になりにけり。瀧口はかくともしらで、簾の前によりゐて、月の傾きぬる程を申せば、母上出合ひて、只今俄に心地の例ならぬ事侍れば、後の夕べをこそと申して、御車を返してけり。帥宮かゝる事侍りとは、露もおぼしよらず。さのみやと今日の憑みに昨日の憂さを替へて、度々御使ありけるに、思の外なる事候ひて、伏見宮の御方へ參りぬと申しければ、おやしさけずば東路の、佐野の船橋さのみやは、堪へては人の戀ひ渡るべきと、思ひ沈ませ給ふにも、御憤の末深かりければ、帥宮御治世の初、基久指したる咎はなかりしかども、勅勘を蒙り神職を解せられて、貞久に補せらる。其後天下大に亂れて、二君三たび天位を替へさせ給ひしかば、基久貞久纔に三四年が中に、三度改補せらる。夢幻の世の習、今に始めぬこととはいひながら、殊更身の上に知られたる世のあはれに、よしや今は兎ても角てもと思ひければ、

うたゝねの夢よりも猶あだなるはこのころ見つる現（うつゝ）なりけり

と、甚久一首の歌を書き留めて、遂に出家遁世の身とぞなりにける。（卷十五）

【大凶一元に歸し】大凶は大なる凶事で戰亂のこと、一元は一人の元首、卽ち天子のこと。【愁を含み云々】愁を有する人、喜を有する人、色々の人が多かつたこと。【賀茂の社】山城愛宕郡にある。元來は加茂氏一家の祖神であつたが、桓武遷都後、王城鎭護の社とせられてから大いに榮え、兩社行幸、加茂の祭、臨時の祭、加茂の競べ馬等の盛な行事も生じた。隨つて其社の神職は中々の重職で、それを希望する人も多く、鴨　明の隱遁も、此職を得られない憤慨による所が多いと言はれる。【恩補】補任と同じい。其れに補せられるのは、君の恩惠によるのであるから恩補といふ。【眉を開く】愁の去ること。【掌を反す如し】事の容易であること。說苑に「易ニ於反ㇾ掌」。又、漢書「易ニ於反ㇾ掌、安ニ於泰山ニ」。【逆鱗】天子の御怒。韓非子の說難篇から出た語。【若紫の匂】若紫は紫草のこと。これはやさしくゆかしいものとして、歌文に取扱はれてゐるので、こゝでも若やかなやさしい姿といふ程の意である。【初本結】公卿が元服する時紫の紐で髮を結ぶ其の紐を初本結といふ。又元服そのことをもいふ。玆は今まで垂髮でゐたのを初めて髮を結つたことを指す。【巫山の神女云々】巫山の神女の如き美しさを有したとの意。楚の懷王が高唐に遊んで、夢に一人の美女に會つた。美女が言ふ「私は巫山の女であります。どうぞ王の枕邊に伽をさせて下さい。」王はそこで其女を愛した。歸る時美女が言つた。「私は巫山の南に居ります。朝には朝雲となり、夕には行雨とな

り、朝々暮々陽臺の下に居りませう。」王が翌朝見ると其の言の如く朝雲が美しくかゝつてゐる。そこで廟を立てゝ其神女を祀つた。そしてこれを朝雲廟と名けた。これが有名な巫山の神女の説話である。「玉妃の太眞院云々」玉妃は楊貴妃を指し、太眞は楊貴妃の名、楊貴妃が自分のゐる御殿を出でしの意。「嬋娟」あてやかに美しいこと。「小野小町が云々」和歌の道を云ふ。小野小町は平安朝初期に、六歌仙中唯一の女性として、和歌に於て名を得たからである。「優婆塞の宮云々」管弦の道を云ふ。優婆塞とは、出家してしかも在家のまゝなる男子を云ひ、優婆塞宮とは親王で優婆塞なる御方を云ふ。こゝは源氏物語に出てゐる八宮のことを指す。同書橋姫に、八宮が琴の名手であることが記されてゐる。「月の前に云々」橋姫の卷に「内なる人ひとりは、柱に少し居かくれて、琵琶を前に置きて、ばちを手まさぐりにしつゝゐたるに、雲がくれたりつる月の、俄にいと明くさし出でたれば、扇ならで、これしても、月はまねきつべかりけりとて、さしのぞきたる顏、いみじくらうたげに云々」とあるによる。即ち優婆塞宮の姫君達が、月の夜に琵琶を彈じて、撥をさぐつてゐるうちに月が明るくなつたので「入る日を扇でまねき返すといふことがありますが、ばちで月をまねき返すことも出來ますよ」などと、輕く洒落を言はれたことを引いたので、月前に琵琶を彈じ云々の如き風流な遊びをするといふ意。「花の下に云々」小町が散る花に歌を詠んだが如き風雅な道を弄んだといふ意。小町の「花の色はうつりにけりないたづらに、わが身世にふるながめせしまに。」の歌によつて書いたもの。「先帝」後醍醐天皇。「帥宮」親王で太宰ノ帥である方をいふ。名のみで、實際赴任はしないのである。「幽なる御棲居」勢力の微々たること。「是は……と申しゝ御事なり」これは本文でなくて、誰かゞ後で入れた

註の文句らしい。先帝と前に言つてあるのに、又後宇多院の第二の皇子云々は、全く餘計な文句である。【今の法皇】後伏見院。【あてやか】みやびやか。上品。【﨟たし】愛らし。㡀かはゆし。【ひたすらなる御業】露骨な御行爲。其家を訪ねて直接に言ひよること等をいふ。【荻の葉に云々】機會につけ、事にかこつけて御文を送られたこと。荻の葉につたふは和歌の常套語で、たゞ風の便と言はん爲にすぎず、萱の云々は、忘れてしまつたでせうなどとかこつけ言をいふことで、源氏物語の夕顏の「ほのかにも軒端の荻を結ばず露のかごとを何にかけまし。」によつたものであらう。【物わびしう哀なる方】もの惱ましく心動かされるやうには感じたが。【吹きも定めぬ云々】末々までそひとげると定まらぬ人に、全く從つてしまつたなら、終には浮名を立てるに至らうと思つたこと。【心强きけしき云々】心强く情愛に動かされぬ樣子を以て、對手を隔てゝゐたごとを、關守が人を隔てることに比したもの。【やんごとなき】貴き。【などや今まで云々】

高貴の方の御覺の一方ならぬことは、身の榮にもなること故、喜んで應ずべきに、何故に今まで御返事もしなかつたのかと、母が大いになげくこと。【ついでよし】好き機會なりと思ふ。【たらちめ】たらちねに同じ。母のこと。【かこち顏】不平顏。【いさや云々】いさやは如何かといふ意。どちらがよいか自分からどうして分けることが出來ようか出來ない。【取る手も云々】取る手も燻ずる程たきくすべたこと。昔はたきものの煙にくすべて芳香をつけたのである。【紅葉がさねの薄樣】紅葉がさねは表紅に裏青の染色。薄樣はうすくすいた紙。【色深からぬ花染云々】色の濃くない花染。花染は露草の花で染めたもの。かをり返るは、色のさめたこと。【言はなくて】歌のみで外に言うたことのないこと。【數ならぬの歌】みのゝ小山

は、新古今、伊勢の「思ひ出づやみのゝを山の一つ松、ちぎりしことはいつも忘れず。」などの如く名のある歌枕。つれなきは色づかぬこと。歌の意は。みののを山の夕時雨が如何にふつても、松は色をかへぬ故、降るかひがないといふのに、數ならぬ身は、いかに愛を注いでも對手は一向無情であるから、今はもう此世に永らへるかひもないと云ふ意を含めたもの。前の伏見の宮の歌と比べて、非常な才氣の相違がうかゞはれる。【とりまかなひて】支度したこと。【瀧口】禁中守護の武人。それが女の迎へに行つたのである。【丑三つ】丑の刻と寅の刻との間を四つに區分した其三つ目。即ち午前三時である。【下簾】牛車の簾の下に垂れる絹布。【牛車】牛にひかせる車で貴族の乘用。【そゞろに云々】何となく魂も身につかぬやうに感じて。【事の外なる】以ての外なる。意外なる。【深山がくれの云々】古今集、兼藝法師「形とそ深山がくれの朽木なれ、心は花になさばなりなむ。」同、躬恒「三千年になるてふ桃の今年より、花咲く春にあひにけるかな。」などによつたものであらう。【誰が爲とても】娘が爲にもわが爲にも。【さのみやと云々】そんなにつらくのみあらうか、今日はきつと參るであらうと、それを頼みに昨日のつらさを忘れての意。玉葉集、院御製「さのみやと今日のたのみに思做せば、昨日のうさぞ今日は嬉しき。」【おやしさけずば】親さへ隔てずば。しは意味を強める助詞。【東路の云々】そんなにいつまでも女を戀ひ渡る必要もなからうに。即ち女を得ることが出來ように。續古今集、家隆「東路の佐野の船橋さのみやは、つらき心をかけてたのまむ。」【夢幻の世の習】夢幻の如きはかなき世の常。【よしや今は云々】まゝよ、今はどうあつてもよいとの意。

正成兵庫に下向の事

尊氏卿直義朝臣大勢を率して上洛の間、要害の地に於て防ぎ戰はんために、兵庫に引き退きぬるよし、義貞朝臣早馬を進らせて、內裏に奏聞ありければ、主上大に御騷ぎありて、楠判官正成を召されて、急ぎ兵庫へ罷り下り、義貞に力を合せて、合戰を致すべしと仰せられければ、正成畏りて奏しけるは、尊氏卿已に筑紫九國の勢を率して、上洛候ふなれば、定めて勢は雲霞の如くにぞ候ふらん。御方の疲れたる小勢を以て、敵の機に乘りたる大勢に懸合ひて、尋常の如くに合戰を致し候はゞ、御方決定打ち負け候ひぬと覺え候ふなれば、新田殿をも京都へ召し候ひて、如レ前山門へ臨幸成り候ふべし。正成も河內へ罷り下り候ひて畿內の勢を以て、河尻を差し塞ぎ、兩方より京都を攻めて、兵粮をつからかし候ふ程ならば、敵は次第に疲れて落ち下り、御方は日

々に隨ひて馳せ集り候ふべし。其時に當りて、新田殿は山門より推し寄せられ、正成は搦手にて攻め上り候はゞ、朝敵を一戰に滅す事ありぬと覺え候。新田殿も定めて此料簡候ふとも、路次にて一軍もせざらんは、無下にいふかひなく人の思はんずる所を耻ぢて、兵庫に支へられたりと覺え候。合戰は兎ても角ても、始終の勝こそ肝要にて候へ。能々遠慮を廻らされて、公議を定めらるべきにて候ふと申しければ、誠に軍旅の事は、兵に讓られよと、諸卿僉議ありけるに、重ねて坊門宰相淸忠申されけるは、正成が申す所も、其謂ありといへども、征伐のために差し下されたる、節度使、未戰を成ざる前に、帝都を捨てゝ、一年の內に三度まで、山門へ臨幸ならん事、且は帝位の輕きに似、又は官軍の道を失ふ處なり。縱令尊氏筑紫勢を率して上洛すとも、去年東八箇國を順へて、上りし時の勢にはよも過ぎじ。凡戰の始より、敵軍敗北の時に至るまで、御方小勢なりといへども、毎度大敵を攻め靡けずといふことなし。是全く武略の勝れたる所にはあらず、只聖運の天に叶へる故なり。然れば只戰を帝都の外に決し

て、敵を鈇鉞の下に滅さん事、何の子細かあるべきなれば、只時を替へず、楠罷り下るべしとぞ仰出されける。

正成此上は、さのみ異議を申すに及ばずとて、五月十六日に都を立ちて、五百餘騎にて兵庫へぞ下りける。正成是を最期の合戰と思ひければ、嫡子正行が今年十一歲にて供したりけるを、思ふ様ありとて、櫻井の宿より河内へ返し遣すとて、庭訓を殘しけるは、獅子子を産みて三日を經る時、數千丈の石壁より是を擲ぐ。其子獅子の機分あれば、敎へざるに中より跳返りて、死する事を得ずといへり。況や汝已に十歲に餘りぬ。一言耳に留らば、我敎誡に違ふ事なかれ。今度の合戰天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顏を見んこと、是を限りと思ふなり。正成已に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の代に成りぬと心得べし。然りといへども、一旦の身命を助らんために、多年の忠烈を失ひて、降人に出づる事あるべからず。一族若黨の一人も死殘りてあらん程は、金剛山の邊に引籠りて、敵寄せ來らば、命を養由が矢さきに懸けて、義を紀信が

忠に比すべし。是ぞ汝が第一の孝行ならんずると、泣々申し含めて、各東西へ別れにけり。昔の百里奚は、穆公晉の國を伐し時、戰の利なからん事を鑒みて、其將孟明視に向ひて、今を限の別を悲み、今の楠判官は、敵軍都の西に近づくと聞きしより、國必ず滅びんことを愁へて、其子正行を留めて、なき跡までの義を進む。彼は異國の良弼、是は吾朝の忠臣、時千載を隔つといへども、前聖後聖一揆にして、有り難かりし賢佐なり。

正成兵庫に着きければ、新田左中將聽て對面し給ひて、叡慮の趣をぞ尋ね問はれける。正成畏りて、所存の通りと勅定の樣とを、委しく語り申しければ、誠に敗軍の小勢を以て、機を得たる大敵に戰はん事、叶ふべきにてはなけれども、去年關東の合戰に打ち負けて、上洛せし時、路にて猶支へざりし事、人口の嘲り遁るゝ所を得ず。それこそあらめ。今度西國へ下されて、數箇所の城郭一も落し得ずして、結句敵の大勢なるを聞きて、一支もせず、京都まで遠引したらんは、餘にいふかひなく存ずる間、戰

の勝負をば見ずして、只一戰に義を勸めばやと、存ずるばかりなりと宣ひければ、正成重ねて申しけるは、衆愚の愕々たるは、一賢の唯々には如かずと申し候へば、道を知らざる人の譏をば、必ずしも御心に懸けらるまじきにて候。只戰ふべき所を見て進み、叶ふまじき時を知りて退くをこそ、良將とは申し候ふなれ。さてこそ暴虎憑河、死而無レ悔者不レ與と、孔子も子路を誡められし事の候。其上元弘の初には、平大守の威猛を一時にくだかれ、此年の春は尊氏の逆徒を九州へ退けられ候ひし事、聖運とは申しながら、偏に御計略の武德に依りし事にて候へば、合戰の方に於ては、誰か褊し申し候ふべき。殊更今度西國より御上洛の事、御沙汰の次第、一々に道に當りてこそ存じ候へと申しければ、義貞朝臣誠に顏色解けて、通夜の物語に、數盃の興をぞ添へられける。後に思ひ合すれば是を正成が最期なりけりと、哀なりしことどもなり。

（卷十六）

【兵庫に引退き】義貞は赤松圓心を伐たうと幡磨の國に進んだが、尊氏等の東上をきいて兵庫まで退いたの

だ。【筑紫九國】筑紫の九箇國。【勢は雲霞の如く】軍勢のおびたゞしいことを雲霞にたとへたもの。【機に乗つたる】はづみにつけ込んだ意。【決定】必定。かならず。【前の如く山門へ臨幸】尊氏が關東から押寄せた時の如く比叡山に臨幸される。【河尻】淀川の下流。舟行をとめて糧を絶つのである。【搦手】追手の反對で、敵の背面をいふ。【料簡】所存。かんがへ。【路次】途中。【云甲斐なく】いくぢなく。【合戰は死ても角ても云々】戰爭は目前の進退勝敗どうあつても、最後の勝利が肝要であるとの意。【遠慮】深遠の思慮。【軍旅】いくさ又は戰ひのこと。いくさの事は武士の計に委せよといふ意。【僉議】僉は皆也衆也。僉議は衆議に同じ。【節度使】支那で天子からしるしとなる刀・旌等を賜はつて、一地方の兵事民政を掌つた官をいふ。義貞も建武二年十一月八日節刀を賜はつたのである。【官軍の道を失ふ處】官軍が自らの取るべき方法手段を失ふ譯合であるの意。【武略】戰爭上の謀略。【聖運】天子の御運。【鈇鉞】大きなまさかりと小さなまさかり。禮記王制篇に「諸侯賜二弓矢一然後征、賜二鈇鉞一然後殺」とあつて刑罰の權を委ねる印に賜はつたもの。こゝでは（京師まで敵を來させず）、征討の將の手で滅せといふこと。【時を替へず】即刻。【庭訓】家庭の訓へ。【機分】意氣、氣力といふ位の意。【中より跳返り】宙よりの意。【一旦の身命】一時の命。【一族若黨】一門の人々や年若い郎黨。【命を養由が矢さきに懸け】命を輕んじといふ意。淮南子に「養由基、楚將善射、去二楊葉一百歩射レ之、百發百中。」とあつて昔の弓の名手。其の矢先に命をさし出す如く、輕んずること。【義を紀信が忠に】義を重んずべしといふ意。紀信は漢高祖が滎陽に圍まれて危かつた時、其の身代りとなつて死んだ忠臣。【百里奚は云々】史記秦本紀に「穆公發兵、使二百里奚子孟明視、蹇

叔子西乞術將レ兵。行日、百里奚・蹇叔二人哭レ之、謂ニ其子一曰、汝軍即敗、必於ニ殽陒一矣。」【良弼】良き補佐の臣。【千載】千歩に同じ。【前聖後聖一揆】前聖は百里奚を、後聖は正成を指す。揆は「はかる」で、之をはかるに其の道の同一な意。孟子離婁下篇に「先聖後聖、其揆一也。」とある。【賢佐】賢明な補佐の臣。【去年關東の合戰に打負け】義貞は去年箱根其他で尊氏の軍に敗れて退いたのだ。【それとそあらめ】それのみならず、又は加ふるにの意。【結句】つまる所、最後に。【遠引】長距離を退くこと。【たゞ一戰に云々】勝負は問はず、唯だ義のために一戰したいと思ふ。「ばや」は自己の望みを述べる助詞。【衆愚の愕々云々】愕々は諤々の誤であらう。史記商鞅傳に「千人之諾々、不レ如ニ一士之諤々一」とあるのを逆に用ひて、衆人のやかましい非難は一賢の快よき肯定に如かずといひ、衆評のとるに足らぬを言つたもの。諤々は直言の貌。【暴虎憑河云々】論語述而篇にある言葉。暴虎は空手で虎を搏ち殺すこと、憑河は河を徒歩で渉ることで、つまり無茶な冒險をすること。かゝる險を冒し、死して悔いぬ樣なものは共に行ふことが出來ぬ。【平太守】北條高時のこと。【褊す】いやしむ。あなどる。【殊更今度云々】殊に今度兵庫に退いたこと、内裏へ奏聞のこと、一々道理に當つたやり方であるといふこと。

正成兄弟討死の事

楠判官正成、舍弟帶刀正季に向ひて申しけるは、敵前後を遮りて、御方は陣を隔てたり。今は遁れぬ處と覺ゆるぞ。いざや先づ前なる敵を一散し追ひ捲りて、後なる敵に戰はんと申しければ、正季可ゝ然覺え候ふと同じて、七百餘騎を前後に立てゝ、大勢の中へ懸入りける。左馬頭の兵ども、菊水の旗を見て、よき敵なりと思ひければ、取籠めて是を討たんとしけれども、正成正季、東より西へ破りて通り、北より南へ追ひ靡け、よき敵と見るをば馳せ雙べて、組みて落ちては首をとり、合はぬ敵と思ふをば、一太刀打ちてかけちらす。正成と正季と、七度合ひて七度分る。其心偏に左馬頭に近づき、組んで討たんと思ふにあり。遂に左馬頭の五十萬餘騎、楠が七百餘騎に懸靡けられて、又須磨の上野の方へぞ引き返しける。直義朝臣の乘られたりける馬、矢尻を蹄に踏み立てゝ、右の足を引きける間、楠が勢に追ひ攻められて、已に討たれ給ひぬと見えける處に、藥師寺十郎次郎、只一騎蓮池の堤にて返し合せて、馬より飛びており、二尺五寸の小長刀の石づきを取り延べて、懸る敵の馬の平頸、むながひの引廻切

りては刎ね倒し〳〵、七八騎が程切りて落しける其間に、直義は馬乘替へて、遙々落ち延び給ひけり。

左馬頭楠に追ひ立てられて、引き退くを將軍見給ひて、新手を入替へて、直義討たすなと下知せられければ、吉良、石堂、高、上杉の人々六千餘騎にて、湊河の東へかけ出でゝ、跡を切らんとぞ取り卷きける。正成正季又取て返して此勢にかゝり、懸りては打ち違へて死し、懸入りては組みて落ち、三時が間に、十六度まで鬪ひけるに、其勢次第々々に滅びて、後は纔に七十三騎にぞ成りにける。此勢にても打ち破りて落ちば、落つべかりけるを、楠京を出でしより、世の中の事、今は是までと思ふ所存ありければ、一足も引かず戰ひて、機已に疲れければ、湊河の北に當りて、在家の一村ありける中へ走り入りて、腹を切らんために、鎧を脫ぎて我身を見るに、斬疵十一箇所までぞ負ひたりける。此外七十二人の者共も、皆五箇所三箇所の疵を被らぬ者はなかりけり。楠が一族十三人、手の者六十餘人、六間の客殿に二行に雙居て、念佛十返ばかり

同音に唱へて、一度に腹をぞ切りたりける。

正成座上に居つゝ、舍弟の正季に向ひて、抑最期の一念に依りて、善惡の生を引くといへり。九界の間に、何か御邊の願なると問ひければ、正季から〳〵と打ち笑ひて、七生まで只同じ人間に生れて朝敵を滅さばやとこそ存じ候へと申しければ、正成よに嬉しげなる氣色にて、罪業深き惡念なれども我もかやうに思ふなり。いざゝらば同じく生を替へて、此本懷を遂せんと契りて、兄弟共に差し違ひて、同じ枕に臥しにけり。

橋本八郎正員、宇左美河內守正安、神宮寺の太郎兵衞正師、和田五郎正隆を始として、宗徒の一族十六人、相隨ふ兵五十餘人、思ひ〳〵に並居て、一度に腹をぞ切りたりける。菊池七郎武朝は兄の肥前守が使にて、須磨口の合戰の體を見に來りけるが、正成が腹を切る所へ行合ひて、をめ〳〵しく見捨てゝは、いかゞ歸るべきと思ひけるにや、同じく自害をして、炎の中に臥しにけり。

抑元弘以來忝くも此君に憑まれ進らせて、忠を致し功に誇る者、幾千萬ぞや、然れど

も此亂又出で來りて後、仁を知らぬ者は、朝恩を捨て丶敵に屬し、勇なき者は、苟くも死を免れんとて刑戮にあひ、智なき者は、時の變を辨ぜずして、道に違ふ事のみありしに、智仁勇の三德を兼ねて、死を善道に守るは、古より今に至るまで、正成ほどの者は未なかりつるに、兄弟共に自害しけるこそ、聖主再び國を失ひて逆臣橫に威を振ふべき、其前表のしるしなれ。(卷十六)

【同じて】贊成して。【左馬頭】尊氏の弟直義のこと。【合はぬ敵】ふさはしからざる敵。【右の足を引き】右の足を引いてちんばに歩くこと。【小長刀】刃の部分の二尺五寸ある小長刀である。長刀が男子の實戰に使はれたのは此頃が最終だといふ。【石づき】柄の本の端につけた金具。石づきをとり延べるといふのは、石突の所を持つて成るべく長くなる樣に持つこと。【むながひの引廻】むながいで、馬の胸を廻つて兩端を鞍につなぐ組緖。それを引廻した部分を切つたのである。【三時が間に】一時は今の二時間。三時は戰の始まつた時からそれ迄の間であらう。五月二十五日辰の刻に、軍勢を部署したのであるから、戰の始まつたのを巳の刻、卽ち午前十時前後とすれば、其の時はもう午後三・四時頃であらう。【機已に疲れ】根機の疲れたこと。精根の疲れたこと。【在家の一村】在家の一群の意。在家は田舍家。【六間の客殿】六間四方の客殿。一間は柱と柱との間一つ。【最後の一念に依りて云々】來世に善く生れると否とは臨終の一心によ

りて定まる。【九界】 地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天上・聲聞・緣覺・菩薩の九界。【七生まで云々】 七度まで人間に生れること。【罪業深き惡念云々】 罪業は罪深い所作。こゝは罪深い惡心。七生まで云々といふ如き執念をいふ。【此亂】 尊氏の叛亂。【仁を知らぬ者は云々】 此の仁は廣義の仁で仁義のこと。仁義を知らぬものは朝敵となり、勇なき者は降人に出で等して刑せられ、智なき者は時勢の變移を辨別せず正道に就くことが出來なかつた。【死を善道に守る】 正しい死に方をすること。【聖主】 後醍醐天皇を指す。【前表の驗】 前兆といふ程の意。

正成首送故郷事

湊川にて討れし楠判官が首をば、六條川原に懸られたり。去ぬる春も、あらぬ首をかけたりしかば、是も又さこそあらめといふ者多かりけり。

うたがひは人によりてぞ殘りけるまさしげなるは楠が首

と、狂歌を札に書きてぞ立てたりける。其後尊氏卿楠が首を召して、朝家私日久しく

相馴れし、舊好の程も不便なり。跡の妻子ども、今一度空しき貌をも、さこそ見たく思ふらめとて、遺跡へ送られける、情の程こそありがたけれ。

楠が後室子息正行是を見て、判官今度兵庫へ立ちし時、樣々申し置きし事ども多かる上、今度の合戰に必ず討死すべしとて、正行を留め置きしかば、出しを限の別なりとは、かねてより思ひ儲けたることなれども、貌を見ればそれながら、目塞り色變じて、替りはてたる首を見るに、悲の心胸に滿ちて、歎の泪せきあへず。今年十一歲に成りける帶刀、父が首の生きたりし時にも似ぬ有樣、母が歎のせん方もなげなる樣を見て、流るゝ泪を袖に抑へて、持佛堂の方へ行きけるを、母怪しく思ひて、卽ち妻戶の方より行きて見れば、父が兵庫へ向ふ時、形見に留めし菊水の刀を、右の手に拔き持ちて袴の腰を押し下げて、自害をせんとぞし居たりける、母急ぎ走り寄りて、正行が小腕に取りつきて、泪を流して申しけるは、栴檀は二葉より芳しといへり。汝をさなくとも、父が子ならば、是程の理に迷ふべしや。小心にも能々事のさまを、思ひて見

よかし。故判官が兵庫へ向ひし時、汝を櫻井の宿より返し留めしことは、全く跡を弔はれんためにあらず。腹を切れとて殘し置きしにもあらず。我假令運命盡きて、戰場に命を失ふとも、君いづくにも御座ありと承らば、死に殘りたらん一族、若黨共を扶持し置き、今一度軍を起し、御敵を滅して、君を御代にも立て進らせよといひ置きし處なり。其遺言具に聞きて、我にも語りし者が、何時の程に忘れけるぞや。かくては父が名を失ひはて、君の御用に合ひ進らせんことあるべしとも覺えずと、泣々諫め留めて、拔きたる刀を奪ひとれば、正行腹を切り得ず、禮盤の上より泣き倒れ、母と共にぞ歎きける。

其後よりは正行、父の遺言、母の教訓心に染み、肝に銘じつゝ、或時は童部共を打ち倒し、首を取る眞似をして、是は朝敵の頸を取るなりといひ、或時は竹馬に鞭を當て、是は將軍を追ひ懸け奉るなんどいひて、はかなき手ずさみに至るまでも、只此事をのみわざとせる、心の中こそ恐しけれ。(卷十六)

【懸けられたり】さらし首にすること。【去ぬる春も云々】本書卷十五によると、建武二年正月二十七日の合戰の後、正成の謀で、新田・楠何れも討たれたと傳へられたので、尊氏方では京都にある死骸を捜した揚句「此處に面影の似たりける首を二つ獄門の木に懸けて、新田左兵衛督義貞・楠河内判官正成と書付をせられたりけるを、如何なるにくさうの者かしたりけん、其札の側に、是れはにた首なり。まさしげにも書きける虚言かなと秀句をしてぞ書きそへて見せたりける。」とある。【さこそあらめ】さうあらう。【疑は云々の歌】正しげと正成とを懸け、此度の正成の首は確かのものらしいが、しかし疑はやはり人々の間に殘つてゐるといふ意。【朝家私日】公にも私にもといふ程の意であらう。【遺跡】のこつた跡。河内國の鄕家をさす。【後室】未亡人のこと。【貌を見れば云々】面を見れば正しくそれに相違はないが、【帶刀】正行を指す。帶刀は東宮の武官で、正行は後にそれに任ぜられたから。【持佛堂】持佛、即ち常に護持して朝夕に信念する佛像を安置する室。佛間。【妻戶】開戶のこと。【小腕】小は接頭語。腕に同じ。【栴檀は二葉より芳し】優れたる人は幼時より優れてゐるといふ意の諺。栴檀は梵語で、佛經中に出てゐる香木。觀佛三昧經に「牛頭栴檀生二伊蘭中一、未レ及二長大一在二地下一時、芽莖枝葉如二閻浮提竹筍一……仲秋滿月卒從レ地出、成二栴檀樹一、衆皆聞二牛頭栴檀上妙之香一。」とある。【扶持し】扶け養ふ。【君を御代にも立て】君の御代になし申すこと。【禮盤】佛前にある禮拜の臺座。【心に染み肝に銘じ】肝も心。深く心にきざみつけられる。【はかなき手すさみ】とりとめもない手遊。【心の中こそ恐しけれ】心中末恐ろしといふこと。

山門より還幸の事

斯る處に、將軍より內々使者を主上へ進じて申されけるは去年の冬、近臣の讒に依りて、勅勘を蒙り候ひし時、身を法體に替へて、死を罪なきに賜らんと存じ候ひし處に、義貞義助等、事を逆鱗に寄せて、日來の鬱憤を散ぜんと仕り候ひし間、止む事を得ずして、此亂天下に及び候。是全く君に向ひ奉りて、反逆を企てしに候はず。只義貞が一類を亡して、向後の讒臣をこらさんと存ずるばかりなり。若し天鑒誠を照されば、臣が讒におちし罪を哀み思召して、龍駕を九重の月に廻され、鳳曆を萬歲の春に復され候へ。供奉の諸卿、幷に降參の輩に至るまで、罪科の輕重をいはず、悉く本官本領に復し、天下の成敗を公家に任せ進らせ候ふべしと、且は條々御不審を散ぜんために、一紙別に進覽候ふなりとて、大師勸請の起請文を副へて、淨土寺の忠圓僧正の方

へぞ進らせける。

主上是を叡覽ありて、告文を進らする上は、僞りてはよも申されじと思召されければ傍の元老智臣にも仰合されず、軈て還幸成るべきよしを仰出されけり。將軍勅答の趣を聞きて、さては叡智淺からずと申せども、斯くに安かりけりと悦びて、さもありぬべき大名の許へ、緣に觸れ趣を伺ひて、潛に狀を通じてぞ語らはれける。去程に還幸の儀、事潛に定りければ、降參の志ある者ども、かねてより今路、西坂本邊まで、拔々に行き設けて、還幸の時分をぞ相待ちける。中にも江田兵部少輔行義、大館左馬助氏明は、新田の一族にて何時も一方の大將たりしかば、安否を當家の存亡にこそ任せらるべかりしが、いかなる深き所存かありけん、二人共に降參せんとて、九日の曉より先づ山上に登りてぞ居たりける。

義貞朝臣斯る事とは知り給はず、參仕の軍勢に對面して、事なき樣にておはしける處へ、洞院左衞門督實世卿の方より、只今主上京都へ還幸成るべしとて、供奉の人を召

し候。御存知候ふやらんと告られたりければ、義貞さる事やあるべき、御使の聞誤にてぞあるらんとて、最騒がれたる氣色もなかりけるを、堀口美濃守貞滿、聞もあへず、江田大館が何の用ともなきに、此曉中堂へ參るとて、登山仕りつるが怪しく覺え候。貞滿先づ內裏へ參りて、事の樣を見奉り候はんとて、郎等に着せられたる鎧取りて、肩に投げ懸け、馬の上にて上帶を縮め、諸鐙合せて參られける。皇居近くなりければ、馬より下り、甲を脫ぎて中間に持せ、四方を屹と見渡すに、臨幸只今の程と見えて、供奉の月卿雲客、衣冠を帶せるもあり、未戎衣なるもあり、鳳輦を大床に差し寄せて、新典侍內侍所の櫃を取り出し奉れば、頭辨範國、劍璽の役に隨ひて、御簾の前に跪く。貞滿左右に少し揖して御前に參り、鳳輦の轅に取つき、淚を流して申されけるは、還幸の事、兒女の說幽に耳に觸れ候ひつれども、義貞存知仕らぬよしを申し候ひつる間、傳說の誤かと存じて候へば、事の儀式早誠にて候ひけり。抑義貞が不義何事にて候へば、多年の粉骨忠功を思召し捨てられて、大逆無道の尊氏に叡慮を移

されけるぞや。去ぬる元弘の始、義貞不肖の身なりといへども、忝くも綸旨を蒙りて、關東の大敵を數日の中に亡し、西海の宸襟を三年の間に休め進らせ候ひし事、恐くは上古の忠臣にも類少く、近日の義卒も皆功を讓る處にて候ひき。其後尊氏が反逆顯れしより以來、大軍を靡して其師を虜にし、萬死を出てゝ一生に逢ふこと、勝げて計ふるに遑あらず。されば義を重じて命を墜す一族百三十二人、節に臨みて尸を曝す郎從八千餘人なり。然れども今洛中數箇度の戰に、朝敵勢盛にして、官軍頻に利を失ひ候ふ事、全く戰の咎にあらず、只帝德の缺くる處に候ふか。仍りて御方に參る勢の少き故にて候はずや。詮ずる處當家累年の忠義を捨てられて、京都へ臨幸なるべきにて候はゞ、只義貞を始として、當家の氏族五十餘人を御前へ召し出され、首を刎ねて伍子胥が罪に比し、胸を割きて比干が刑に處せられ候ふべしと、忿る面に泪を流し、理を碎きて申しければ、君も御誤を悔いさせ給へる御氣色になり、供奉の人々も皆理に服し義を感じて首を低れてぞ坐られける。（卷十七）

【勅勘】 天子のおとがめ。御勘氣。昨年の十月時行を征伐した時、尊氏蔭謀の進言があつて君の逆鱗に逢つたことを言ふ。【死を罪なきに賜らん】 無罪者となつて死を賜はりたい。【逆鱗】 天子の御怒。【天鑒誠を照されば】 天鑑は天の照覽。天が誠實の者を照明すること。それを天皇が誠を御知り下さらばといふ意に用ひたもの。【龍駕を九重の月に廻され】 龍駕は天子の御召車。九重は禁中。宮城に御還幸を乞ふとの意。【鳳暦を萬歳の春に復され】 代を君が御代に復されむことを乞ふの意。【本官本領】 もとの官と領地。【天下の成敗】 天下の政治。【公家】 朝廷。【條々】 すぢ〲。こゝはいろ〲といふ程の意。【大師勸請の起請文】 比叡山に、大師勸請の起請文といふ事があるとは、徒然草にもある。大師とは慈惠大師が始めた起請文だからといふ説もあるが、傳教大師を指すのであらう。勸請の起請文とは神佛の御出を請うて、そむいた場合の罰を請うた誓文である。これは大師を勸請した起請文である。【淨土寺】 大和國愛宕郡淨土寺村にある。【忠圓僧正】 後醍醐帝の信任厚く北條調伏の法を行つて越後へ流された人。【告文】 事情を上申する文書。【元老】 國家の大なる功臣。【さもありぬべき大名云々】 降參しさうな大名の許へ、折にふれ樣子を見て、手紙をやつてかたらうた。【先づ山上に登りて云々】 足利方に降參するには、主上の還幸の御供をして京に入ることが必要故、ひそかに山上に登つたのだ。【參仕の軍勢】 平常の如く出仕した部下の軍勢。【郎等に着せられたる鎧】 郎等に持たせておいた自分の鎧。【上帶】 鎧の上帶。【諸鐙合せて】 兩方の鐙をかけて馬を走らす。【中間】 侍と小者の間に當る雜卒。【月卿雲客】 公卿殿上人の別稱。【戎衣】 軍服卽ち甲冑のこと。和成つて還幸になるので、衣冠でよいのであるから「未だ」と言つたもの。【大床】 廣廂のことを武家で

はかくよぶ。【新典侍】 女官。內侍司の次官である。多數あつたから或人を新といつたのであらう。【內侍所】 溫明殿の別稱。神鏡を奉安する所。櫃とは神鏡を入れた櫃である。【頭辨】 辨官で藏人所頭を兼ねた人。【拜して】 會釋しての意。【轅】 車の前方に長く出た二本の木、それで車を輓くもの。【兒女の說】 兒女は子供。つまらぬ者共のする噂。【不肖の身】 愚鈍の身といふ程の意。【關東の大軍を云々】 高時を討滅したと。【西海の襟云々】 隱岐に流された主上をお救ひして此三ケ年の間安んじ申上たと。高時伏誅の元弘三年から、今年、延元元年まで滿三年である。【萬死を出で云々】 非常の危險を冒したこと。萬死中に一生を得たこと。【節に臨みて】 大切な場合に會つて。【唯帝德の缺くる處】 貞滿も隨分思ひ切つたことを言つたものである。【詮ずる處】 畢竟の意。【伍子胥が罪に比し】 伍子胥も比干も罪なくして殺された忠臣。それらの如く義貞をも殺し給へといふ意。伍子胥は吳王夫差に仕へた賢臣。讒に逢つて死を賜はつた時「吾が目を抉りて東門に懸けよ」と言つて死んだ人。【比干】 殷の紂王を諫めて胸を割かれた人。前出。【理を碎いて】 道理をこまかに分けて。

先帝吉野へ潛幸の事

主上は重祚の御事相違候はじと、尊氏卿樣々申されたりし僞の詞を御憑ありて、山門より還幸成りしかども、元來謀り進らせんためなりしかば、花山院の故宮に押し籠られさせ給ひ、宸襟を蕭颯たる寂寞の中に惱さる。霜に響く遠寺の鐘に御枕を欹て、楓橋の夜の泊に御哀を副へられ、梢に餘る北山の雪に御簾を撥げては、梁園の昔の御遊に御淚を催さる。紅顏花の如くなりし三千の宮女も、一朝の嵐に誘はれて、何地ともなくなりしかば、夜の大殿に入らせ給ひても、夢より外の昔もなし。紫宸に星を列ねし百司の老臣も、滿天の雲に掩はれ、參り仕ふる人一人もなければ、天下の事如何になりぬらん、と尋ね聞召さるべき便もなし。抑朕が不德何事なれば、かほどに佛神にも放たれ奉りて、逆臣のために犯さるらんと、舊業の程もあさましく、此世中も憑少く思召されければ、寛平の遠き跡をも尋ね、花山の近き例をも追はゞやと思召し立たせ給ひける處に、刑部大輔景繁武家の許を得て、只一人伺候したりけるが、勾當內侍を以て潜に奏聞申しけるは、越前の金崎の合戰に、寄手每度打ち負け候ふなる間、加賀

國、劒、白山の衆徒等御方に參り、富樫介が籠りて候那多の城を責め落して、金崎の後攻を仕らんと企て候ふなる。是を聞きて還幸の時、供奉仕りて京都へ罷り上り候ひし、菊池掃部助武俊、日吉加賀法眼以下、皆己が國々へ逃げ下りて、義兵を擧げ、國中を打ち順へて候ふなる間、天下の反覆遠からじと、謳歌の說耳に滿ち候。急ぎ近日の間に、夜に紛れて大和の方へ臨幸成り候ひて、吉野十津川の邊に皇居を定められ、「諸國へ綸旨を成し下され、義貞が忠心をも助けられ、皇統の聖化を耀され候へかしと、」委細にぞ申し入れたりける。

主上事の樣を具に聞召され、さては天下の武士猶帝德を慕ふ者多かりけり。是天照太神の景繁が心に入替らせ給ひて、示さるゝものなりと思召されければ、明夜必ず寮の御馬を用意して、東の小門の邊に相待つべしとぞ仰出されける。相圖の刻限にもなりければ、三種の神器をば、新勾當內侍に持たせられて、童部の蹈みあけたる築地の崩より、女房の姿にて忍び出させ給ふ。景繁かねてより用意したることなれば、主上を

は賽の御馬に舁き乘せ進らせ、三種神器を自ら荷擔して、未夜の中に大和路にかゝりて、梨間宿までぞ落ち進らせける。白晝に南都を此の如くにて通らせ給はゞ、人の怪め申すこともこそあれとて、主上をば怪しげなる張輿に召しかへさせ進らせて、供奉の上北面共を輿舁になし、三種の神器をば足つけたる行器に入れて、物詣ずる人の破籠なんど、入れて持せたる様に見せて、景繁夫になりて是を持つ。いづれも皆習はぬ業なれば、急ぐとすれども行きやらで、其日の暮程に、内山までぞ着せ給ひける。此までも若し敵の追蒐進らすることもやあらんずらんと、安き心もなかりければ、今夜如何にもして吉野の邊まで成し進らせんとて、此より賽の御馬を進らせたれども、八月二十八日の夜のことなれば、道最暗くして行くべき様もなかりける處に、俄に春日山の上より金峯山の嶺まで、光物飛び渡る勢に見えて、松明の如くなる光終夜天を耀し、地を照しける間、行路分明に見えて、程なく夜の曙に、大和國賀名生といふ所へぞ落ち着せ給ひける。

此所の有樣里遠くして人煙幽に、山深くして鳥の聲も稀なり。柴といふものをかこひて家とし、芋野老を堀りて世をわたるばかりなれば、皇居になすべき所もなく、供御に備ふべき其儲も尋ねがたし。斯ては如何あるべきなれば、吉野の大衆を語ひて、君を入れ進らせんと思ひて、景繁則ち吉野へ行き向ひ、當寺の宿老、吉水の法印に此由を申しければ、滿山の衆徒を語ひ、藏王堂に集會して僉議しけるは、古清見原の天皇、大友の皇子に襲はれ、此所に御幸成りしも、程なく天下泰平を致さる。其先蹤につきて、今仙蹕を促さるゝ事、衆徒何ぞ異議に及ぶべきや。就中昨夜の光物臨幸の道を照す、是併ら當山の鎮守藏王權現、小守勝手大明神、三種の神器を擁護し、萬乘の聖主を鎮衞し給ふ瑞光なり。暫くも猶豫あるべからずとて、若大衆三百餘人皆甲冑を帶して、御迎にぞ參りける。此外楠帶刀正行、和田次郎、眞木定觀、三輪の西阿、紀伊國には恩地、牲河、貴志、湯淺、五百騎三百騎引きも切らず、面々馳せ參りける間、雲霞の勢を腰輿の前後に圍ませて、程なく吉野へ臨幸なる。春雷一たび動く時、蟄蟲萠蘇す

る心地して聖運忽に開けて、功臣既に顯れぬと、人皆歡喜の思ひをなす。（卷十八）

【蕭颯たる寂莫の中に】 吹く風さびしき寂莫の宮殿内に。【霜に響く遠寺の鐘云々】 山海經に「豐嶺九鐘、霜降自鳴。」又白氏文集に「遺愛寺鐘欹レ枕聽」などによつたもの。枕を欹つとは枕の一方を高くしてきゝ耳をたてること。【楓橋の夜の泊に云々】 唐の張繼が「月落烏啼霜滿レ天、江楓漁火對二愁眠一、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到二客船一。」による。こゝは前句の遠寺の鐘から楓橋夜泊の詩を引いて來ただけで、唯だ夜の御寢に哀を加ひさせられる意。【北山の雪云々】 白氏文集の「香爐峯雪撥レ簾看。」によつたもの。一條の花山院から北山の雪を眺めること。【梁園の昔の御遊】 西京雜記に「梁孝王作二曜華之宮一、築二兎園一、日與二宮人賓客一、弋二釣其中一。」とある。こゝは唯だ天皇が過ぎし御遊を思ひ出される意。【紅顏花の如くなりし云々】 長恨歌の「雲鬢花顏金步搖」や「後宮佳麗三千人」によつたもの。一朝の嵐は爭亂をいふ。【夜の大殿】 天子の御寢室。【紫宸に星を列ねし云々】 紫宸は天子の御殿。星を列ねしは、多く列んだこと。滿天の雲は武家の擾亂に譬へたもの。【舊業】 前世の所業。【寬平の遠き跡云々】 宇多天皇・花山天皇御出家のこと。【勾當內侍】 掌侍の上首たる女官。傳奏を掌る。【金崎】 敦賀市の東北。義貞・義助等が其の地の城に籠つてゐた。【劍・白山】 共に加賀國能美郡にある。劍は今は鶴來と書く。【還幸の時云々】 此度の還幸のこと。【謳歌の說】 世上の風說。巷說。【皇統の聖化】 皇室の御威光といふ程の意。【寮の御馬】 左右馬寮の廐の馬。【梨御宿】 山城國綴喜郡奈島。【張輿】 疊表を張つた輿。そまつな物であつた。【上北面】 北面の武士を上、下

に分つ。上北面は四位・五位の者を任ずる。【行器】食物を盛つて持ち運ぶ器。圓形で高く、脚のあるのは三脚であつた。【破籠】檜木の薄いのを曲げて造つた食物の容器。【夫】人夫。【金峯山】吉野山の最高峯。【賀名生】大和國吉野郡丹生川の末にある。【柴】雜木の小さいものゝ稱。【野老】薯蕷科に屬する植物。根塊を食用にする。やまのいもによく似たもの。【大衆】僧侶の群衆。【淸見原天皇】天武天皇の御事。【仙蹕】行幸に用ひる車。行幸のことである。【小守勝手】小守は吉野山中水分山にある。勝手も吉野山中の地名。【瑞光】めでたき光。【腰輿】手で腰の邊まで持ち上げて行く輿。手輿ともいふ。【春雷一たび動く時云々】春の雷がなると始めて冬の間地中にとぢ籠つてゐた蟲が動き出すこと。呂氏春秋に「開春始雷、則蟄蟲動矣。」とある。

金崎の城落つる事

金崎の城には、瓜生が後攻をこそ命に懸けて待れしに、判官うち負けて、軍勢若干討れぬと聞えければ、憑む方なくなりはて、心細くぞ覺えける。日々に隨ひて兵糧乏しくなりければ、或は江魚を釣りて飢を資け、或は磯菜を取りて日を過す。暫しが程こ

そかやうのものに命を續ぎて軍をもしけれ、餘に事迫りければ、寮の御馬を始として、諸大將の立てられたる秘藏の名馬共を、毎日二匹づゝ差し殺して、各是をぞ朝夕の食には與へたりける。是につけても、後攻する者なくては、此城今十日とも堪へがたし。總大將御兄弟、竊に城を御出て候ひて、杣山へ入らせ給ひ、與力の軍勢を催されて、寄手を追ひ拂はれ候へかしと、面々に勸め申されければ、げにもとて、新田左中將義貞、脇屋右衛門佐義助、洞院左衛門督實世、河嶋左近藏人惟頼を案内者にて上下七人、三月五日の夜半ばかりに、城を忍び出でゝ、杣山へぞ落着せ給ひける。

瓜生宇都宮斜ならず悦びて、今一度金崎へ向ひて、先度の耻を雪め、城中の思を蘇せしめんと、樣々思案を廻しけれども、東風漸く閑になりて、山路の雪も群消えければ、國々の勢も寄手に加りて、兵十萬騎に餘れり。義貞の勢は僅に五百餘人、心ばかりは猛けれども、馬物具もはかばかしからねば、兎やせまし角やせましと身を揉みて、廿日餘を過しけるほどに、金崎には早馬どもをも皆食ひ盡して、食事を斷つ事十日ばかりに

なりにければ、軍勢共も今は手足もはたらかずなりにけり。爰に大手の攻口にありける兵共、高越後守が前に來りて、此城は如何様兵粮に迫りて、馬をばし食ひ候ふやらん。初のころは、城中に馬の四五十匹もあらんと覺えて、常に湯洗をし、水を蹴させなんどし候ひしが、近來は一匹も引き出すことも候はず。哀一攻せめて見候はゞやと申しければ、諸大將然るべしと同じて、三月六日の卯の尅に、大手搦手十萬餘騎、同時に切岸の下、塀際にぞつきたりける。城中の兵ども是を防がんために、木戸の邊までよろめき出でたれども、太刀を使ふべき力もなく弓を挽くべき様もなければ、只徒に櫓の上に登り、塀の陰に集りて、息つき居たるばかりなり。寄手ども此有様を見て、さればこそ城は弱りてけれ、日の中に攻め落さんとて、亂杭逆木を引き退け、塀を打ち破りて、三重に搆へたる二の木戸までぞ攻め入りける。由良長濱二人、新田越後守の前に參じて申しけるは、城中の兵ども、數日のつかれに依りて、今は矢一をもはかばかしく仕り得候はぬ間、敵既に一二の木戸を破りて、攻め近づきて候ふなり。如何に

思召すとも叶ふべからず。春宮をば小舟にめさせ進らせ、何くの浦へも落し進らせ候べし。自餘の人々は一所に集りて、御自害あるべしとこそ存じ候へ。其程は我等攻口へ罷り向ひて、相支へ候ふべし。見苦しからんものどもをば、皆海へ入れさせられ候へと申して、御前を立ちけるが、餘に疲れて足も快く立ざりければ、二の木戸の脇に射殺され、伏したる死人の股の肉を切りて、二十餘人の兵ども一口づゝ食いて、是を力にしてぞ戰ひける。河野備後守は、搦手より攻め入る敵を支へて、半時ばかり戰ひけるが、今ははや精力盡きて、深手餘多負ひければ、攻口を一足も引き退かず、三十二人腹切りて、同枕にぞ伏したりける。

新田越後守義顯は、一宮の御前に參りて、合戰の樣今は是までと覺え候。我等力なく弓箭の名を惜む家にて候ふ間、自害仕らんずるにて候。上樣の御事は、縱令敵の中へ御出候ふとも、失ひ進らするまでの事はよも候はじ。只かやうにて御座あるべしとこそ存じ候へと申されければ、一宮いつよりも御快げに打笑ませ給ひて、主上帝都へ還

幸成りし時、以㆑我爲㆓元首將㆒以㆑汝、令㆑爲㆓股肱臣㆒、夫無㆓股肱㆒元首持つことを得んや。されば吾命を白刄の上に縮めて、怨を黃泉の下に酬いんと思ふなり。抑自害をば如何樣にしたるが、よきものぞと仰せられければ、義顯感淚を抑へて、かやうに仕るものにて候ふと申しもはてず、刀を拔きて逆手に取り直し、左の脇に突き立てゝ、右の脇のあばら骨二三枚懸けて搔き破り、其刀を拔きて、宮の御前に差し置きて、うつぶしになりてぞ死しにける。一宮聽て其刀を召され御覽ずるに、柄口に血餘りすべりければ、御衣の袖にて、刀の柄をきり〳〵と押し卷せ給ひて、雪の如くなる御膚を顯し、御心の邊に突き立て、義顯が枕の上に伏させ給ふ。頭大夫行房、里見大炊助時義、武田與一、氣比彌三郞大夫氏治、太田帥法眼以下御前に候ひけるが、いざさらば宮の御供仕らんとて同音に念佛唱へて、一度に皆腹を切る。是を見て庭上に並居たる兵三百餘人、互に差違へ〳〵彌が上に重り伏す。

氣比大宮司太郞は、元來力人に勝れて、水練の達者なりければ、春宮を小舟に乘せ進

らせて、櫓かいもなけれども、綱手を己が横手綱に結びつけ、海上三十餘町を游ぎて、蕪木の浦へぞ着け進らせける。是を知る人更になかりければ、潛に杣山へ入り進らせんことは最安かりぬべかりしに、一宮を始め進らせて、城中の人々殘らず自害する處に、我一人逃げて命を活たらば、諸人の物笑なるべしと思ひける間、春宮を怪しげなる浦人の家に預け置き進らせ、是は日本國の主に成らせ給ふべき人にて渡らせ給ふぞ。如何にもして杣山の城へ、入れ進らせてくれよと申し含めて、蕪木の浦より取りて返し、もとの海上を游ぎ歸りて、彌三郎大夫が自害して伏したる其上に、自ら我首を掻き落して、片手に提げ、大膚脱になりて死しにけり。土岐阿波守、栗生左衞門、矢島七郎三人は、一所にて腹切らんとて、岩の上に立並びて居たりける處に、船田長門守來りて、抑新田殿の御一家の運、爰にて悉く極め給はば、誰々も殘らず討死すべけれども、總大將兄弟杣山に御座あり、公達も三四人まで、此處彼處に御座ある上は、我等一人も活き殘りて、御用に立たんずるこそ永代の忠功にて侍らめ。何とい

ふ沙汰もなく自害しつれて、敵に所得せさせての用は何事ぞや、いざゝせ給へ。若しやと隱れて見んと申しければ、三人の者ども船田が跡に附きて、遙の礒へ遠淺の浪を分けて、半町ばかり行きたれば、礒打つ波に當りて、大に穿げたる岩穴あり。爰こそ究竟の隱所なれとて、四人共に此穴の中に隱れて、三日三夜を過しける心の中こそ悲しけれ。由良長濱は、是までも猶木戸口に支へて、喉乾けば己が疵より流るゝ血を受けて飲み、力落ち疲るれば、前に伏したる死人の肉を切りて食ひて皆人々の自害しはてんまでと戰ひけるを、安間六郎左衛門走り下りて、何時を期に合戰をばし給ふぞ、大將は早御自害候ひつるぞやと申しければ、いざやさらば、とても死なんずる命を、若しやと寄手の大將のあたりへ紛れ寄りて、よからんずる敵と倶に差し違へて死なんとて、五十餘人の兵ども、三の木戸を同時に打ち出で、攻口一方の寄手三千餘人を追ひまくり、其敵に相交りて、高越後守が陣へぞ近づきける。如何に心ばかりは彌武に思へども、城より打ち出でたる者どもの爲體、枯槁憔悴して、尋常の人に紛るべくも

なかりければ、皆人是を見知りて、押し隔てける間、一人も能き敵に合ふ者なくして、所々にて皆討れにけり。

都て城中に籠る處の勢は百六十人、其中に降人になりて助かる者十二人、岩の中に隱れて活きたる者四人、其外百五十一人は一時に自害して、皆戰場の土となりけり。されば今に到るまで其怨靈此所に留りて、月曇り雨暗き夜は、叫喚求食の聲啾々として、人の毛孔を寒からしむ。誓掃匈奴不顧身、五千貂錦喪胡塵、可憐無定河邊骨、猶是春閨夢裏人と、己亥の歳の亂を見て、陳陶が作りし隴西行も、かくやと思ひ知られたり。(卷十八)

【爪生】爪生判官保。足利の軍に叛いて官軍に味方した人。【磯菜】海邊に生ずる草の食用に供し得るもの。【諸大將の立てられたる】肝要としたる。【杣山】越前國南條郡にある。爪生判官・宇都宮美濃將監等が籠つてゐた。【與力】助力すること。【東風漸く閑になつて】漸く春風の長閑に吹く頃となつて。【義貞の勢は】杣山城に於ける勢である。【身を揉みて】氣を揉むと同じい。【高越後守】高ノ師泰のこと。【馬をぼし】ぼしは接尾語。意味を強める意がある。【日の中に】日の暮れぬ間に。【新田越後守】義顯。【春宮】

恒良親王。【弓箭の名を惜む家】武士の家といふに同じ。【唯此様にて云々】此のまゝ此の城においであれとの意。【一宮】尊良親王。【我を以て元首云々】元首は頭首。股肱はもゝとひぢ。主君の最も頼みとする臣。文選に「君爲二元首一臣爲二股肱一明二其一體一相待而成、有レ君無レ臣春秋刺焉。」【横手綱】褌のこと。【蕪木の浦】越前國南條郡河野村にある。【何といふ沙汰もなく云々】何といふ理由なく皆自害して、敵に利益得させて何の役に立つか。【いざさせ給へ】人を誘ふ言葉。さあ一緒に來なさい。【若しやと】萬一にも隱れ終せるかと。【穿げたる】深く掘れ込んだ。【何時を期に】いつまでを限りに。【枯槁憔悴】痩せ衰へてやつれたこと。【叫喚求食】わめき食を求めること。叫喚地獄や餓鬼道に於ける如く、佛果を得ない痩せて死んだ亡靈が、わめいたり食を求めたりするといふのだ。【啾々】しくしくと泣く聲の形容。【毛孔を寒からしむ】恐ろしさにぞつとさせる。身の毛をよだゝせる。【誓掃二何奴一云々の詩】何奴は支那北邊の蕃族。貂錦は貂裘錦衣で文武官のこと。無定河は綏德州にある河。詩の意は誓つて何奴を掃はうと、身を顧みずに死んだ五千人の人々は、無慚にも無定河邊の白骨となつてゐるのに、家鄕では空閨を守る妻が其の歸來を夢みてゐる。【陳陶】晩唐の詩人。平淡の妙を得たと言はる。

義貞自害の事

燈明寺の前にて、三萬餘騎を七手に分けて、七の城を押し阻てゝ、先づ對城をぞ取られける。かねての配立には、前なる兵は城に向ひ逢ひて合戰を致し、後なる足輕は、櫓をかき塀を塗りて、對城を取りすましたらんずる後、漸々に攻め落すべしと議定せられたりけるが、平泉寺の衆徒のこもりたる藤島の城、以の外に色めき渡りて、聽て落つべく見えける間、數萬の寄手是に機を得て、先づ對城の沙汰をさしおき、塀に着き堀につかりて、喚き叫んでせめ戰ふ。衆徒も落色に見えけるが、とても遁るべき方のなき程を知りけるにや。身命を捨てて是を防ぐ。官軍梱を覆して入らんとすれば、衆徒走木を出して突き落す。衆徒橋を渡りて打ち出づれば、寄手の官軍鋒を調へて斬りて落す。追ひつ返しつ入れ替る戰に、時刻押し移りて、日已に西山に沈まんとす。大將義貞は、燈明寺の前にひかへて、手負の實檢しておはしけるが、藤島の戰强くして、官軍やゝもすれば追立らるゝ體に見えける間、安からぬことに思はれけるにや、馬に乘替へ鎧を着かへて、纔に五十餘騎の勢を相從へ、路をかへ畔を傳ひ、藤島の城

へぞ向はれける。其時分黑丸の城より、細川出羽守、鹿草彦太郎兩大將にて、藤島の城を攻めける寄手共を追ひ拂はんとて、三百餘騎の勢にて横暇を廻りけるに、義貞覿面に行き合ひ給ふ。細川が方には、歩立にて楯をついたる射手ども多かりければ、深田に走り下り、前に持つ楯を衝き雙べて、鏃を支へて散々に射る。義貞の方には、射手の一人もなく、楯の一帖をももたざれば、前なる兵義貞の矢面に立ち塞りて、只的になりてぞ射られける。

中野藤內左衞門は、義貞に目加して千鈞の弩は鼷鼠のために機を發せずと申しけるを、義貞きゝもあへず、失レ士獨免ルは、我意にあらずといひて、尙敵の中へ懸入らんと、駿馬に一鞭をすゝめらる。此馬名譽の駿足なりければ、一二丈の堀をも前々輙く越えけるが、五筋まで射立られたる矢にやよわりけん。小溝一をこえかねて、屛風をたふすが如く、岸の下にぞころびける。義貞弓手の足をしかれて、起きあがらんとし給ふ處に、白羽の一筋眞向のはづれ、眉間の眞中にぞ立ちたりける。急所の痛手

なれば、一矢に目くれ心迷ひければ義貞今は叶はじとや思ひけん。拔きたる太刀を左の手に取り渡し、自ら首をかき切りて、深泥の中に藏して、其上に横りてぞ伏し給ひける。越中國の住人氏家中務亟重國、畔を傳へて走りより、其首を取りて鋒に貫き、鎧太刀刀同じく取り持ちて、黑丸の城へ馳せ歸る。義貞の前に畷を阻てゝ戰ひける、結城上野介、中野藤内左衞門尉、金持太郎左衞門尉、此等馬より飛びて下り、義貞の死骸の前に跪きて、腹かき切りて重り臥す。此外四十餘騎の兵、皆堀溝の中に射落されて、敵の一人をも取り得ず、犬死してこそ伏したりけれ。

此時左中將の兵三萬餘騎、皆猛く勇める者どもなれば、身にかはり命に代らんと、思はぬ者はなかりけれども、小雨まじりの夕霧に、誰を誰とも見分ねば、大將自ら戰ひ打死し給ふをも、知らざりけるこそ悲しけれ。只よそにある郎等が、主の馬に乘り替へて、河合をさして引きけるを、數萬の官軍遙に見て、大將の跡に隨はんと、見定めたることもなく、心々にぞ落ち行きける。」

漢高祖は自ら淮南の黥布を討ちし時、流矢に當りて未央宮の裏にして崩じ給ひ、齊宣王は、自ら楚の短兵と戰ひて、干戈に貫れて、修羅場の下に死し給ひき。されば蛟龍ハ常保ツ二深淵之中一、若シ遊ブ二淺渚一有リ二漁網釣者之愁一といへり。此人君の股肱として、武將の位に備りしかば、身を愼み命を全くしてこそ大義の功を致さるべかりしに、自らさしもなき戰場に赴きて、匹夫の鏑に命を止めし事、運の極といひながら、うたてかりし事どもなり。

軍散じて後、氏家中務丞尾張守の前に參りて、重國こそ新田殿の御一族かと、おぼしき敵を討ちて、首を取りて候へ。誰とは名のり候はねば、名字をば知り候はねども、馬物具の樣、相順ひし兵共の尸骸を見て、腹をきり討死を仕り候ひつる體、何樣尋常の葉武者にてはあらじと覺えて候。これぞ其死人のはだに懸けて候ひつるまぶりにて候とて、血をも未洗はぬ首に、土のつきたる金襴の守を副へてぞ出したりける。尾張守此首を能々見給ひて、あな不思議や、よに新田左中將の顏つきに似たる所あるぞや。

若しそれならば、左の眉の上に矢の疵あるべしとて、自ら鬢櫛を以て髮をかきあげ血を洗ぎ、土をあらひ落して、是を見給ふに、果して左の眉の上に疵の跡あり。是に彌心つきて、帶れだる二振の太刀をば取り寄せて見給ふに、金銀を延べて作りたるに、一振には銀を以て、金膝纒の上に、鬼切といふ文字を沈めたり。一振には金を以て銀脛巾の上に、鬼丸といふ文字を入れらる。是は共に源氏重代の重寶にて、義貞の方に傳りたりと聞ゆれば、末々一族共の帶くべき太刀にはあらずと見るに、彌怪しければ、膚の守を開きて見給ふに、吉野の帝の御宸筆にて、朝敵征伐事、叡慮所レ向、偏在二義貞武功一、選未レ求レ他、殊可レ運二早速之計略一者也と遊ばされたり。さては義貞の首相違なかりけりとて、尸骸を輿に乘せ、時衆八人にかゝせて、葬禮のために往生院へ送られ、首をば朱の唐櫃に入れ、氏家中務を副へて、潜に京都へ上せられけり。

（巻二十）

義貞は敵城七十餘を攻取つた勢で、足利高經の據つてゐる足羽城を攻めたのだ。【燈明寺】越前吉田郡中藤

島村。【七の城】 足羽城では城中に七つの城を築いてあつた。【對城】 七手に分けて、七つの城の一つ一つに對して對城を築かうとした。對城は一つの城にして造る城。【配立】 手筈。手配り。【平泉寺】 大野郡平泉寺村。【藤島城】 前出、藤島村にあつた。【色めき渡る】 全體にまけ色が見えること。【栫を覆して】 自分の持てゐる栫を踏まへて塀に上らうとすること。【走木】 木をすべらせて投げてやること。【畔】 あぜのこと。田のふちの陸のこと。【横畷】 畷もあぜ。田の横のあぜ。【覿面】 まのあたりに。眞正面に。【千鈞の弩は云々】 鈞は三十斤、弩は大弓、鼷鼠ははつかねずみ。小なるものに大なる力を用ひずの意。魏志に「千鈞之弩不下爲二鼷鼠一發上機」。【名譽の駿足】 有名な駿馬。【弓手】 左手。【眞向のはづれ】 冑の眞正面のまびさしの端。【犬死】 むだじに。【よそにある郎等】 その時義貞に從つて來なかつた郎等。【河合】 越前國吉田郡にある。【漢の高祖は云々】 史記高祖本紀「高祖撃二黥布一時、爲二流矢所一レ中、行道病、四月甲辰崩二長樂宮一」 【齊の宣王は云々】 本據未詳。【短兵】 短き武器のこと。玆では小勢の兵といふ意に用ひたのであらう。【修羅場】 戰場といふ意。【蛟龍は云々】 神龍釣者の云々の條參照。【さしもなき】 それ程必要でもなき。【尾張守の前に參つて】 尾張守は足羽の城主足利高經のこと。【葉武者】 つまらぬ武士。【金銀をのべて】 金銀を打ちのべて薄くし、それを飾にした太刀。【膝纏】 刀の鍔の降に鍔元の動かぬやうにつけた金具。【末々の一族】 新田の重要ならぬ一族。【時衆】 不明。寺衆にて、寺に使はるゝ人か。【往生院】 越前國坂井郡高柳村。今稱念寺。

義貞の首を獄門に懸くる事附勾當内侍の事

新田左中將の首京都に着きければ、是朝敵の最、武敵の雄なりとて、大路を渡して、獄門に懸らる。此人前朝の寵臣にて、武功世に蒙らしめしかば、天下の倚賴として、其芳情を悦び、其恩顧をまつ人、幾千萬といふ數を知らず、京中に相交りたれば、車馬道に横り、男女岐に立ちて、是を見るに堪へず、泣き悲む聲呦々たり。

中にも彼北の臺勾當の內侍の局の悲を、傳へ聞くこそあはれなれ。此女房は頭の大夫行房の女にて、金屋の內に粧を閉ぢ、雞障の下に媚を深くして、二八の春の比より內侍に召されて、君王の傍に侍り、羅綺にだも堪へざる貌は、春の風一片の花を吹き殘すかと疑はれ、紅紛を事とせる顏は、秋の雲半江の月をはき出すに似たり。されば椒房の三十六宮、五雲の漸くに遠ることを听み、禁漏の二十五聲、一夜の正に長きことと

を恨む。去ぬる建武のはじめ、天下又亂れんとせし時、新田左中將常に召されて、內裏の御警固にぞ候はれける。或夜月冷しく風秋なるに、此勾當の內侍、半簾を卷きて、琴を彈じ給ひけり。中將其怨聲に心引れて、覺えず禁庭の月に立ち吟ひ、あやなく心そゞろにあこがれてければ、唐垣の傍に立ち紛れて伺ひけるを、內侍見る人ありと物侘しげにて、琴をば彈かずなりぬ。夜痛く深けて、有明の月のくまなく差し入りたるに、類までやはつらからぬと、打ち詠めてしほれ伏したる氣色の、折らば落ちぬべき萩の露、拾はゞ消えなん玉篠の、あられより尙あだなれば、中將行末も知らぬ道にまよひぬる心地して、歸る方もさだかならず。淑景舍の傍にやすらひかねて立ち明す。朝より夙に歸りても、幽なりし面影の、猶こゝもとにある心迷に、世のわざ人のいひかはすことも、心の外なればいつとなく、起きもせず寐もせで夜を明し日を暮して、若ししるべする海人だにあらば、忘草のおふといふ浦のあたりにも、尋ねゆきなましと、そぞろに思ひしづみ給ふ。

あまりにせん方なきまゝに、媒すべき人を尋ね出して、そよとばかりを、しらすべき風の便の下荻の、穗に出づるまではなくともとて、

　我袖のなみだにとまるかげとだにしらで雲井の月やすむらん

と詠みて遣されたりければ、君の聞召されんことも憚ありとて、よに哀げなる氣色に見えながら、手にだに取らずと、使歸りて語りければ、中將いとゞ思ひしほれて、いふべき方なく、あるを憑の命とも覺えずなりぬべきを、何人か奏しけん、君等閑ならずと聞召して、夷心のわく方なさに、思ひそめけるも理なりと、哀なることに思召しければ、御遊の御次に左中將を召され、御酒たばせ給ひけるに、勾當の内侍をば、此盃につけてとぞ仰出されける。左中將限りなく忝しと悦びて、翌の夜軈て牛車さはやかにしたてゝ、かくと案内せさせたるに、内侍もはや此年月の志に、さそふ水あらばと思ひけるにや、さのみ深け過ぎぬ程に、車のきしる音して、中門に轅を指し廻せば、侍兒一人二人妻戸をさしかくして、驚破めきあへり。中將は此幾年を戀ひ忍びて、相

逢ふ今の心の中、優曇花の春まち得たる心地して、珊瑚の枕の上に陽臺の夢長くさゝめ、連理の枝のほとりに、驪山の花自ら濃なり。あやなく迷ふ心の道、諫める人もなかりしかば、去ぬる建武のすゑに、朝敵西海の波に漂ひし時も、中將此內侍に暫しの別を悲みて、征路に滯り、後に山門臨幸の時、寄手大嶽より追ひ落されて、其儘寄せば京をも落さんとせしかども、中將此內侍に迷ひて、勝に乘り疲を攻むる戰を事とせず、其弊果して敵のために國を奪はれたり。誠に一たび笑みて能く國を傾くと、古人の是を戒めしも理なりとぞ覺えたる。

中將坂本より北國へ落ち給ひし時は、路次の難儀を顧みて、此內侍をば今堅田といふ所にぞ留め置れたりける。かゝらぬ時のわかれだに、行くには跡を顧みて、頭を家山の雲に廻らし、留るは末を思ひやりて、泪を天涯の雨にそふ。況や中將は、行末とてもたのみなき北狄の國に赴き給へば、生きて再び廻りあはん、後の契もいさ知らず。又內侍は都近き海人の磯屋に身をかくし給ひければ、今もやさがし出されて、憂名

を人に聞かれんずらんと、一方ならずなげき給ふ。翌年の春父行房朝臣、金崎にて打れ給ひぬと聞えしかば、思の上に悲をそへて、明日までの命もなしや何かせんと、歎きしづみ給ひしかども、さすがに消えぬ露の身なれば、起居に袖をほしわびて、二年あまりになりにけり。中將も越前に下り着きし日より、軈て迎をも上せばやと思ひ給ひけれども、道の程も輙からず、又人の言思はんずる所憚りあれば、只時々の音信ばかりを互に殘る命にて、年月を送り給ひけるが、其秋のはじめに、今は道の程も暫く靜になりぬればとて、迎の人を上せられたりければ、内侍は此三年が間、暗き夜のやみに迷へるが、俄に夜の明けたる心地して、頓て先づ杣山まで下り着き給ひぬ。折節中將は足羽といふ所へ向ひ給ひたりとて、此處には人もなかりければ、杣山より輿の轅を廻して、淺津の橋を渡り給ふ處に、瓜生彈正左衛門尉、百騎ばかりにて行合ひ奉りたるが、馬より飛びており、輿の前にひれ伏して、是はいづくへとて御渡り候ふらん。新田殿は昨日の暮に、足羽と申す所にて討れさせ給ひて候ふと申しもはてず、涙

をはらはらとこぼせば、内侍の局、こは如何なる夢のうつゝぞやと、胸ふさがり肝消えて、中々泪も落ちやらず、輿の中にふし沈みて、せめてはあはれ其人の討れ給ひつらん、野原の草の露の底にも、身をすて置きて歸れかし。さのみは後れさきたゝじ、共に消えはてなんと、泣き悲み給へども、早其輿かき返せとて、急ぎて又杣山へぞ返し入れまゐらせける。是ぞ此程中將殿の住給ひし所なりとて、色紙押し散したる障子の內を見給へば、何となき手ずさみの筆の跡までも、只都へいつかと、あらまされたる言の葉をのみ書きおき、讀みすてられたり。

かかる空しき形見を見るにつけても、いとゞ悲しみふかくなり行けば、心少しも慰むべき方ならねども、中將のすみすて給ひし跡なれば、爰にて中陰の程をも過して、なき跡をも弔はゞやと思しけるに、頓て其邊も騷しくなりて、敵の近づくなど聞えしかば、城の麓はあしかるべしとて、頓て又京へ上せ奉り、仁和寺のあたり、幽なる宿の主だに、すまずなりぬる蓬生の宿に送りおき奉る。都も今は却て旅なれば、住所も定ま

らず、心うかれ袖しをれて、いづくにか身を浮船のよるべもあるべきと、昔見し人の行末を尋ねて、陽明の傍へ行き給ひける路に、人數多立ちあひて、あなあはれなんどいふ音するを、何事にかと立ち留りて見給へば、越路遙に尋ね行きて、あはでかへりし新田左中將義貞の首を、獄門の木に懸られて、眼塞り色變ぜり。内侍の局是を二目とも見給はずして、傍なる築地の陰になき倒れ給ひけり。知るも知らぬも是を見て、共に涙を流さぬはなかりけり。日已に暮れけれども、立ち歸るべき心地もなければ、蓬が本の露の下に泣きしをれておはしけるを、其邊なる道場の聖、餘に御いたはしく見えさせ給ひ候とて、内へいざなひ入れ奉れば、其夜やがて翠の髮を剃り下し、紅顏を黒染にやつし給ふ。暫しがほどは、なき面影を身にそへて、泣き悲み給ひしが、會者定離の理に、愛別離苦の夢を覺して、厭離穢土の心は日々にすゝみ、欣求淨土の念時々に增りければ、嵯峨の奥往生院のあたりなる柴の扉に、明暮を行ひすましてぞおはしける。（卷二十）

【朝敵の最云々】　朝敵は北朝の敵、武敵は武家の敵。【大路を渡して】　大路をひき廻して。【世に家らしめ】武功の恩惠を世に與へた。【芳情】　恩顧に同じ。【呦々】　聲が相和する形容。【北臺】　貴人の夫人の稱。【勾當内侍】　掌侍の上首をいふ官名であるが、玆では其人の名の如く呼ぶ。【金屋云々】　美しき家のうち深く、美しく育てられたこと。【雞障云々】　前句と同意。雞障は宮中の金雞障でなくて、美しいふすまといふ程の意。【羅綺にだも云々】　羅綺はうすものとあや。陳鴻の長恨歌傳に「體弱力微、若レ不レ任二羅綺一。」【紅粉を云々】　紅や白紛でよそほひを凝らした顏は、半月が秋の雲を出たやうであるとの意。【椒房の三十六宮】

椒房は后妃の御在所、即ち後宮。後宮の多くの后妃といふ程の意。【五雲の云々】　五雲は、五雲の車の略で、貴人の御車。天子のおとづれが少いこと。【禁漏の云々】　禁漏は禁中の漏刻、即ち水時計のこと。二十五聲は漏刻によつて時を告げる聲。一晝夜を四十八刻に分けたから、夜だけで二十五刻であつたものか。空閨のさびしさに、夜の長いのを恨むと。何れも勾當内侍のみが寵を得て、他の后妃が悲しみうらむさまを現はす。【怨聲】　人を怨むが如き聲。【あやなく】　理も分らぬまでに。【そゞろにあこがれ】　何となく心も身につかぬやうになる。【唐垣】　支那風の垣。【類までやは云々】　新古今集、有家「つれなさのたぐひまでやはつらからぬ、月をもめでじ有明の空。」によつたもの。「有明の月も、つれない人の類であるかの如くつれない。」と、歌の句をひいて獨言いつたもの。【折らば落ちぬべき云々】　色めいた女の艶な姿を言つたもの。源氏物語、帚木の卷「折らば落ちぬべき萩の露、ひろはゞ消えなむと見ゆる玉ざゝの上の霰などの、えんにやえかなるすきずきしさのみこそ、をかしく思さるらめ。」とある。【ゆくへも知らぬ云々】　暗中を迷ふ心地

せること。【淑景舍】桐壺ともいふ。大內裏五舍の一。五舍は昭陽舍・淑景舍・飛香舍・凝花舍・襲芳舍で何れも女官の居所。【やすらひかねて】詰所に歸つて寢ることも出來ずに。【朝より夙に】宮中から早朝に歸る。【こゝもとに】すぐこゝに。目の前に。【世のわざ云々】仕事も手につかず、人の言葉も耳に入らぬこと。【起きもせず云々】古今集、業平の「起きもせず寢もせで夜を明しては、春のものとてながめ暮しつ。」による。【しるべする云々】案內する海人があらば、忘草の生ひる浦に行つて其の草を折つて忘れたいと思ふ。【そよとばかり云々】思ふことをほんの一寸知らせる此音信に、明かに己が思ひは現れぬでも、とにかく知らせるだけは知らせたいの意。そよは荻の葉のなる音、穗に出づるは荻の穗が出ると、思ひが外に出でることゝを兼ねてゐる。新古今集、安住法師「世の常の秋風ならば荻の葉に、そよとばかりの音はしてまし。」【世に哀げなる】非常に心を動かされたらしい樣子。【あるを憑み云々】玉葉集、小侍從「同じ世にあるを賴みの命にて、をしむも誰が爲とかは知る。」によつたものであらう。【等閑ならずと】一通りならず義貞が戀すると聞召て。【夷心の云々】武士の一本調子の心で、君の侍女であるなどの區別も出來ずに思ひそめたのも道理。【かくと案內】迎へに參つたと告げる。【さそふ水云々】古今集、小町「わびぬれば身を浮草のねを絕えて、さそふ水あらばいなむとぞ思ふ。」による。【妻戶をさしかくして云々】從つて來た侍女が、義貞の第に下り立つてそよめいた樣であらう。【優曇花の云々】優曇花は三千年に一度咲き、其時は金輪王が出るといふ佛說の花である。容易に得られないものを得たこと。【珊瑚樹云々】次の句とともに、情愛のこまやかなことを述べたもの。これは美しきしとねの上に、いつ迄も眠らずに相語らふ意か。陽臺の夢

は、朝々暮々陽臺之下の陽臺で、即ち巫山の神女と語らつたことを指すのであらう。【連理の枝云々】驪山は、玄宗が楊貴妃を置いた宮。連理の枝はもく目の連つた枝のこと。長恨歌の「七月七日長生殿、夜半無レ人私語時、在レ天願作二比翼鳥一、在レ地願爲二連理枝一」によつて書いたもので。契の濃やかなことを言つたもの。【あやなく迷ふ】道理もなく迷ふ。【朝敵西海の波云々】延元元年二月、尊氏等が九州の方に逃げたこと。【寄手大嶽より云々】延元元年六月、西坂本の大嶽で、寄手二十萬騎を撃破し、谷二つを死屍で埋めた時のこと。【其弊】其の惡い結果。其弊害。【一たび笑みて云々】漢書外戚傳に、「李延年歌曰、北方有二佳人一、絶世而獨立、一顧傾二人城一、再顧傾二人國一。」【北狄】北方の夷。【憂名】よくない名。いやな評判。【殘る命】

それを命とし、それによりかゝつて生きてゐたこと。【色紙】歌をかく料紙。横五寸五分、縦六寸四分又は六寸の大さのものときまつてゐるといふ。【あらまされたる】豫期した。【中陰】人の死後四十九日の間。【蓬生の宿】草深い地のいぶせき家。【陽明】陽明門のことであらう。【道場の聖】道場は寺のこと。聖は僧のこと。【紅顔を云々】美しい顔を黒衣圓頂の尼姿にかへたこと。【なき面影云々】なき人の姿を常に忘れず。【會者定離】會うた者は必定に別れねばならぬといふこと。【愛別離苦】別離を悲しむこと。【厭離穢土】けがれた娑婆を厭ひ離れること。【欣求淨土】淨土に往生することを欣びの心で求めること。【行ひすまし】すましは澄しで、雜念の濁亂なく一心佛道を修めること。

先帝崩御の事

南朝の年號延元三年八月九日より、吉野の主上御不豫の御事ありけるが、次第に重らせ給ふ。醫王善逝の誓約も、祈るに其驗なく、耆婆扁鵲が靈藥も、施すに其驗おはしまさず。玉體日々に消えて、晏駕の期遠からじと見え給ひければ、大塔忠雲僧正、御枕に近づき奉りて、泪を抑へて申されけるは、神路山の花二たび開くる春を待ち、石淸水の流逐に澄むべき時あらば、さりとも佛神三寶も捨て進らせらるゝことは、よも候はじとこそ存じ候ひつるに、御脈已に替らせ給ひて候ふよし、典藥頭驚き申し候へば、今は偏に十善の天位を捨てゝ、三明の覺路に趣かせ給ふべき御事をのみ、思召し定められ候ふべし。さても最期の一念に依りて、三界に生を引くと、經文に說れて候へば、萬歲の後の御事、萬叡慮にかゝり候はんことをば、悉く仰せ置れ候ひて、後生善所の

望をのみ、叡心に懸られ候ふべしと申されたりければ、主上苦しげなる御息を吐かせ給ひて、妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者、是如來の金言にして、平生朕が心にありしことなれば、秦穆公が三良を埋み、始皇帝の寶玉を隨へし事、一も朕が心に取らず。只生々世々の妄念ともなるべきは、朝敵を悉く亡して、四海を泰平ならしめんと思ふばかりなり。朕則ち早世の後は、第七の宮を天子の位に卽け奉りて、賢士忠臣事を謀り、義貞義助が忠功を賞して、子孫不義の行なくば、股肱の臣として天下を鎭むべし。之を思ふ故に、玉骨は縱令南山の苔に埋るとも、魂魄は常に北闕の天を望まんと思ふ。若し命を背き義を輕ぜば、君も繼體の君にあらず、臣も忠烈の臣にあらじと、委細に綸言を殘されて、左の御手に法華經の五卷を持せ給ひ、右の御手には御劍を按じて、八月十六日の丑の尅に、遂に崩御なりにけり。

悲哉北辰位高くして、百官星如くに列るといへども、九泉の旅の路には、供奉仕る臣一人もなし。奈何せん南山の地僻にして、萬卒雲の如くに集るといへとも、無常

敵の來るをば禦ぎ止むる兵吏になし。只中流に船を覆して一壺の浪に漂ひ、暗夜に燈消えて五更の雨に向ふが如し。葬禮の御事かねて遺勅ありしかば、御終焉の御形を改めず、棺槨を厚くし、御座を正しくして、吉野山の麓、藏王堂の艮なる、林の奥に圓丘を高く築きて、北向に葬り奉る。寂寞たる空山の裏、鳥啼き日已に暮れぬ。土墳數尺の草、一徑涙盡きて愁未盡きず。舊臣后妃泣々鼎湖の雲を瞻望して、恨を天邊の月にそへ、覇陵の風に夙夜して、別を夢裏の花に慕ふ、哀なりし御事なり。

天下久しく亂に向ふことは、末法の風俗なれば、暫く言ふに足らず、延喜天暦より以來、先帝ほどの聖主神武の君は、未おはしまさゞりしかば、何となくとも、聖德一たび開けて、拜趨忠功の望を達せぬ事はあらじと、人皆憑をなしけるが、君の崩御なりぬるを見進らせて、今は御裳濯河の流の末も絶えはて、筑波山の陰に寄る人もなくて、天下皆魔魅の掌握に落つる世にならむずらんと、あぢきなく覺えければ、多年着き纏ひ進らせし卿相雲客、或は東海の波を踏みて、仲連が跡を尋ね、或は南山の歌を唱へ

て寧戚が行を學ばんと、思ひ〳〵に身の隱家をぞ求め給ひける。（卷二十一）

【不豫】帝王の御病氣。【醫王善逝】藥師如來のこと。その誓約とは病者を救ひ給はむとの御誓。【耆婆】古の印度の名醫。【扁鵲】支那周代の名醫。【晏駕】崩御の意。晏はおそしの意。臣子の心には崩御を信じ難く、おそく駕して出御あらんと思ふの義。【神路山の花云々】皇家の榮ゆる期を待つてゐたならばの意。神路山は伊勢外宮の鎭座ある山、神路山の花開くは皇室の榮ゆること、石清水の流れ澄むも意は同じ。【佛神三寶】三寶は佛寶・法寶・僧寶のこと。【典藥頭】典藥寮の長官。藥を徴したり官の醫師を管轄して疾病・藥園のことを司つたりする。【十善の天位】天子の御位。前世に十善を行つたものが其果報で天子となるより云ふ。【三明の覺路】過去世の相を知ること。未來世の相を知ること、及び現世の苦相を知りて惱煩を斷つこと、これを三明といふ。此の三明を得るのは佛陀となる捷路であるから、これを三明の覺路といふ。覺路とはさとりの路である。【最後の一念に依つて云々】最後の心一つが惡いと、凡夫の生死往來する三界（欲界・色界・無色界）といふ迷界に必ず生れるといふこと。【萬歲の後】崩御の後。天子及び貴人の死後といふ意味に使ふ言葉。【妻子珍寶云々】大集經卷十六に出てゐる偈の中の文句。妻子・珍寶・王位の如き、此世にて最も貴びしものも、臨終の時には一つも隨はないといふこと。【秦の穆公が云々】史記秦本紀に「秦穆公卒、從死者百七十七人、秦之良臣子輿氏三人、名曰奄息・仲行・鍼虎、亦在二從レ死之中一、秦人哀レ之、爲作下歌二黃鳥一之詩上。」とあるによる。【始皇帝の云々】やはり同書に「葬二始皇驪山一、穿二三泉一下レ銅而致レ槨、宮

親・百官・奇器・・珍怪、徙レ藏滿レ之。」とあるによる。【第七の宮】義良親王。北畠顯信と陸奥へ行かれようとして、風の爲に歸られた方。【子孫不義の云々】義貞の子孫に不義がなかつたならば。【南山の苔に云々】南山は吉野山を指す。北闕は北門であるが北方の意。文の意は明かである。【繼體の君】統を繼いで天位に卽く君。あとつぎの君。【御劍を按じ】按じは持つの意。【北辰】北極星のこと。衆星が北辰に向ふのは恰度群臣が天子に仕へる樣だから之を天子にたとへる。【九泉】よみぢ。黃泉。【南山の地僻にして】吉野の地がかたより遠くて攻來りにくい意。僻をさがりと訓むは離るの意か。【無常の敵云々】無常は轉變生滅のつねなきこと。其の無常の來るを敵の攻め來るに譬へたもの。【中流に船を云々】鶡冠子に「中流失レ船一壺千金。」とあつて、中流で船を覆した時は一つの壺をも非常に賴みとすること。玆は中流に船を覆して一壺にすがるが如く、非常に行末の心細きこと。【艮】東北のこと。【空山】人の居ない山。【土墳數尺の草云々】

土墳は土饅頭のこと。土墳の傍には數尺の草があり、それに通ふ一本の細い道がある。其道を行つて土墳に詣れば、淚は出し盡して出ないが、悲しみのみは盡きることなく頻に湧くといふ程の意。【鼎湖の雲に云々】

黃帝が銅で鼎を鑄た所が龍が天から黃帝を迎へに來た。帝及び群臣後宮はそれに從つたが、小臣は騎ることが出來ず、龍の髯につかまつて引いた所が其髯が拔けて小臣等の手に留まつた。又帝は弓を墮された。そこで百姓が其の髯と弓とを抱いて天を仰いで泣き、其地を鼎湖と名けた。玆は天皇の崩御を哀しんで、空の月に一層の哀しみを增すの意。【覇陵の風に云々】こゝも亦崩御をかなしんで夢にまで昔の花を見る意。覇陵は漢の文帝を葬つた地。【末法の風俗云々】釋迦の死後千年を正法、その後の千年を像法、其後の一萬年を

末法といふ。佛の教も衰へた末の世の意。天下の亂は末法の習なれば、それのみでは何も世を隱れるに當らないが、大いに此の天皇に望みをかけたのに、それが急に崩ぜられたので、世をはかなく思つたとの意。【御裳濯川の云々】御裳御濯川は五十鈴川の上流、伊勢神宮の側を流れる所から、天照大神の御裔をさす。皇統も絶えるといふこと。【筑波山の云々】君にしたがひ其恩に浴する人もないこと。古今集に「筑波ねのこのもかのものにかげはあれど、君がみかげにますかげはなし。」【魔魅】ばけもの。逆賊を指す。【あぢきなく】面白味なく。つまらなく。【東海の波を踏んで云々】戰國策によると、齊人魯仲連、魏趙等の國が秦を尊んで帝となさんとするをきいて「秦は禮儀を棄てゝ戰功を第一とする國である、もし秦が帝となつたなら、私は東海に赴いて死なうのみ」といつた。こゝは北朝の天子の代となる順序であるから、そんな君に仕へず、仲連の如く死なうとしたこと。【南山の歌を云々】寧戚は牛角をたゝいて南山の歌を謠ひ、齊桓公に用ひられた隱逸の賢人。南山の歌は「南山燦々、白石爛々、中有二鯉魚一長尺有半、生不レ遭二堯與一レ舜、短布單衣纔至レ骭、從レ昏飲レ牛至二夜半一、長夜漫々何時旦。」こゝは南山といふ名から南山の歌を思ひついて書いたもので、又聖帝が出たらば出でゝ仕へようと、身を隱したことをいふ。

正行吉野へ參る事

安部野の合戰は、霜月二十六日のことなれば、渡邊の橋よりせき落されて、流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楯に助けられて、河より引き上られたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚に結びて、生くべしとも見えざりけるを、楠情ある者なれば、小袖を脱ぎ替へさせて身を暖め、藥を與へて疵を療せしむ。此の如く四五日皆勞りて、馬に乘る者には馬を引き、物具失へる人には物具をきせて、色代してぞ送りける。されば敵ながら、其情を感ずる人は、今日より後心を通ぜん事を思ひ、其恩を報ぜんとする人は、軈て彼手に屬して後、四條縄手の合戰に、討死をぞしける。

さても今年兩度の合戰に、京勢無下に折ち負けて、畿内多くの敵のために犯し奪はれ、遠國又蜂起しぬと告げゝれば、將軍左兵衛督の周章、只熱湯にて手を濯ふが如し。今は末々の源氏、國々の催勢なんどを向けては、叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國、中國、東山、東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。軍勢の手分事定りて、未一日も過ぎざるに、越後守師泰は、手勢三

千餘騎を率して、十二月十四日の早旦に、先づ淀に着く。是を聞きて馳せ加る人々には、武田甲斐守、逸見孫六入道、長井丹後入道、厚東駿河守、宇都宮三河入道、赤松信濃守、小早河備後守、都合其勢二萬餘騎、淀、羽束師、赤井、大渡の在家に居餘りて、堂舍佛閣に充滿たり。同廿五日、武藏守手勢七千餘騎を率して、八幡に着く。此手に馳せ加はる人々には、細河阿波將監淸氏、仁木左京大夫賴章、今河五郞入道、武田伊豆守、高刑部大輔、同播磨守、南部遠江守、同次郞左衞門尉、千葉介、宇都宮遠江入道、佐々木佐渡判官入道、同六角判官、同黑田判官、長九郞左衞門尉、松田備前三郞、須々木備中守、宇津木平三、曾我左衞門、多田院御家人、源氏廿三人、外樣大名四百三十六人、都合其勢六萬餘騎、八幡、山崎、眞木、葛葉、鹿島、神崎、櫻井、水無瀨に充滿せり。

京勢雲霞の如く、淀八幡に着きぬと聞えしかば、楠帶刀正行、舍弟正時一族打ち連れて、十二月廿七日、吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成㕝

弱の身を以て、大敵の威を碎き、先朝の震襟を休め進らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻め上り候間、危きを見て命を致す處、かねて思ひ定め候ひけるかに依りて、遂に攝州湊河にして討死仕り候ひ了んぬ。其時正行十三歳に罷りなり候ひしを、合戰の場へは伴はで河內へ歸し、死殘り候はんずる一族を扶持し、朝敵を亡し、君を御代に卽け進せよと申置きて死して候。然るに正行、正時、已に壯年に及び候ひぬ。此度我と手を碎き合戰仕候はずば、且は亡父の申しし遺言に違ひ、且は武略のいふかひなき謗に落つべく覺え候。有待の身思ふに任せぬ習ひにて、病に犯され早世仕る事候ひなば、只君の御爲には不忠の身となり、父のためには不孝の子となるべきにて候ふ間、今度師直師泰に懸合ひ、身命を盡し合戰仕りて、彼等が頭を正行が手に懸けて取り候か、正行正時が首を彼等に取られ候か、其二つの中に戰の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顏を拜し奉らんために、參內仕りて候と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心其氣色に顯れければ、傳奏未奏せざる先に、まづ直

衣の袖をぞぬらされける。

主上則ち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顔殊に麗しく、諸卒を照臨ありて正行を近く召して、以前兩度の戰に勝つ事を得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮先づ憤を慰する條、累代の武功返す〴〵も神妙なり。大敵今勢を盡して向ふなれば、今度の合戰天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずる事は、勇士の心とする處なれば、今度の合戰手を下すべきにあらずといへども、進むべきを知りて進むは、時を失はざらんがためなり。退くべきを見て退くは、後を全うせんがためなり。朕汝を以て股肱とす。愼んで命を全うすべしと仰せ出されければ、正行頭を地につけて、兎角の勅答に及ばず、只是を最後の參内なりと思ひ定めて退出す。

正行、正時、和田新發意、舍弟新兵衞、同紀六左衞門子息二人、野田四郎子息二人、楠將監、西河子息、關地良圓以下、今度の軍に一足も引かず、一處にて討死せんと約束したりける兵、百四十三人、先皇の御廟に參りて、今度の軍難義ならば、討死仕る

べき暇（いとま）を申して、如意輪堂の壁板に、各名字を過去帳（くわこちやう）に書き連ねて、その奥に、

返らじとかねて思へばあづさ弓なき數にいる名をぞとゞむる

と一首の歌を書き留め、逆修（ぎやくしゆ）のためと思しくて、各髻を切りて、佛殿に投げ入れ、其日吉野を打出でゝ、敵陣へとぞ向ひける。（卷二十六）

【安部野の合戰】攝津の天王寺以南、住吉祠に至る一帶の沙丘を安部野といふ。正行こゝにて山名伊豆守以下の軍を大いに破る。【霜月二十六日】正平二年十一月二十六日。【渡邊の橋】今の大阪市天滿・天神兩橋の間にあつたと。山名の一陣二陣、濱の手・天王寺の勢一度に渡邊の橋を退いたので、狹い橋の上から多くせき落された。【かひなき命】つまらない命。助ける甲斐もないやうな命を、楠は情深くも助けた意。【秋の霜云々】朝の霜氷が皮膚や肉を破つて。「秋の」は單に霜といはうが爲の言葉である。【小袖】衣服の一種。大袖や廣袖に對し、袖の下部を圓く縫つたもの。【色代】挨拶又は會釋。それらの人々に一々挨拶して歸した。【彼手に屬して】正行の部下となつて。【兩度の合戰】八月十四日の藤井寺の戰と十二月二十六日の安部野の戰。【蜂起】蜂の巣をつゝいた如くむらがり起ること。【將軍左兵衞督】尊氏と直義。【周章】あわてること。【熱湯にて云々】あわてる形容。あつつ、あつつと手を一寸觸れたり又引込めたりするさま。【末々の源氏】源氏の末流。【催勢】催促して集め寄せた軍勢。【隆資を以て】隆資の傳奏にて。とり次に

て。【尫弱】尫もよわし。かよわきこと。【危きを見て云々】論語憲門篇に「子曰、見レ利思レ義、見レ危授レ命。」君の危きを見て、生命を捧ぐべき場合であると、豫て思つたか。【壯年】禮記曲禮に「三十曰壯」とある。【我と手を碎き云々】自ら出來る限りのてだてを盡して。【武略の云々】いくさの懸引が言ふ價値もないほど下手だといふ謗に合ふであらう。【有待の身】はかなき人間の身。有待は絶對に對する相待の意で、相對のものは其性質が無常で生滅變化限がない。生滅無常の理に支配されるはかない人間共は有待の身である。【傳奏】武家から願ひ出すことを傳達奏聞する職。武家時代の職名で、建武中興の時には傳奏二十四人を置いた。【直衣の袖を云々】直衣は貴人の平常の服。こゝは隆資卿自らが未だ奏せないうちに泣いたと。【南殿】紫宸殿の別名であるが、こゝでは行宮中の一つをかく呼んだものであらう。【諸卒を照臨】照臨は照覽に同じ。正行の伴つた諸卒を御覽になる。【累代の武功】代々の戰功。正成正行二代をいふ。【進退度に當り云々】軍の懸引を時機に應じ適當にすることは武士の主とする所であるから、何も言ふべきではないが、退くべき場合には退いて股肱の任を完うせよとの綸命である。正行討死の覺悟が言動に現れてゐるので、唯だ一途に死なうとするなとの聖旨である。【命を全うすべし】命ぜられた任務を十分に仕とげよ。【兎角の勅答云々】感極まつてはかぐ\しく勅答もせぬこと。【先皇】後醍醐帝。【過去帳に】過去帳の如くにといふ意。過去帳は死人の法名・俗名等を記し置く帳簿。【返らじとの歌】梓弓はいるにかゝる枕詞。いるは射る・入るの懸詞。一首の意は明瞭。【逆修】生前に逆(あらかじ)め死後の冥福を修すること。

楠正行最期の事

去程に師直と楠とが間、一町ばかりなりにけり。是ぞ願ふ處の敵よと見澄して、呂陽二度白骨を連ねて、韓と難を搆へ戰ひける心も、是には過ぎじと勇み悦びて、千里を一足に飛びて懸らんと、心ばかりは早りけれども、今朝の巳の刻より申の時の終まで、三十餘度の戰に、息絶え氣疲るゝのみならず、深手淺手負はぬ者もなかりければ、馬武者を追攻めて、討つべき樣ぞなかりける。されども多くの敵共、四角八方へ追散して、師直七八十騎にて控へたれば、何程の事かあるべきと思ふ心を力にて、和田、楠、野田、關地良圓、河邊石掬丸、我先々々とぞ進みたる。餘に辭理なく懸られて、師直已に引色に見えける處に、九國の住人須々木四郎とて、强弓の矢つぎばや、三人張に十三束二伏、百歩に柳の葉を立て、百矢をはずさぬ程の射手のありけるが、人の解き

捨てたる箙、尻籠、胡籙を搔き抱くばかり取り集めて、雨の降るが如く、矢坪を指してぞ射たりける。一日着暖めたる物具なれば、中ると當る矢、篦深に立たぬはなかりけり。楠次郎眉間ふえのはづれ射られて、拔く程の氣力もなし。正行は左右の膝口三所、右の頰先、左の目尻、篦深に射られて、其矢冬野の霜に伏したるが如く折れかゝりたれば、矢すくみに立ちてはたらかず。其外三十餘人の兵ども、矢三筋四筋射立られぬ者もなかりければ、今は是までぞ、敵の手に懸るなとて、楠兄弟差し違へ、北枕に臥しければ、自餘の兵三十二人、思ひ〳〵に搔腹き切りて、上が上に重り伏す。

和田新發意如何して紛れたりけん、師直が兵の中に交りて、武藏守に差し違へて死なんと近づきけるを、此程河内より降參したりける、湯淺本宮太郎左衞門といひける者、是を見知りて、和田が後へ立ち廻り、諸膝切りて倒る所を走り寄せて、頸を搔かんとするに、和田新發意、朱を洒ぎたる如くなる大の眼を見開きて、湯淺本宮をちやうと睨む。其眼終に塞がずして、湯淺に首をぞ取られける。大剛の者に睨まれて、湯淺臆

じてやありけん、其日より病つきて身心惱亂しけるが、仰けば和田が怒りたる顔天に見え、俯けば新發意が睨める眼地に見えて、怨靈五體を責めしかば、軍散じて七日と申すに、湯淺あがき死にぞ死しにける。

大塚掃部助手負ひたりけるが、楠猶跡にあるとも知らで、放馬のありけるに打ち乘りて、遂に落ち延びたりけるが、和田楠討たれりと聞きて、只一騎馳せ歸り、大勢の中へ懸入りて、切死にこそ死しにけれ。和田新兵衛正朝は、吉野殿に參りて、事の由を申さんとや思ひけん、只一人鎧一縮して、歩立になりて、太刀を右の脇に引き側め、敵の首一つ取りて、左の手に提げて、東條の方へぞ落ち行きける。安保肥前守忠實、只一騎馳合ひて、和田楠の人々皆自害せられて候に、見捨てゝ落られ候ふこそ情なく覺え候へ。返され候へ。見參に入らんと、詞をかけゝれば、和田新兵衛打ち笑ひて、返すに難きことかとて、四尺六寸の太刀の貝しのぎに、血の着きたるを打ち振りて走りかゝる。忠實一騎合の勝負叶はじとや思ひけん、馬をかけ開きて引き返す。忠實留れ

ば、正朝又落つ。落ち行けば忠實又追懸け、落懸くれば止り、一里ばかりを過ぐるまで、互に討たず討たれずして、日已に夕陽に及ばんとす。斯る處に青木次郎、長崎彦九郎二騎、箙に矢少し射殘して馳來る。新兵衞を懸退け〳〵射ける矢に、草摺の餘引合の下、七筋まで射立られて、新兵衞遂に忠實に首をば取られにけり。すべて今日一日の合戰に、和田楠が兄弟四人、一族二十三人、相順ふ兵百四十三人、命を君臣二代の義に留めて、名を古今無雙の功に殘せり。先年奥州の國司顯家卿、安部野にて討たれ、武將新田左中將義貞朝臣、越前にて亡びし後は、遠國に宮方の城郭少々ありといへども、勢未振はざれば今更驚くに足らず。唯此楠ばかりこそ、都近き切所に威を逞しくして、兩度まで大敵を靡かしぬれば、吉野の君も、魚の水を得たる如く叡慮を悅ばしめ、京都の敵も、虎の山に靠る恐懼をなしつるに、和田楠か一類、皆片時に亡びはてぬれば、聖運已に傾きぬ、武德誠に久しかるべしと、思はぬ人もなかりけり。（卷二十六）

【魯陽二度云々】非常な勢で勇み進んだこと。淮南子に「魯陽公與レ韓構レ難、戰酣方暮、援レ戈而麾レ之、日爲レ之反三舍。」とあつて、戈を以て日を招き返して再び死屍を連ねて戰つた樣な勢をいふ。【巳の刻より云々】午前十時から午後四時まで。【馬武者を云々】楠の方は皆馬を射られたので馬をすて、田の畔によつて辨當を食べ、再び徒歩立で戰つてゐるのだ。最後の最後まで手痛い戰をしてゐる若い將士のさま、涙なくしては讀まれない。【辭理なく】辭理は事理の誤であらう。道理もなく。むやみ矢鱈に。【三人張】三人で弦を張る強い弓。【十二束二伏】矢の長さ十二握と指二本のもの。【百歩に云々】昔の養由程の名手といふ意味である。淮南子に「養由基、楚將善射、去二楊葉一百歩射レ之、百發百中。」【箙・尻籠・胡籙】共に矢を盛つて負ふ器。其中、箙は靈簿に似たもの、尻籠は壺胡籙・胡籙は平胡籙。【矢坪】矢のよいねらひ場所。【一日著暖めたる云々】終日著たので體熱で金が軟かくなつてゐたのである。【箆深】矢竹深く射ること。【楠次郎】正時。【眉間ふえのはづれ】眉間と咽喉のはづれと。【矢すくみに云々】矢の爲に身がすくんで、自由に動かない。【上が上に】上に上にとつみ重る。【和田新發意】正行のいとこ和田賢秀のこと。新發意は、新に發心して佛門に入つたもの。【ちやうと】はつたとなどに同じ。強くにらむこと。【あがき死】手足を動かし展轉反側してもがき苦しんで死ぬこと。【放馬】繫いだ所又は主の手を放れた馬。【切死】敵を切りまはりつゝ討たれて死ぬこと。【鐙一縮】鐙を一ゆすりすること。【右の脇に引側め】右の脇近くに提げ。【東條】南河内郡佐備鄕にある。【貝しのぎ】鎬が普通の如くに角立たず、ふくらんで小貝に似てゐるもの。【かけ開いて】駈けて敵と離れること。【懸退け】追かけ追かけに同じ。【草摺の餘】草摺のあい

てゐる部分。【引合】鎧の右脇、胴と脇立とを引合せて結ぶ部分。【宮方の城郭云々】宗良親王は遠江に、興良親王は駿河に、懷良親王は九州においでになつたのを指す。【切所】殺所・折所なども書く。要害の地。

賀名生皇居の事

貞和五年正月五日、四條繩手の合戰に、和田楠が一族皆亡びて、今は正行が舍弟次郎左衞門正儀ばかり、生き殘りたりと聞えしかば、此次に殘る所なく、皆退治せらるべしとて、高越後守泰師三千餘騎にて、石川河原に向城を取りて、互に寄せつ寄られつ、合戰の止む隙もなし。吉野の主上は、天の河の奥賀名生といふ所に、僅なる黑木の御所を造りて御座あれば、かの唐堯虞舜のいにしへ、茅茨不レ剪、柴椽不レ削、淳素の風もかくやと思ひ知られて、誠なる方もありながら、女院皇后は、柴葺く庵のあやしきに、

軒漏る雨を禦ぎかね、御袖の涙ほす隙なく、月卿雲客は、木の下岩の陰に松葉を葺きかけ、苔の莚を片敷きて、身を措く宿とし給へば、高峯の嵐吹き落ちて、夜の衣を返せども、露の手枕寒ければ、昔を見する夢もなし。況や其郎從眷屬たるものは、暮山の薪を拾ひては、雪を戴くに膚寒く、幽谷の水を掬びては、月を擔ふに肩やせたり。かくては一日片時も、ありながらへん心地もなけれども、さすがに消えぬ露の身の、命あらばと思ふ世に、憑をかけてや殘るらん。（卷二十六）

【賀名生】 吉野の西南、吉野郡丹生川の末にある。【黑木の御所】 黑木は樹皮を削らぬまゝの丸木。其の黑木で造つた粗末な御所。【唐堯虞舜】 堯舜のこと。堯は陶唐氏だから唐堯といひ、舜は有虞氏だから虞舜といふ。【茅茨剪らず云々】 黑子に「堯堂三尺、土階三等、茅茨不レ剪、采椽不レ刊。」即ち堯舜素朴の風をいふ。茅はかや茨は次、茅を列べて剪らないこと、采は採、椽はたるき、山から採つたまゝの椽を削らないこと。【淳素】 淳厚質素。【誠なる方も】 誠は實の意で、華麗な當世風よりは、堯舜の古の樣な朴實なよい點もあるけれどの意。【夜の衣を云々】 古今集、小町「いとせめて戀しき時はうば玉の、夜の衣をかへしてぞぬる。」夜の衣をかへして寢ると昔のことを夢に見るといふが、その夢さへも見せない程寒いといふこと。【暮山の薪云々】 こゝの句は書言故事に出てゐる。【雪を戴くに云々】、薪の上に雪の積つたのを戴き、水に

月のうつつたのを擔ふ意。【さすがに】さりながらといふが如し。

上杉畠山流罪死刑の事

去程に上杉伊豆守重能、畠山大藏少輔直宗をば所領を沒收し、宿所を破却して、共に越前國へ流し遣されけり。此人々さりとも、死罪に行はるゝまでの事は、よもあらじと憑れけるにや、暫しの別を悲みて、女房少き人々まで、皆伴ひて下り給へども、馴れぬ旅寐の床の露、おきふし袖をや濡すらん。日來より翫びし事なれば、旅の思ひを慰めんと、一面の琵琶を馬鞍にかけ、旅館の月に彈じ給へば、王昭君が胡角一聲霜後夢、漢宮萬里月前腸と、胡國の旅を悲みしも、かくやと思ひ知られたり。

嵐の風に關越えて、紅葉ぞぬさと手向山、暮れ行く秋の別れまで、身にしられたる哀にて、遁れぬ罪を身の上に、今は大津の東の浦、濱の眞砂の數よりも、思へば多きなげ

きかな。絶えぬ思ひを志賀の浦、渚によする小浪の、返るを見るもうらやましく、七座の神を伏拜み、身の行末を祈りても、都に又も歸るべき、事は堅田に引く網の、目にもたまらぬ我泪、今津甲斐津を過ぎ行けば、湖水の霧に峙ちて、波間に見えたる小嶋あり。是なりけり、都良香が古、三千世界は眼前に盡きぬと詠ぜしかば、十二因縁は心裡に空しといふ下句を、辨才天の續ぎ給ひし、竹生島よと望み見て、暫く法施を奉る。燒かぬ鹽津を過ぎ行けば、思ひ越路の秋の風、音は荒血の山越えて、淺茅色つく野を行けば、末こそしらね梓弓、敦賀の津にも身を寄せて、袖にや浪の懸るらん。稠しく守る武士の、矢田野はいづくかへる山、名をのみ聞けるかひもなし。治承の亂に籠りけん、火打が城を見上ぐれば、蝸牛の角の上三千界、石火の光の中一刹那。哀あだなる憂世かなと、今更驚くばかりなり。無常の虎の身を責むる。上野の原を過ぎ行けば、今は我ゆゑさわがしき、月の鼠の根をかぶる、壁草のいつまでか、露の命のかゝるべき。とても消ゆべき水の泡の、流れ留る處とて、江守の庄にぞ着きにける。

當國の守護代細河刑部大輔、八木光勝是を請取りて、あさましげなる柴の庵の、暫しも如何が栖まれんと、見るだに物憂き住居なるに、警固を居ゑてぞ置れたりける。痛哉都にてはさしも氣高かりし、薄檜皮の屋形の、三葉四葉に作り雙べて、奇麗なるに、車馬門前に群集し、賓客堂上に充滿して、花やかにこそ住み給ひしに、今は引替へたる鄙の長途に、やすらふだにも悲しきに、竹の編戸松の垣、時雨も風もたまらねば、袂の乾く隙もなし。されば如何なる宿業にて、かゝる憂目に逢ふらんと我ながらうらめしくて、あるもかひなき命なりけるを、猶も師直不足にや思ひけん、後の禍をも顧みず、潜に討手を差し下し、守護代八木光勝にいひ合せ、上杉畠山を討つべしとぞ下知しける。光勝元は上杉が下知に隨ふ者なりけるが、武藏守に語らはれて、俄に心變じければ、八月廿四日の夜半ばかりに、伊豆守の配所江守の庄へ行きて、昨日の暮程に、高辨定信大勢にて、當國の府に着きて候ふを、何事やらんと、内々相尋ねて候へば、旁を討ち進らせんために下りて候ふなる。かやうにて御座候ひては、爭でか叶はせ

給ひ候ふべき。今夜急ぎ夜に紛れて落させ給ひて、越中越後の間に立ち忍ばせ給ひて、將軍へ事の仔細を申し入れさせ給ひ候はゞ、師直等は忽に御勘氣を蒙り、御身の罪は輕くなりて、などか歸參の御事なかるべき。警固の兵共にも、道の程の御怖畏候まじ。只はや討手の近付候はぬ先に、落させ給ひ候へと、誠に貳心なげに申しければ出拔くとは夢にも知り給はず、取物も取敢へず、女房少き人々まで皆引具して、上下五十三人、歩はだしなる有樣にて、加賀の方へぞ落られける。

時しもこそあれ、霰交に降る時雨、面を打つが如くにて、僅に細き田面の道、上れば氷れる馬ざくり、蹈めば深泥膝にあがる。簑もなく笠も着ざれば、膚までぬれとほり、手屈り足寒えたるに、男は女の手を引き、親は少き子を負ひて、何處を落着くべき處とも知らず、只跡より討手や懸るらんと、怖しきまゝに、落行く心中こそ哀なれ。八木光勝かねて近邊に觸れ廻り、上杉畠山の人々、流人の身として、落ちて行く事あらば、是非なく皆討ち止めよと申す間、江守、淺生水、八代庄、安居、波羅密の邊に居

たる溢者共、大鼓を鳴し鐘撞きて、落人あり打止めよと騒動す。上杉畠山是に驚きて、一足も前へ落ち延びんと倒れふためきて、足羽の渡へ行き着きたれば、川の橋を引きはづして、足羽藤嶋の者共、川向に楯を一面に衝き雙べたり。さらば跡へかへり、八木をこそ憑まめと、憂かりし江守へ立ち歸れば、又淺生水の橋をはねはづして、跡にも敵充滿たり。只つかれの鳥の犬と鷹とに責めらるらんも、かくやと思ひ知られたり。是までも主の先途を見はてんと、附順ひたりける若黨十三人、主の自害を勸めんため、押膚脱ぎて一度に腹をぞ切りたりける。畠山大藏少輔續きて腹掻切り、其刀を引き拔きて、上杉伊豆守の前に投げ遣り、御腰刀は些寸延びて見え候、是にて御自害候へといひもはてず、うつぶしになりて倒れにけり。伊豆守其刀を手に取りながら、「幾程ならぬ憂世の名殘を惜みて、女房の方をつく〴〵と見て、袖を顏に押しあて、只さめ〴〵と泣き居たるばかりにて、坐に時をぞ移されける。去程に八木光勝が中間共に生捕られて、差し殺されけることそうたてけれ。武士たる人は、平生の振舞はよしや兎

も角もあれ、強に見る處にあらず。只最後の死に樣をこそ執することとなるに、穢くも見え給ひつる死場かなと、爪彈せぬ人もなかりけり。女房は年比日來のなじみ、昨日今日の情の色、いつ忘るべしとも覺えずと、泣き悲みて、其淵瀨に身をも沈めんと、一人目の隙を求め給ひけるを、年來知識に憑まれたりける聖、兎角止め敎訓して、往生院の道場にて髮剃り落し奉りて、なき跡を弔ふ外は、更に事はなしとぞ聞えし。かやうに萬なりぬれば、天下の政道、併ら武家の執事の手に落ちて、今に亂れぬとぞ見えたりける。（卷二十七）

【上杉畠山】共に足利直義の執事であつた。尊氏の執事高師直が驕奢專恣であつたので、直義に勸めて之を除かうとして、あべこべに其の爲に失はれることになつてしまつた。【さりとも云々】いくら罪科を問はれても、まさか死罪にまではなるまいといふのを賴みにしたこと。【馴れぬ旅寢云々】馴れぬ旅寢の床の悲しさに。起きるにつけ伏すにつけ涙を催された。【王照君】漢の元帝の宮人。匈奴に請はれて嫁せしめられた人。其行旅を慰める爲に馬上で琵琶を彈じたと言はれてゐるが、こゝの「琵琶を馬鞍にかけ」が王照君のそれに似てゐる所から次の朗詠を引いて來たのであらう。【胡角一聲云々】和漢朗詠集、江相公大江音人の

作。胡角は胡人の吹く角笛、漢宮は漢の宮殿。霜の夜深く胡角の一聲に夢を破られ、皓たる月下に萬里の彼方の漢宮を想ひやつて、斷腸の思ひに泣くとの意で、王照君の心を詠んだものである。【紅葉ぞぬさと手向山】ぬさは神に奉る幣帛。手向山は逢坂にある。菅公の「このたびはぬさもとりあへず」の歌によつたもの。【身にしられたる云々】西行の「心なき身にもあはれは知られけり。」の歌等によつたものであらう。【今は大津】今は大津に來たとと、身の上におふと懸けたもの。【思ひを志賀の浦】思ひをすると志賀との懸詞。【七座の神】山王七社のこと。卽ち大宮・二の宮・聖眞子・八王子・客人・十禪師・三の宮。【堅田】との難きと堅田と懸けてある。【目にもたまらぬ】網の目と眼との懸詞。【都良香】文德の頃の有名な漢詩文人。羅生門で鬼神と唱和した「氣霽風梳二新柳髮一、氷消波洗二舊苔鬚一。」や竹生島で神の教に下の句を成した本文のものなど有名な說話が多い。【三千世界云々】竹生島のはてしなき眺めは、三千世界の廣き境界悉く見え盡して餘すところがない。【十二因緣云々】十二因緣によるいろいろの迷の雲が心中にはれ渡つて全くないの意。十二因緣は過去現在未來にわたつて衆生輪廻の相をなす十二の因緣。無明・行・識・名色・六處・觸・受・愛・取・有・生・老死。【法施】法文を唱へ献ること。【燒かぬ鹽浦】鹽浦は近江伊香郡の村名。名ばかりで鹽を燒かぬといふ意。【思ひ越路】思ひ來しと越路を懸けてゐる。【音は荒血の】荒血は愛發と書き、越前國愛發山中に有つた關所。音の荒きと懸けたもの。【淺茅色づく云々】淺茅は短かいちがや。人麿集に「矢田の野にあさぢ色づくあらち山、みねの淡雪寒くぞあるらむ。」【梓弓】敦賀のつる（弦）と言はんが爲に置いた言葉にすぎない。【嚴しく守る云々】武士が嚴しく自分等を擁護することから、武士の矢と、地名の矢田野にかけて

言つたのである。【歸る山】越前國南條郡鹿蒜村にある。歸る山の名のみは前からきいてゐたが、其名のかひもなく歸られぬ。【治承の亂に】燧が城は木曾義仲が其手のものに籠らせてあつた城で、燧城の合戰は壽永二年五月であるから、治承の亂にとは唯だ大らかに源平の爭亂に位の意味である。【蝸牛の角の上の云々】白樂天の對酒詩中の句に「蝸牛角上爭ニ何事一、石火光中寄ニ此身一。」とあるによつて書いた文。蝸牛の角のさきにあるやうな極めて小さい世界であり、石を打つて出る火花の中に含まれた様なほんとに短かい時間である所の人生は、あゝいかにもはかないものであるわいの意。燧城を仰いで源平の爭戰を思ひ、人生の感に打たれたのである。【無常の虎の云々】無常の吾が身にせまり來ることを述べ、其無常轉變の有爲の境を過ぎることゝ地名の上野の原とをかけたものである。無常の恐しさを虎に譬へることとは大智度論から出て居る。【今は我ゆゑ云々】自分が高師直等を除かうとしたが爲に、此やうな目にあつたのであるから、即ち自分故に本心がみだれて騷がしいといつたもの。月は眞如の月と見てよいと思ふ。【月の鼠の根をかぶる】かぶるはかぢると同じ。佛說譬喩經に「時有ニ一人一、遊ニ於曠野一、爲ニ惡象一所レ逐、怖走無レ依、見ニ一空井一、傍有ニ樹根一、即尋レ根下、潛ニ身井中一、有ニ黑白二鼠一、互齧ニ樹根一、於ニ井四邊一有ニ四毒蛇一欲レ螫ニ其人一、下有ニ毒龍一。」即ち鼠の根を嚙るとは、日月を黑白の二鼠にたとへ、それが自分の命の綱を食ひ切らうとする極めて危いことを言ふのである。玆では根をかぶる壁草と、壁草の根をかぢる樣に解さないで、鼠に根をかぢられてゐるやうな身であるから、いつまで永らへられようと解するがよい。鼠は高師直を指すものと解してよからう。【いつまで草の云々】壁草は古い壁に生ずる草。單にいつまでかと言はんが爲に置いた言葉と見るべきであ

る。露、かゝる、何れも壁草といつたが僞の緣語に過ぎないから、いつまで永らへるとが出來ようかと意譯するのがよい。【流れ留る】 流されてとゞまる。水の泡にも江守にも緣ある語である。【薄檜皮】 檜の皮で薄く葺いたもの。【三葉四葉】 屋棟を三つも四つも造り出した造り方。古今集の「この殿はむべも富みけりさき草の「三つ葉四つの葉に殿づくりせり」によつたもの。【時雨も風もたまらねば】 たまらねばは防ぎとめ得ないからの意。【宿業】 前世の所業。【あるもかひ云々】 ある甲斐もない命。【後の禍云々】 獨斷で上杉等を失つたりすれば後で尊氏等に罪せられるであらうことを言ふ。【旁】 方々。各々方と同じ。【歸參】 勘氣を受けたものが許されて歸ること。【警固の兵共にも】 警固の武士もついてゐるからの意。【馬さくり】 馬の踏み荒した泥路。【溢者】 ごろつき。ならず者。【つかれ鳥の云々】 疲れよわつた鳥が空中にては鷹、地上にては犬に、兩方から追はれること。【寸延びて】 普通のものより少し長く見える。【平生の振舞云々】

平生の行はたとひどうあつても強ひてかれこれ言はぬ。最後の死樣が最も大事であると一心に心がけるのにの意。執するは飽くまで重んずること。【爪彈】 いやなことのある時瓜を彈くことで、謗りきらふこと。【知識に憑まれ云々】 知識は善道に導いて吳れる僧侶のこと。聖は德高い僧をいふ。【往生院】 越前坂井郡高柳村にある寺。【武家の執事】 高師直をいふ。【今に亂れぬ】 亂れむの誤か。

直冬上洛の事附鬼丸鬼切の事

南方に再往の評定ありて、足利右兵衛佐直冬を大將として、京都を攻むべきよし、綸旨をなされければ、山名伊豆守時氏、子息右門佐師氏、五千餘騎の勢を率して、文和三年十二月十三日、伯耆國を立ち給ふ。山陰道悉く順ひ附きて、兵七千騎に及びしかば、但馬國より杉原越に播磨へ打つて出で、先づ宰相中將義詮の、斑鳩の宿におはするをや打ち散す、又直に丹波へ懸りて、仁木左京大夫頼章が、佐野の城に楯籠りて我等を支へんとするをや打ち落すと、評定しける處へ、越中の桃井播磨守直常、越前修理大夫高經の許より、飛脚同時に到來して、只急ぎ京都へ攻め上られ候へ。北國の勢を引きて、同時に攻め上るべきよしを牒せられける間、さらば夜を日に繼ぎて上らんとて、山名父子七千六百餘騎、前後十里に支へて、丹波國を打ち通るに、仁木左京大

夫賴章、當國の守護として、敵を支へんために在國したる上、今は將軍の執事として、勢人に超えたれば、丹波國にて、定めて火を散す程の合戰、五度も十度もあらんずらんと覺えけるに、敵の勇鋭を見て、戰ひては中々叶はじとや思ひけん、遂に矢の一をも射懸けずして、城の麓をのさ〳〵と通しければ、敵の嘲るのみならず、天下の口遊とぞなりにける。都にありとある程の兵をば、義詮朝臣につけて播磨へ下さる。遠國の勢は未上らず。將軍僅なる小勢にて、京中の合戰は中々惡しかりぬと、思慮旁深かりければ、直冬已に大江山を超ゆると聞えしかば、正月十二日の暮程に、將軍主上を取り奉りて、江州武作寺へ落ち給ふ。抑此君御位に即せ給ひて後、未三年を過ぎず、二度都を落させ給ひ、百官皆他鄉の雲に吟ひたまふ、あさましかりし世中なり。

去程に同十三日、直冬都に入り給へば、越中の桃井、越前の修理大夫、三千餘騎にて上洛す。直冬朝臣此七八箇年、依繼母讒那邊這邊漂泊し給ひつるが、多年の蟄懷一時に開けて、今天下の武士に仰れ給へば、只年に再び花さく木の、その根かゝるは、

未レ知春風三月一城の人、皆狂するに異ならず。抑山名伊豆守は、若狹の所領の事につきて、宰相中將殿に恨あり。桃井播磨守は、故高倉禪門に屬して、望を達せざる憤あれば、此兩人の敵になり給ひぬる事は、少し其謂もあるべし。尾張修理大夫高經は、忠戰自餘の一門に超えしに依りて、將軍も抽賞他に異にして、世其仁を重くせしかば、何事に恨あるべしとも覺えぬに、俄に今敵になりて、將軍の世を傾けんとし給ふ事、何の遺恨ぞと、事の起を尋ぬれば、先年越前の足羽の合戰の時、此高經朝敵の大將新田左中將義貞を討ちて、源平累代の重寶に、鬼丸鬼切といふ二振の太刀を取り給ひたりしを、將軍使者を以て、是は末々の源氏なんど持つべきものにあらず。急ぎ是を渡され候へ。當家の重寶として、嫡流相傳すべしと度々仰せられけるを、高經堅くをしみて、此二振の太刀をば、長崎の道場に預け置きて候ひしを、彼道場炎上の時燒けて候ふとて、同寸の太刀を二振取替へて、燒損じてぞ出されける。此事ありのままに京都へ聞えければ、將軍大に忿りて、朝敵の大將を討ちたりつる忠功、拔群なりと

いへども、さまでの恩賞をも行はれず、事に觸れ面目なき事ども多かりける間、高經是を憤りて、高倉禪門の謀叛の時も是に與し、今直冬の上洛にも力を合せて、攻め上り給ひたりとぞ聞えける。

抑此鬼丸と申す太刀は、北條四郎時政天下を執りて四海を鎭めし後、長一尺ばかりなる小鬼、夜々時政が跡枕に來りて、夢ともなく幻ともなく、侵さんとする事度々なり。修驗の行者加持すれども休まず、陰陽寮封ずれども立ち去らず、剩是故に時政病を受けて、身心苦む事隙なし。或夜の夢に、此太刀一人の老翁に變じて告げていはく、我常に汝を擁護する故に、彼妖怪の者を退けんとすれば、汚れたる人の手を以て、劍を探りたりしに依りて、金精身より出で、拔かんとすれども叶はず。早く彼妖怪の者を退けんとならば、淸淨ならん人をして、我身の金精を拭ふべしと、委しく敎へて、老翁は又元の太刀になりぬとぞ見えたりける。時政夙に起きて、老翁の夢に示しつる如く、或侍に水を浴せて、此太刀の金精を拭はせ、未鞘にはさゝで、臥したる傍の柱に

ぞ立掛けたりける。冬の事なれば暖氣を内に籠めんとて火鉢を近く取り寄せたるに居ゑたる臺を見れば、銀を以て長一尺ばかりなる小鬼を鑄て、眼には水晶を入れ、齒には金をぞ沈めたる。時政是を見るに、この間夜々夢に來りて、我を惱しつる鬼形のものは、さも是に似たりつるものかなと、面影ある心地して守り居たる處に、拔きて立てたりつる太刀、俄に倒れかゝりて、此火鉢の臺なる小鬼の頭を、かけず切りてぞ落したる。誠に此鬼や化して人を惱しけん。時政忽に心地直りて、其後よりは鬼形の者夢にも曾て見えざりけり。さてこそ此太刀を鬼丸と名づけて、高時の代に至るまで身を放さず守となりて、平氏の嫡家に傳りける。相摸入道鎌倉の東勝寺にて自害に及びける時、此太刀を相摸入道の次男少名龜壽に、家の重寶なればとて、取らせて信濃國へ祝部を憑みて落ち行く。建武二年八月に、鎌倉の合戰に打ち負けて、諏訪三河守を始として、宗徒の大名四十餘人、大御堂の内に走り入り、顏の皮をはぎ自害したりし中に、此太刀ありければ、定めて相摸次郎時行も、此中に腹切りてぞあるらんと、人

皆哀に思ひ合へり。其時此太刀を取りて、新田殿に奉る。義貞斜ならず悦びて、是ぞ聞ゆる、平氏の家に傳へたる、鬼丸といふ重寶なりと、秘藏して持れける劍なり。是は奥州宮城郡の府に、三の眞國といふ鍛冶、三年精進潔齊して、七重に注連を引き、きたうたる劍なり。

又鬼切と申すは、元は淸和源氏の先祖、攝津守賴光の太刀にてぞありける。其昔大和國宇多郡に大森あり。此陰に夜々妖物ありて、往來の人を取食ひ、牛馬六畜を摑み裂く。賴光是を聞きて、郎等に渡邊源五綱といひける者に、彼妖物を討ちて參れとて、秘藏の太刀をぞたびたりける。綱則ち宇多郡に行き、甲冑を帶して、夜々件の森の隱にぞ待ちたりける。此妖物綱が勢にや恐れたりけん、敢て眼に遮る事なし。さらば形を替へて謀らんと思ひて、髮を解き亂して掩ひ、鬘をかけ、鐵漿黑に大眉を作り、薄衣を打ちかつぎて、女の如くに出立ちて、朧月夜の曙に、森の下をぞ通りける。俄に中空搔き曇りて、森の上に物の立ち翔る樣に見えけるが、虛空より綱が髮を摑みて、

に提げてぞ騰りたりける。綱、賴光の許より賜りたる太刀を拔きて、虛空を拂斬にぞ切りたりける。雲の上に唖といふ聲して、血の颯と顏に懸りたるが、毛の黑く生ひたる手の指三つありて、爪の鈎りたるを、二の腕より、かけず切りてぞ落しける。綱此手を取りて賴光に奉る。賴光是を秘して、朱の唐櫃に收めて置かれける。後夜々おそろしき夢を見給ひける間、占夢の博士に夢を問ひ給ひければ、七日が間の重き御愼とぞ占ひ申しける。依レ之堅く門戶を閉ぢて、七重に注連を引き、四門に十二人の番衆を居ゑて、每夜宿直蟇目をぞ射させける。齋する事已に七日に滿じける夜、河內國高安の里より、賴光の母儀おはして、門をぞ敲せける。齋の最中なれども、正しき老母の對面のためとて、渺々と來り給ひたれば、力なく門を開きて、內へいざなひ入れ奉りて、終夜の酒宴にぞ及びける。賴光醉に和して、此事を語り出されたるに、老母持ちたる盃を前に閣き、あなおそろしや、我傍の人も此妖物に取られて、子は親に先立ち、婦は夫に別れたる者多く候ふぞや。さても如何なるものにて候ふぞ。哀其手を見ばやと所

望せられければ、賴光安き程の事にて候ふとて、櫃の中より件の手を取り出して、老母の前にぞ閣きける。母是を取りて、暫く見るよししけるが、我右の手の臂より切られたるを差出して、是は我手にて候ひけるといひて差合せ、忽に長二丈ばかりなる牛鬼となりて、酌に立ちたりける綱を、左の手に提げながら、賴光に走り懸りける。賴光件の太刀を拔きて、牛鬼の頭をかけず切りて落す。其頭中に飛び揚り、太刀の鋒を五寸喰ひ切りて、口に含みながら、半時ばかり跳上々々吠え怒りけるが、遂には地に落ちて死しにけり。其軀は尚破風より飛び出で、遙の天に上りけり。今に至るまで、渡黨の家作に破風をせざるは此故なり。

其比修驗清淨の橫川の僧都覺蓮を請じ奉りて、壇上に此太刀を立て、注連を引き、七日加持し給ひければ、鋒五寸折れたりける劒に、天井より倶利伽羅下り懸りて、鋒を口に含みければ、忽に如レ元生ひ出でにけり。其後此太刀多田滿仲が手に渡りて、信濃國戸隱山にて、又鬼を切りたる事あり。依レ之其名を鬼切といふなり。此太刀は伯

晉國會見郡に、大原五郎大夫安綱といふ鍛冶、一心淸淨の誠を致し、きたひ出したる劒なり。時の武將田村の將軍に是を奉る。此は鈴鹿の御前、田村將軍と、鈴鹿山にて劒合の劒是なり。其後田村麿、伊勢大神宮へ參詣の時、大宮より夢の告を以て、御所望ありて御殿に納らる。其後攝津守賴光、太神宮參詣の時夢想あり。汝に此劒を與ふる、是を以て子孫代々の家嫡に傳へ、天下の守たるべしと、示し給ひたる太刀なり。されば源家に執せらるゝも理なり。（卷三十二）

足利方には内訌の絶間がなかつた。尊氏と直義との間も不和となり、どちらも南朝に降つたりした。そして是までに内訌の中心をなした師直師冬は殺され、直義も亦殺されて内訌もやゝ凫がつきさうになり、尊氏は後光嚴院を擁立した。しかし又直義の子直冬が南朝に降り京都に攻め入ることになつたのだ。【南方に】吉野方に再度の評定あつたと。【直冬】實は尊氏の子、直義の養子となつたのである。【文和三年】南朝の年號では正平九年である。【杉原越】但馬と播磨との間の山道。【鵤宿に云々】鵤宿は播磨國にある。鵤宿の義詮を伐たうか、佐野の仁木賴章を伐たうかと評定したのである。【牒ぜられ】書狀を以て知らせる。【夜を日に繼いで】日だけで足らぬから夜を以て繼いで。晝夜兼行で。【十里に支へて】十里の長さに連つて。

【のさ〳〵と】 ゆつくりと歩む形容。【口遊】 あざけりの種。【此君】 後光嚴院。【二度都を落ちさせ】 文和二年五月山名師氏の京に攻め上つた時東坂本に移られたことと此度のことゝ。【歎懷】 ふさいでゐた心。【年再び花さく云々】 榮華極まること とは亡びる原因だといふ意。 平家物語烽火の事にもこれ に似た語がある。【春風三月云々】 詩の句らしいが出所未詳。春風の三月滿城の人が花に酒に狂ずるが如く、直冬及び其將士が喜び狂じたこと。【宰相中將】 義詮。【故高倉禪門】 直義。直義のことをば高倉殿、三條殿、錦小路殿など呼ぶ。禪門は在家のまゝで佛門に入つた男子をいふ。直義は佛門に入つたのだ。【少し其の謂あるべし】 山名・桃井二氏の叛いたのは少し理由があらうといふこと。【自餘の一門】 自分以外の足利一門。【抽賞】 抽んでゝ賞を行ふ。【其仁を重くす】 其人を尊敬したこと。【嫡流相傳】 足利の本家の家筋に代々傳へよ うといふこと。【長崎の道場】 越前坂井郡高柳村長崎にある寺。 道場は寺のこと。義貞を葬つた往生院を指すのである。【跡枕】 後枕が正しい。寢た時の足の方と枕の方とをいふ。【修驗の行者】 修驗道の行者。やまぶしのこと。【陰陽寮云々】 陰陽寮は中務省所屬で、陰陽道に關することを掌つた所。陰陽寮が其妖怪を法力でとぢ込めようとしたこと。【銀を以て云々】 火鉢の臺に裝飾のためにつけた銀製の鬼が害をなしたのである。【面影ある】 見覺えのある。【守り居たる】 見つめてゐる。【祝部】 前出。【主の眞國】 大原安守の子。【六畜】 馬・牛・羊・犬・豕・雞。【眼に遮る】 眼にとまる。【鬘をかけ云々】 鬘は髮飾、鐵漿黑は鐵漿で齒を黑く染めたこと。大眉はまゆずみで眉を太くかいたもの。すべて女の扮裝である。【二の腕】 肩と肘との間をいふ。【唐櫃】 唐風の櫃で通常脚が六本ある。【宿直蟇目】 とまり番の武士をして、寢ずに蟇目の矢

を放つて夜を警めさせることを宿直蟇目といふ。蟇目は矢尻に穴があつて射る時高く響くもの、ひゞき目の約つた名だといふ。【母儀】母の敬稱。【見るよし】見るさま。【牛鬼】牛の頭をした鬼。牛頭馬頭の牛頭に同じいもの。【破風】屋根の兩側面の切妻の合掌形をなした部分をいふ。唐破風千鳥破風等種類がある。【修驗清淨の】修驗が清淨で驗のあるといふ意であらう。【倶利伽羅】倶利伽羅不動明王のこと。黑龍の劍にからめる相を現す。【多田滿仲】滿仲は賴光の父であるから此處は誤である。多田滿成であらうといふ。【鈴鹿御前】田村麿が勅を受けて、鈴鹿山の鬼神を伐たとは、謠曲田村などにもある話であるが、鈴鹿御前とは、其鈴鹿山の神か、不明である。何か有名の話らしいが、調べても分らぬから、暫く不明としておく。【源家に執せらる】源家に重寶として執着せられる意。

飢人身を投ぐる事

かくて事の樣を見聞くに、天下此二十餘年の兵亂に、禁裏、仙洞、竹苑、椒房を始として、公卿、殿上、諸司、百官の宿所々々多く燒け亡びて、今は纔に十が二三殘りたりしを、又今度の東寺合戰の時、地を拂ひて、京白川に武士の屋形の外は、在家の一

宇もつゞかず。離々たる原上の草、壘々たる白骨叢に纒れて、ありし都の跡とも見えずなりにければ、蓮府槐門の貴族、なま上達部、上﨟女房達に至るまで、或は大井桂川の波の底の水屑となる人もあり、或は遠國に落ち下りて、田夫野人の賤しきに身を寄せ、或は片田舍に立ち忍びて、桑門竹の扉に住みわび給へば、夜の衣薄くして、曉の霜冷たく、朝氣の煙絕えて後、首陽に死する人多し。

中にも哀に聞えしは、或御所の上北面に、兵部少輔なにがしとかやいひける者、日來は富み榮えて樂身に餘りけるが、此亂の後財寶は皆取り散され、從類眷屬は何地ともなく落ち失せて、只七歲なる女子、九つになる男子と、年比相馴れし女房と、三人ばかりぞ身に添へける。都の內には身を置くべき露のゆかりもなくて、道路に袖をひろげん事もさすがなれば、思ひかねて、女房は娘の手を引き、夫は子の手を引きて、泣々丹波の方へぞ落ち行きける。誰を憑むとしもなく、何處へ落ちつくべきとも覺えねば、四五町行きては野原の露に袖を片敷きて泣き明し、一足步みては木の下草にひれ

ふして泣き暮す。只夢路をたどる心地して、十日ばかりに丹波國井原の岩屋の前に流れたる思出河といふ所に行き至りぬ。都を出でしより、道に落ちたる栗柿なんどを拾ひて、纔に命を繼ぎしかば、身も餘にくたびれ、足も立たずなりぬとて、母幼き者皆川のはたに倒れ伏して居たりければ、夫餘に見かねて、とある家のさりぬべき人の所と見えたる内へ行きて、中門の前に彳みて、つかれ乞をぞしたりける。暫くありて内より侍中間十餘人走り出で、用心の最中、なまばうたる人の疲れ乞するは、夜討強盗の案内見るものか、然らずば宮方の廻文持ちて廻る人にてぞあるらん。誡め置きて拷問せよとて、手取り足取り打ち縛り、上げつ下しつ二時ばかりぞ攻めたりける。女房幼き者、斯る事とは思ひ寄らず、川の端に疲れふして、今や〳〵と待居たりける處に、道を通る人行きやすらひて、あなあはれや、京家の人かと思しき人の、年四十ばかりなりつるが、疲れ乞しつるを、怪しきものかとて、あれなる家に捕へて、上げつ下しつ攻めつるが、今は攻め殺してぞあるらんと申しけるを聞きて、此女房幼き者、今は

誰に手を引れ、誰を憑みてか暫しの命をも助るべき。後れて死なば、冥途の旅に一人迷はんも憂かるべし。暫く待ちて伴はせ給へと、聲々に泣き悲みて、母と二人の幼き者互に手に手を取り組み、思出河の深き淵に身を投げゝるこそ哀れなれ。

兵部少輔は、いかに攻め問ひけれども、此者元來咎なければ、落ちざりける間、さらば許せとて許されぬ。是にもこりず、妻子の飢えたるが悲しさに、又とある在家へ行きて、菓なんどを乞ひ集めて、先の川端へ行き見るに、母幼き者共が、着けたる小草鞋杖なんどはありて、其人はなし。こは如何になりぬる事ぞやと、周章騒ぎて彼方此方求めありく程に、渡より少し下なる井堰に奇しき物あるを、立ち寄りて見たれば、母と二人の子と、手に手を取り組みて流れかゝりたり。取上げて泣き悲めども、身もひえはてゝ、色も早替りはてゝければ、女房と二人の子を抱き拘へて、又本の淵に飛び入り、共に空しくなりにけり。今に至るまで心なき野人村老、緣も知らぬ行客旅人までも、此川を通る時哀なることに聞き傳へて、涙を流さぬ人はなし。誠に悲しかり

ける有様かなと、思ひやられてあはれなり。（巻三十二）

永い爭亂のための一般民衆の苦しみは如何ばかりであつたか。こゝには其の一小哀話を出して朧げながら一般を想ひやる料とした。【禁裏仙洞云々】 禁裏は宮城、仙洞は上皇の御座所、竹苑は皇族の邸宅、椒房は後宮。【東寺の合戰】 正平十年二月、尊氏直冬が京都に戰つたこと。【地を拂つて】 すべて見えなくなることで、これは國民が全く見えなくなつたこと。【京白川】 京と白川。白川は鴨川と東山との間の地域。【離々原上の草】 離々は繁茂した貌。白居易の賦得古原草送別詩に「離々原上草、一歳一枯榮、野火燒不盡、春風吹又生、云々」とある。【ありし都の云々】 もと都の跡とも見えず。【蓮府槐門】 正しくは蓮府は大臣槐門は三公の異稱、攝關大臣などを指したものと見ればよい。【なま上達部】 余り官位のよくない公卿。四位の參議など。【上﨟】 女房の上位のもの。【田夫野人】 田舍もの。【柴門竹扉】 粗末な家のこと。【朝氣の煙】 朝氣は朝餉の意で、朝餉をたく煙。【首陽に死する】 餓死すること。伯夷叔齊が首陽山に餓死した所からかくいふ。【上北面】 北面のうち四位五位のものをいふ。下北面に對す。【道路に袖を云々】 道路で物乞ふこともさすがに出來ない。【さりぬべき人】 相應に富んだ人。【つかれ乞】 眞の乞食でなく、飢ゑつかれた爲に乞ふのをいふ。【用心の最中】 盜賊や落武者のために警戒してゐる最中。【なまばうたる人】 怪しき人といふが如し。【案内見るもの】 樣子を探るものか。【上げつ下しつ】 色々手だてをかへて。【行きやすらひて】 立ちどまつて。【落ちざりける】 罪に伏さなかつた。白狀しなかつた。【井堰】 水を堰きとめた

所。

新田左兵衛佐義興自害の事

去程に尊氏卿逝去ありて後、築紫はかやうに亂れぬといへども、東國はいまだ靜なり。爰に故新田左中將義貞の子息左兵衛佐義興、其弟、武藏少將義宗、故脇屋刑部卿義助子息右衛門佐義治三人、此三四年が間、越後國に城郭を構へ、半國ばかりを打ち隨へて居たりけるを武藏上野の者共の中より、弐心なきよしの連署の起請を書きて、兩三人の御中に、一人東國へ御越し候へ。大將にし奉りて、義兵を揚げ候はんとぞ申したりける。義宗義治二人は、思慮深き人なりければ、此比の人の心、左右なく憑み難しとて許容せられず。義興は大ばやりにして、忠功人に先立たんことを、いつも心に懸けて思はれければ、是非の遠慮を廻らさるるまでもなく、纔に郎從百餘人を行きつれたる

旅人の様に見せて、竊に武藏國へぞ越えられける。元來張本の輩は申すに及ばず、古新田義貞に功ありし族、今畠山入道道誓に恨を含む兵、竊に音信を通じ、頻に媚を入れて、催促に隨ふべきよしを申す者多かりければ、義興今は身を寄する所多くなりて、上野武藏兩國の間に其勢漸く萠せり。

天に耳なしといへども、是を聞くに人を以てする事なれば、互に隱密しけれども、兄は弟に語り、子は親に知らせける間、此事程なく鎌倉の管領、足利左馬頭基氏朝臣、畠山入道道誓に聞えてげり。畠山大夫入道是を聞きしより敢て寢食を安くせず。在所を尋ね聞きて、大勢を差し遣せば、國內通計して行方を知らず。又五百騎三百騎の勢を以て、道に待ちて夜に討寄せて討たんとすれば、義興更に事ともせず、蹴散しては道を通り、打ち破りては圍を出で、千變萬化總て人の業にあらずと申しける間、今はすべき樣なしとて、手に餘りてぞ覺えける。さても此事如何すべきと、畠山入道道誓晝夜案じ居たりけるが、或夜潛に竹澤右京亮を近づけて、御邊は先年武藏野の合戰の

時、彼義興の手に屬して忠ありしかば、義興も定めて其舊好を忘れじとぞ思はるらん。されば此人を僞りて討たんずる事は、御邊に過ぎたる人あるべからず。如何なる謀をも運らして、義興を討ちて左馬頭殿の見參に入れ給へ。恩賞は宜しく請によるべしとぞ語られける。竹澤は元來欲心熾盛にして、人の嘲をも顧みず、古の好をも思はず、情なき者なりければ、曾て一議をも申さず。左候はゞ兵衞佐殿の疑を散じて、相近づき候はんために、某態と御制法候はんずることを背きて、御勘氣を蒙り、御内を罷り出でたる體にて、本國へ罷り下りて後、此人に取り寄り候ふべしと、能々相謀りて己が宿所へぞ歸りける。

かねて謀りつる事なれば、竹澤翌日より宿々の傾城共を數十人呼び寄せて、遊び戯れ舞ひ歌ふ。是のみならず、相伴ふ傍輩共二三十人招き集めて、博弈を晝夜十餘日までぞしたりける。或人是を畠山に告げ知らせたりければ、畠山大に僞り忿りて制法を破る罪科一にあらず。凡そ道理を破る法はあれども、法を破る道理なし。況や有道の法を

や。一人の科を誡むるは、萬人を助けんためなり。此時緩々の沙汰を致さば、向後の狼籍斷ゆべからずとて、卽ち竹澤が所帶を沒收して、其身を追ひ出されけり。竹澤一言の陳謝にも及ばず、あなことごとし、左馬頭殿に仕はれぬ侍は、身一つは過ぎぬかと、飽くまで廣言吐き散して、己が所領へぞ歸りにけり。かくて數日ありて、竹澤潛に新田兵衞佐殿へ人を奉りて申しけるは、親にて候ひし入道、故新田殿の御手に屬し、元弘の鎌倉合戰に忠を抽で候ひき。某又先年武藏野の御合戰の時、御方に參りて忠戰致し候ひし條、定めて思召し忘れ候はじ。其後は世の轉變度々に及びて、御座所をも更に存知仕らで候ひつる間、力なく暫しの命を助かりて、御代を待ち候はんために、畠山禪門に屬して候ひつるが、心中の趣氣色に顯れ候ひけるに依りて、さしたる罪科とも覺えぬ事に、一所懸命の地を沒收せられ、結句討つべきなんどの沙汰に及び候ひし間、則ち武藏の御陣を逃げ出でゝ、當時は深山幽谷に隱れ居たる體にて候。某が此間の不義をだに御免あるべきにて候はば、御內奉公の身と罷成り候ひて、自然の御大

事には、御命に替り進らせ候ふべしと、苦にぞ申し入れたりける。兵衞佐是を聞き給ひて、暫くは申す所誠しからずとて、見參をもし給はずして、密議なんどを知らせらるゝ事もなかりければ、竹澤尙も心中の僞らざる處を顯して、近づき奉らんため京都へ人を上せ、ある宮の御所より少將殿と申しける、上﨟女房の十六七ばかりなる、容色類なく、心樣優にやさしくおはしけるを、兎角申し下して、先づ己が養君にし奉り、御裝束女房達に至るまで、樣々にし立てて、潛に兵衞佐殿の方へぞ出したりける。義興元來好色の心深かりければ、類なく思ひ通して、一夜の程の隔も千年を經る心地に覺えければ、常の隱家を替へんともし給はず、少しひたゝけたる式にて、其方樣の草のゆかりまでも、心置くべき事は露ばかりも思ひ給はず。誠に褒姒一たび笑みて幽王國を傾け、王妃傍に媚びて玄宗世を失ひ給ひしも、かくやと思ひ知られたり。されば太公望が好レ利者與ニ財珍一迷レ之、好レ色者與ニ美女一惑レ之と、敵を謀る道を敎へしを、知らざりけるこそおろかなれ。

かくて竹澤奉公の志切なるよしを申しけるに、兵衛佐早心打ち解けて見參し給ふ。鞭て鞍置きたる馬三匹、只今威し立てたる鎧三領、召替のためとて引き進らす。是のみならず、越後より着き纒ひ奉りて、此處彼處に隱れ居たる兵共に、皆一獻を進め、馬、物具、衣裳、太刀、刀に至るまで、用々に隨ひて、漏さず是を引きける間、兵衛佐殿も、竹澤を他に異なる思をなされ、傍輩共も皆是に過ぎたる御要人あるべからずと、悦ばぬ者はなかりけり。かやうに朝夕宮仕の勞を積み、晝夜無二の志を顯はして半年ばかりになりければ、佐殿今は何事につきても、心を置き給はず。謀反の計略、與力の人數、一事ものこらず、心底を盡して知らされけるこそあさましけれ。九月十三日夜は暮天雲晴れて、月も名に負ふ夜を顯はしぬと見えければ、今夜明月の會に事を寄せて、佐殿を我舘へ入れ奉り、酒宴の砌にて討ち奉らんと議して、無二の一族若黨三百餘人催し集め、我館の傍にぞ籠め置きける。日暮れければ、竹澤急ぎ佐殿に參りて、今夜は明月の夜にて候へば、乍ㇾ恐私の茅屋へ御入り候ひて、草深き庭の月をも御覽候

へかし。御内の人々をも、慰め申し候はんために、白拍子共少々召し寄せて候ふと申しければ、興ある遊ありぬと、面々に皆悦びて、聽て馬に鞍置かせ、郎從共召し集めて、已に打ち出でんとし給ひける處に、少將の御局よりとて、佐殿へ御消息あり。披きて見給へば、過し夜に、御事を惡しき樣なる夢に見進らせて候ひつるを、夢說に問ひて候へば、重き御愼にて候、七日が間は門の內を御出あるべからずと申し候なり。御心得候ふべしとぞ申されたりける。佐殿是を見給ひて、執事井彈正を近づけて、如何あるべきと問ひ給へば、井彈正凶を聞きて、愼まずといふ事や候ふべき。只今夜の御遊をば止らるべしとこそ存じ候へとぞ申しける。佐殿實にもと思ひ給ひければ、風氣の心地ありとて、竹澤をぞ歸されける。竹澤は今夜の企案に相違して、安からず思ひけるが、抑佐殿の少將の御局の文を御覽じて、止り給ひつるは、如何樣我企を、內々推して告げ申されたるものなり。此女姓を生けて置きては叶ふまじとて、翌夜潛に少將の局を、門へ呼び出で奉りて、刺し殺して堀の中にぞ沈めける。痛ましい哉、都をば

打ち續きたる世の亂に、荒れのみまさる宮の中に、年經て住みし人々も、秋の木葉の散々に、おのが樣々になりしかば、憑む影なくなりはてゝ、身を萍の寄るべとは、此竹澤をこそ憑み給ひしに、何故と思ひ分きたる方もなく、見てだに消えぬべき、秋の霜の下に伏して、深き淵に沈められ給ひたる、今はの際の有樣を、思ひ遣るだに哀にて、外の袖さへしをれにけり。

其後より竹澤、我力にては尙討ち得じと思ひければ、畠山殿の方へ使を立て、兵衛佐殿の隱れ居られて候ふ所をば委細に存知仕りて候へども、小勢にては打ち漏しぬと覺え候。急ぎ一族にて候、江戸遠江守と、下野守とを下され候へ。彼等によく〳〵評定して、討ち奉り候はんとぞ申しける。畠山大夫入道大に悅びて、軈て江戸遠江守と、其甥下野守とを下されけるが、討手を下すよし兵衛佐傳へ聞かば、在所を替へて隔つる事もありとて、江戸伯父甥が所領、稻毛の庄十二鄕を闕所になして、則ち給人をぞつけられける。江戸伯父甥大に憤り忿りて、軈て稻毛の庄へ馳せ下り、給人を追出し、

城郭を構へ、一族以下の兵五百餘騎招き集めて、只畠山殿に向ひ、一矢射て討死せんとぞ罵りける。程經て後、江戸遠江守、竹澤右京亮を緣に取りて、兵衞佐に申しけるは、畠山殿故なく懸命の地を沒收せられ、伯父甥共に牢浪の身と罷りなる間、力及ばず、一族共を引率して、鎌倉殿の御陣に馳せ向ひ、畠山殿に向ひて、一矢射んずるにて候。但し然るべき大將を仰ぎ奉らでは、勢の着く事あるまじきにて候へば、佐殿を大將に憑み奉らんずるにて候。先づ忍びて鎌倉へ御越候へ、鎌倉中に當家の一族、いかなりとも二三千騎あるべく候。其勢をつけて相摸國を打ち隨へ、東八箇國を推して、天下を覆す謀を運らし候はんと、誠に容易げにぞ申したりける。さしも志深き竹澤が執し申すなれば、疑ふ所にあらずと憑まれて、則ち武藏、上野、常陸、下總の間に、内々與力しつる兵どもに、事のよしを相觸れて、十月十日の曉に、兵衞佐殿は、忍びて先づ鎌倉へとぞ急がれける。

江戸竹澤は、かねて支度したる事なれば、矢口の渡の船の底を、二所えり貫きていみ

をさし、渡の向には、宵より江戸遠江守、同下野守、混物具にて、三百餘騎、木の陰岩の下に隠れて、餘る所あらば討ち止めんと用意したり。跡には竹澤右京亮、究竟の射手百五十人勝つて、取つて歸されば、遠矢に射殺さんと巧みたり。大勢にて御通り候はゞ、人の見尤め奉る事もこそ候へとて、兵衛佐の郎從共をば、かねて皆抜々に鎌倉へ遣したり。世良田右馬助、井彈正忠、大島周防守、土肥三郎左衛門、市河五郎、由良兵庫助、同新左衛門尉、南瀨口六郎、僅に十三人を打ち連れて、更に他人をば雜へず、のみをさしたる船にてみ乘りて、矢口渡に押し出す。是を三途の大河とは、思ひ寄らぬぞ哀れなる。倩是を譬ふれば、無常の虎に追れて、煩惱の大河を渡れば、三毒の大蛇浮び出で、是を呑まんと舌を暢べ、其殘害を遁れんと、岸の額なる草の根に、命を係けて取りつきたれば、黑白二の月の鼠が、其草の根をかぶるなる、無常の喩に異ならず。

此矢口の渡と申すは、面四町に餘りて、浪嶮しく底深し。渡守已に櫓を押して、河の

半を渡る時、取りはづしたるよしにて、櫓擢を河に落し入れ、二つのみを同時に拔きて、二人の水手、同じ様に河にかばくと飛び入りて、うぶに入りてぞ逃げ去りける。是を見て向の岸より、兵四五百騎懸出で、鬨をどつと作れば、跡より鬨を合せて、愚なる人々かな。忻るとは知らぬか。あれを見よと欺きて、箙を控きてぞ笑ひける。去程に水船に涌き入りて、腰中ばかりになりける時、非彈正衛佐殿を抱き奉りて、中に差し揚げたれば佐殿安からぬものかな、日本一の不道人共に忻られつることよ。七生まで汝等がために、恨を報ずべきものをと、大に怒りて、腰の刀を拔き、左の脇より右のあばら骨まで掻廻しくく、二刀まで切り給ふ。非彈正腸を引き切りて、河中へかばと投げ入れ、己が喉笛二所さし切りて、自らかうづかを摑み、己が首を後へ折りつくる音、二町ばかりぞ聞えける。世良田右馬助と大島周防守とは、二人刀を柄口まで突き違ひて、引き組みて河へ飛び入る。由良兵庫助、同新左衛門は、船の艫舳に立ちあがり、刀を逆手に取り直して、互に己が首を掻き落す。土肥三郎左衛門、南瀬口

六郎、市河五郎三人は、各袴の腰引きちぎりて裸になり、太刀を口にくはへ、河中へ飛び入りけるが、水の底を潜りて、向の岸へかけあがり、敵三百騎の中へ走り入り、半時ばかり切合ひけるが、敵五人打ち取り、十三人に手負せて、同枕に討れにけり。其後水練を入れて、兵衛佐殿、并に自害討死の首十三求め出し、酒に浸して、江戸遠江守同下野守、竹澤右京亮、五百餘騎にて、左馬頭殿の御座す武藏の入間河の陣へ馳せ參る。畠山入道斜ならず悦びて、小俣少輔次郎、松田、河村を呼び出して、此を見せらるゝに、仔細なき兵衛佐殿にて御座し候ひけりとて、此三四年が先に、數日相馴れ奉りし事ども申し出でて、皆泪をぞ流しける。見る人悦の中に哀添ひて、共に袖をぞぬらしける。

此義興と申すは、故新田左中將義貞の妾の腹に出來たりしかば、兄越後守義顯が討たれし後も、親父猶是を嫡子には立てず、三男武藏守義宗を、六歲の時より昇殿せさせて時めきしかば、義興はあるにもあらず、孤にて上野國に居たりしを、奥州の國司顯家卿、陸奥國より鎌倉へ攻め上る時、義貞に志ある武藏上野の兵共、此義興を大將に

取り立て、三萬餘騎にて、奥州の國司に力を合せ、鎌倉を攻め落して、吉野へ參じたりしかば、先帝叡覽ありて、誠に武勇の器用たり。尤義貞が家を興すべき者なりとて童名徳壽丸と申しゝを、御前にて元服させられて、新田左兵衛佐義興とぞ召されける。器量人に勝れ、謀巧に、心飽くまで早かりしかば、正平七年の武藏野の合戰、鎌倉の軍にも大敵を破り、萬卒に當る事、古今未レ聞處多し。其後身を側め、只二三人武藏上野の間に隱れ行き給ひし時、宇都宮の清黨が、三百餘騎にて取籠めたりしも討ち得ず。其振舞恰も天を翔り、地を潜る術ありと、怪しき程の勇者なりしかば、鎌倉の左馬頭殿も、京都の宰相中將殿も、安き心地をばせざりつるに、運命窮りて、短才庸愚の者共に忻られ、水に溺れて討れ給ふ。

斯りし程に、江戸竹澤が忠功、抜群なりとて、則ち數箇所の恩賞をぞ行はれける。あはれ弓矢の面目かなと、是を羨む人もあり。又穢き男の振舞かなと、爪彈をする人もあり。竹澤をば、猶も謀反與黨の者どもを、委細に尋ねらるべしとて、御陣に留め置

かれ、江戸二人には、暇たびて恩賞の地へぞ下されける。江戸遠江守喜悦の眉を開きて、則ち拜領の地へ下向しける。十月二十三日の暮程に、矢口の渡に下り居て、渡の船を待ち居たるに、兵衞佐殿を渡し奉りし時、江戸が語らひを得て、のみを拔きて船を沈めたりし渡守が、江戸が恩賞賜りて下ると聞きて、種種の酒肴を用意して、迎の船をぞ漕ぎ出しける。此船已に河中を過ぎける時、俄に天掻き曇りて、雷鳴り水嵐烈しく吹き漲りて、白波船を漂はす。渡守周章騷ぎて漕ぎ戻さんと、櫓を押して船を直しけるが、逆卷く浪に打ち返されて、水手梶取一人殘らず、皆水底に沈みけり。天の怒直事にあらず。是は如何樣義興の怨靈なりと、江戸遠江守懼ぢをのゝきて、河端より引返し、餘の處をこそ渡さめとて、此より二十餘町ある上の瀨へ、馬を早めて打ちける程に、電行前に閃きて雷大に鳴り霆めく。在家は遠し日は暮れぬ。只今雷神に蹴殺されぬと思ひければ、御助け候へ兵衞佐と、手を合せ虛空を拜して逃げたりけるが、とある山の麓なる辻堂を目にかけて、あれまでと馬をあふりける處に、黑雲一群江戸

が頭の上に落ちさがりて、雷電耳の邊に鳴り閃めきける間、あまりの怖しさに、後を屹と顧みたれば、新田左兵衛佐義興、緋威の鎧に龍頭の五枚甲の緒をしめて、白栗毛なる馬の額に角の生ひたるに乘り、あひの鞭をしとゝ打ちて、江戸を弓手のものになし、鐙の鼻に落ちさがりて、わたり七寸ばかりなる俣鷹を以て、かひがねより乳の下へかけずふつと射通さるゝと思ひて、江戸馬より倒に落ちたりけるが、やがて血を吐き悶絶躄地しけるを、輿に乘せて江戸が門へ舁きつけたれば、七日が間足手をあがき、水に溺れたる眞似をして、あら堪へがたや、是助けよと叫び死に死ににけり。有爲無常の世の習、明日を知らぬ命の中に、僅の欲に耽り、情なき事共を巧み出し、振舞ひし事月を阻てず、因果歷然乍に身に着きぬる事、是又未來永刧の業障なり。其家に生れて、箕裘を繼ぎ、弓箭を取る、世俗の法なれば力なし。努々人はかやうの思の外なる事を、好み振舞ふ事あるべからず。

又其翌夜の夢に、畠山大夫入道殿の見給ひはける、黑雲の上に太皷を打ちて、鬨を作

る聲しける間、何者の寄せ來るやらんと、怪しくて、音する方を遙に見遣りたるに、新田左兵衛佐義興、長二丈ばかりなる鬼になりて、牛頭馬頭阿放羅刹共、十餘人前後に隨へ、火車を引きて、左馬頭のおはする陣中へ入ると覺えて、胸打ち搔ぎて夢覺めぬ。禪門夙に起きて、斯る不思議の夢をこそ見て候へと、語り給ひける言の未終てざるに、俄に雷火落ちかゝり、入間河の在家三百餘宇、堂舍佛閣數十箇所、一時に灰燼となりにけり。是のみならず、義興討れし矢口の渡に、夜々光物出で來て、往來の人を惱しける間、近隣の野人村老集りて、義興の亡靈を一社の神に崇めつゝ、新田大明神とて、常盤堅磐の祭禮、今に絕えずとぞ承る。不思議なりし事どもなり。（卷三十三）

【筑紫は云々】南朝方の菊池氏と小貳大友寺の爭亂があつて騷がしかつた。【連署の起請】姓名を連記した起請文。起請文は神佛に誓つて約を守る旨を記した書類。【左右なく憑み難し】容易に賴み難し。【大ばやり】非常に激し易くあせる人の意。【元來張本の輩】內通した主謀者。【畠山入道々誓】畠山國淸。管領基氏の執事。【天に耳なし云々】別に出典明かならず。「天に口なし」などの言葉から書いたものらしい。【在所】義興のありか。【國內通計して】國內の人々が計を通じて義興のありかを分らなくする。【武藏野の合

戰】正平七年二月義興等が尊氏の軍と武藏野に戰つたことを指す。【欲心熾盛】 欲心盛んなこと。【一議をも申さず】少しの異議をも申さず。【御制法云々】 法度で禁じてゐる事を背かうといふこと。【傾城】 遊女をいふ。【博奕】 金錢を賭けて勝負を爭ふこと。【所帶を沒收】 所領の土地を取上げること。【あなことごとし】あゝ仰山なといふ程の意。少しの罪に大きな處罰をなしたことをいふ。【身一つは云々】 身一つの生計が出來ぬか。【廣言】 憚なく思ふがまゝに言ひ散らすこと。【一所懸命】 その一ケ所を命に懸けて大切に思ふこと。極めて大切なこと。【此間の不義】 敵方の畠山道譽についたことをいふ。【自然の御大事】 萬一のことのある場合にはの意。【心ざま優にやさしく】 上品にやさしいこと。【一夜の程の云々】 一夜會はぬと千年も會はぬやうに感じたこと。【常の隱家云々】 敵に知られぬ爲に隱家を替へるのであるが、それもせずにゐたといふのである。【ひたゝけたる式】 心の亂れた體といふ意。【其方樣の云々】 敵方のゆかりのものには、どんなものにも心置くべき事。其は敵方で、少將殿は京都方の宮女であるからいふ。草のゆかりは單に緣のこと。【褒姒云々】 褒姒は周の幽王の寵姬。笑ふことを好まなかつたので、王は百方力を盡して笑はせようとし、或日敵の來ないのに合圖の烽火をあげて諸侯を集めた所が、大いに褒姒が笑つた。それで本當に敵の來寇した時には誰も集まらず遂に殺された故事。國を傾くは國を亂し又は亡ぼすこと。【王妃】 楊貴妃のことをいふ。【太公望】 周の文王武王を助けて功を成させた兵法家。六韜は其著で次の語も其中にある。【引き進らす】 引出物として贈つたこと。【用用に隨つて云々】 其人の必用必用に應じて、何か一品づつは漏れなく引出物としたこと。【御要人】 役に立つ人。重要の人。【月も名に負ふ云々】 月もよく澄んで

有名な十三夜の夜のさまを現はしたといふこと。九月十三日の夜は禁中に觀月の宴があつたりして有名である。【白拍子】白拍子の舞などをなす遊女の一種。鎌倉時代に最も多かつた。【御事】親しみを以て言ふ對稱代名詞。おんみ、そなたなどに似る。【夢說】夢の吉凶を判じ說く人。【已が樣々】思ひ思ひのこと。【身を萍の】憂きと萍とをかけてゐる。憂き身はあたかも浮草の如くといふ意。【何故と云々】何故に殺されるのか知るともなく。【見てだに云々】見てさへ消え入りさうな恐ろしい白刃の下に斬り殺されて。秋の霜は刄の鋭いことを譬へていつたもの。消え。霜は緣語。【外の袖さへ】無關係の人の袖さへぬれたといふこと。【闕所】領主のない地。【給人】領地の支配をする人。代官に同じ。【牢浪の身】さまよひ人。浪々の誤であらう。【執し申す】一心に申すこと。【與力】味方すること。【矢口渡】武藏國荏原郡矢口村にある。【のみ】栓のことである。【混物具】すべての人が皆鎧をつけてゐること。【餘る所あらば】水に溺れず生き殘るならばの意。【三途の大河】死者が冥途の旅で、七日から二七日までの間に渡るといふ河。三つの瀬があつて生前の所業によつて深淺緩急渡る所を異にする。みつせ川ともいふ。【無常の虎云々】前出。煩惱は無明貪欲のまよひ。三毒は三種の煩惱のことで、貪慾と瞋恚と愚痴とである。こゝでは三毒を大蛇に譬へたもの。岸の額は岸角のこと。日月の二鼠に命の根を食はれつゝ、そして又無常に追はれつゝ、わづかの命の根にすがつて煩惱の生を渡るさまを譬へたのである。【表四町に餘り】河幅四町以上なること。【うぶに入りて】不明。うつ伏しになつて水に入ることで、水をくゞつて逃げたことか。【あれを見よと欺いて】あざむくは古くはあざける意に用ひた。【からづか】髮束の音便。【水練】水泳の練達者。【昇殿せさせ】

童殿上人として昇殿させたこと。【あるにもあらず】無きが如く。【武勇の器用】武勇の才幹。【身を偸め】身を忍ばせ。【語らひを得て】仲間に引入れられて。【水嵐】水上を吹くあらし。【水手梶取】船頭と舵をとつて漕ぐ人と。【あれまで馬をあをり】それまで馬を驅り立て。【あひの鞭】鐙をかけると合せて打つ鞭。【しとゝ】鞭うつ音の形容である。【江戸を弓手の】江戸を義興の左方になる如く位置して。【鐙の鼻に云々】鐙の先の高さ程までに身をひくゝ下りさがつての意。【わたり七寸ばかりなる雁俣】雁俣は鏑矢のさきにさす鏃で、蛙の手の股のやうな形したもの。其開きの七寸もあるものである。【かひがね】かいがねと書くが正しい。肩胛骨のことである。【悶絶躄地】もだえ苦しみ地にたふれる意。【有爲無常】生滅轉變の常ならぬこと。有爲も人生の生滅常ならぬをいふ言葉である。【因果歷然云々】善因善報惡因惡報の因果の理が明かに現はれ、惡業の報が忽ち に己が身に來つ たといふ意。【未來永劫の業障】永劫は極めて永い時間。劫は梵語で極めて永い時間をいふ語である。業障は惡業の罪によつて正道を障蔽すること。文の意は江戸の惡業は今忽ちに其報を受けたのみならず、未來永劫の罪障となるといふのである。【其家に生れて云々】

武士の家に生れ、父祖の業を承け繼いで弓矢を事とするのは、俗世の習であるから已むを得ないといふこと。箕裘を繼ぐは父祖の業を繼ぐことで、弓造の子は父の眞似をして柳の枝で箕をつくり、鍛工の子は皮を綴つて裘を作る、卽ち子供の時から父の業をまねてそれを繼ぐことをいふ。【牛頭馬頭阿放羅刹】何れも地獄の獄卒。牛頭・馬頭は何れも人身で牛馬頭のもの、阿放羅刹は單に阿防とも言ひ、牛頭人手で兩脚に牛の蹄ある獄卒。【火車】地獄で罪人を乘せる火焰の燃え立つてゐる車。【光物】火の玉のやうな妖光。【常熱

【堅磐】とこ磐かた磐の約で、永久不變のこと。

吉野御廟神靈の事附諸國勢京都に還る事

南方の皇居は、金剛山の奥觀心寺といふ深山なれば、左右なく敵の近づくべき所ならねども、斥候の御警固に憑み思召されたる、龍泉赤坂も攻め落され、又昨日一昨日まで、御方せし兵共、今日は多く御敵となりぬと聞えしかば、山人杣人案内者として、如何樣何處の山までも、敵攻め入りぬと申沙汰しければ、主上を始め進らせて、女院皇后、月卿雲客、こは如何すべきと、懼ぢ恐れさせ給ふ事限りなし。

爰に二條禪定殿下の候人にてありける、上北面、御方の官軍、かやうに利を失ひ、城を落さるゝ體を見て、敵のさのみ近づかぬ先に、妻子共をも京の方へ送り遣はし、我身も今は髻切りて、如何なる山林にも世を遁ればやと思ひて、先づ吉野邊まで出でたりけ

るが、さるにても多年の奉公を捨てはて、主君に離れ、此境を立ち去る事の悲しさに、せめて今一度先帝の御廟へ參り、出家の暇をも申さんと思ひて、只一人御廟へ參りたるに、近來は洒掃する人なかりけりと覺えて、荊棘道を塞ぎ、葎茂りて舊苔扉を閉ぢたり。何時の間にかくは荒れぬらんと、此處彼處を見奉るに、金爐香絶エテ、草殘ニ一叢之煙ヲ、玉殿無クシテレ燈、螢照ス五更之夜ヲ、思ひありて聞く時は、心なき啼鳥も哀を催すかとおぼえ、岩漏水の流までも、悲を添ふる音なれば、通夜圓丘の前に畏りて、つくづくと憂世の中の成り行く樣を案じ續くるに、抑今の世如何なる世なれば、有テレ威無キレ道者は必ず亡ぶといひ置きし、先賢の言にも背き、又百王を守らんと誓給ひし神約も皆誠ならず、又如何なる賤しき者までも、死にては靈となり鬼となりて、彼を是し此を非する理明なり。況や君已に十善の戒力に依りて、四海の尊位に居し給ひし御事なれば、玉骨は縱令郊原の土に朽ちさせ給ふとも、神靈は定めて天地に留りて、其苗裔をも守り、逆臣の威をも亡されずらんとこそ存ずるに、臣君を犯せども天罰もなし。

子父を殺せども神の罰をも未見ず。こは如何に成り行く世の中ぞやと、泣〳〵天に訴へて、五體を地に投げ禮をなす。

餘に氣くたびれて、頭を低れて少し目睡みたる夢の中に、御廟の震動する事稍久し。暫くありて圓丘の中より、誠にけだかき御聲にて、人やある〳〵と召されければ、東西の山の峯より、俊基資朝是に候ふとて參りたり。此人々は、君の御謀叛申し勸めたりし者共なりとて、去元德三年五月二十九日に、資朝は佐渡國にて斬られ、俊基は其後鎌倉の葛原が岡にて、工藤二郎左衛門尉に斬られし人々なり、貌を見れば、正しく昔見たりし體にてはありながら、面には朱を差したるが如く、眼の光輝きて、左右の牙銀針を立てたる樣に、上下に生ひ違ひたり。其後圓丘の石の扉を排く音しければ、遙に向上げたるに、先帝袞龍の御衣を召され、寶劍を拔きて右の御手に提げ、玉扆の上に座したまふ。此御容も昔の龍顏には替りて、忿れる御眸逆に裂け、御鬢左右へ分れて、只夜叉羅刹の如くなり。誠に苦しげなる御息をつかせ給ふ度毎に、御口より焰

はつと燃え出てゝ、黒烟天に立ち上る。

暫くありて主上、俊基資朝を御前近く召されて、さても君を惱し、世を亂る逆臣共をば、誰にか仰せつけて罰すべきと、勅問あれば、俊基資朝、此事は已に摩醯修羅王の前にて議定ありて、討手を定められて候。さて如何に定めたるぞ。先づ今南方の皇居を襲はんと仕り候、五畿七道の朝敵共をば、正成に申しつけて候へば、一兩日の間には、追ひ返し候はんずらん。仁木右京大夫義長をば、菊池入道愚鑑に申しつけて候へば、伊勢の國にてぞ亡び候はんずらん。細川相摸守清氏をば、土居得能に申しつけて候へば、四國に渡りて後亡び候ふべし。東國の大將にて罷り上りて候、畠山入道、舍弟尾張守をば、殊更嗔恚強盛の大魔王、新田左兵衛佐義興が申し請け候ひて、罰すべきよし申し候ひつれば、輙かるべきにて候。道誓が郎從共をば、所々にて首を刎ねさせ候はんずるなり。中に江戸下野守、同遠江守二人は、殊更に惡き奴にて候へば、龍の口に引き居ゑて、我手に懸けて切り候ふべしとこそ、申し候ひつれと奏し申しけれ

ば、主上誠に御心よげに打ち笑ませ給ひて、さらば年號の替らぬ先に、疾く〳〵退治せよと仰せられて、御廟の中へ入らせ給ひぬと見進らせて、夢は忽に覺めにけり。上北面此示現に驚きて、吉野より又觀心寺へ歸り參り、人々に內々語りければ、只あらまほしきことぞ、思寢の夢に見えつらんとて、信ずる人もなかりけり。實にも其驗にてやありけん、敵寄せば尙山深く、主上をも落し進らせんと、逃方を求めて戰はんとはせざりける、觀心寺の皇居へは、敵曾て寄せ來らず、剰さしてし出したる事もなきに、南方の退治、今は是までぞとて、同五月二十八日、寄手の惣大將宰相中將義詮朝臣、尼崎より歸洛し給ひしかば、畠山、仁木、細川、土岐、佐々木、宇都宮以下、都て五畿七道の兵二十萬騎、我先にと上洛して各國へぞ下りける。さてこそ上北面が見たりしといふ夢も、實にやと思ひ合せられて、如何樣にも、仁木、細川、畠山も、滅ぶる事やあらんと、夢を疑ひし人々も、却りて是をぞたのみける。（卷三十四）

【觀心寺】河內國金剛山の麓にある。正成は幼時此寺で學問し、其の首塚もある。後村上天皇は今度足利義

詮が大擧して攻めて來たので、河内の天野から此所へおうつりになつたのである。【左右なく】たやすく。【斥候の警固】敵狀を知る爲と警固の爲とに。【山人杣人云々】獵師や樵夫を案内者として、敵はどんな山中までも攻め入るであらうといふ風評であつたから。【候人】僧形妻帶で門跡家などに仕へ、雜役をとつた人。これは始め候人で後に北面になつた者。【此境】この土地。【先帝の御廟】後醍醐帝の御廟。【酒掃】掃除。【荊棘】いばら。【葎】茜草料に屬する草。山野に多く生ずる。やへむぐらといふも同じである。【蒼苔云々】古い苔が扉にも生えてゐたこと。【金爐云々】昔は美しい金製の香爐に煙が立つてゐたのに、今はそれはなくなつて、一叢の草が宛かも煙のやうに亂れ生えて居り、又、昔は廟の美しい殿舍に明るい燈がついてゐたのに、今は殿舍は荒れ燈はなくして螢が燈をしのばせるやうに、夜ふけを飛んでゐる。廟前の荒れはてた光景を飾つた言葉でのべたものである。【思ひありて云々】心に悲みがあつてきくと、無心に啼く鳥の音も何か哀み事ありて感じられ、岩もる水の音まで己が悲みを增すといふこと。【圓丘】山陵の土饅頭のこと。【威あつて云々】威權のみあつて無道のものは必ず亡びるといふので、先賢とは誰を指すか、はつきりしてゐるのであるまいと思ふ。【百王を云々】何神を指すか分明しない。宗廟の伊勢神宮・皇城鎭護の八幡神宮などを指すものか。【又如何なる賤しき云々】どんな賤しい人でも、死ねば靈鬼となつて、善い人には報ひ、惡い人には祟りするゝに、十善の天子でありながら、少しも崩後に其ことがないといふ意。靈も鬼も、共にたゝりをなす精靈、たましひをいふ。【十善の戒力】十善の戒を守つた力。【四海の尊位】天下の尊位、即ち天子の位。【苗裔】子孫。【五體を地に投げ云々】全身を地上に投げ出して禮拜する。【人やあ

る」人が居るか。誰か居るか。【左右の牙】牙は門歯の左右に一枚づゝある尖つた歯。犬歯。【袞龍の御衣】天子着用の御衣で、日・月・星辰・龍等を繡つた緋の衣【玉扆】玉座に同じ。【龍顏】天子の御顏。【夜叉羅刹】何れも獰惡な鬼神。夜叉は豕牙肉角、羅刹は黑身朱髮獸牙雁爪碧眼であるといふ。【摩醯修羅王】大自在のこと。色界の最頂に位する天神の名。大智度論に「摩醯首羅此稱二大自在一、形有二八臂三眼一騎二大白牛一雲降雨雨、大千界一切衆生無二能知一數、唯此天王獨能知レ之。」とある。【仁木右京太夫義長】前出の仁木頼章の弟。後に伊勢長野城に圍まれて遂には南朝に降つた。これを討つたのは佐々木土岐の徒であるが、こゝでは死んだ菊池寂阿が討つたやうに作つたのである。菊池愚鑑は大友貞宗の法名であるから、諸異本に寂阿とあるのがよからうといふことである。【細川相模守淸氏】細川和氏の子。正平六年に足利氏に叛き翌年讃岐で仆された。土居得能は共に伊豫の河野の一族で、船上山の時から南朝に屬して始終よく盡した。【畠山入道云々】道誓のことである。舍弟尾張守は義深のこと。正平十七年に足利氏に叛いて修善寺によつたが遂には逃去して死んだ。これをしかせしめたのを義興の怨靈の所爲としたのである。【瞋恚强盛】いかりの盛なこと。義興には死後魔神となつて怨敵を殺したなどいふ巷說があるので、殊更瞋恚强盛の大魔王など言つたものと見える。【道誓が郞從云々】道誓の從者遊佐入道性阿は湯本で自殺し、江戸下野守は龍口で生捕られて斬られたことなどを、すでに冥府で議定したやうに書いたのである。【さらば年號云々】翌々年の三月に康安と改元したのを言ふか。しかし康安は北朝の年號故、後醍醐帝がかう仰せられるのは少しをかしいと思ふ。【あらまほしきことぞ云々】自分の希望するのを夢に見たまでゞあらうとの意。

太平記新釋終

大正拾四年十一月廿五日印刷
大正十四年十一月廿八日發行
大正拾五年四月十五日再版
昭和弐年三月十五日三版
昭和三年弐月廿二日四版
昭和三年九月十七日五版
昭和四年壹月五日六版
昭和四年三月壹日七版
昭和四年十月三日八版
昭和四年十二月五日九版
昭和五年五月九日拾版
昭和六年四月廿五日拾壹版
昭和七年壹月十二日拾弐版
昭和八年十二月三日拾參版
昭和拾年壹月十日拾四版
昭和拾壹年九月廿六日拾五版
昭和拾弐年十二月廿日拾六版
昭和拾四年九月十日拾七版
昭和拾五年十月廿三日拾八版

(停) 太平記新釋
正價金貳圓五拾錢

不許複製

檢印

著作者　石田吉貞
東京市神田區一ッ橋二丁目三番地
發行者　阪本眞三
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷者　寺井藤左エ門
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　大日本印刷株式會社

東京市神田區一ッ橋二丁目三番地
發行所　大同館書店
振替貯金口座東京八七弐番

◇鬼澤福次郎先生新著（菊判最上製美本箱入 全一冊紙數八百頁）正價金六圓八拾錢（送料金廿七錢）◇

系統的國文學史解說

《史的體系を保ち解說に忠實に而して》

《統一せる敍述に成れる國文學史出現》

《日本文學史の研究は此一册で盡さる》

史的體系を保ち解說に忠に而して統一せる敍述を以て在來の國文學史の缺漏を裨補せんとして出現したのが本書である。內容は最初に先づ國文學の全景を展望して其の特質を究め次で各類型に分けて夫々史的開展の跡を辿り其間一千六百五十の作家作品に周密なる解說を加へ更に國文學發達系統表・註釋書目一覽・作家作品一覽・文檢問題對照・解說索引を附して繙讀の便に供した。要するに本書の特色は史的體系の敍述に留意しつゝ而も總ての問題を網羅した點は斷然類書中の白眉と云ふてよい。文檢受驗者中等諸學校の國語敎授者師範學校專攻科生其他一般國文學愛好者の一讀をすゝむ。今や敎育方針の新傾向たる日本文學史の參考用書高級敎科用書としても最も好適の良書である。

◇吉田桐野先生著《中等國語科の學力標準を明示せるもの》

●中等標準讀本と其評釋（現代篇） 菊判最上製五百八拾頁 金三圓八拾錢 送料廿三錢

●中等標準讀本と其評釋（古代篇） 菊判最上製三百頁 金貳圓參拾錢 送料十八錢

本書は著者が多年の苦心と體驗により中等國語科の標準學力を明示せるもので內容は二百種に近い現行讀本中から其何れの讀本にも缺くる事の出來ない代表的名作文のみを選出しこれを一學年から五學年までに分類し懇切詳密に解釋せるものである、されば文檢國語科受驗者は其研究に入る基礎本として最も必要の虎の卷である其他專檢及各學生の學力を確得すべき唯一の參考書である。

《東京神田 大同館發行》

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03033 8693